THE CENTRAL REVIEW

中央公論

6-1918

六月號

33　6　33

第三百五十七號　第三十三年第六號

大正七年五月廿八日印刷納本
大正七年六月一日發行（毎月一回一日發行）



腦神經病に適藥ありや？

コヽに最良の適藥あり

島村博士有効證明

健腦丸を服め!!

コンナ兆候はありません？

▲頭が變で重い物被つた心地はありませんか
▲頭痛眩暈がして眠むられぬ事ありませんか
▲氣分惡しく逆上せて便祕に苦む事ありませんか
▲仕事も手に付かずクヨ〳〵思ふ事ありませんか
▲記憶力が薄くなり決斷力が乏き事ありませんか
コレ腦神經病の症候也健腦丸服用あれ

島村博士證明
腦病 良藥
健腦丸
KENNOGWAN

健腦丸を常用せば逆上を引下げ頭痛眩暈を治し、腦充血を快治し便通をよくし、怖る可き中風卒中を未發に豫防し、記憶力增進頭腦明快の効あり。

藥價　一週分四十錢　五週分二圓六十錢
　　　二週分七十錢　十週分五圓
　　　三週分一圓廿錢　到る處にあり

本舗 大阪 東京 丹平商會藥房

獨逸イエナ大學名譽教授
ヘッケル博士著
文學士 栗原古城譯

新刊 生命の不可思議

「宇宙の謎」の姉妹篇

大宇宙の不思議は生命より不思議なるは莫し、生命の源泉を究むれば『宇宙の謎』は既に其全解決を見たりと云ふも過言にあらず、泰西の新科學は今や其精鋭を擧げて生命其者の研究に沒頭し、一世を驚倒せしむべき眞理學說等の發見せらるゝもの枚擧に遑あらず、苟くも此最新科學の傾向に通ぜずんば、何人も新思想を云爲するの資格無き也。爰に『宇宙の謎』の名著に全世界の學界を震撼せる生物學の一大權威ヘッケル博士が、廿世紀初頭の新研究を網羅組織して、その『生命學』の要諦を說けるもの即ち本書なり。若し夫れ有ゆる專門科學の眞髓を摘抉總合して、これを何人にも理解せしむる明快懇到の敍述に至りては、博士は正に當代の第一人者たるの觀あり。本書一冊より得らるべき實益と興味とは、優に數年の研究と冥想とに匹敵すべきを疑はず。

四六判總洋布製
極美本・全一冊
紙數六百七十頁
正價貳圓參拾錢
送料―內地十二錢 其他十四錢

●最近の讀書界を震憾せる

著者 譯者 同前

宇宙の謎

▼五版出來

四六判總洋布製極美本
全一冊紙數六百七十頁
正價金貳圓 郵稅十二錢

東京本鄉西片町 玄黃社 電話小石川一三九番 振替東京七九九五番

英傑傳叢書第五編出づ

▽早稲田大學教授 昇曙夢先生新著

ペートル

▽定價金貳圓送料十二錢
▽菊判總布製大册函入

學者らしき嚴正なる態度と、公平なる批評眼と、稀に見るの誠實とを以て、此偉大なる改革者の複雜なる人格と多端なる業蹟とを描破し、ペートル傳中第一の定評あるブリックネル教授の著を典據とせるもの、著者は露文學に造詣最も深き昇教授にして述ぶる所、時代精神と史的背景とに重きを置けり。英雄兒ペートルと露國民の眞相に觸れんとする讀者に薦む。

全部十二卷・大割引

ワシントン。ビスマルク。ルーテル。クロンウエル。ペートル。(以上既刊)ナポレオン。フレデリキ。ネルソン。リンコルン。カブール。グラッドストン。少ピット。(以上未刊、隔月一册宛發行の豫定)

定價各册貳圓。送料各册十二錢の處、全部前金直接御註文に限り十二册を**貳拾圓に割引**。送料一切不要。當社にて負擔。

東京京橋南紺屋町 ■ **實業之日本社發行** 振替東京三二六番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



■諸君ハ建築ニ欠ク可ラザル化粧煉瓦ニツキ研究セシ事アリヤ？

化粧煉瓦トシテノ必須條件ハ左ノ通リデス

耐熱耐酸耐水性ナルコト
龜裂剝脱ノ憂ナキコト
汚染變色セザルコト
色澤形狀齊一ナルコト
品質永久不變ナルコト
耐久力無限ナルコト

然ルニ從來如上ノ各條件ヲ完全ニ具ヘタモノヲ撰擇ナサルコトハ不可能デアッタコトヲ遺憾トスルデショウ、然シ今ヤ諸君ハ安心シテ使ヘルモノガ出來マシタ

弊社新製品硝子煉瓦ハ科學的研究ニヨッテ前述ノ條件ヲ一々吟味ノ上製造シタモノデ眞ニ實質外觀ヲ具備シタ理想的逸品デアリマスカラ必ズ諸君ノ御滿足ヲ得ルモノト確信シマス

■用途

●建物ノ內外張附、門柱、塀ノ張附
●玄關、浴場、洗面所、臺所流シ場、便所等ノ羽目板及下敷張附
（在來ノ壁、羽目板床ニ張リ附ケラレマス）

■說明書ハ御申越次第御送リシマス

△▽硝子煉瓦は東亞のほまれ△▽

絕對的誠實ハ弊社ノ信條也

横濱市久保町五十八番地
製造元 合資會社 東亞硝子工業所
電話三六八四番

東京市麴町區內幸町一丁目
一手販賣 安部幸兵衛商店 機械電氣部
電話新橋 特長五一八 長五八三 長二〇九一 長二七二

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す



出來ました
鷹(タカ)印の新らしい
夏帽子
最良質
最新型
今回全國特許大會に於て多年製品發明改善の功績を認められ特に表彰せられたり
各地到る所の帽子店、雜貨店に販賣す御愛用あらんことを



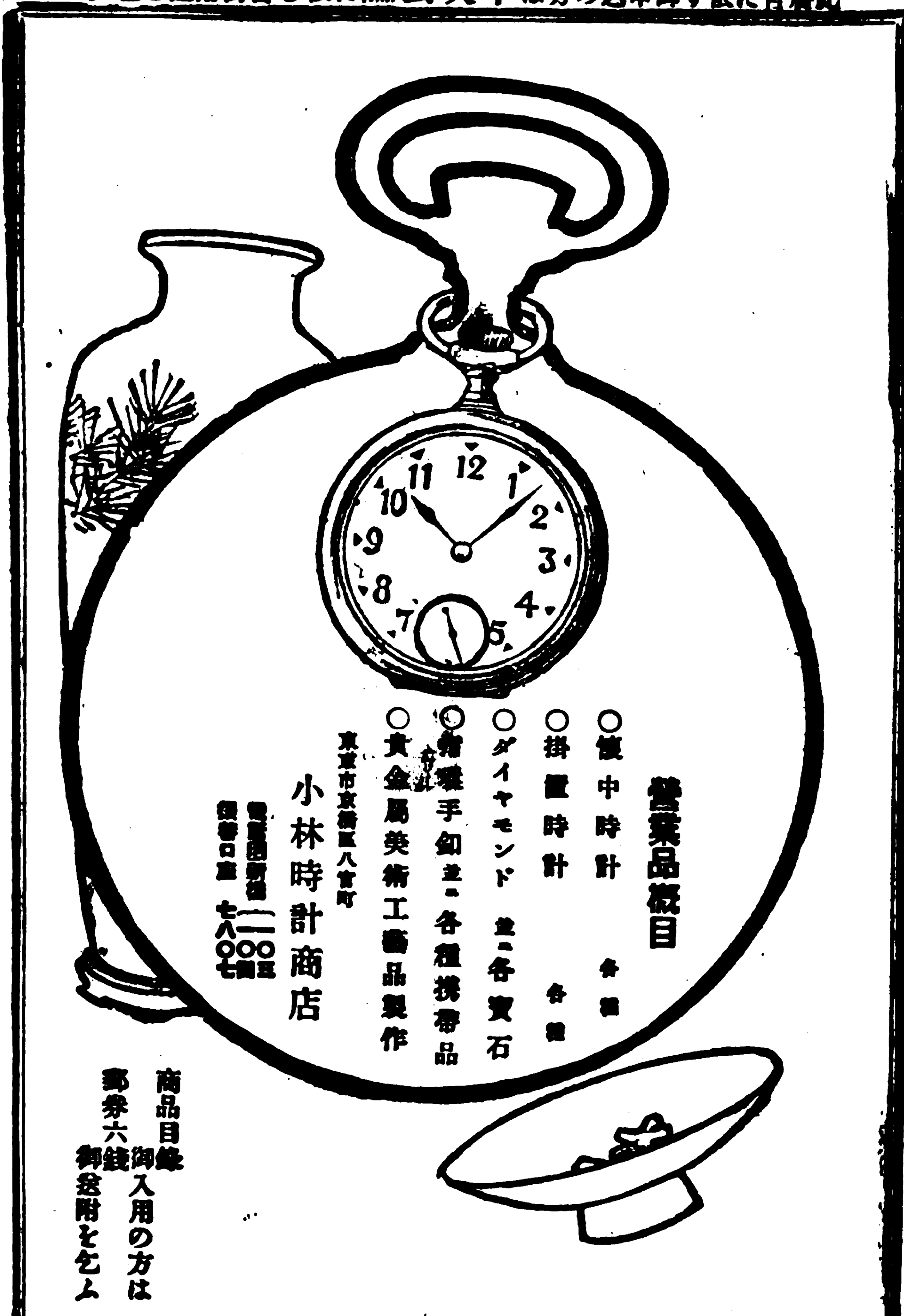
中央公論第三十三年六月號目次

▼公論

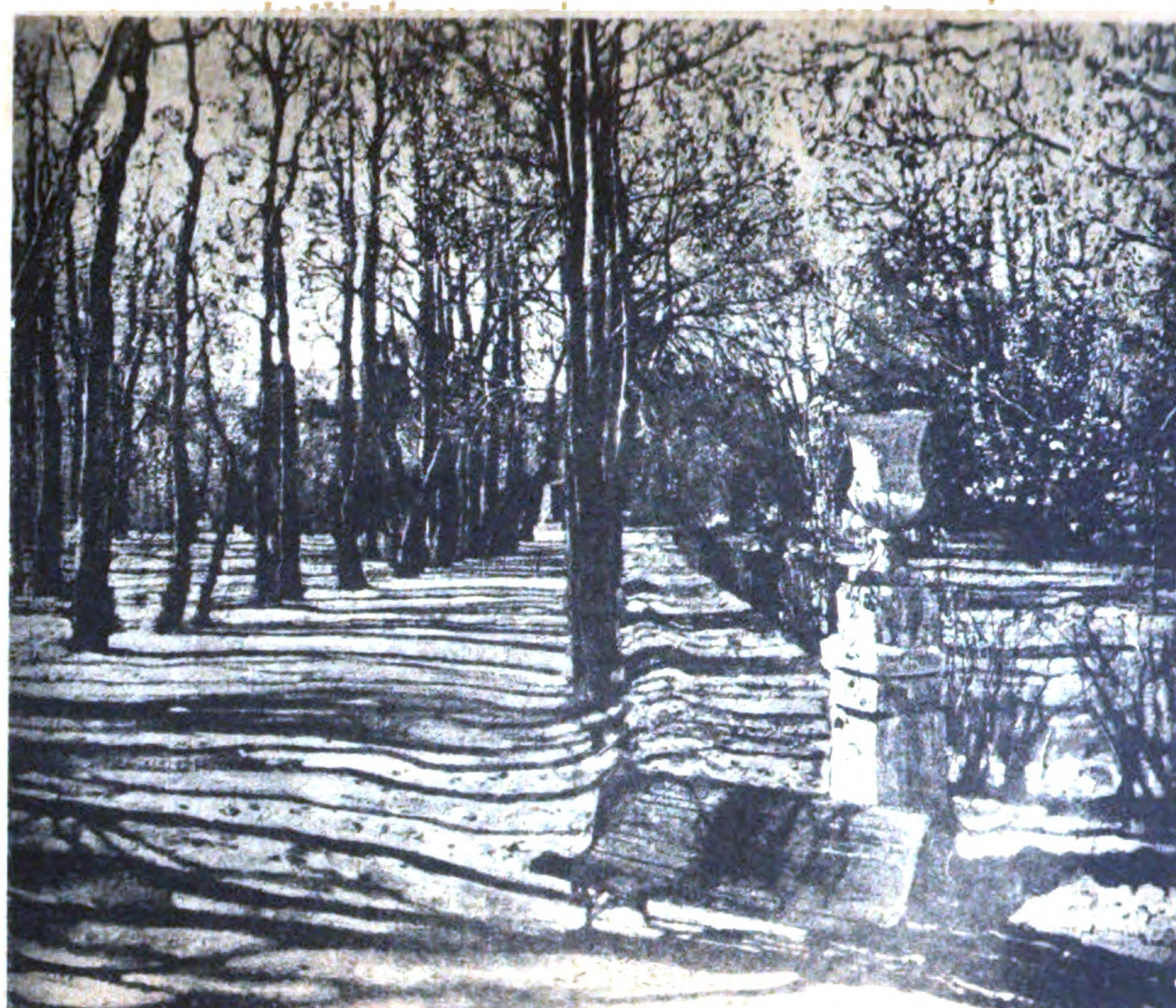
▼說苑



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



"IN THE PARK"
BY I. BRODSKY

中央公論



第卅三年第六號
六月號
第三百五十七號

民心の發揚と輿論の指導

——米國所見——

文學博士　姉崎正治

米國旅行から歸つて來た僕に對して、多くの人が發する問は米國人は一體戰爭に就いて本氣なのか、又どう考へて居るかと言ふにある。海を隔てゝ米國を眺め、地球の反對の側に起つて居る戰爭を餘所事に見て居る人々に取つては、此の如き問題が出るのは自然であるかも知れない。併し、米國人から見たならば、此の疑問ほど奇體で且つ又侮蔑的なものはなからう。國を擧げて戰つて居る、若しくは戰ひの準備をして居、且つ其の戰ひは自分一國の利害のみならず、國民の面目に懸け、建國の理想から見、且

つ又世界文明の將來の爲めに信ずる所あつての戰である。此の一生懸命の國民的事業に對して、一體其を本氣でやるのかといふ問ひを問ひ懸けられたならば、米國人としては啞然として答ふる所を知らないと云ふ外なからう。

米國人自身の思想意氣込を觀察すると共に、日本人側から斯くの如き問が起る原因を訊ねて見るも亦無用な事ではなからう。日本側から觀て、隨分多くの人は、今度の戰爭を歐洲戰爭と名稱けて居るが米國人から言へば世界戰爭である。獨り舞臺が世界的であるのみならず、其の意味に於て世界的であると考へる。實際の戰鬪が主として歐洲に限られて居るのを觀て、歐洲戰爭と考へるのも無理無き事のやうには見えるが、此は畢竟、其人の眼光が世界的に開けて居ない爲であつて、此と共に米國に對する奇妙な疑問は、米國の國情を考へないに歸着しないか。

一體十九世紀の文明は、歐洲を中心とし、アメリカもアジアも其の從屬と成つて來たのである。日本が現在或は帝國主義、或は經濟的膨脹に熱中して居るのも、目的は日本自身の爲めであるが、其思想の源を訊ね、又實行の方法並に原料を尋ねて見れば、十九世紀の歐洲文明を容れて居るに外ならない。十九世紀の歐洲文明は、斯くの如くにして世界全體を支配し、其の最後の破綻を呈して今回の大戰と成つたのである。言を換へて云へば、十九世紀文明は、思想に於て物質主義、機械主義を土臺とし、之を軍國的若しくは經濟的帝國主義によつて實行したものである。一例を擧げて云へば、生存競爭と言ふ事實は、地球初まつて以來動物の間にも人間の間にも行はれて來た事實であるが、而かも人間が之を意識して、獨り個人の間のみならず、國家の間にも生存競爭を主義として標榜するに至つたのは、十九世紀の

產物である。(我々の世界觀から觀ても、亦、現在生物學說から觀ても、動物並に人間の生活が單に競爭ばかりで出來て居るものでないと言ふ事は、姑く別問題として置く。)中世紀のマキアヴエリ主義にあつては、競爭陰謀は之を是認し獎勵しても、所謂る國家或は國民の主義として之を奬說したものではなかつた。然るに十九世紀の國家は、之を主義として標榜して居る。而して大別して云はゞ、之を經濟上に實行したものはイギリスであり、軍國的に實行したものはドイツである。其他の諸國も、皆多少は、此の兩者と同じ意識で動いて來た。

兎に角人生は生存競爭の舞臺だと言ふ思想が、人心に滲み渡り、人生の他の方面を顧みず、或は軍備に、或は商工業に、互に他を仆して己れを利するを目的として進んで來たのが、十九世紀の文明であつた。斯くの如き文明が、遂に何かの形で、即ち階級戰爭か又は國際戰爭で、大破裂を來すに違ひないと云ふ事は、有識者の夙に唱へて居つた所であり、僕自身も十年前カアン財團に對する報告によつて之を世界に公にして置いた。敢て豫言の明を誇る必要はないが、競爭を主義とした文明が、競爭の最も酷烈な且つ組織的な戰爭に破裂するのは當然の事である。競爭の事實が存在する以上に、更に之を自覺し或は其の意識に唆示せられて起した競爭が慘烈を極めるのは自然の結果である。

斯くの如く觀察すれば、現在の戰爭は、十九世紀世界文明の破裂である。其の舞臺は歐洲に發しても其影響が全世界に及ぶのは必然の勢である。然らば戰爭の終結結果が、世界的事實となるのも必然の勢である。然らば此の大戰の破裂に伴ひ、進行につれ、又其の結果如何を考慮すれば世界中の何れの國民も、此の大戰を餘處事と見るべきでない。利害は云ふまでもなく又其以上、更に國民生活の主義理想に

闘して、痛切の影響が各自の頭上に落ち來るを覺悟して世界に處する自家の態度を定めざるを得ない。米國人も、多數は、一九一四年開戰の始には、此處までは考へず、此を以て對岸の事、歐洲國民の戰爭だとして居たのである。然るに今日は、其の同じ米國が、最も盛な熱情を以て此の大戰に參加して居る。四年間に於ける此の變化は如何にして起つたか。

此の變化を起させた事情は、外にあつては、ドイツの刺激と、内にあつては、輿論の指導と民心の發揚と能く一致した結果である。ドイツの激發を述べるのは今の目的でないから、項目だけに止めるが、ドイツ軍國主義の主張と軍事上の暴行が米國の人心に深い悲憤を起させた事、米國内に於けるドイツ人の宣傳事業が如何にも侵略的に行はれて、反感を激發した事、續いて米國内に於けるドイツ人の陰謀が段々に露顯した事、此の三に歸する。

そこで進んで米國々内の輿論民心について觀察せう。

* * * * * * *

國民の多數が、大戰を太西洋の彼岸に於ける餘處事として居る間にも、先づ此の戰爭の世界文明に對する意義を道破し又ドイツ軍國主義に對する道徳的論評を加へたのは、主としてニューイングランドの思想家教育家であつた。開戰後一年近くになつた一九一五年五月ルジタニア號事件は、輿論の變化に一時期を劃し、多くの人々も一層現在大戰の世界的意義を認め、ドイツは結局米國の敵、人類の自由主義を脅す怪物だといふ觀念を强くした。惟ふに大統領ウィルソン氏も亦政治學者歴史家として、此點に著目して居つたであらう。併し一國の責任ある元首として、直ちに其意見を發表し、若しくは夫れに對

する行動を取る譯には行かなかつた。茲に於て、最初三年間の中立嚴守となつたのである。併し其の間に於ても、米國の思想家、卽ち輿論の指導者は、主義理想の上から見て、ドイツの軍國主義は、どうしても米國の敵となるべきものだといふ事を益す堅く認め、而して大統領も、此の最後の決論を實行すべき準備をなしつゝあつたと考へられる、例へば種々の批評を招いた"We are too proud to fight"の一言の如きも、種々の解釋を容れ得るが、其の中には、一方、世界の將來に對する米國の重大なる責任を思ふの念と、他方、最後には戰鬪に愬へるも已むを得ないと言ふ兩樣の意味があつたものと解釋し得る。其他大統領の種々の言論並に行動(例へば當時は意味不明瞭であつた、一九一五年の船舶法案提出の如き)に見れば、ウィルソン氏の意思は、國民をして以上述べた兩方面に對する責任を自覺せしめ、最後の覺悟を促すにあつたと思へる。卽ち中立三年間に於ける大統領ウィルソン氏の言論行動は、輿論を導いて最後究竟の必要に應ずべき國民の覺悟を嚮導するにあつた。

此の觀察を證明する爲に、茲にウヰルソン氏の言論の一端を擧げやう。ルシタニア事件後一年の間、ドイツの惡辣な戰術の外に、其の大使館を中心とし、網目を四方に張つた陰謀詭計が、米國内のみならず、ハイチやキユバ方面にも暴露して、終に大使館員の召還をドイツに要求せざるを得ざるに至つた。其頃卽ち一九一六年二月二日、大統領がトペカで演説した一節に曰く、

我々は何れの國民の權利をも侵害せうとしない。然し、若し或る國民が我々の權利を侵して來たならどうすべきか。茲に自分は、諸君に語らざるを得ない、我國の外交は日日に困難と複雜と危險とを增しつつある。そこで、若し此等の事を十分打ち明けて諸君に語り、又合衆國の力を以てなすべき大事が

何れにあるかを、諸君に語らざるを得ない。若し之をしなければ、自分は大切な義務を怠るに當る。

其の次の日、セント・ルイでの演說にも同樣の警告を公開し曰く、

諸君、危險は內より來らず、外より來り、此の危險は絕えず加はり、又直接に加はりつゝある事を諸君に語るは、自分の義務である。此の危險は、敢て新事件の發生した爲でもなく、又最近數週間又は數間月に起つた事でもなく、一事の起る每に(其の策源から)出て來る危險である。云々(How the War Came to America. p 9)

玆に「危險」といひ、其の策源は偶然に出來たものでなく、組織あり實力ある一大帝國の軍國主義にあるといふ事は、言外に見え、大統領の此に對する警戒が、日一日の事でなかつたのを示して居る。ドイツ系人民の多い中西部諸州で、此等の演說を試みたといふ事は、大膽と共に自信を證して居る。此の如くにして大統領は民望の代表者たると共に、又輿論の嚮導者たる實を擧げんとしたのである。政治家の要契が、此の二方面の職を果すにあり、其の思想見識が、一方國內の事情を顧慮し參酌し、又一國の利害面目を重んずると共に、他方國外の形勢に通じ、世界の大勢を洞察し、且つ此等一切の考慮方策の基本として、人生の大本、人心の本然に着目すべきは當然の事である。民情を察せずして、訓令で人を動かさうと試み、世界の大運動を洞察して、之に乘じ、又は之を嚮導する、見識も力量もない人間で、政治の局に當るが如きは、勿論政治家の資格なき者である。

言少し餘談に亘つたが、米國參戰の跡を觀察して見れば、國內に於ける輿論の勃興、民心の發揚は又實に世界文明の危機に動かされ、人類生活の大局に接觸した結果であり、國民が自家眼前の利害以上

に着眼し、一國の利害利慼が世界人類全體の運命と離るべからざるものあるを看取した結果と云はざるを得ない。此點に關して僕自身は、バークレーに於ける講演の一部で、左の言を以て米國人の意見を求めた。

「諸君米國人は、曾ては戰爭に對して中立を守つて居つた。然るに今になつて諸君が戰爭に引入れられた成行を檢査せらるゝならば、其の成行は盲目的運命の爲す所でなく、其の間に必然の論理があつた事を發見されないか。此の論理は純粹理性の論理でもなければ、又單に感情の問題でもなからう。卽ち此成行の必然なる事は、人生の活きた論理から來た事、國民の面目、並に國際道德に關する動的論理であらう。人類に對する挑戰が起り、文明が危機に瀕する場合、何れの人民と雖も、政治上並に道德上全然中立で冷靜にして居る譯には行かない。勿論或場合には政治的方策と道德的判斷との間に、幾許の距離を必要とする事、過去に於ける諸君の中立時代に於けるが如き事もあらう。斯くの如くにして諸君は人生論理の前提から必然の結論に移つて、此二つを合併するに至つた。此の如き人生論理の基礎たる原理は、結着人類の結合 Solidarity of mankind と言ふ事にある。而して結合は獨り經濟的關係のみならず、道德的判斷並に結合的理想に於ける結合である。今や軍國主義の一國民が、世界の表に堂々と宣言し、其の主義を以て世界の國民を支配し、其の運命を左右しやうと企てるに至り、世界の大部分を作つて居る諸の國民は、此の挑戰に對して判斷を一つにし、行動を共にするに至つた。言はゞ世界は二つに分れた。而して、人類の生活を破らうとする暴力に對する反抗に於て、人類の結合を示しつゝある。

此の點に就いては日本側では勿論種々の論議もあらうか、兎に角此考へは米國思想家の多數が我々と見解を同じうする點である。米國大統領が高調して居る人道主義は、抽象的な人道主義でなく、世界の危機に際して、人生の活論理を捕へた結果である。

兎に角開戰に至るまで、米國の輿論指導者は、歐洲戰爭が歐洲だけの事に留まり得ないといふ意義を明にして、民心を啓發し國民一般に向つて、此點に關する覺悟を促し、其の意味に於て輿論を導いて、國論を纏めるに全力を盡したのである。其の結果大戰に對する米國民の意見には、德義的判斷の色彩が益す強くなり、いよ／＼開戰となるに及んで、國論の一致は實に驚くべきものがあつた。人民は、此の戰爭が各自自分の生存並に主義の爲の必要事だと自覺して、此意味での擧國一致が行はれた。今まで國民統一の最大障害と考へらて居たドイツ人の陰謀は殆ど遺漏なき制止を受け、國論は獨立戰爭以來曾て見ざる程の一致を見た。此は要するに、國民の主義理想が、適當なる指導者の力で、人民各自の自覺となり此の如き民心の發揚が輿論となり、輿論が國民的大運動となつたのである。

此等の點に關して、日本側では米國の現狀に對する誤解が尚一部分に行はれて居るやに見える。即ち一つは米國に於けるドイツ人の勢力を過大に視ると云ふ事、二は國論の一致が壓制手段で行はれて居るが如く視る事。此の第一の點に關しては今一々之を說明する必要はない。唯一つ丈け事實を擧げやう。ドイツ人の都會と言はれたミルウオーキー市のドイツ劇場は、ルシタニャ擊沈の後(即ち宣戰前約一年)見物が減つて閉場せざるを得ないやうになつた。現在に於けるドイツ人の活動は、些々たる陰謀を企てるに過ぎない。而かもそれは殆んど悉く失敗して居る。第二の點に關しては、壓制手段と言へば、壓制

と言ひ得やうが、國民の大多數が方針を定めた場合、之に反抗し、或は敵國民と共謀して攪亂を企てた者に對して、國民的制裁を加へると言ふ事は、國民生活に於ける一要件たる事は、事々しく述べるまでもなからう。リンコルンが聯邦結合の大主義を敢行する爲に、南方の挑戰に應して兵戈を執つたものも此の意義に外ならぬ。

但し、米國に於ける此制裁は、一々法律と裁判との力で行はれ、而して輿論或は社會一般の意氣込が之を後援して行はれて居る。平時の法律でも公安秩序を妨害する者を制裁する事は當然の事であるが、之に戰時法律を加へる。即ちEspionage Bill の如き法律を制定し、軍事政治に關する機密を偸む者、其他船舶等の破壞を企てる者、旅行劵を僞造する者等に對する罰則を設け、其の法律に據つて處分をして居るのである。又大學教授其他の言論に對しても、制裁の行はれた場合がある。之を評して單に言論に對する壓迫だと解釋する人もあるが、一々の事實を辿つて觀れば、夫れ等反間的言論、即ち Seditious opinions の背後に、敵國民又はドイツに傭はれた者との聯絡のあつたに對する制裁である。其の一例は、僕の滯在中にも現に起つて、法律上の罪とまでは行かないが、其の證跡が可成り明白な爲めに、輿論の制裁で大學總長を動かし、教授を罷免するに至つた事實もある。此等の點も輿論の壓制と言はゞ壓制である。併し民意によつて動く國で、國論に背くのみならず、陰謀的手段を以て社會の攪亂を企てる者に對して、法律の制裁と共に社會的制裁を加へるのは、單に壓制といふべきものではなからう。要するに、大戰勃發以後三年の中立は、米國々内で、輿論指導の大運動が行はれた時代であり、昨年初に危機に迫り、終に宣戰となり、今日益々實戰の準備をして居るのは、民意發揚の大デモンストレーションである。

其の他戰時に於ける特別法律や非常政策は種々あるが、何れも輿論の後援を待つて行はれ、非常政策實行の局に當る人には、民間の有志者卽ち「一年一ドルの人」も少なからずあり、日本で云はゞ官民合同で實行する。法律は民意を代表するものとして、人民の尊敬を受けると云ふ事實に於ては、平時と異る事はない。玆に於て所謂輿論政治の運用に關する觀察を施す心要がある。所謂輿論政治は結果に於ては多數政治である。併し乍ら其實質と運用に於ては、多數の民意を發揚すると共に、之を指導する勢力があつて始めて輿論を形造ると云ふ大切なる事實を看過してはならない。卽ち嚮にも述べた如く、ドイツに對する開戰に於て、全國の輿論は殆んど全く一致の熱心を以て之を歡迎した。卽ち結果に於て最大多數の輿論である。然し此の輿論の歸嚮を見るまでの三年の間、大統領初め政治家、敎育家、思想家等が、輿論を指導した努力と成績とは、實に重大なる事實である。斯くの如き指導無しには、輿論は到底一致しなかつたに違ひない。僕自らは大戰破裂後一年間ハアバードに滯在し、親しく輿論指導者の或る人々に接し、東部に於ては民論が益々ドイツに反對する明白なる事實を看取し、其の後輿論に不一致の多かつた西部諸州に旅行をして形勢を觀察した。其より以後今度の旅行に至るまで、廣く言論界の形勢に注意して來たが、其の間に於ても輿論の趨勢は、恰かも洪水が平原を浸す如く、段々に中部西部を動かし、昨年の宣戰布告から今日に至つて、所謂擧國一致を見るに至つたのである。卽ち大戰勃發以來、戰爭に關する米國の輿論は、着々指導者の勢力を表はして、民心の發揚が之に應じて進んで來た事を觀る。勿論今日と雖も大統領の政策並びに政府の遣り方に關する批評は盛んに出て居る。如何に擧國一致でも政策方法を批評するのは、勿論人民の自由であるが、然し戰爭に對する國民の覺悟に於ては、立派

な一致を見得る。

斯くの如く指導者の勢力が、着々成功したのは、勿論命令や訓令で行はれるのでない。彼等の主張する所の意見が、政治的にも道德的にも人民一般の思想に對して、嚮導の光明を與へ、且つ國民の主義、修養、傾向と能く相合する爲めである。人心の機微に觸れ、人生の眞理を指摘し、而して民意を發揚する者でなくば、輿論の指導者となる資格はない。卽ち輿論の指導は又同時に民意の發揚となつて居るのである。何となれば多數人民は、棄ておけば所謂る「衆愚」にもならうが、能く之を敎育し嚮導すれば、案外人間の本性を發揮し、健全の思想を發表するものであつて、所謂る「常識」の大切な所以を示す。

特に社會の事が複雜になるに從ひ、個々特別の意見は、階級、職業、利害などの別に應じて、事物の一面に偏して大局に通じない患がある。官僚政治の危險は、社會萬般の事を官僚といふ一角から眺め其の一角の偏見に拘泥するにある。(閥族私黨の害は、云ふまでもない)。之に反して、民衆一般は、個々の個人として見れば、見識才幹に於て、專門政治家や官僚に劣つても、社會の意見の交換を盛にし討議を自由にして、彼等全般の判斷を集め得る機會を十分に與へると、民衆の輿論は存外健全に又鞏固に發揚し得る。一方輿論の指導も必要であるが、公明正大の政治には、どうしても民意の發揚を必要とする。而して、此の如き民意の發揚は、宣戰前後から、今日に及ぶ間、米國民輿論の運動に現はれ、民意の發揚が擧國一致の實質となり、戰備のみならず萬般の社會政策をも、人民自ら進んで、一國共同して實行するといふ實績を示して居る。米國人の所謂る民本主義は、此の如き民意の發揚と、其の結果なる人民の自發的共同を重んずる精神である。ラフリン敎授は簡明に此點を喝破して居る。曰く、

此の戰爭を遂行するに當つて我々の常に記憶すべきは此の世界で民本主義が威嚇を受けない様にしたいとの希望が其の本である一事にある。我々には弱點も少なからずあり、之れを告白するに躊躇すべきでない。我々は浪費もし愚にも陷つた事もある。然し此の戰爭は總て此等の弱點を我々に示してくれたと共に他に一事重要な敎訓を與へてくれた、卽ち我々が何よりも賴みとすべきは、常人の常識(the plain sense of the plain people)にあるといふ事。(McLaughlin: The Great War p15)

民本主義の此の如き見解については尙ほ考ふべき點は多々あるが、其等の討論は別に讓つて、此處には此の如きものが米國人の自信であり。意氣込であるといふ事を述べるに止めておく。

斯くの如き民意國論の運動に關して、尙ほ一つ其の根柢に看過すべからざる勢力は、建國の理想卽ち國民の精神的遺傳である。此の基礎と背景とが無くば、如何に高邁なる意見が出ても、人民全般の贊同を得民意を指導する力とはならない。然るに米國建國の理想として、人民の自由といふ事が、凡ゆる階級の人心に滲み渡つて居る。此の琴線に觸れさへすれば、指導者の言論は民意の共鳴を得る。ワシントンの告別演說に表はれた國民の覺悟(例せば、「諸君自らの手に成つた此の自由の憲法を神聖として維持せよ」といふ一語の如き)リンコルンのゲッチスバーグ演說に表はれた民本主義の主張、(獨立の宣言や憲法は言ふまでもない)、此等は米國民に取つて政治上の聖書の如き者である。輿論の指導者も、此等の精神を基礎にして、時事を解釋し、現在の世界的危機にも之を應用する。其處で、此の如き指導的言論は、民心を覺醒し敎訓して、民心は歸向を得て來る。且つや國民傳來の此等の主義理想は、單に言論文字でなく、七年間の苦鬪を經た獨立戰爭と、五年の惡戰を續けた南北戰爭とに由つて、國民の精神に血と淚との證明

を與へる。此に於て輿論を指導する者も、此の精神を基礎とし、一般民心も此の生命に接觸して奮起する。此に於て國論の一致となり、國民の意氣精神は、獨立戰爭に表はれた自由獨立の主義、南北戰爭に表はれた人道自由の理想、此等を應用し、充實し、擴張して、旺盛な意氣を呈する。單り米國内に之を應用するのみならず、之を擴充して、今回の世界大戰に表はれた世界文明の危機に對して、兵力を以て飛び込んだのである。即ち彼等の自由主義は、單り國內政治上の自由のみならず、世界に國を成す諸の國民民族の自由に對して、餘處事ならぬ感を抱き、强國に犯された弱小國を救助するにあらゆる方法を盡し、終に此等弱國の壓制者たるドイツを敵をして戰ふといふ自然の結論に達したのである。所謂國際的民本主義と稱すべきものが此である。

* * * * * * * * *

段々に述べた如く、民意の發揚は適當なる指導を要する。而して其の背後には一貫の精神の存在する事を要する。即ち一般人民と指導者と根本主義と、此の三者の相關照應、謂はゞ三位一體が、如何に米國の國民生活に表はれて居るかといふ事に歸着する。他語で云はゞ、獨立以來百四十年、種々の變遷を經た米國民は、其理想や氣風も變化して居ないかといふ問題である。自分の觀察では、今回の戰爭に關しては、此の三一關係が獨立戰爭の場合、南北戰爭の場合と非常に趣を同じくして現はれて居る。殊に今回の戰爭に於ては、主義理想を高調すると云ふ事が世界的目的に向つて、世界抱負を以て表はれて居る。但し一方に於て我々から觀ても、又米國民自身に取つても重大な問題は、獨立戰爭以來百四十年、米國の國情は種々の變化を經て居る。此事實は何人も爭ひ得ない所であるが、夫れに拘はらず、如何にして

根本主義に一貫した所が有ると云ひ得るか。此點に就いて少しく觀察する必要がある。

第一、舞臺の上で云はゞ、獨立戰爭は東海岸十三州の運動であり、其の人民の多數はアングロ・サクソンであつた。彼等は十八世紀フランスに發生した天賦人權の思想と、イギリス傳來の自由思想とを一にし、而して當時のイギリス政府の壓制に反抗して起つた。夫れ故獨立の結果、個人の自由をピユリタン的に主張すると共に、十三州各州の獨立をも尊重して、聯邦憲法すら前後十年を經て初めて十三州の批准を經た位である。此の時代に於ける彼等の自由主義は頗る個人的であつた。然るに其後聯邦の構造は段々鞏固になると共に、其の範圍も中西部まで擴まつた。即ち南北戰爭の時代には、舞臺はロッキー以東の全部を含んで、人民としては北方にはドイツ、スカンヂネヴィア等の移民が大に加はり、南にはフランス人が多かつた。此に於て奴隷解放問題に關して、南北の間に意見並びに利害の衝突の起つた場合、今まで形造つて來た聯邦は破滅に陷るかと危ぶまれた。然るに奴隷解放を主張する北方側は、アングロ・サクソンもチユートンも、共に一致して主義の爲めに戰ひ、奴隷解放の成就すると共に、聯邦組織は政治的に一層鞏固になり、之に加へて自由主義の理想は一層明確に聯邦の道德的基礎となつた。所謂る雨降つて地堅まつたのである。

南北戰爭以後今日に至るまで五十年の變化は、前時代に劣らない重大なものであつた。即ち聯邦の地域は、太平洋沿岸全體に擴張し、住民は一層複雜に、ヨーロッパのあらゆる人種を包含し、其の間には葛藤もあれば同化も行はれて今日に至つた。殊に其の間に重大な勢力に成つたのは、十九世紀後半に盛んに移住して來たドイツ人とアイルランド人とである。今度の大戰に際して、此等は共にイギリスに反對し、

從つて聯合國側に同情せず、此等の勢力丈けでも米國をしてドイツに反抗するを得ざらしむるかと危ぶまれた。而るに事實は反對に、ドイツの宣傳事業は、却て米國人の反抗を惹起し、米國が宣戰するに當つては、極めて少數のアイルランド人（所謂シンフエイン黨）と、殊にドイツ政府と氣脈を通じて居るドイツ人との外は、悉く大統領の政策を贊助するに至つた。

此の事實を觀て、其の意味を解釋するには、どうしても先に述べた國民生活の三位一體を基礎にしなければならない。此の國論一致を以て、單に政府或は議會の高壓手段が效を奏したと考へるが如きは、全く米國の國情と民心の實際とを知らない人の僻見に過ぎない。米國人の如き自由主義の人民が、無理と知りつゝ政府の高壓手段に屈從すると云ふやうな事は到底有り得ない。然し繰返して云ふ、斯くの如き民心が歸向する所を定めるに至るには、適當なる輿論の指導を要し、而して輿論の指導といふのも、少數者の勝手に行ひ得る事でなく、一方民心を發揚するに足る旗幟を揭げると共に、其の背景には國民的理想の傳統があると共に、又世界人類の文明に對する活眼光明を與へるのでなくば到底行はれない。

斯くの如く、國論の一致によつて敢行する戰爭であるから、其の手段に於ても、人民の自發的作用に待つ事の多いのは勿論である。政府や議會は、要するに民意を代表し、實行の委任を受けて居るに過ぎない。此點に於ては軍備組織の事、公債募集の事、食料制限の事、勞費防過の事、鐵道運輸の事、船舶建造の事、其他戰爭遂行に必要なる國民的動作は、一方政府の組織的方策に待つ事あるは勿論であるが、人民全體の自發的努力が其の基礎を成して居る。（此等の事實に關しては、「雄辯」六月號に述べて置いたから茲には略する）或る日本人の觀察者の批評に面白い事を云つて居る。曰く、「米國人は元來自由を尊ぶ

人民である。然るに彼等は戰爭の爲めだと稱して、パンや砂糖まで制限を受けて居る。斯くの如きは自由主義の矛盾である」と。此觀察者の誤りは、第一、米國人の主義とする自由と云ふ意味內容を考へないにある。勿論米國人の主張する自由は、結局個人の自由であるが、而かも自國を以て此の自由を主義として建つた國だと信じ、其の自由を防衞する爲めには、國民的動作の必要を知つて居る。(ワシントンの告別演說には、特に强く之を說いて居る)。獨立戰爭の成功も、南北戰爭の結果も、要するに斯くの如き意味に於ける自由主義の結果であつたといふ自信が、米國人民の信仰であり熱情である。自由に對する彼等の信念は、彼等をして此の主義の爲めには個人の利害をも生命をも犧牲に供せしめる力を有つて居る。然らば其の自由主義の爲めに食料を制限する位の事は、苦痛でもなければ矛盾でもない。且つや米國は戰時の食料制限のみならず、其他造船所の提供、鐵道運輸の連絡など、必ずしも政府の命令强制を待たず、人民なり會社なりが自動的自發的に之を行つて居る。(是等の事實も亦「雄辯」の方に讓る)。自由主義の利害得失は別問題として、此の如き自由主義が米國々民の理想であり、此を個人生活の上に實行せうともするが、又之を國民の生活にも應用し、之を世界人類の共同生活、卽ち國際的正義の關係にも擴張せうとするが、彼等現在の意氣込である。而して斯の如き意氣込の擧國一致が行はれたのは、國民理想の傳統が基本となり、輿論指導者の見識が動力となり、一般民心の發揚が、其の實質となつて動きつつあるのである。

* * * * * * * *

最後に附言として、モンいー主義に關する點を觀察する必要があらう。モンロー主義の意味內容に就

いては、數年來種々の意見が出て居つた。又現在の戰爭に關聯して、夫れが果してモンロー主義と矛盾するや否やに就いても、種々の疑問が起つて來る。(之れに關してはハワイやフイリッピンの問題も、二十年以來の問題である)此の事實に關しては、唯一つの事實だけを述べて置かう。卽ち今までもモンロー主義の內容並に應用に關して種々の變化を經たのに、一步を進めて米國は、モンロー主義の形式を棄却せよといふ議論である。之れがとれだけの勢力に成るか、尙ほ未知數である。然し顯著有力なる議論を一つ玆に紹介する。夫れはアシヤア教授 Professor Usher の The Challenge of the Future である。此人は少壯歷史家として近年頗る有力に成つた人である。大戰以前に「汎ドイツ主義」と云ふ書物を著して、ドイツの世界政策を簡明に述べた。其の根據は歷史と經濟にあるが、其の書物に述べてある事が、殆ど悉く適中して居る事は、戰爭以來世人がドイツに關して注意を深くするに從つて、明かに成つて來た。卽ちアシヤアは、此一著に由つて、單に過去を顧る歷史家たらず、將來を洞察する歷史家たる名聲を博した。其の人が昨年の初め、卽ち米國宣戰の前に、右に述べた新著を公にした。此の新著に於ける論點は、此米國の經濟政策に在つて、經濟に基く將來の外交政策を指示して居る。而して其の政策として四つの大綱目を擧げて居る。卽ち(一)イギリスと經濟的並に政治的の攻守同盟を結ぶ事、(二)太平洋を凡て日本に讓步する事、(三)モンロー主義を棄却する事、(四)從つて南アメリカに對して、干涉しないに反して、中央アメリカる握り占めを事、此四若しくは五項目を大綱として居る。其の論據に就いては今一々述べないが、大體に於て經濟政策を中心にしつゝ、米國國民の社會的理想を實行すると云ふ事を眼目にして居る。其政綱の中でイギリスとの同盟は參戰に由つて事實に成立して居る。さうしてアシヤアの云ふ

如き經濟的連絡もイギリスとの間に成立つ事は、自然の勢ひだと考へられて居る。且つ又中央アメリカを握り占めるといふ事は、殆ど既定の事實である。其處で殘る所、モンロー主義を棄てるといふ事と、太平洋を日本に任かすといふ事、此の二つに就ては形勢全く未知數である。然し洞察の明あるアシヤアの言論として、非常な注意を惹いて居るだけは事實である。

此の問題に關聯して、第一は米國の自由主義と此等の政策との關係如何といふ事、並に日本に對する米國の輿論如何といふ問題が出て來る。此等に關しては尙ほ一層の研究を續けて見たい。

遊戯化しつつある我國近時の政界

大山郁夫

（一）議底の影の如き多數黨の威力

幾多の重要なる問題を控へながら、政府と議會の多數との國政玩弄の結果、一二の場合を除いては、平凡極まる經過を以て始終した第四十議會閉會後の我國の政界は、その過去の經緯より來れる當然の歸結とは言ひ條、是は又餘りに甚だしく惰氣滿々の姿を呈し、國民の注意は漸次之より離れ行くのみである。議會進行中に兎や角と問題にせられた多數黨の威力といふものも、畢竟政府の提出に係れる豫算案に大修正を加ふることに依つて其面目を散々に蹂躪したと言ふに止まり、毫も年來行詰れる政局を展開するために貢献した跡を見せなかつた。政友會が眞に多數黨の威力として誇る程のものを持合はせて居るものならば、丁度今といふ今こそそれを持出して、近くはその寺內內閣の下に於て我國の憲政のために犯し來つた罪過の幾分をでも償却すべき絶好機會ではないか。然るに事實は之に反して、寺內內閣はその一年有半餘の政治的經驗に於て、今日程明瞭にその內政外政上の無力無能無策を證據立てたことがないに拘らず、所謂「重大なる時局」の前に於て、細々ながらもその命脈を取留めて居るではないか。死に切れない病內閣もあつたものかな。首相は生理的及び心理的原因に依つて近頃意氣甚だ銷沈して居る樣に傳へられ、その他の閣僚にしても、脫線氣分を發揮して頻に新聞種を製造するを以て能事畢れりとするもの、若しくは猫を咬む窮鼠を學んだらしい狂暴政策を行つて、「大臣の威儼」などと獨り好がりを言ふものを除いては、正直の所孰れを見ても氣勢頗る揚がつて居ない。斯の如き內閣の運命は、普通の場合

に於ては、風前の燈火にも譬ふべきものである。然るにそれがこの普通以上の場合に於て、不安定不平均の狀態を示しながらも倒壞の非運を免れたまゝ、兎も角今日まで繼續して居るのは不思議である。無論それは後繼內閣難のためであることは言ふまでもないのであるから、それだけのことならば、別に不思議とする程のことはないが、多數黨の威力を誇る政黨が儼存して居るのに後繼內閣難の問題が起り、而して既に明瞭に存續權を喪失して居る內閣がそのために覺束なき命脈を續々として繫いで居る情態が何時までも眼前に現はれて居るのが不思議なのである。是は要するに、政黨が內閣を威嚇する力とまではなつて居るものの、まだ內閣の存廢を支配する力とまではなつて居ない我國の憲政の變則的發達の姿をその儘に反映して居るものであるが、斯の如き立場より眺むれば、多數黨の威力など言ものも、畢竟鏡底の影に過ぎないものである。

（二）　京都における二元老の會合

政界の小策士連が陰暗裡に跳梁して、擧國一致內閣の畫策に腐心して居るとか、政府反對黨の政客が原氏を首魁とする政友會內閣の成立を歡迎すると公言したとかの噂が所在に高まるに至つたのは、兎も角寺內內閣に龜裂の生じた消息を語つた第一聲であつたが、是等のことは今に至るまで竟に事實となつて現はて來なかつた。斯くて議會終了後の政界は、依然として平凡なる鎭靜に支配せられ、沈滯低迷の情態に於て繼續し、行詰まれる政局は何れの點より開通すべきかの目星さへ附かなくなつた。此時に當り、滿目初綠の裝ほひ美しき京洛煙霞の鄕に於て、政治的に隱者を氣取れる山公園侯の二元老が再三の會合を重ね、同時に政友會の幹部中の三四の有力者が故意か偶然か、相蹤いで此地に落ち合つたことは、何か意味ありげに見て、却て政黨の組織的行動よりも遙かに有力に世間の視聽を聳てしむる動因となつたのである。

山公園侯の會合は、表面上はどこまでも雅懷淸興を遣るものの樣に取繕はれたが、果して他に政治上の意味の件はなかつたものであるか否かは、此二貴人及び

その杯盤の間に侍した少數の寵人の外には之を知るものがない。けれども世人の多數は單純に之を風流三昧の小宴と見做して居ないことだけは事實である。世人の此種の推斷の當否は姑らく之を問はぬこと丶するも、内閣更迭の可能性が議會に於ける政戰上の勝敗で決せられるよりも、寧ろ政治的責任の圏外に立てる一二の隱居政治家の指金で左右せらる丶事實がその間に暗示せらるるは、立憲國に於ける奇異なる現象と見なければならぬことである。而かも我國民の多數は之を當然のこととして怪まず、寧ろその不當を鳴らす者を野暮として嘲笑する傾向を示すのは、思想上の習慣の恐ろしさを指示するに最も適切なる例證であると謂はねばならぬ。

今更憲政の發祥地たり、その運用の模範國たる英國の政治上の實情を引き來つて、我國のそれに比較するのは、餘りに倫を失した遣り方との譏りを免れまいが、筆の序に最近の英國議會に於けるモーリス少將の批難に對するロイド・ジョージ首相の辯明及び議會の之に對する態度の如きものに觸れて置くことは無用ではあるまい。モーリス少將は最近まで英軍の作戰部長として在任し、又曾てヴェルサイユに於ける聯合軍の最高軍事會議にも列席したこともある武官であるが、先頃倫敦の諸新聞紙に投書して、ロイド・ジョージ首相及びボナー・ロー藏相が、議會に向つてなしたる軍事上の報告の虚僞であることを摘發して、英國の議會に於て容易ならざる物議を惹起したことは、當時の外電に依つて報ぜられた所である。彼の所論の要點は、今次の戰鬪開始當時に於ける佛國内英國戰線の延長に就き、及び本年の初頭に於ける在佛英國軍隊の實勢力に就き、並にパレスチン、エジプト、メソポタミヤ等に於ける白人兵士の數に就き、右兩相が眞實ならざる報告をしたといふのであつた。彼が此際斯の如き摘發を行つたことを評して、ロンドン・タイムスが、彼の此行爲は一片の愛國心に出でたものであるけれども、只事を好む一派の策士連に乘ぜられた形跡があるを如何せんと述べたことの當否は、素より茲で問題にしても始ま

らぬ話であるし、又英國の政界にも我國の政界に於けると同じく、國家のために百害あつて一利なき所謂策士と稱する寄生蟲の一種が跋扈して居ることなどは、別に珍らしがる程の現象でもないが、只我等の注意を促す一事は、英國の議會及び政治家が之に對して、苟くも虛僞欺瞞といへば一毫の微と雖も之を假借せぬといふ、極めて嚴肅眞摯なる態度を示したことである。

モーリス少將が指摘した樣なことが、我國の議會に於て問題となつたならば、その辯明の衝に當る大臣は只形式的に「政府はさる事實を認めず」位の答辯を與ふるに止まり、議會も之を深く追窮せずに濟ませたことであらう。或は「時局の重大」に籍口することに妙を得たる我國の官僚政府の大臣は、斯の如き問題を持出した議員を亂臣賊子でもあるかの如く罵倒しないとも限らないし、而してその議員の反對の側に立つ政黨も直ちにそれに同意を表して、却て鋒尖を之に向けないとも限らないとは、第四十議會に於ける政爭の記錄だけに依つても、優に之を揣摩することが出來るのである。けれども此問題に關して緊張せる注意を以て首相及び藏相の答辯を待ち設け、場合に依つてはロイド・ジョージ内閣の危機ともなり兼ねまじき形勢を示したのは、流石は英國議會である。彼等議員連は時局の重大は毫も眞率を缺ける政治を看過する口實とならぬことを知つて居たのみならず、却てそれは一層眞率なる政治を要求するものであることを信じて居たものらしい。兎も角、彼等が眞劍の心意氣を以て政府の答辯に耳を傾けたことは、簡單なる電文に依つても十分に之を窺ふことが出來るのである。而して首相及び藏相も亦、よく議會の此期待に副ふことが出來たのは、此議會にして此政府ありと稱すべく、他國のことながら聞くだに心地よきことであつた。即ち政府反對派の牛耳を執れるアスクィスが、此問題に關して特別調査委員會を設けんとの動議を提出したのに對して、藏相ボナー・ローは「最高の信任を得て重要の地位に在る官吏が國務大臣の行動に關して反對の意を表し、その行動を審査せんことを要求する場合、縱しや其事が緊要なる

にもせよ、その都度審査を行ふに於ては、政務は竟に進行すべからず。然りと雖も本件は國務大臣の體面に關し事態輕からざるを以て、政府は陛下の裁判官二名を請ひて審問會を開き、國務大臣の議會に言說せる所の當否如何を審査し、成るべく速に之が結果を報告せしむるやう奏請に及びたり」と辯じ立て、以て言責を重んずる政治家の襟度を示し、又首相ロイド・ジョージは、モーリース少將の書簡に對し、一々例證を擧げてその論難の根據なきことを明かにし、且つモーリス少將が批議せる大臣の陳述なるものは、少將自身の屬して居る官省より供給したる報告を基礎として作製したものであることを丁寧周匝に說明して、以て議員多數の滿足を贏ち得た。而してその結果として、アスクイスの動議は、百〇六票對二百九十三票の多數を以て否決せられ、政府は無難に此危機を通過したのである。

右の一事件は、英國政界の現狀——殊にロイド・ジョージ及びアスクイスの兩大立物の勢力の消長を測知する上に於て好個の參考資料となるものであるが、差詰め我等の問題となるべき一要點は、英國に於ける政爭上の輸贏及びその極致たる內閣の動搖が、白晝公然議會內に於ける諸勢力の角逐に依つて決せられることである。之を我國に於ける政變の道程が、少數の隱居政治家の秘密の會合に於ける相談に依つて左右せられる實情と比較せば、その間の差異の餘りに甚だしいものがあることは、何人と雖も之を否定することが出來ないのである。大臣の任免は大權の發動であつて、臣子の濫りに私議すべきものでないとは、閥族官僚が好んでその專權に對する辭柄とする所であるが、斯の如き言分が政治の實質と形式とを故意に混同したものであつて、且つそれは問題を一般國民が腹藏なく意見を吐露することを憚る所謂言論の危險區域の上に繞らし來ることに依つてその自由批評の口を塞がんとする詭計より出でたものであることは言ふまでもないことであるが、同時に內閣製造の處方を勝手氣儘に私議するものは、實に斯く言ふ閥族官僚自身であることは、國民

の最早十分に知り拔いて居る事實である。かの內閣の危機の傳へらるゝ每に、「政界の諸星」とか稱するものが小田原の一角に集まつたり、軍閥の巨頭が一たび平安の舊都に趣くと此風月の靜寂境が忽ち政治の中心に變じたりすることは、我國の憲政の現狀が今尙ほ外戚專權の藤原時代の統治樣式を蟬脫し切つて居ない確證と見るべきである。現下の行詰れる政局が何時如何なる方向に展開せんとするかの問題に關しては、國民は秘密主義の張本人たる山縣二老の周圍に侍する少數の寵人よりも尙ほ無知識である事情がないとは、誰れも保障することが出來ないのである。奇妙なる憲政もあればあつたものである。而かも不思議なる政治的樂觀論者が我國には少からず存在して居つて、而して彼等は我國の憲政は特殊の事情の下に置かれて在るのであるから、英國などとは異つた方向に發達せねばならぬなどと論ずることに依つて、一切の不都合なる現狀を是認せんとして居る。斯の如き論者は、寧ろ頭ごなしに立憲政治を否定して、我國の特殊の事情は斯の如きものを不必要とするものであると唱へる方が、頗る理論的に徹底して居る筈ではないか。而かも苟くも萬機を公論に決すべしといふことを根本精神とする立憲政治を肯定する以上は、我國の憲政が英國流の責任政治に向ふことは、希望すべきことでこそあれ、決して咒咀すべきことではない筈である。元老の政治的干涉を謳歌若くは默過する者は、明治聖帝の五事の大誓に耳を掩うて、直ちにその理想の統治樣式を藤原氏や平氏の長袖若くは武辨專制時代に求めて然るべきものである。少くともその方がまだしも理論的に徹底して居るだけ、それだけ取柄があるものといふことが出來るのである。

近年來、民衆政治の實現に對する要求が論壇に於て頻に唱道せられ、讀書社會に於て盛に共鳴せらるゝ事實は、內閣の存廢が二三の隱居政治家の私議に依つて決せられ、全國の青年團が軍閥の俘虜と化せんとする危險に瀕するが如き情況と、將來如何なる點に於て衝突せんとするか、若しくは如何なる點に於て調和せん

とするかは、未だ解決せられざる問題である。我國の政界はどこまでも頑冥不靈なる官僚軍閥と、周圍の世界の政治的進運に啓發せられたる識者階級と、並に巧に是等兩者の間を縫うて進みつゝ、盛に便宜主義を發揮して、表裏反復常なき姿を呈する操守なき政黨者流との三つ巴となつて入り亂れての掛引のために、著しく紛糾錯亂の狀態に在ることは、今更言ふまでもないことである。かの洛東洛北に於ける二星の再三の會合が、暫らくの間は政界の注意の焦點となつたことの如きは、見方に依つては時代錯誤の現象とも言ひ得られ、見方に依つては當然必至の事實とも言ひ得られるのは、全くそのためであると謂はねばならぬ。此混亂狀態が結極如何なる方向に落附くべきかが、我國憲政の將來の明暗二途の分岐點を構成するものである。そこに希望の微光も動いて居れば、絕望の種子も潜んで居ないでないが、孰れの點より見ても、憲政の闘士が今に及んで意氣沮喪して俄に活動を停止せねばならぬ根據は毛頭存在しないのである。老い行く者をして老い行かしめよ。我國の憲政の將來は、未だ尙ほ固定したる政治觀に執着せざる靑年國民を政治的進步主義者の味方に引入れることの可能なるや否やに繫つて居るのである。只我國の軍閥の全國靑年團の組織に由つて是等靑年國民を蠱惑せんとする活動は、可なり凄まじい勢を以て進んで居ることは、注意して觀察すべきものである。されば我國の憲政の進運に關心する者は、此際少しも遲疑せず、之に對抗するに足る主義宣傳的運動を提起し、且つ組織的に之を遂行せねばならぬ必要に際會して居ることだけは、一點疑ふ餘地なき的確なる事實である。デモクラシーは、我國に於ても議論の時代より實行の時代に入つたものである。

(三) 政黨の遊說期

內閣の生命が今尙ほ依然として元老の手に握られ、政友會が誇稱する多數黨の威力も政局展開のためには、少くとも直接的積極的效果を及ぼすことを得ず、唯一の政府反對黨たる憲政會は、過ぎし議會に於て豫定の事とは言ひながら散々の敗北を經驗してよりは、

全く內兜を見透かされたる如き悲況に陷り、國民黨や新政會や清和倶樂部の如き小黨小派は、キャスチング・ヴォートの所有者としての外は、何等の重大なる勢力としての働きをなすことを得ることなく、斯くて政界の注意は却て山國二老の會見場たる京洛の閑地に向つて牽き着けられ、そこに何等かの暗示を捜り索めんとする飛耳張目が集められ、政黨の組織的行動の如きは暫く措いて顧みられないといふ樣な狀態が假初めにも現はれ出でたことは、各政黨の自負心を甚だしく毀損したものであらねばならぬ。

　政黨の政治的意義が理論的には漸次認識せらるる樣になつた今日に於て、その實際的効果が却て右の如く茫漠極まるものとなるに至づたのは、素より各方面に於て專制時代の思想的習慣を脫し切らざる我國の社會に於ける憲政の變則的發達に基因して居るものに相違ないが、斯の如き憲政の變則的發達をその儘に放任して置いた事に就いては、政黨自身にも責任がないとはいへぬ。一體官僚打破を以て少くともその使命の一に數へて居る我國の各政黨が、却て自ら多大の官僚臭を帶びて居ることは、一は我國の政黨の歷史より來て居ることであるが、主としては政黨自身の自覺の不徹底に胚胎して居るものである。我國の各政黨がその幹部中に多數の官僚系出身者を包容して居ることは、深く咎むるに當らないとしても、政黨が是等の官僚系出身者を政黨化し得る程度よりも、是等の官僚出身者が政黨を官僚化し得る程度の方が却て强大であるのは、是れ全く政黨の本體が固まらずにぐらついて居るためではないか。夫の各政黨が常に官僚政府に對して多大の被誘惑性若しくは被牽引性ともいふべきものを示して居るのは、政黨の官僚否認の聲に著るしき僞善的色彩を帶びしめて居るものであることは、今更玆に改めて指摘するまでもないことである。

　政黨の官僚政府に對する被誘惑性若しくは被牽引性の根源に溯れば、その極點に於て專制治下の人民の通性たる事大主義に到着するものである。無論此種の事大主義の習性は、自治の訓練を缺如して居る我國の社

會の各層に根強く潜在して居るものであつて、その極端の一例を擧ぐれば、最も獨立的でなければならない筈の商工業界に於てさへ、種々の理由に依つて官吏の古手までが珍重せらるるといふ次第であるから、獨り政黨に向つてのみ此傾向の外に脱出することを求めるのは、或は無理な註文であるかも知れぬ。けれども政黨はその本質上一般國民――殊に國民中の選擧有資格者の支持後援なくしては、到底何等の重大なる政治的勢力となることが出來ないものであるから、必然的に最も民衆的色彩に富まねばならぬものである。而してこの民衆的色彩に富むといふことは、選擧季節に於て選擧區民に阿附し愁訴し嘆願することに依つて、その一票を自黨に振向けしむるが如きことを指すものでは決してなく、選擧季節と否とに拘らず、民衆の思想感情希望に共鳴同感して、之を國家政治の上に傳達する媒介となることである。立憲政治の人間味及び精神的意義の充實は、政黨が此の重要なる職務を完全に果たすか否かに懸ることの極めて多いものである。政黨が此使命を忘却するか、若しくは之を濫用する時は、立憲政治からはその人間味及び精神的意義が全然喪失せられて、最良の場合に於ても、只その機械的運轉のぎごちなさのみが殘留することとなり、その結果としては、山公園侯の一夕の藤原時代式の雅宴の情趣さへも之に伴ふことなく、而して只二老の間に國政の樞機が私議せらるることにも等しき惡政のみが、その正味の收穫として贏ち得らるるに止まるべきものである。反動的政治思想は、常に斯の如き罅隙を狙つて居るものであることは、我國民が如何に健忘症に罹つて居るにしても、その反復的體驗に依つて、今は之をその記憶の上に深く印刻して居る所のものである。我國の政黨は孰れも此點に關する完全なる理解を缺如して居るがために、選擧季節に於て選擧區民の前に叩頭することだけは決して忘らないが、民衆の思想感情希望に共鳴同感することを修養するが如きことは無く、却て自ら深く官僚臭に浸潤することを意としないである。而かも此傾向が憲政運動と呼ばれた大袈裟な示威運動を

り越して來た今日に於ても尙ほ、減退するよりは寧ろ增進しつゝある痕跡を見せて居るのは、「曠古の時運」とか「重大なる時局」とかの題目稱名では到底蔽ひ盡くされない一大不合理である。而かも斯の如き事を種々の口實の下に於て平氣で行つて居る諸政黨が、「主義に於ては反對なり」などと揚言しつゝ官僚否認の聲を絕たないのは、餘りに國民を甘く見積つた仕業であるが、實は反對に政黨自身が斯くすることに依つて益す國民に甘く見積られて居るのである。その證據は苦心して搜索するまでもなく、世人が内閣の更迭問題の暗示を政黨そのものの行動に求めずして、却て之を洛東洛北に於ける二星往訪の隱栖に求むるその事だけで十分である。

とはいへ、政友會及び憲政會が、豫定のプログラムに從つて、此頃になつて遊說を開始したことは、多少の程度に於て政界の注目を惹くことを怠らなかつた。殊にそれが時期に於て、愛知縣、岩手縣、及び奈良縣に於ける補缺選擧と偶然相合致したために、一層有意義のものの如く見え、殊に右三縣の內、愛知が憲政會總裁の、而して岩手が政友會總裁の鄕地であるだけに、一種の劇的興味さへ之に加はつた感があり、又奈良縣の補缺選擧が愛知縣のそれに應援中の上島氏の死に依つて惹起せされたことに依つて、憲政會に取つてはそれが弔合戰となつたとは、選擧區民の心理の上に或る影響を齎らすべきものであることも考へ得られるのである。唯此際國民黨が比較的鎭靜を保つて居るのは、何の理由に出でたのかは知らないが、傍觀者に取つては聊か物足らぬ心地がしないでもない。

政友會の遊說は本(五)月六日の富山市に於ける北信八州大會及び十二日の高知市に於ける四國中國大會に依つて烽火を擧げ、憲政會のそれは同じく十二日の名古屋市に於ける東海十一州大會に依て皮切りをした。是等の政黨大會は、今後他の地方に於て擧行せらるべき同種の會合、及び現に所在に開催せられて居る多くの支部大會と共に、後繼內閣問題が元老の胸中に疊み込まれて外界に漏れさうにも見えぬ現下の政界に於

て、少くとも一種の點景として見るだけの價値は僅かにあるものである。

是等の大會に於ては、例に依て例の如く宣言と決議とが發せられ、それに加へて黨首の演說が試みられた。而して又各場合に於ける宣言及び決議は、是亦例に依つて例の如く美辭麗句に滿ち、之を取つて直ちに當該政黨の日頃の行動に比較し來れば、その間の差異霄壤も啻ならざるものあるを見たのである。只各政黨の首領の演說に於ては、當該政黨の現在の立場が辭句の間にそれとなく反映せられて、國民に或る種の暗示を與へたものがあつたことは、極めて興味に富めることであつた。此點は後段に於て少しく詳述して見やうと思つて居る所である。

何時ものことながら、政黨がその宣言や決議に於て堂々たる語句を駢列して、それがその日頃の行動と如何なる點に於ても一致して居ないことを毛頭顧慮した形跡を見せないことは、政黨が如何に國民の健忘性に附け込んで居るものであるかを示して居るものであつて、國民の立場より之を見れば、誠に片腹痛い極みである。是は今回の大會に於ける政、憲兩黨の宣言及び決議に就いて、共に之を言ふことが出來るのである。彼等が之に依つて全然國家の運命に關する重任を擔つて立つて居る概を示して居ることは、その過去に於ける自黨本位的及び資產階級幇助的行爲に照らして考ふる時は、心ある者をして顰蹙に堪へざらしむるものがある。殊に政友會の決議に於て、「衆議院選擧法を改正し、憲政の圓滿なる發達を期する事」の一項を見るに至つては、今を距ること僅々二個月以前の議會に於て、同黨が選擧法改正案の通過を阻止した事例を考へて見る時は、如何に筆舌に稅が懸らぬものとは言へ、餘りに公衆を愚にしたものとの感を國民に與へねば已まないものである。成る程國民は遺憾ながら過去に於ては甚だしき健忘性を示したことは事實であるが、何時までも此狀態を持續するものと決めて掛つて之に乘ぜんとする政黨は、必ず後に至つてその報復を得るであらう。言論機關の近年に於ける發達は、靑年國民間

に於ける普通教育の漸進的普及と共に相結合して、政治的啓發を受けたる者の數を著るしく增加して居ることは、縱し數字を以て之を的確に表示することが出來ないにしても、常識上より疑ふべからざる趨勢と見做すべきものであつて、而して日々成長し行く青年が、徐々に――併し確實に、日々凋落し行く老年に取つて代りつゝあることも亦、孰れの政黨と雖も考慮の内に加へざるべからざる人生の活事實であらねばならぬ。「總べてのものは流る。」そこが人間的事實としての政治の面白味の存する所である。

次に政黨の宣言及び決議に極めて鮮明に現はれて居ることは、政黨が國民の群衆心理的一方面のみを狙つて、巧妙なる語句の表現が與ふる暗示的効果（サジエスチーヴ・エフエクト）を無闇に利用することである。此點も亦今回の大會に於ける政、憲兩黨の宣言及び決議を一貫して現はれて居るが、殊に政友會がその政黨の本質より見て曖昧極まるものとすべき態度を、例の是々非々主義の別名たる「嚴正中立」の語句で粉飾して居ることが、その最も適切なる實例である。如何に宣言や決議が政黨の金看板であつて、商品が必ずしも廣告と一致しないことが市場の習はしであるといへ、飽くまで剝落し易い鍍金を使用して、その正體の醜陋を表面の光輝を以て蔽はんとすることは、國民の群衆心理現象の單なる一面たる無批判性を餘りに重く見積り過ぎた遣り口であつて、現今に於ける我國の選擧區民の教育の程度を標準としてすらも、決して賢明なる方策と稱することが出來ないのである。況んや、一般には普通及び專門教育の、特別には公民教育の進步するに從つて、選擧區民の個性に基く選擇が群衆心理に呑み盡くされて、その各個が全然無批判的に行動するといふが如き事實は、漸次に稀薄になり行く傾向があるべきものであることも亦、各政黨が今後に於けるその勢力の維持及び開拓のためには、當然之を打算中に入れねばならぬことである。

我等は右の二點を闡明するために、その例證を政友會の宣言決議より取り來つたが、他の諸政黨と雖も之と大同小異であることは、改めて言ふまでもない。併

し總て是等のことを考慮の中に加へて省察しても尚ほ、政黨が大小各種の會合に依つて國民に接近することとは、政黨自身のためにも、將又國民のためにも、共に歡迎すべきことであると謂はねばならぬと思ふのである。蓋し斯の如き會合は、公衆に政治教育を施す上に於て多大の効果を有するのみならず、政黨は之に依つて刻々に於ける國民の思想感情希望を測知する機會を得、國民は又之に依つて直接間接に政黨の上に監視抑制を加へ、且つその思想感情希望を國政の上に傳達する方便を得べき筈である。尤も國民全般が直接に且つ有効に此方便を利用し得るためには、無論選擧權の根本的擴張を實現することを前提條件とするものではあるが、同時にまた、如何なる場合に於ても、政黨が官僚よりは國民に接近して居る程度が多いだけに、國民の監視抑制が後者よりは前者の上に遙に多く及ぶものであることも、深く説明を要するまでもなく明白なる事理である。殊に選擧といふ一事は、國民が政黨に對して所有する最も鋭利なる武器である。此點より見ても選擧權が現今に於けるが如き多大の法律上の制限を受けて居ることの不都合なことが分明するのである。それは兎に角、我等は政權爭奪を中心として行動する政黨が決して本質的に立派なものとは認むることが出來ないし、又普通選擧制度が實現せらるるまでは、政黨がその理論上の政治的意義の大部分を具備しないものであることをも知つて居るし、更に又政黨內閣制度が必ずしも立憲政治の進化の道程に於ける最終の形式ではないことをも考へて居るにも拘らず、而かも尚ほ我等は如何なる場合に於ても、極力官僚政府を否認し、政黨內閣を以て寧ろ之に優れるものとし、且つ現下の內政の形勢上、原氏を首魁とする政友會內閣の出現をすら、元老の產婆役の下に產るべき如何なる官僚內閣よりも、寧ろ容易に之を忍容せんとするものであつて、而して此事の理由の一端は、右の記述中に聊か暗示して置いた積りである。

(四)　兩黨首の各大會に於ける演說

政、憲兩黨の大會は、各場合に於て双方の首領が陣

頭に立つて演說を試みたので、例年の行事とは言ひながら、此際それがために多少の緊張味を見せなかつたではない。併し原總裁の北信八州大會に於ける演說は、政友會の現在の立場が立場だけに、當面の政局に對して何等の批判を加ふることをなさず、又政友會の今後の行動の方針に關しても、唯單に例の是々非々主義の態度を反復するのみであつて、毫もそこに多數黨の威力を示すに足る程のものを現はして居ないものであつて、實際の會場に於てはどれ程聽衆の氣を引立てたかは知らないが、その速記錄に就いて之を見れば、極めて貧弱なる內容を有するものたるに過ぎなかつた。その歐洲戰爭に對する國民の覺悟を促したり、戰後經營の方針として、自給自足の途を計る必要を說いたり、國防充實の急務を高調したり、敎育事業の閑却すべからざる所以を說明したり、交通通信諸機關を普及發達せしむることの國家のために緊急なる事理を指摘したことの如きは、單に國家の一般利害問題を抽象的概念的に述べたものたるに止まり、當面の政局を如何すべきやといふ必要問題には、毛頭觸るゝ所なくして終つた。而かも右の如き抽象概念を擧ぐるに當つても、誰れの口より漏れ出でたにしても別に反對論の起りさうにもない平凡幼稚なる原理の五六を陳列したに過ぎなかつたのである。若し斯の如き原稿が原總裁の署名なしに提示せられたならば、之に對して氣の利いた中學生中の雄辯好きの一人の筆に成つたものであるとの推測を與ふる者があつても、誰しも之を不當呼ばはりするものはあるまい。原總裁の現下の地位が、彼をして大會に於て此種の問題以外に觸れしむることを許さないものがあるにしても、彼にして若し現代の政務に對して透徹せる識見があり抱負があるものとすれば、今少し生命の充實したる精彩奕々たる演說を試むることが出來た筈ではないか。殊に歐洲戰亂に依つて激成せられたる我國社會生活上の精神的及び物質的動搖に關しては、識見の豐富なる政治家の闡明的意見の發表を要求若しくは誘惑する好問題が無限に包藏せられて居るではないか。而かも原總裁が如何なる理由に依つて

か、斯の如き常に得難き好機會に際して、此言論資料の寶庫を棄てゝ顧みなかつたのは、惜しみても尚ほ餘りあることでなければならぬ。

只一つ原總裁が政友會の現政局に對する態度を具體的に述べたのは、彼が政友會の一枚看板たる是々非々主義を布衍して、「我黨は目前の利害を爭ふものにあらずして、國家的利害より打算して行動するあるのみ、徒らに時の政府と爭うて贊否を決するが如きは、斷じて採らざる所なり。」と言うて居る一點である。彼が之に依つて所謂「政爭のための政爭」を排斥せんとするの意思を述べたのならば、主義としては無論何人にも異存のあるべき筈のものではないが、その代り彼が此際此主義を持出すことは、彼自らが態々自黨の過去をも否定的に批評することに當るといふ滑稽なる歸結に終つたものである。加之、彼自身が常に口にし、又大會の宣言にも立派に記してある通り、「現內閣の施設を見るに、未だ吾人の期待に副はざるものあり」といふことが眞實ならば、斯の如き「政府と爭うて贊否を決するが如き」ことは、決して政爭のための政爭ではなくして、政黨の本分を盡くし義務を果たす所以であることは、極めて明白なる事理ではないか。素より多數黨の威力を誇稱する政友會と雖も、單獨にては衆議院內に於ける過半數を占めて居ないのであるから、此點より來る多少の不便を免れないにしても、而かも尚ほそが有理に期待することを得る現在の政府與黨中よりの援助を合する時には、その公然不信任を表白する政府に取つて代る事位は、一擧手一投足の勞でなければならぬ。然るに野心には決して事を缺いて居ない筈の政友會が、今に及んで尚ほ遲疑して此事を企てざるは、重大なる時局に伴ふ無限不測の責任を負擔することを回避するためか、それとも貴族院樞密院の反對に手を燒いた過去の經驗の追憶の前に萎縮するためか、孰れにしても單純に「國家の利害より打算したる行動」とは、如何なる贔負目にも決して見えないのである。

之に反して加藤總裁が名古屋市の憲政會大會に於て試みたる演說は、憲政會の現在に於ける立場が單純で

あるだけに、極めて自由なる見地より意見を述べて居る點に於て、別に雄大とか高邁とか稱する程の識見を示しては居ないのであるけれども、當面の政局に直接に觸着する語句に富んで居ることは、その速記錄に徴しても直に之を看取することが出來るのである。彼が外交調査會の成立及びその後の成績に關して政府を批難し、又第四十議會に於ける財政計畫の矛盾不徹底に關して政府及び政友會を共に痛擊し、選擧法改正案の撤回に就いても同じく政府と政友會との私曲を詬罵し、一轉して言論の壓迫に關して現內閣の方針を詰り、殊に最近に於て頻發せらるるに至りたる外交記事差止の妄擧を責め、シベリア出兵問題及び對支問題に關する現內閣の設施を縱橫に批評して、その確乎たる方針の缺乏若しくは誤謬を指摘した點に於て、總ての人をして承服せしむるに足るか否かは無論別問題として、唯その言說に無用の含蓄や曖昧なる遁辭が毫末も伏在して居なかつただけに、聽者をして最も明白にその意の存する所を知らしめただけの効果はあつた。殊に此全演說が直接に現前の活問題に觸着した點は、原總裁のそれの抽象的概念的であつたのに比して、多大の差異を示して居たのである。而してその最後に提示したる對支政策及び一般の外交政策の方針は、寺內內閣を否認する根據とするに十分であつたとは之を認めねばならぬが、唯我等の遺憾とする所は、寺內內閣を否認する理由が、直ちに加藤內閣（憲政會を絕對多數黨と假定して）を腹藏なく是認する根據とすることが出來ないことである。

加藤總裁の犀利なる舌鋒も、毫末も現在我國の社會生活上の內的及び外的動搖に對應する方策に觸れて居なかつた點に於て、原總裁の演說と同じ物足りなさを示したことは事實である。而して此事を第四十議會に於て極めて不十分ながらも提出せられたる社會政策的案件に對する憲政會の否定的態度と對照して考へる時は、我等は一層憲政會に對する不滿を增さない譯には行かないのである。此點に關しては、我等は大に同會の反省を促さねばならぬ理由を有して居る。それにし

ても加藤總裁が右の演說に於て、あれほどその對政府の態度を率直明白に表示することが出來たのは、憲政會の現在の立場が、多分憲政會員多數の意思に拘らず、極めて單純透徹となつたためであると謂はねばならぬ。今より少し前までは、憲政會員中の多數者が西園寺侯の傘下に於て擧國一致內閣の實現せられんことを希望して居たものであつたことが、頻に當時の新聞紙上に於て傳へられたが、第四十議會閉會間際になつてから、政友會及び國民黨の主唱の下に、理論上極めて珍奇なる死せる大隈內閣に對する彈劾的決議が通過せられてより以來、此希望が全然空望に變ずるに至つたと取沙汰せられて居る。曾て官僚化せる政黨の色彩の强烈であつた憲政會が、此頃になつて漸く、我國の總べての政黨中に於て最も政黨らしき體面を具備する政黨となるに至つたことは、公平に見て之を確言することが出來る所であるが、唯此變化の起源に溯つて考ふれば、それが右に擧げた樣な詰らぬ事件に胚胎して居るものであるとせば、是亦極めて呆氣ないものであると謂はねばならぬ。近時我國の政界が著るしく不眞面目に陷り、急速に遊戯化しつゝある傾向を示せることは、政局の表面を徂徠する走馬燈的事件を皮相的に觀察しても直ちに分明することである。憲政會の外面的には剛直なる現下の在野振りの根柢にも亦、斯く如き不眞面目なる來歷の潛在して居ることは、是亦晴天十日式政界の遊戯氣分の一端を代表して居るものではないか。孰れにしても斯の如き輕佻なる政治的掛引は、時代錯誤的現象たる官僚政府の支配と共に、一日も早く我國の政治舞臺より驅逐し去るべき代物であらねばならぬ。此點より見ても亦、我等は近年來次第に流行するに至れる職業的政治家以外の泉源より出づる政論の存在權を是認し、且つその益す隆盛に趣かんことを希望して已まないものである。（七——五——一二）

後藤外相の言論指導事件

松井柏軒

（一）

後藤外務大臣と霞倶樂部との確執は、近頃言論界に於ける珍らしき問題にして、方に男爵の爲人（寧ろ缺點）を遺憾なく暴露したると共に、併せて新聞界の苦々しき傾向を赤裸々に露出したるに於て、頗ぶる興味ある問題とす、試みに事實の眞相を叙して、其の間に若干の批評を加へ、以て彼等双互の覺醒を促がすべし。

後藤男が地方官會議の召集を機會に、五月十四日各府縣知事を霞ヶ關官邸に招待し、晩餐を饗すると共に、例の一場の訓示演説を爲したるその得意の樣子は、世人の想像に餘ある所なるべし、内務大臣として地方官の親分たる地位を離れたる以上、大人しく沈默を守るこそ普通の體度なるべきに、恰も舊子分に現在の地位を誇り示すが如く、絢爛たる外務大臣の官邸に府縣知事輩を呼寄せ、格別必要もなき訓示を與へしは、京童をして評せしむれば、また是れ一種の成金氣分とも評すべきものならん、洵に罪なき始末なれども、茲に端なくも一悶着の種となりしは、彼の『新聞紙を指導されんことを希望す』といへる一節なりき。

霞倶樂部といふは、各新聞社のレポータアが、外務省の一室を借受けて、大臣次官乃至局長に面會するか、公表の電報その他を得るを本務とする團體の名稱にして、彼等は十五日に至り後藤外相の指導云々を耳にするや、奇怪なる言分なりとて、先づ委員を擧げて、指導云々の意味を訊問に及びたるに、男爵頗ぶる癪に障りたりと見へ、解釋は卿等勝手にせよと剱もホロロに突き刎ねしかば、倶樂部員も躍起となりて、竟に『不穩當なりと認む』てふ決議を爲し、之を大臣に突付け

たり。

若し霞倶樂部員にして、當時自家の地位に顧みて、極めて正當なる地歩を占めんとせば、その決議を爲すの以前、先づ之を各自の新聞社幹部に具陳して、外相の言の不當なるを攻撃せしむる乎、或は少くも幹部の承認を經て而して後決議を爲すを當然とす、然るにその多數者が茲に出でずして、自由に決議を爲したるは、假令多くの先例ありしにせよ、聊か輕忽の嫌ひありといはざる可らず、唯だ外相の指導云々の言辭そのものの不當なるが爲めに、此の決議は幸ひにして、何等批評なしに多數新聞紙に容認せられしのみ。

（二）

牧野伸顯男の農相たるや、農商務省擔當の一記者團は、農相を以て國民に不親切なりとの決議を爲し、之を農相に突付けたるに、牧野男は「諸君の立場としては洵に當然の決議ならん」と答へしのみ、爾後記者團より、或は直接に、或は秘書記官を通じて其の回答を求むるも、男は唯だ頷くのみ、更に答ふる所なかりしかば、記者團も奈何ともする能はずして止めりといふ、後藤外相にして若し政治家的機略あらば、亦また斯の如くにして可なりしのみ、若し更に外交家の靈腕あらん乎、此の決議に對しては、指導云々の言辭は左る意味に非ざりしも、卿等の不機嫌を招けるは心外なりとて、輕く之を受け流し、巧みに彼等の顏を立て遣らば、彼等は却つて男爵の光風霽月の如き襟度に悦服して、幾んど傾倒したるなるべし、乃ち機を利用する外交家的手腕の存する所なるに、後藤男が兩つながら之を採らず、却つて例の疳癖を起し、翌十六日霞倶樂部員全部に店立を喰はせ、爾後一切の面晤を拒絶し、且つ即夜特使を以て各新聞社長に至急親展書を贈り、霞倶樂部員の如き不心得なるものとの面晤を拒絶するも、他の社員に對しては、從前通り出入共に自由なるべきことを通告したるが如きは、寧ろ甚だ大人氣なき振舞にして、識者の憫笑を禁ぜざる所とす。

事の原由の自家の不當なる言辭に存するを省みず、却つて斯の如く疳癖的擧動に出でし後藤男その人は、

帝國外交の衝に當りても、果して感情に驅られて、輕々に事を斷ずるなきや否や、一事は萬事也、冷靜なるべき外務大臣として、後藤男其の人の斯の性癖は少からず國民に不安を感ぜしむるや必然にして、男に快からざるものは、必らずや之を以て男の外交家として不適任なる一證と爲すに躊躇せざるべし、果して然らば男のためにもまた大に痛恨嘆惜せざるを得ざる也。

(三)

霞倶樂部員は外務大臣より店立てを喰はしめられて、第一に其の職責を果す能はざるに苦しめるなるべし、然かも外務大臣の指導云々の言辭を以て、言論界に對する一侮辱と爲し、聲を大にして反對運動に着手し、各省にある同業の各倶樂部各團體に應援を求めたり、官省を擔當する各新聞社のレポータアも、獨り外務省に於ける霞倶樂部の如く、内務省の大手倶樂部、首相官舍の永田倶樂部、宮内省及び内閣の坂下倶樂部を始め、政友會の十日會、憲政會の櫻田會、國民黨の國民倶樂部等の團體あるが、此の各團體は、それ〲協議の上、外相の言辭そのもの丶不當を鳴らし、霞倶樂部と歩調を一にして外務大臣攻擊の火の手を揚ぐべく、その所謂聯合會なるものを十八日に開催したり。

各新聞通信雜誌の重もなる社長及び主筆等總てその幹部たる人々の組織せる春秋會は、同じく霞倶樂部よりの交渉を受けたるが、此の會は偶々十七日夕を以て田尻東京市長と後藤外相、水野内相を招待し置けるに由り、賓客たる外相に對して斯る問題を提起するは、禮に非ずと做し、翌十八日別に評議員會を開きて此の問題を議定することゝ爲し、當夜は唯だ談笑に止めたりしも、會員中往々にして語談の指導云々に渉るあり、流石の外相も匆々にして辭去したりしといふ。

春秋會の評議員會は、第一後藤外相の言辭の指導云々は不當なるを以て、如何なる事情あるにせよ、霞倶樂部を支持せざる可らずと雖も、之を以て外相と戰ふには、十分なる決意を要するを以て、先づ外相の眞意を確かめ、頑冥移るなくんば乃ち大に決戰すべく、然らずして反省自悛の態度あらば、進んで兩者を調停す

べしとし、會長黑岩氏、評議員吉植、頭本、對馬、山川の五氏を委員として外相を往訪せしめたるに、外相は結局「指導なる文字は善意に解釋せられ度し、例せば揭載禁止事項等に觸れたる後にて處分するが如きは甚だ遺憾なれば前以て注意を與へ右樣の行違などなきやうにしたしとの親切に外ならず」と解釋し、且つ霞俱樂部員等に對して、從前通り外務省を開放すべく、その善後策を擧げて總て春秋會に一任する旨聲明したり。

　此の春秋會評議會員の態度は、頗る妥當なりとせざる可らず、彼等は各新聞社レポータアの團體に非ず、多くは各新聞社の幹部員として、新聞紙その物に對して直接の責任者なるを以て、素より霞俱樂部その他の團體と一列に運動すべき性質を有せず、外相と戰はんとせば、春秋會員寧ろ主として之に當るを當然とす、曲の後藤外相に在る何人も疑ふの餘地なしと雖も、苟くも戰はんとせば、各新聞一致の步調を執りて、十二分に勝利を獲るの算を立てざる可らず、此が爲め先づ外相の眞意を確め、外相にして苟くも反省の意あらば、十分に霞俱樂部員の面目を保たしめて、以て穩かに局面を收拾せんと期せるは、流石に責任あり思慮ある行動と稱して可なるべし。

（四）

　春秋會委員に對する後藤外相の態度もまた稱するに足る、夫れ新聞紙の指導を以て、區々の地方官に望むが如きは、實に以ての外の沙汰にして、固陋なる官僚思想の發顯に外ならず、聞く所によれば、外相當日の訓示演說には、指導の言辭を用ゐざりしも、其の訓示草案として屬僚の記せしものには明らかに指導の文字あり、屬僚等そのまゝ其の草案を外相の演說として公表したるなりといふ、思ふに去年寺內首相の地方官に對する訓示演說にも、亦新聞紙指導の文字ありて、二三新聞の攻擊を受けしも、外務省屬僚の固陋なる、民論の非難を忘却して、再び之を草案中に挿入せしなるべし、而して後藤男その人と雖も、本來指導の言辭を使用するに遠慮するが如き性質に非ざるを以て、玆に

その責任を執るの當然なる言を俟たずとす、唯だ指導の文字を解釋するに前記の如き旨趣を以てせしは、是れ國務大臣として地方官に對する訓示の一節を取消すの失體を避けしに外ならずして、其の事實の取消し同前なるやまた多言の要なかるべし、乃ち外相自から省悟の實を表したる所以にして、其の洒然として拘泥せざるの態度は、流石に大人として稱すべく、玆に初めて其小ならざる人格を示し得たる也。

隨つて霞俱樂部その他の團體は、春秋會の苦心と、外相その人の省悟とに滿足して、玆に局面を收拾せば、完全に凱歌を奏し得べかりしに、春秋會の委員等が外相訪問の結果を齎して聯合記者會に出席するや、多數は頗ぶる侮蔑せる態度を以て之を迎へ、卽座に春秋會委員の和談を否決したり。

叙して玆に至つて、余は實に長大嘆息を禁ずる能はず、外相既に指導の文字を解釋すると彼れが如くにして、全然省悟の意思を表せる以上、其の攻擊者等は、玆に戰局を收むるを當然とす、所謂戰爭の目的は明白に達し得たれば也、然るに團體の多と頭數の衆とを恃みて尙ほ戰ひを繼續せんとす、是れ戰ふがために戰ふ也、驕兵也。

戰ひは實に萬已むを得ざるに至て始めて發すべし、何人が如何なる方面より看るも、間然す可らざる正理を基礎とし、此の基礎に據つて戰ふに非ずんば十全の勝利を獲ること難し、往年山本內閣の當時、余等が原內相と戰ふや、苦心慘憺、豫め數段の戰法を立てたりと雖も、其の開戰の理據に至ては、人を斬りたる警察官吏の不當を鳴らすに在りて、何人と雖も爭ふ能はざる理由に據りたりしも、尙ほ且つ輙もすれば、世間より新聞紙の利器を恃みて橫恣に流ると非難されんとせしと二三回に止まらざりき、今回の新聞記者團體聯合會の如き、始めは正當なる理據を有せること論を俟たずと雖も、當面の外相既に國務大臣として最大限度の讓步を爲し、事實に於て白旗を揭げし以上、飜然として戰局を收拾するを當然とするに、尙ほ勢ひに乘じて咆哮し突進せんとするが如き、實に思はざるの甚だし

きものにして、横恣凶暴の非難を免かれんと欲するも難かるべし。

後藤外相の側よりいふも、當初何等正當なる理據を有せずして必敗の地位に立ちたりしと雖も、一旦春秋會の委員等に調停を一任し、指導の言辭に一種の解釋を下し、國務大臣として出來得る限りの讓歩を爲したるに、尚ほ且つ局面を收むるなしとせば、責任は夙く轉じて敵側に移り、外相は極めて有利なる地位に立てるのみならず、此がため新聞記者側は、少くもレポータア團體と有力なる春秋會との對立ともなりて、結局の勝利は逆まに外相その人の上に歸するや必然ならん、驕兵にして敗るゝは當然なりと雖も、血氣に任せて常度を失せる記者團等の態度は實に痛惜に堪えたりと謂べし。

（五）

十八日の各記者團體聯合會に於て、一種の侮辱的否決を受けたる春秋會は、廿日再び評議員會を開き、外相讓歩（實は屈服）の眞意未だ聯合會員に徹底せず、現に當夜聯合會員の多數は、既に決議を終りて、酒宴に移り、醉に乘じて意氣軒昂、盛んに激越なる演説中なりしかば、外相解釋の旨趣は勿論、春秋會の意衷も亦十分なる理解を得ざりしと做し、更に聯合會に會見を求めたるに、彼等は當日の大會に於て實行委員を擧げ、之をして會見せしむべく回答せるが、七八個新聞の霞倶樂部員は、春秋會に一任する意圖よりして一の決議案を提出せんとしたるも、姑らく之を中止したりといふ、斯くて右實行委員中の代表者五名は、廿一日春秋會評議員と會見したるに、其の主張する所は、殆んど春秋會を信認せざるが如く、春秋會と同列若くば別個に外務大臣と會見すべしといふに至り、春秋會は辭を盡して之を說けるも應ぜず、結局交渉の餘地なしと唱へて引上げたるを以て春秋會は此の顚末を發表するに決したるが如し、然るに聯合會の實行委員會は、更に翻へりて春秋會に一任するに決し、翌廿二日別に代表者を出して春秋會評議員と會談し、若干の希望條項を添へて、全部春秋會に一任する旨挨拶し、春秋會の

委員五名は其の日再び外相を訪ひ、指導なる言辭の解釋の外、更に「言論を壓迫する趣旨に出でたるに非ず」との言明を得、是にて全部解決するに決したり。

外相にして既に指導の解釋を下したる以上、問題は根本的に解決さるべき道理なるに、聯合團體が尚ほ之を聽かず、春秋會の提議を即座に否決し、實行委員また一たびは交渉を斷絶しながら、竟に斯の如く結局したるは、到頭落着する所に落着したるものにして、幸ひに敗戰を免かれしと雖も、其れまでの曲折中、彼等の態度と主張とを視るに、事理を判斷する頭腦の聰明に至ては、頗ぶる疑問とせざるを得ず、自から靑年と稱して時代思想を體現するかの如く誇負するその意氣と、其の頭腦とは、果して正しと認めらるべきや否や、新聞紙の改革を必要とするものは、先づ第一に此の點に於て大に考慮せざる可らず。

歐洲大戰の狀態に鑑みるも、我が國最近の傾向に視るも、新聞紙を改善すべき時機は切迫せり、而して今回の問題は、此の改革に就て好個の敎訓を與ふるものたるに於て、余の此の記事と評論とは、必らずしも無用ならざるを確信す。

概して之を評すれば、本問題に於て、後藤外相若し彼の解釋を下すの讓歩を爲さずんば、玆に政局の一大危機を生ぜしなるべし、新聞社のレポータア團體の聯合會が若し十八日の態度を悛むるなくんば、春秋會の威信を傷くるは勿論、彼等また內自から分裂を來し、驕兵竟に敗るの訓言を證して、甚だしき汚辱を受けしなるべし、事の玆に至らざりしは幸ひ也、而して春秋會が一たびは垢を含み辱を耐えて隱忍したりし効果は、特に之を記するの價値ありと謂ふべし。

「新しき村」の批評

堺利彦

(一)

武者小路實篤君の「新しき村」の計畫について批評せよと云ふ御注文は、ちよつと面白いと思ひますから、少しばかり書いて見ます。

先づ武者君の計畫は、德富健二郎君の田園的別莊や加藤一夫君の飯事的農業などに比べると、同じくトルストイの影響は受けてゐながら、其の理想の社會的な點と、其の規模の稍や大きそうな點と、及び其の意氣込の頗る眞劍らしい點とに於いて、遙かに立ち優つたものと思ふ。

武者君の理想は、大體に於いて私共の理想と同じ樣なものだと思ふ。然し武者君と私共とは、其の理想を實現させようとする手段が違ふ。其の手段の違ひの生ずるのは、社會の見方、歷史の解釋の仕方、一般事物の考へ方に、根本的の違ひがあるからである。即ち私共は物質主義者であり、武者君は精神主義者(若しくば理想主義者)である。

(二)

武者君は云つてゐる。「勞働者に味方することは、中流以上の階級を敵にすることを意味しなければならないとは思はない。」「新らしい世界をつくるのに暴力は用ひたくない。」「理性とか、愛とか、理知とか、さう云ふものによつて、尤だと思ひ込むことによつて一歩づゝ進みたく思つてゐる。」そして武者君は「北風と日光と、どつちが旅人の外套をぬがせたかと云ふ話」を持ちだして、「僕は北風のはげしさよりも、日光の暖かさの方が力が弱いとは思はない」と云つてゐる。

然し德川慶喜が政權を返上したのは、「日光の暖か

さ」の爲であつたか、『北風のはげしさ」の爲であつたか、それをチョット考へたばかりでも、此の比喩の力は消えて了ふ筈である。

又あの時、德川幕府の人々と薩長其他諸藩の人々とが、『理性とか、愛とか、理知とか、さう云ふものによつて、尤だと思ひ込むことによつて一歩づゝ進」んだかどうか。

現に武者君自身も別の所では斯う云つてゐる。『社會の力をもつてすれば、富者も勞働者の草履をとる位なことは甘じてやるにちがいない。』『社會の力」は『暴力」と同じ者では無いだらうけれども、『理性とか、愛とか、理知とか」と同じ者でもあるまい。武者君は又『富者は…輿論に反抗するだけの力はない」とも云つてゐる。富者に對して反抗を許さないほどの壓迫を與ふべき『輿論」なる者は、其の背後に大きな強い力を持つてゐなければならん筈である。『社會の力」と云ふのは即ち其事だらうと思ふが、其力が『日光の暖かさ」であつて、『北風のはげしさ」でないと云ふ證據が何處にあるだらう。

（三）

武者君は又云つてゐる。『自分は少數の人が協力して新らしい生活をつくることから始めたい。』凡そ改革の事業が少數の人の協力から始まるは無論である。初から多數でありよう筈がない。そこで其の少數の人の協力した『新らしい生活」といふ事が、維新の際の志士等が、それ〴〵の藩を脫して、謂ゆる處士橫議の浪人生活に入つた樣な事、或は近世の歐米勞働者等が、將來の新社會の萠芽として、諸種の組合生活に入つた樣な事を指すとすれば、私共に於いて勿論異存がない。然し武者君のは只、現社會から離れた處で將來の理想社會の『見本」を示さうと云ふのである。其の『見本」が果して出來るかどうか。

十九世紀の前半に多くの空想的社會改良家がヨーロッパに現はれた。カベー、オーエン、サンシモン、フーリエー等が即ちそれである。武者君は勿論それらの主張と理想と事跡とを知つてゐるだらう。彼等は皆な

「見本」的新社會の建設實現に熱中した。アメリカに行けば只で幾らでも土地の得られる時代であつたので、彼等は皆なアメリカに行つて色々の共產村を作つた。一時は非常な社會的センセーションを起して、人も集まり、金も集まり、何百人、何千人といふ大きな團體の出來た事もあつた。然し大抵は皆な失敗に歸した。

（四）

なぜ失敗に歸したか、社會の變遷は必然的進化の徑路である。其の進化の趨勢と理法とを見究めずに、道德的、若しくは宗教的、若しくは藝術的に、或エライ人の頭の中から編みだした考案に依つて、其通りに社會を作り直さうとするのは無理である。小さな見本だけでも、其の考案どほりに拵へあげる事は到底出來ない。現社會から離れると云つても、矢張り諸種の關係を持つてゐる。現社會を支配する經濟力から免れる事はどうしても出來ない。然るに彼等は其の經濟力、社會力の根本には手を觸れずに、ソツト其の支配を免れようとするのだから駄目である。

現に武者君は、「一人について一段以上の田と少しの畑に相當する土地」で農作をやる積りらしいが、「勞働時間は六時間を超えない」と勝手に極めて置いて、其の農作が果して出來るか。尤も武者君は「會員外の勞力もこばまないにしろ、地主が小作人に對する態度はさけねばならぬ」と云つてゐるから、矢張り小作の樣な事もやらせる積りと見える。然し其の小作を地主の態度で待遇せぬとすれば、年貢米は取れない事になる。若し極僅かな年貢米を取るとするならば、なぜ態々土地を買ひこむか。其金を銀行にでも預けておいて、少しづゝ米を買つた方が安上りではないか。若し又年貢米は世間並に取るが、態度だけは他の地主と違ふと云ふのなら、丁度、小學教員の俸給は增せないが、待遇だけ善くすると云ふ樣な話と同じである。

武者君は又綿も作る積りらしいが、近來日本全國の綿作が全く無くなつて、印度綿ばかりが輸入されてゐるのを何と考へてゐるか。武者君が綿を作つて、それを自分の機織工場で布に織ると、其布は、印度綿を輸

入して紡績會社で產出する布より、安價に出來ると思つて居るだらうか。武者君は「他の社會よりもよりよき品をより安價につくり出すことに苦心もする」と云つてゐるが、「苦心」ばかりでそんな事が出來るだらうか。又武者君は「千人近くの人が智慧をしぼつて喜んで全力をつくして協力してつくるのだから、一家族だけで舊式の方法で、精神ぬきでやつてゐる仕事よりもしまひには勝つのがあたりまいと思ふ」と云つてゐる。然し今日の紡織事業は、「一家族だけで舊式の方法で」やつてゐるのではない。大資本の力で大機械を使ひ、何千人何萬人を協力させて最新式の方法でやつてゐる。共產的の「精神」は「ぬき」であるけれども、資本家的の強烈な精神でやつてゐる。此の大勢力に對する武者君の事業は、初から負けるのがあたりまいである。

(五)

猶ほ實驗共產村の失敗した原因の中には、主唱者と隨從者との關係もある。共產村の理想は其の根本が自由平等に在らねばならぬ事は勿論である。然るに實際はいつも一人のエライ人が中心になつてやるのだから、そこに不和の原因が存する。どんなに無我無私に見える人(若しくば自らソウ信ずる人)でも、矢張り我儘の出る時もあり、間違つた事をやる時もある。又善美崇高な理想の所有者が必ずしも事務の才の所有者ではない。そこに無理な點がある。現に武者君も「自分を信じ切つてくれる」人があればと云つてゐる。此の言葉の中に早や專制者の態度が見えてゐる。一人を「信じ切」る樣な人が集まつて、自由平等の社會が作られる筈がない。

(六)

然しズツト現社會から遠ざかつて、原始的な生活をするのなら、それは或時日の間、出來ない事もあるまい。現に臺灣の生蕃はあの山の中で、自分等の特殊な社會組織で、文明社會の下層貧民よりは遙かに平和な安全な、愉快な生活を送つてゐる。然しそれでは武者君の理想とは大ぶん掛けはなれたものになる。

或人がカベーのイカリア村を見た時、こんな事を云

つてゐる。「あゝ空想家の空想よ。私は三月の薄寒い或日曜日に、イカリア村をぶらつきながら、カベーの小冊子（カベーの有名な著述、イカリア旅行記。この旅行記の空想を實現させる爲にイカリア村が出來たのである。）を繰りひろげて讀んで見た。そしてカベーがあの小冊子の中に華々しく描きだした愉快と雅致とに對する、此村の實生活の無趣味な貧困のコントラストを、しみ〴〵と痛ましく感じた。」武者君の理想と實現とのコントラストも恐らく此轍を踏むより外はない。

そこで近世の社會運動は、社會進化の趨勢と理法とを善く見究めて、それに從つて方針を定め、手段を定めると云ふ事になつてゐる。だから今更武者君がそんな計畫をするのは、德富別莊加藤農園に比べては遙かに立ちまさつてゐるけれども、畢竟アナクロニズムの沙汰である。

（七）

然し武者君をして今日その樣な考へを起させたのには、又相當な社會的原因がある。第一、日本の社會は一面には恐ろしい勢ひで資本主義が發達してゐるけれども、何分まだ年月の短い事だから、一面には又、甚だしく世界の經濟的進歩に後れた所がある。從つて丁度その未熟な經濟狀態に相應する空想的改良主義が持ち出されるのである。

第二、日本の社會運動は、必然的に先進國の運動の歷史（即ち進化の過程）を短時日の間に繰返してゐる。生物學の法則上、種の進化の過程が個體の發育の上に繰返されると同じ樣な譯である。そして其の短時日の間の繰返しが、場合に依つては同時に並行して現はれる事になる。丁度、東北地方に行けば、梅も桃も櫻も同時に花が咲くと云ふ樣なものである。武者君の梅が他の櫻と同時に咲きだすのは、さういふ譯である。

第三、右二つの理由の外、日本の社會運動は、どれもこれも殆んど手足の出されない形勢に陷つてゐる。故に成るべく安全な他の道を取る事になる。故にさういふ人は、逃避するとか、猫を冠るとか、鼠色になるとか云ふ意識は勿論無く、自分の取つた其の安全な道

を、客觀的にも最善の者と信じてゐるが、實は矢張り猫鼠と同じ種類に屬するものである。武者君の立場も矢張り(少くとも幾分かは)そういふ心理の作用であると思ふ。「我々はこの世の制度にさからふ必要はない、それは內が生長すれば自づとかはるものだ」などと云ふのは、トルストイ其儘のアキラメ言葉である。

（八）

然し武者君は中々善く分つた事も云つてゐる。豚を熟睡中に麻醉劑で殺さうと云ふ樣な些細な考案に耽つたり、男女關係の解決のつかないのに餘ほど困つてゐたりする所は、少し滑稽に見えるけれども、「新らしき村」に於いては、「器械は人間につかへて人間を使用しやうとはしない」と云ふ樣な、深い意味のある言葉を、善く理解して使つてゐる。

又武者君が、「なぜ今迄にかう云ふ社會をつくる人がなかつたか、よしあつてもなぜそれが世界的にまで生長することが出來なかつたか。それは時機の問題である。……人類其處までまだ進步して來てゐなかつたからである。……世界は、人類は一つの目標を目がけてもう一步と云ふ處に來てゐる」と云つたのは、餘ほど面白い。だから私共は武者君に賛成が出來ないのだが、然し一種の刺激といふ意味で、此の「新らしき村」の計畫も存外結構だと思つてゐる。兎にかく之は日本に於いて初めての企てである。こんな事でゞも多少なり社會の注意を引くのは、今日の「時機」として、決して、無益ではない。

然し又かういふ事も出來る。曾て或人々は、社會主義者等を一纏めにして何處かの離れ島に送り、それに何程かの金を與へて、勝手に理想の村を作らせるがよい、といふ建策をした事がある。そうすれば本國の社會では厄介のがれが出來てよいではないかと云ふのである。武者君の企ては丁度この御註文にはまつたものだとも考へられる。

本篇は都合により諸處削除したるところ多し。
筆者及び讀者の諒恕を乞ふ。（編者しるす）

南阿聯邦を觀て

マスター・オブ・アーツ　米田實

一

「何たる美景色ぞ、淸鄕土ぞ」、予等の船がケープタウンの灣口に差し懸つた朝、予は覺えず斯くの如く獨語したのである。

倫敦を出でゝ十九日、獨逸潜航艇が出沒するてふビスケイ灣を無事に過ぎてからは、滿目是れ蒼濤、生活は單調に、心境は白紙のやうになつて居た、此のモノトナスな境涯に俄然變化を齎らしたと言ふことゝ自身が、此テーブル灣(ベイ)に對する予の感興を深うしたのではあるまいか、コウ言ふ疑ひも二三分とは持續し得無かつた、前面に聳えたテーブル、マウンテンの莊重森嚴な姿、之を形造つた花崗石の怪奇なる群、淸く穩やかな灣水、心地善い日光、丘の蔭から少しづゝ現はれ來るケープタウン市の一端、ジブラルタルのやうな所もあり、リウイラのやうな趣もあつて、何と評しても言ひ盡されぬ感じがする、故チヤーチル卿(英國兵站卿ウインストン、チヤーチル氏の父)が「景色の絶佳と氣候の優良とにてはケープタウンは完全に近つく」と言ひ、プライス子爵が「見たるものゝ忘れ得ぬ景」と叫んだのも、予の爲めに吐いた讃辭ではあるまい乎と、予は荒れ地たる可き阿弗利加に此偉大な風光を見て、思ひ出でねばならなかつたのである。

やがて船は波止場に着いた、船長、事務長、越後の美術家等と共に市街見物を始める、アッダリー街と言ふのが本通りで、歐洲風の商店、公共建築物、寺院などが並んである、中には日本品を陳列した店、殊に濠洲から移つたとか言ふ邦人某經營の商舖も見える、海から寺院に及ぶ長い此町の一端にはマヂエスチックな

テーブルマウンテンが半空を屹立して、莊重な教訓を與へたり、遊意をそゝつたりして居る、彼方此方と徜徉すると、例の有名な南阿議會の黄白い建築やら、阿弗利加植物を聚めた氣持ちの善い公園やら、清い芝生の中に立つ二階建の南阿博物館やらに出遇ふ、博物館は阿弗利加獨特の珍奇な動物剝製、鑛物、歷史的參考資料等、いづれ面白からぬは無かつた中に、例の記錄石が最も目を惹いた、之は昔年航海困難であつた時代に、此灣に來た船舶が其航海事實を印記して殘した石で、或物は和蘭語、或ものは佛語、英語等であつた、最も早い記錄は一六一〇年七月で、ポール、スッルソムメルの訪問を刻記して居り、其他一六一九年、一六二四年、一六二九年などがある、中には危險な蠻族の樣子を書いて後の船舶に警戒を與へて居るものも見える、舘を出でゝ更らに種々な古跡若くは古建築物に出會する、是曾つて葡萄牙の勢力下に在り、次て和蘭の支配に歸し、今は英國々旗下に立つ此地としては、何等の不思儀も無いことであらう、然かも南阿につきての知識淺き東洋人の目には、すべてが珍奇であり、すべてが至深の趣味を喚起するのであつた。

されど、有體に言ふと、最も多く予の心魂を魔したものは、之等の歷史的遺物でも無く、强烈な色彩に身を飾つて居るカフィア土民の婦人でも無く、穩やかで、淸い南阿の自然であつた、時恰かも北半球の冬卽ち此南半球の夏に當り、諱度も半熱帶たる可き此地域が、如何なれば、かばかり一樣に順良の氣候を維持し得る乎、(說明者は「南氷洋からの潮流で緩和されるのだ」と答ふる)、日光の柔らく心地善き、和蘭人が造つた花卉繁茂せる庭園、樫樹の長い〱並木、海濱の廣い白沙にキスする細波或はテーブル山邊の罅隙から流れ出づる銀のやうな小川、いづれ仙鄕を想はしめぬのは無いのである、予はしばし公園のベンチに腰打ち懸けて、「我れは此淸土の民たり得可くば、永く留る可き乎」との假定的問題を出して、樂しき冥想に耽つたのである。

然かも心裡、いろんな思想の出現、軋轢、戰鬪の末、凱旋を見た思想は、「否定的回答」であつた。成る程斯

ばかり麗はしい自然は他處にありとも思はれぬ、唯だ人と生れた身の悲みは、自然とのみ生活し、捿息することが出來ぬ運命（デスチニー）であつた、人と共に生活し、捿息せねばならぬ運命であつた、予は限り無く南阿の自然を愛慕し、崇拜し、謳歌するのであるが、同じく此地に住んで居る人類をも愛慕し、崇拜し、謳歌する氣には、ドウしてもなれ無かつた。

そは何故ぞ、予は少しく南阿の人につき語るであらう。

二

南阿聯邦卽ちトランスヴワール、オレンジ、フリー、ステート、喜望峯殖民地及びナタール四州の人口は約六百萬で、內阿弗利加土民四百萬、亞細亞人其他有色人種七十萬、白人百三十萬を含んで居る、玆に予が說かんとするのは、阿弗利加人でも無い、亞細亞人でも無い、目下南阿を支配し左右しつゝある歐洲人卽ち白人である。

白人の血は大分混淆して居るが、兎に角も數量に於て優勢なのは和蘭系のボーア人であらう、予は先づボーア人を檢して見やう。

ボーア人は和蘭本國の衰落せる人民に比すると、剛健で淳樸で、冒險心に富んで居る、之は久しく新大陸の山河と戰つて來た爲めであらう、然れども彼等は餘りに偏狹無智、頑冥で、恐ろしく我儘である、箇人の自由は相互の尊重に依りて成り立つものだが、彼等の自由は他人の自由を無視し、他人を蹴倒して得る所の自由である、予は果して斯くの如き人民と愉快に生涯を共にすることが出來るであらう乎。

彼等は嫉妬心が强く、エライ人物が現はるゝと、寄り聚つて叩き落さんとする風がある、又た極めて狹い人種的僻見を持して、一擧一動之に支配せらるゝかとさへ思はるゝ、予は果して斯くの如き人民と愉快に生涯を共にすることが出來るであらう乎。

就中忘れられぬのは、ボーア人が其先覺者たり、恩人たるボータ將軍に對する態度である――ボ將軍をして難境に立たしめ、今や健康をさへ損せしむるに至つ

た其の冷酷無智の態度である。

ボータ將軍とは如何なる人ぞ、彼は南阿聯邦の首相である、一八六三年ナタール州グレイタウンに生れ、トランブールに移つて、其第一議會の議員となり、十八年前の南阿戰爭では、恰かも三十六歲で軍營に入り、ジユベル將軍逝去後、ボーア軍司令官となつて、南船北馬、勇猛な將軍振りを發揮したのであつた、コレンソの戰役、六千の寡兵を以て英將ブール麾下一萬八千の大軍を阻止したのも彼であつた、愈ボーア軍總司令官となつた後、三年間英の名將ロバーツ及キチナーの畫策に反抗し、雄名を揚げたのも彼であつた、若し英軍が其の得意とする食糧攻め、供給品通路遮斷に依つて持久的戰略を執らなかつたならば、或は到底彼の軍を打破し得なかつたかも知れぬのである。

講和後の彼は、一應反英計畫を抛ち、英國々旗下に於て完全なる自治邦を形成し、大ボーア國を南阿に實現するの策を講ずるに至つた、蓋し彼はボーア戰爭の經驗で、海上權が英國の手にある限り、歐洲よりの援兵が頼むに足らざることを悟つた、又た、英國が自由自在に物資供給を支配してボーア軍を餓へしめ得可きことをも明かに悟つた、之が前にはボーア兵の勇敢も、その主將の戰略も、結局一文の價値だも無きことを見た、彼れ以爲らく、「形勢斯くの如し、望み難きを望まんよりは、名義上英國治下に立ちて、徐ろにボーア國の實力を養成し置かんには」と。

彼は此見地に立ちて、一九一〇年四大州を含む面積四十七萬方哩の南阿聯邦を形成したのである。小州分立、相爭ふよりも、合同して英國にも當り、外國に當るが善いでは無い乎と言ふのが、彼及その味方の意志であつた、而して英國は之に自治權を附與し、南阿は濠洲及び加奈陀に劣らぬ、事實上獨立した殖民國となつたのである。

彼は亦た此見地に立つて、今回の歐洲大戰にも處したのである、一九一四年八月大戰爭勃發するや、彼は九月先づ獨領西南阿弗利加征伐に着手し、九月十八日リユデリツツブフトを占領し、翌年二月大活動を開始し、

向ふ所敵なく、五月十二日獨領西南阿弗利加の首府ウイドハックを占領したのである、蓋し氏の三十二萬方哩てふ廣大な地域をボーア國に併合することは、如何ばかり將來に於てボーア民族の勢力を添え、實力を加ふるであらう乎、一九一五年七月二十二日ケープタウンに凱旋した彼の額上の微笑は、深長なる意義を含めるものゝ一であつた。

彼は又た其股肱スマッツ將軍を獨領東阿弗利加に送つて奮闘せしめた、之れも阿弗利加に於けるボーア邦の運命を豫見しての措置たることは無論であつた。

左れどその偏狹な、嫉妬深い、智見の足らぬ我儘な同人種、同民族は、果して如何なる態度を以て、此先見あり、深慮ある名將軍に對したのである乎。

三

彼等の半數は(少くとも)、痛罵と呪咀とを以て將軍及其政策を迎へたのである。

先づボータ將軍が獨領西南阿弗利加鎮定より凱旋し、席未だ煖まらざる際、行つた南阿議會總選擧は、如何に將軍が同民族間に不人望なるかを證明して餘りあつたのである、一九一五年十月選出の新議會では、將軍を首領とする南阿黨の議員數は前議會の六十九名より減じて五十四名となつた、此數さへ大分英人側の援助に依つたもので、純和蘭系の地方丈けで見ると、南阿黨は實に三十の議席を失つた譯となつて居た、之に反し將軍の敵手で反逆黨とも言はるゝヘルツオグ將軍部下の國民黨は、二十七の議員を得て、大分氣勢を擧げて居た、否な議員數を離れて、各政黨得票數を算すると、國民黨は四、南阿黨は五弱の比例であるから、選擧區制てふ人爲的モヂフイケーションが無かつたならば、南阿黨議員は四十七、國民黨議員は四十を算す可き筈であつた、斯く同胞の半數に見離されたボータ將軍が、今猶之に依つて辛うじて政權を維持し行く姿は、悲慘な現象と言はねばならぬ。

然かも此英人派も援助に對する報酬を要求せずに止むもので無い、そは卽ち政權分與、換言すれば聯合內

閣の組織である、ボータ將軍には之れが出來無い、蓋しその實行せらるゝ曉は、今日猶將軍の味方として殘留せる南阿黨の大部までが、飜然敵營に奔り得可き危機であるからである、かくて英人派の將軍援助も、自然冷淡に終らねばならぬ、ソコデ內閣の地位も、重に問題每に行ふ諸政派の操縱で維持し居る有樣となつたのは、亦た止むを得ぬ所であらう。

ボータ反對熱は獨り議會のみに止ら無い、ヘルツオグ將軍、マラン博士を始めとし農民間にも、宗敎家間にも、排ボータ運動の戰鬪士が滿ちて居る、彼等はボータ將軍を以てボーア人の叛逆人の如く紹介して居る、能く論じ、能く語る巨眼黑髭のヘルツオグ將軍は、最も烈しくボータ將軍攻擊に熱中して居る、「クルーゲルの精神も、スティンの至誠もボータ將軍には宿らない」「南阿は英帝にこそ臣從すれ、合衆王國(英國)に臣從するのでは無い、合衆王國政事家に使はれる南阿首相は、禍ひなるかな」、彼は農民に對しても、大學生、專門學校生に對しても此論鋒を用ふ、到る所、大喝采を博して居る。

あゝ、遠大なる理想と周密なる畫策とを抱き、英國と言ふよりも寧ろ將來の大ボーア國の爲めに、粉骨碎身、大に盡瘁しつゝあるボータ將軍の至誠が、如何なれば斯くも其同胞に了解せられ無いのである乎。

思ふて玆に至ると、予は狹量なるボーア人が人種的僻見に心鏡を蔽はれて、事物を正視するを得ぬのを遺憾に感ずる外は無いのである。

人種的僻見とは外でも無い、第一としては南阿の少數分子たる英人に對する彼等の僻見を意味するのである、勿論ボーア人は英國の統治を好んで居無い、然かも南阿白人々口に若しも想應の有力な——就中都會に優勢で、或程度に於て商工業を左右する形勢すらある英人々口を含まなかつたとすれば、彼等は決して今日の如く短氣に狹量に、小鬪是れ汲々たる姿とはならなかつたであらう、政治上には所謂統一黨(ユニオニスト)南阿の)として現はれ、社會上には鑛山成金、駝鳥成金等として現はれて居る彼れ英人の有樣を見てはボーア民族の多數

は、遠大なボータ將軍の政策を緩漫とし、言議も、行動も婦人的嫉妬に駆られて極端に奔らねば止まぬのである。

左れど、此劣しき妬心に動かされて、其民族の聰明な、遠見達識あるリーダーを苦しめ、以て却つて自ら禍ひを招きつゝあるボーア人は、穩やかな清い南阿の美景に孤負せぬ「人」と言ふことが出來やう乎。

四

然かも此嫉視、狹量、排外的性質が、獨り英人に對してのみ發露され、延ひて自派の政治家に累して居るのであれば、猶恕す可き所もあらう、其阿弗利加土民排斥に現はるゝに至つては、實に批評の言葉も無いのである。

土民とは何ぞ、祖先以來阿弗利加に住居し、ボーア人の渡來以前、其山川、原野を所有したものでは無い乎、然るに今やボーア人の政府は、此土民の土地所有權を制限し剝奪せんと企てゝ居るでは無い乎。

先づ最も早く土民の土地獲得權を剝奪したのはオレンヂ自由州であつた、ボーア人に執りては自由州かも知れぬが、土民に執りては不自由州であつた、處が、一九一三年南阿聯邦議會が「土民土地法」なる臨時的法律を通過してからは、トランスヴアール州でも、ナタール州でも共に土民の土地獲得權は喪失せられたのであつた、唯だケープのみが憲法上の保障の爲め僅かに土民の權利も救はるゝを得たのである、而して南阿の政治家は今や一九一三年法の趣旨に基き、永遠に土民に不利な立法を定めんと企てゝ居る。

無論、ボーア政治家の表面に稱道する所を聽けば立派なものである、卽ち土民は白人の蠶食を受けて苦むから、之を保護する爲めに彼等の所有地域を一方に劃定し、黑白兩人種をして互ひに特立的生活を營ましむると言ふのが彼等の理窟である、然かも調査委員が一九一六年南阿議會に報告した劃定案に依ると、土民に與へらる可き「特定地域」は、將來土民の人口增加を支ゆるに足らぬ面積では無い乎、又た其地質は皆な瘠せて居て、到底土民に農耕以て自立せしむるに足らぬ程

では無い乎、換言すれば肥沃な地域は皆な白人の所有たる可く劃定せられたでは無い乎、否な々々之のみで無い、「土民居住地域」の中にも比較的肥沃で白人が占領して居るものもあるが、政府は毫も之を處分せず依然之を白人の所有たらしめんと企てゝ居るでは無い乎、英人派即ち統一黨の領袖スマート氏が、餘りの事に驚いて、正論を唱道し「土民に對し不公正なる無き乎を調査せよ」と號叫したのも、尤も千萬な次第である、されどボーア人は之を聽かず、他の問題で仇敵として相分れ相爭つて居るボータ部下の南阿黨とヘルツオグ部下の國民黨は利益の下に相握手して、首尾善く(實は首尾惡く)同案を成立せしめたのである。

思ふに已に多大の土地を擁し乍ら、その大部分を開拓もせず農耕もせず荒廢に歸せしめ、左ればとて他の歐州人の移住開拓には反對して止まない慾張りのボーア農民は、矢張り自力に相應せ無いにも係らず、土民まで排斥して益々所有地の增加に苦心しつゝあるのであらう、又た勞働者缺乏に苦んで居る彼等は成る可く土民自身を土地所有者とせしめぬ方、勞働市場の供給を增加する所以だと信じ、少しも長く土民を奴隷的地位に置かんと希望しつゝあるのであらう。

然かも東方君子國の遊子たる予は、此形勢を見ると共に、益々ボーア人の狹量、利己を厭ふの念を增加し來るのみである。

然かも斯くの如きもの、果して獨りボーア人のみであらう乎。

五

斯くの如きもの、獨りボーア人のみであらう乎。

予は滯阿中、二日をナタール州ダーバンに發した、此處もケープタウン程では無いが、沙白く水清く、軟風に戰ぐ棕梠樹の姿、一種の風情があつて、深く旅客の心魂を魔したのである、二本の角を頭上に挿し、羽毛其他を以て巧妙に飾つた白衣の黑土人が曳く人力車に乘つて市内を見物し、美術館を訪ふて豫想外の完備に驚き、高燥なる住宅區域を巡つて、白人の贅澤に打たれ、疲勞の末、歩を料理店(レストラント)に向けんとすると、其處では

有色人禁制だと言ふ、江湖の諸子よ、有色人禁制の何の意味たるかは、説明せでも分らるゝであらう、然も此ナタール州ダーバンこそは、ボーア人と言ふよりも彼自由平等を尊むの美名ある英國人殊に蘇格蘭人が多數居住し、その政治、經濟を支配して居る場所では無い乎。

併し回想すれば、之も何等の不思儀も無いのである、予は二年間の英國滯在で、英人の長所美點を充分に熟知し、尊敬もし、崇拜もするものだが、南阿に移し植へられたアルビオン島の草は最早や同じ草では無いのである、換言すれば、彼等は人種的僻見に惱まされつゝあることとボーア人と多大の逕庭が無いのである。

ボーア人が英人、阿弗利加土民を苦しむるのみならで、亞細亞人をも敵視して居ることは、南阿移民法律に照せば明かである、故に多言の必要を見無い、唯だ簡單に英人、蘇格蘭人の態度を檢して見度い。

ナタール州の開發は重に印度人の力と言ふも溢美の辭では無いことは、恐らくは萬人周知の事實であらう、十九世紀の中半に印度人が渡航し植林其他の業務に從事して以來、その數は漸次に增加した、一八九一年には四萬一千となり、一九〇四年には十萬を越え、今日では十三萬に達して、白人種をも凌駕して居る、然るに英人は如何に此功勞者を遇して居る乎。

單刀直入に言ふと、南阿英人はあらゆる手段を盡して印度人を迫害しつゝあるのである、先づ彼等は有名なナタール法等を制定し、教育資格其他の條件を口實に印度人入國禁止を企てたのである、一九一五年度の統計(最近發表)を見るとダーバンにて入國を許された亞細亞人は印度人七百〇九名、支那人二名馬來人一名であるが、右印度人の內二十三名は南阿出生者、五百六十六名は南阿居住者、百十五名は南阿居住者の妻子であつて、眞箇に印度人の資格で入つて來たものは僅々五名に過ぎぬのである、又た彼等は自由印度人に對して年三十四と言ふ特別稅(白人には課せられ無い)を課して、その退去を求めつゝあるのである、其他彼等は印度人が種々の商業に發展し行くのを嫉視し、之に小賣鑑札下附を拒み、已に之を下附せるものすら之が繼續を拒むに至つたのである、同樣の例を數ふれば際限も無い、予が前に言へるレストラントの有色人拒絕位

ひは奇とするに足ら無い事件と言はねばならぬ。

予は切に思ふた「本國で儀禮あり、尊敬す可き紳士であり、獨逸人、伊太利人等に比すれば、親切な點も宵壤の差ある我同盟國民の一部が、如何なれば、斯くまで甚しく變化するのである乎」と。

六

之れ實に予の心裡に湧出せる感想である。竊か憂ふ、「南阿は今日の如くにして能く其希望する大發展を遂げ得るであらう乎」を。

勿論亞細亞人たる予の反感の如きは、問題とするに足らぬであらう、否な却て彼等の喜ぶ所かも知れぬ、然もボーア人が齎らさんとする和蘭、英、蘇人が齎らさんとする英蘇の、善良なるポピユレーションは、果て此社會狀態を好むであらう乎、成程南阿には自然の魔力がある、然かも人の魔力に不足は無いであらう乎。

顧みるに南阿の前途には偉大なる將來があるに違ひ無い、戀しき故邦を後にして、遙けき南方に奮闘努力しつゝあるボーア人、英人の勇氣と忍耐とは、予が欽仰、禁じ得ぬ所である、左れば南阿聯邦が、長へに我同盟國の領土——完全な自治を有するドミニオンとして、ボーア人及び英人の樂園たらんことを希望する予の念は何人にも劣ら無いと思ふ、而して南阿の地や、富源に滿ち、世界產額の四割に當る黃金を產出し、キンバレイでは金剛石を出し、トランスヷール一帶は無盡藏の炭鑛を有して居る、其他羊毛、駝鳥の羽毛、獸皮等を產し、農作業も有望である、然かも農業が大規模の灌漑と勞働者とを要求しつゝある如き、駝鳥羽毛の前途が永遠の計をなさずば危險なる如き、石炭を利用する工業の發達策が急務となりつゝある如き、いづれも新らしき人と資本とを南阿に歡迎するの必要を示して居る、左れば今日に於ける南阿人の最大要務こそは、實にその「對他人態度」を一變し、寬大宏量の民となるの一點では無からう乎、唯だ危ふむ、南阿人に之が出來るがドウかを。

深紅色の日陽を吐き出す印度洋の曙の雲を目懸けて一直線に突進する一萬噸の巨船の甲板上、予は屢々背面を顧みて幾度びか長大息したのである。

青年團に對する內務文部及び軍事當局の指導方針を論ず

▽指導よりも先づ自治獨立の精神を涵養せよ

早大教授 安部磯雄

○

先日青年團の大會が擧げられたが、其時に初めて私も一種異樣な感を抱かせられた。是より先きに新聞で青年團の出來た事は承知してゐたが、夫れ程注意を拂つて居なかつた。今度いよ〳〵東京に聯合大會が催され參列者が一千名に餘り、政府からは大臣までが出席して非常な盛會であつた。其上全國に亙つての團數は二万餘、團員は三百万もあると言ふ事である。仍で私も異樣な感がしたのである。何が異樣な感を起させたかといふに、若し之が英國とか米國とか言ふ國であれば、青年團自身の發起で全國青年團大會といふ名目の下に、統一的の運動が行はれるといふのが普通であつて、さういふ事は見たり聞いたりした事も少くない。處が今度の青年團大會は政府の役人の發起で、發會式には堂々たる大臣が四五人も出席して演說し、議事に移ると陸軍中將田中義一といふやうな人が議長席に着いて議事を進めた、之れが私の考へた處と大變違つて、何となく物の釣合はない、自然と言ふよりも不自然と言ふ感を起させた。理窟で述べるのではない、初めの印象がさうなのである。何故さういふ印象を與へられたか、以下一通り青年團に就いて批評して見やう。

○

第一に青年團と言ふやうなものが何か纏つた事業をしてゐるのであれば、事業の性質上役人などが大に骨折つて團結せしむる事も必要である。併し乍ら今日の青年團はさういふ事も見當らない。青年團のやつてゐる仕事は、官吏の方で世話をしてやらなければならない程のものは無い。元來青年團などゝいふものは事業も事業だが、精神的に團結すべきものである。外國では多く青年團は宗教に關係してゐて、宗教運動と言ふ處で團結してゐるのである。現に米國でも、英國でも、基督教徒が青年團を組織して、精神的團結を圖つてゐる。夫れに就いて政府の役人達が之を指導するやうな事實は見られない。又その必要もないのである。よし役人達が世話を燒いた處で服從しない。それに日本に於てさういふ青年團があるのは、一つは日本の國民性の缺點を曝露したものである。青年

と言ふやうなものが、自分でもつて自分を導いて行く事が出來ないのは殘念である。之れは日本が團體生活に慣れてゐないからである。自治の精神で自分の團體を盛り立てゝ行く力がないからである。之れは獨り地方の青年のみが有する缺點では無い。大學生のやうな高等の敎育を受けてゐるものでも同じである。だから青年團を地方に設けてあつても、役人とか郡長とか村長などが無理やりにさういふ會を組織せしめて、形式だけを整へたものに過ぎない。若し精神的に結合してゐれば、青年團といふ一つの團體が、有力で活動の出來るものとなる事が出來る。處が日本ではさうは出來ない。自分で始める力が無いから、何か仕やうとなると、何人か有力なる人の來て統一するのを待たなければならない。少しも自發的自治的の精神が無い。現に今度催された聯合大會を觀ても、政府の役人が總掛りで斡旋し、大臣まで出席して演說や訓辭を述べた事は、一方政府の熱心には感服するが、一方青年團の力の無い事を證明するものである。役人の力を借りなければ仕事も出來なければ、統一的の活動も出來ぬと言ふのは、青年團に取つて非常に遺憾な事であると私は痛切に感ずる。こんな意氣地のない青年團は有つても無くても可い位だ。將來は自發的の團體を造らへて行くやうな時代が來る事を、私共は切に望むのである。

○

次に政府の方から言つて、果してあゝ言ふ聯合運動などを發起してゐる事が、あの人々が望むやうな成績を擧げて、あの人々が望むやうな目的を達する助けとなると思つて居るのであらうか。若しさうとすれば大變な間違である。のみならず果して將來青年團の建全なる發達を圖る事が出來やうか。自治すべきを指導すれば、何時までも獨立が出來ないで、有力な力に頼る氣風を養成する。折角指導の勞を取りながら、却つて獨立力を失はしむる結果になる。かう言つたからとて、國家が社會の各方面に世話を燒くのは不可いと云ふのではない。寧ろ盛んに國家の力を以て國家が働くのは贊成である。無干渉は却つて不可い。今度の歐洲戰爭でも著しく分るやうに、國家はいろ〳〵な事に世話を燒かなければならない。食糧に就いても、米國の如きは、何日には肉を喰べてはいけない、何日には小麥を喰べてはいけないと布告を發してゐる。或る人は米國に行つて之れでも民主國かと驚いてゐる。が私は夫れがデモクラシーであると思ふ。國民全體の共同利益の爲めには、一身を犧牲にしても之れに服從するやうな團體的精神がデモクラシーである。國民が何んにも知らずに服從するのと、自ら知つて服從するのとは大變の相違がある。米國人の如きは國家の命ずる處を可いと知つて服從するものである。

併し玆に注意して置きたい事は、國家の世話するのは所謂物質的方面に限つて、精神的方面には干渉して可けない事である。精神的方面は各自の自由に任せて、自發的に出て來なければ國家の爲めにならない。青年團の如きも國家が之れを指導してやらうと言ふのは間違いで、決して良く行くものでない。又役人の言ふ通りに服從して行くやうならば、青年の發達の邪魔になる。彼等に自治の精神を養はしむるには、成る可く

干涉しないがよい。私は政府が青年團に干涉する事は、大體に於て青年の側から見ても不利益なれば、國家の側から見ても不利益であると信じて居る。

○

玆に更に一つ疑が起つて來るのは、何の爲めに、何の目的を以て、政府が青年團を指導するのかと言ふ事である。或人は何か軍人の方からさういふ考へが出たものであつて、之れは田中中將のやうな人が議長に成つたのを見ても判る。軍事上の目的から人民に軍隊主義軍國主義を鼓吹する爲めだ…と言ふ人もある。實際多少其の疑念が無いでもない。若しそれならば、初めから男らしく夫れを標榜したらよい。唯青年團といふ何ともつかないものにしないで、軍國主義の鼓吹の爲めと正直に告白した方がよい。然し今さういふ風の爲めに青年を團結せしむるは考へものである。或る新聞の如きはあの大會の模樣を見て、さういふ事を現に書いて、軍人の爲めにあの青年團を利用してゐる、軍人の勢力があの大會の中に瀰つてゐると言つてゐた。記者にもさういふ印象を與へたのであれば、之れも全然無根の事ではあるまい。私は當日親しく出席しなかつたのでよく判らないが、若し實際軍人の勢力があの會を支配してゐたならば、大變面白くない事と思ふ。

若し又軍國主義鼓吹の爲めでないとすると、恐らく次のやうな意味合のものではなからうか。即ち當日の文部大臣の演說から察すると、今日は青年の思想が混亂してゐる。殊に倫理上の思想が混亂してゐる。故に之を打つて一團として、道德上の思想を鼓吹し、國民道德を樹立しやうと言ふ考へがあるらしい。然しさういふ事は政府の遣るべき事ではない。固より簡單な問題には、政府方も其意見を發表するのは毫も構はない。然し青年團員三百万を打つて一團とし、或種の倫理的思想を吹き込むと言ふ事柄は面白くない。前にも述べた如く、政府は精神的の方面に干涉してはいけない。或國家が或宗敎を信じて、それを國敎として國民に鼓吹する爲めに、青年團を打つて一團とするのは面白くない。思想は國民各自の自由にして、之を一に限らず、廣く各種の思想を認め、甲論乙駁、自由に議論させて行かなければならない。さうすれば自ら思想も高められ、倫理觀念を向上するのである。一つの思想を限つて、それに據らしめると言ふのは賴み少い。尤も倫理的思想の統一と言ふ事も、自發的に青年團の內から湧いて來たのならば、一種のムーブメントで面白いが、政府が外から押しつけるのは可笑しい。一種の權力を有つてゐる政府がやるとなれば、思想上の一種の干涉であるから、日本の思想界の爲めに取らない。

更に第三の疑問は新聞にもあつた通り、一種の官僚主義の橫溢である。近時の青年の間にあつてデモクラシーの思想が普及するやうだが、夫れは夫れは不可ぬ。之に對しては保守的思想官僚的思想を吹き込むのが當然である…と言ふやうな事から、斯う言ふ團體を一纏にして官僚に服從せしめやうとしてゐると云ふ者もある。之れは少し邪推に過ぎるとも思はれるが、やり方は確かに官僚的であつた。私自身が見たのでないか

ら能く分らないが、新聞などの報道に見ると、案外集つた人は不滿を抱いたやうだ。議事でも何でも凡て官僚的で、委しい相談もせず、幹部で定めた事を團員に押し付けたから、岐阜縣の或る郡長が當然與へらるべき討議の機會も、意見を陳べる餘裕も無く、唯幹部で定めた決議をどしどし押し付けられる氣がすると言つたのは無理もない。軍人などが議長になつてゐるのであるから、已を得ないかも知れないが、官僚的に過ぎたやうだ。あれでは全國青年會の大團結、而かも其發會式としては失敗だと思ふ。大臣や軍人などが皆に演説を聞かして、肝心の協議の時間を潰して了つたり、殘りの日を軍艦を見せたり士官學校を參觀させたりして費してしまつたやり方は、全く官僚的で不平の聲が滿ちて居つたと言ふのも無理はない。

西洋は西洋、日本は日本と言つて了へばそれまでゞあるが、青年團などの樣子は全然違つてゐる。政府の役人が總がゝりでやるなどと言ふ事は英米には珍らしい事である。青年團と言ふものをさういふ風に統一せしめては、一向青年團の發達される所以にはならない。政府からするも大した效能がないと思ふ。一の龐大な團體を作つた處で、大した働も出來ない。寧ろそんな莫迦げた努力をするよりも、青年の自治心を鼓吹して、役人の助力を賴みにする意氣地のない氣風を絶滅するやうに圖るべきである。自治的精神が缺乏して、役人の力を借りねば何事も出來ぬと言ふやうな氣風を、青年の間に培養するのは實に恐るべき事と思ふ。

▽青年團即亡國團

向軍治

昨年の春東京府廳で東京府下の青年團の指導者を、東京府知事が召集して、いろ〳〵相談した事がある。其時分私も麻布青年會の會長として出席した。開會に先立つて控室で井上知事に向つて、「貴下は青年團の事業を本氣になつてお遣りになる心算なら、禁酒禁煙から始めて懸らなければ駄目ですが、どうです」と言つた所が、知事は「君そんな事は考へて居ないよ」と言ふ返事であつた。「それ御覽なさい。そんな事で本當に青年團の事業がやれるものですか。今内務省で獎勵して居る青年團といふのは、何の事はない飲酒會で、青年誘導會ではなくして青年誘惑會ですよ」と言ふと、知事が「それは君大變だね」と苦笑ひしながら返事せられた。それからいよ〳〵會が始まると、形式ばかりの議事があつて、午前の内 最後に僅か十五分を剩すだけになつた。すると議長席に坐つた東京府内務部長が、「府下の模範青年團の樣子を其當事者から話をして貰いたいが、時間が無いから一人に就き五分宛の演説を三人やつて貰ひたい」と言ふ事であつた。仍で私は直ぐに起立して「こんな國家の大事件を討議するに方つて時間が無いと言ふのは言語道斷である。青年團に關する話が五分で出來る筈は無い。元來こんな相談が會議を一日でやり上げる、而かも其午後の半分は演説に用ゆるといふやうな大雜駁な事で濟

む筈のものではない。是非一日延期して頂きたい」と云つた所が、列席の軍人が贊成の意を表せられたので、遂に翌日も相談會を開く事になつた。午後には中島力造博士が時勢遲れの最も甚だしい、少くも三十年時勢に遲れてゐる演說を長つたらしくやられた。今の青年も了解して居なければ、社會も研究して居ない雜駁な頭の博士の演說が、無學で時勢に遲れた青年團指導者のために毒になつても藥にはならないと感じた者は、當日私一人ではなかつた。阪谷男爵の演說は上出來であつた。併し男爵は聯合軍の爲に氣焰を吐かうとした結果、獨逸を野蠻國の樣に言做して了つて、獨逸に關して丸で間違つた印象を聽衆に與へた。すると其後に出た福田陸軍中將は獨逸を模範として示して、我國民の覺醒を促すと云ふ仕組の演說をやる積りで出席せられたので、其段になつて正か阪谷男爵の說が間違つて居るとも言ひ兼ね、さればとて默つて男爵の演說と正反對な事を言つては當擦つた樣に聞えて惡いし、困られた結果、要領を得ない演說をして御茶を濁された。「コンナコトデ」とつくづく思つた。前日には二百五十人も集つて、郡長も皆列席して居た。延期した翌日になつて見ると、集つた者僅かに五十人位で、郡長は多分皆缺席であつたかと思ふ。仍で私は東國內務部長に言つた。「御覽なさい。青年團の指導者と謂ふのがこんな有樣です。指導者を先づ指導してやらなければ、青年團の事業は出來やしません」。すると內務部長も「困つたものです」と言つて居られた。翌日は時間があつたので、可也多くの演說があつたが、何れも皆體育を盛んにするといふ事許りを說いて居た。仍て私は立つて「人間は木偶や土偶ではあるまいし、外から叩き固めたからと言つて碌なものは出來はしない。都合の惡い事には『魂』といふものがあつて、之れが腐敗して居た日には身體が丈夫になると、禍は增すばかりである。若し諸君が眞面目に青年團事業をやりたいとならば、體育の獎勵は二の手に廻して何よりも先きに精神教育を盛んにせなければ駄目だ。禁酒禁煙を指導者自ら斷行して、青年を眞面目な人間に育て上げ、貴下方は厭でも應でも宗教をおやりなさらなければ駄目だ。現在鹿兒島人の徵兵檢査の成績が惡いと言ふのは、明治十年に偉い鹿兒島人が皆死んで、病人と片輪のみが生き殘つた結果で、此頃徵兵檢査に懸る鹿兒島人に健全な人間が居つたら、それこそ奇蹟である。歐羅巴に於ても此戰爭の後の人類墮落の事を非常に心配して居る。我國全體に亙つて徵兵檢査の結果の惡いのは、過去數十年間に教育のために誤まられた無知無學の親が生んだ子供の體が惡いからである。メチールアルコールなどを盛んに飲んだ親に、健全な子の出來る筈がない。今日の青年の體格が惡いのは、無學な文部省が、過去數十年間に於て教育の方針を誤つた結果である。今日の小中學校は人の子を害ふ爲めの設備といつても差支へない。中學の卒業生は其智慧の働きに於て、誰れも皆生れ付きより二割方馬鹿になつて居る。精神上に於ては無意味な道德教育の爲めに、折角人間として生れ付き有つて居る宗教心を型無しに破壞されて、殆んど禽獸と選ぶ所無き程度まで心が荒んで居る。今の教育者の中に時勢に遲れない信仰を以て、精神的感化を兒童に與へて居る人間が幾人あるか。體育といふのも

形式に止まつて居る。運動家といふのは多くは怠惰生で、暴飲暴食を恣にして、折角運動によつて造り上げた身體を、惡德によつて無暗に壞しつゝある青年の輩である。小中學に於て斯の如き敎育を受けた人間を相手にして、體育を盛んにしたら何が出來る。獸みたやうな人間が出來る許りではないか。青年團の事業が眞面目にやりたくば、第一に小中學の敎育の改良を圖りなさい。源が濁つて居ては末が淸くなる筈のものでない」と論じた。すると出席者の一人であつた軍人が、「君は甘い事を言つた。成程『魂』さへ確乎して居ればどんな事でも出來る。」と言つて如何にも感心した風をして居た。併し當日出席者の多數は無論私の說を了解し得ない木偶的の人間であつたと思ふ。

以上が昨年春東京府廳に於て開かれた青年團の指導者の相談會の模樣である。指導者すら斯くの如きものであるから、其下に行はれて居る青年團の運動が、如何なるものであるかは想像に難くない。斯くの如き青年團が盛んになればなる程國家は滅亡に近づくのである。青年團といふよりも亡國團と改名した方が早い。此指導者の會合に於て私の驚いた者が二つある。第一が山縣有朋の歌の石版刷であつた。私は配布せられた印刷物を見て居る内に、其石版刷があつたので驚いた。碌でもない三十一文字が並べてあつて、其後に有朋とあつた。私はそれを見ると直ぐに其紙で鼻汁かんで捨てた。山縣有朋と言へば維新の元勳の一人ではあらう、が道德上どれ丈けの價値のある男であらう。我輩は山縣有朋を風敎の賊と見做して居る。斯くの如きものゝ作つた歌が、神聖なるべき青年團の會合を汚すとは何事であるか。無禮にも程がある。畢竟するに內務省で獎して居る青年團といふものは、藩閥の手先きを作らうといふ根膽に基いたものであらう。私も山口縣人である。山口縣人の中に山縣有朋の如き人の居る事を常に嘆息して居る。斯くの如き人が山口縣に居るのは山口縣人の恥辱である。國家の上から見ても山縣有朋が青年團を汚がすのは言語道斷の話である。山口縣人としても山縣有朋の爲めに辱を搔くのは口惜しい。故に私は此紙で鼻汁をかんだ。然し一旦は捨てたものゝ後日の好い證據物品と思つたから、又袋の中に納めて置いた。多分宅に保存してあると思ふ。第二に驚いたのは其日に配布された「帝國青年」とか何とかいふ雜誌である。內容を見ると全然時勢遲れの論文で埋つて居た。さなきだに我國の社會は世界の文明に遲れて居つて困る。それを內務省が獎勵して時勢遲れの雜誌を讀せる手傳をするとは何事であるか。本來中央青年團の幹部には碌な人間は居ない。大抵は時勢遲れの人ばかりである。早川千吉郎氏の如きは世界がどんなになつて居るか、全然知らない人である。日本丈けが昔のやうに鎖國をして居るのなら、早川氏の如き時勢遲れの人が物を云ふ理由が有るかも知れない。今の文明の競爭の劇しい世の中で、早川氏の如き時勢遲れの人が出娑婆ると云ふのが既に技精だ。時勢遲れの指導者の下に碌な會の出來る筈はない。僞か眞か、內務省の獎勵して居る青年團が如何なる程度まで腐敗して居るかを、二三の實例によつて證明して見よう。

昨年山形縣の或る地方で青年團の發會式が行はれた。山形縣の知事が

出發して議論を與へたのは好かつたが、翌青年會に臨んで鹿爪らしい說法をした其口で、晩には藝妓の盃を貰つて酒を飲んでドンチャン〳〵大騷ぎをやつた事が翌日の新聞に出た。青年團の發會式に臨んで知事の演說を聽いた青年は、何方が本當の知事さんかと驚いた。斯らいふ事は山形縣のみに止まつて居ない。伊豆に內務省で特別に表彰して居る青年團がある。其青年團員中に一人基督敎徒があつて盛んに青年團員の酒を飲むのを攻擊した。すると青年團の大會が開かれた夜、中途に會長が命令を與へて電燈を消さした。すると其禁酒禁煙を唱へた青年は袋叩きに逢つた。之れが內務省の奬勵して居る青年團である。

品川の近所に青年團がある。女郎屋の亭主が其青年團の幹部の人に賴んで春畫を買つて貰ふ運動をした。「貴君が之を能く賣つて下されば、無代で揭げてあげます」と云ふのである。仍で其青年が其春畫を方々へ賣り擴めた。或る中學の學生がそれを押賣りされて困つた事がある。內務省斯の如き青年團を奬勵して居る。

或る地方の青年團長と青年團の風儀の惡い事を論じた所が、其團長曰く「實は悉く禁酒禁煙にしなくても、せめて青年團の會合の時丈けでも酒を用ひないやうにしたいと思ふのですが、飲み食ひしない會なら來ない、と云ふのですから實に困ります」と云ふ事であつた。飲喰を目的として居る青年を集めて飲喰の稽古をさせたら、それが何程國家の利益になる。時勢遲れの人間のすることは皆此うである。昨年の東京府廳の青年團指導者の會合に於て、府下模範青年團の代表者の一人の說にも「何分集りが惡いものですから籤引き法を採用して出席を奬勵した所が、なかなか成績が宜しう御座いました」と云ふ言葉があつた。何の事はない賭博の稽古をさせてゐるのだ。私は其代表者が人間であるかを疑つた。二つ足があつたから確かに「けだもの」ではなかつた。恥かしくも無くよくもあんな馬鹿が公然と云はれたものである。斯の如く良心の痲痺した人間が指導者になつて居る青年團であつて、而かもそれを府廳が模範青年團と認めて居るのであるから、憤慨する位の事では追つ付かない。馬鹿げて居て可笑しくなつて了ふ。私は昨年から青年團破壞の運動を始めた。機會のある度每に內務省の奬勵して居る青年團、早川千吉郞氏の指導してゐる青年團が、國家を亡ぼすものである事を絕叫する。過日催された青年會の大會には出席しなかつたから、其模樣はどんなであつたかは知らない。其遣り口のお祭り騷ぎ然たる所から見ると、此青年團運動も恐らく內務省の奬勵して居る青年團と同じやうに、國家を滅ぼす爲めに組織された機關であらう。國家の爲めに長大息すべき事である。

世の中が斯くの如くに亂れてゐる時に方つて、佛敎家は全然時勢に遲れて居る。基督敎徒は生きて居るのか死んで居るのか分らない。此國は果して誰によつて救はれるのであらうか。「天は自ら助くる者を助く」と云ふ。眞に國家を愛ふる青年なら時勢遲れの連中の云ふ事に耳を傾けないで、自ら進んで取る方針を立てるのが何よりも大事である。一週間許り前に名古屋市の青年團指導者の會合に出席して、何處も同じなのに感心した。大部分は時勢遲れ處ではない、丸で無智無學な人達で

つた。私が指導して居る青年團は忠孝主義一天張で御坐ると憚らずに無智無學の標本を見せて得意になつて居る商人や軍人が居た。あんな指導者の下に碌な青年團が出來る筈はない。何の事はない、盲が目明の道案内をすると云ふのである。滑稽にも程がある。今の青年團指導者の大多數は鴨の卵を孵した牝鷄に善く似て、池の邊で大心配をして居る。自分が轉げ込まない工夫をした方が餘程手近である。

▽文字に囚はる弊

農學博士 法學博士 新渡戸稲造

十餘年前の事であつたが、青年會の創立が各所に奬勵された頃、時の某大臣に意見を述べた事がある。即ち地方の青年を團結せしむる事は甚だ望ましき事であるけれども、其の指導を過まれば却つて網の機關を作るやうなものである。相當なる人物の無き處に徒らに會合を作る事は危險であるから、政府が人工的に結合を奬勵する事は望ましかるまいと云ふ意を述べた。一體我國に於ては何事も政府の奬勵でなければ形を成さない。其結果は政府の爲る事は物の形を造るといふ事に止まるに過ぎない、即ち瞳を入れない人形を作る様なものである。故に何事に據らず、外から見れば形式が整つて一見美なるが如きも、其の内容を覗へば多くは充實して居らない嫌ひがある。此の事は勿論吾輩一人云ふのでは無くして具眼の士は百も承知である。當局者は熟く此危險を覺つて居る。而して彼等の云ふ事に據れば、まづ先きに形を造り輪廓を定めて、徐ろに其内容の充實を圖るといふ。故に創業の際は先づ器の準備に止まつて、二十年三十年を待つて此器を指導する者を作り出す。尙は二十年三十年を經て、之れに收むる品物を作る氣の永い考を以て此仕事に當つて居るやうに見受ける。此考が果して誤つて居るとは、誰人も斷言出來ない、少くとも吾輩は此考を是認するものである。然し之を以て最良の方法とは云はぬ。吾輩の最良と思ふものは、前に述べた已に實質の整つた處より團結を初めるといふ事にあるが、既に政府が創立を促して全國青年團を作つた以上は、其の大部分を壞しても最良の方法を採る必要は無い。よりよき方法と認むるものを實行せんがために、曲りながらもこしらへたものを水泡となす事は惜しい。西洋の諺に The better is the enemy of the good といふ通りである。勢ひ此處に至つたならば、方策を改めて今後は氣永く内容の充實に取懸るより術は無からう。

然るに此創業の際に方つて、いろ／＼なる方面より青年會を利用せんとするのは、之れ亦自然の事にして、固より豫期すべき事と思ふ。聞く所に據れば或は軍人、或は宗教家、其他地方に勢力ある機關が銘々其所信と主張とを青年會に鼓吹し、青年會を以て彼等の機關の如く爲さんとするの惧れある事を聞いた。勿論彼等は狹き議論を以て青年會を指導するとは云はない。何れも國家の急務と要求とを盾に取り、其所論を維持するのである。軍人が或は國防の爲めとか、或は忠君の爲めとか、或は時

勢に鑑みて云々と云ふ理由の下に、青年團員をして軍事的鍛錬の方面に意を注がしめるのは、誰が聞いても拔く事の出來ない論據が有つて、之れに反對すれば直ちに賣國奴の如く聞え、反逆者の如く見える。又宗教家の如きは自分の主張を鼓吹するに、同じく神道は敬神の道にして大和民族の特徴である。其發揚は神社佛閣の保存に在るなどの理由を述べられる。之に反對する者は如何にも敬神の意無き者にして、非國民の如く聞えるが故に、一應其說に從ふ事になる。狹い田舍では少しく毛色の變つた者は兎角排斥され易い。我國民の如く雷同し易い性質を具へて居る者は、狹い田舍に於ては少くとも直ちに結合し易い。故に如何なる主義によらず、地方人民の尊敬する者が云ひ出せば、各自の心には納得出來なくとも、形式上其說を是認し之に服從する。而して人が之れを呼んで國民思想統一などゝ心得て居る。思想統一なる文字其ものも其名が美であるから、之れに反對する者は不統一を主張して反逆論でも持ち出すが如くに聞える。由來日本人は支那人の糟粕(かす)を嘗めて育つたから、文字に囚はれ易い。二つ三つの耳障り好い熟語を用ゆれば、其反對には耳を傾ける餘地の少い國民である。その美なる言葉の下に、如何なる醜體が演ぜられても、敢て問ふ處では無い。孝といふ文字を用ゆれば、親が如何に親權を濫用して、其子の人間としての權利を剝奪し、或は身體に危害を加へても甚だしきは我子の操を傷付けても、之に從ふを以て孝する。親を責めない。子を褒める。斯の如き例を擧げれたならば、何事に就いても同じ事である。近頃國民思想統一なる美名の下に、十六七世紀の思想を鼓吹する風さへ行はれる。折角明治天皇より賜つたる信仰の自由さへも、此曖昧なる熟字の爲めに破れんとする傾がある。又國防なる誰人も反對する能はざるの言葉の下に、各地の青年が各自の思想の發展を妨げられたり、或は各自の職務を防害さるる事までも聞く。吾輩の惜むのは例の支那式の文字に重きを置いて、實際の內容について誤り易き點である。軍國主義も可し、實業主義も可し、敬神主義も可し、殆んど世の中に行はるる主義にして、或る程度までは何一つとして惡いものは無からう。相撲も、芝居も、浮かれ節も、下戶も上戶もそれ〴〵取り所がある。人格を重んずる者は、各自の趣味、各自の判斷を尊重する事が大事で、青年の發展も十人十色のやうに、個性を發揮することこそ望ましき事である。統一なる美名を濫用して、各自の狹い考を他人に及ぼす事は大に愼しむを要する。

▽偏僻の考で指導する は國家の禍

慶應義塾 塾長 鎌田榮吉

青年團といふものは至極結構なものと思ふ。先づ青年團としての事業を擧げれば、國家の義務を完全に果す爲めに種々なる方面に於て訓練を

なし、義務教育の繼續をなし、亦各自の生活の獨立を計り、個人若くは團體の厄介にならぬやう心掛けを附けて行くといふが如き團體である。要するに青年とは來る時代の國民としての準備時期であつて、青年團とは此の國家發展の上に最も大なる關係のある青年を肉體的にも精神的にも鍛磨薫陶し現代よりより良き國民となさんとするを目的とする機關である。

今後の國民はもつと健全なる國民にならなければ退歩し行く事は分りきつて居る、到底激甚なる列國の競爭に伍列して行く事が出來ないのである。それが爲めには、青年と云ふ者を單に軍事のみに限らず、廣く文事の事業に對しても訓練するといふが必要である。故に偏僻なる考へを持つて指導する事あらば、國家の大なる禍となる。無論共同して目的を達せんとするには、一致協力して自己を犧牲にしても國家または斯うした團體に盡すことは大切な事であるが、他の事は缺點を生じても構はない、此事のみ上手になればよいとか、青年といふ者は斯ういふ型でなくてはならぬとか、誤れる目的に向つて次代の國民に一種の氣質を注き込まんとして、一人若しくは數人の頭腦で考へて、之を全體の青年に及ぼさんとするのは最も危險な事であり、延いては國家を危くする原である。どうしても今後文明の世界に立つて發展し永久に國家の進歩を計つて行かうとするには、全國擧つて商工國主義を採り、經濟的に充分なる防禦を設けて行かなければならない。最も健全であらねばならぬ青年迄が斯かる點に於て武備のみに偏した目的で訓練されたなら、遂には世界を敵として國家は亡ぶる事になる。動もすると國家の發展を主唱する者の中には、性急な爲め偏した考を有つて居る者が少くない。斯る人々の考案で青年といふ者を何か鑄型で鑄るやうな考へで指導する事の危險な事は今日の歐州大戰の成り行きを見ても、苟も常識ある人ならば肯かれるであらう。

青年を指導する者は多く官公吏といふ職務上の者であるが、偶々官にあり職に在つたといふ關係からやるといふものでなく、もつと土着的に團體其物を愛する念が强く、可成り學問もあり名望もあり財産もあるといふ特志家が指導の任に當り、その人を中心として堅實に效果を收めて行くやうにして欲しい。廣島といつたやうな一年か半年位其官職に居る人が職務上にやつて居るのに依頼して形式的にやつて居たのでは、形の上に於ては整然として揃つて居るが精神的には何物もないものになつてしまふ。良き目的に向つては强き團結を成して遂行するといふ風に健全に青年を發達さす樣に心掛なければならぬ。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



(中付の一)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

文學博士
三宅雪嶺先生
新著

小紙庫

■新式ポイント活字■
■總洋布四百五十頁■
■新形携帶至便箱入■
■裝幀極美天金特製■
正價金壹圓五拾錢
送料金八錢

先生自序の一節に曰く

永平寺の和尚は庭前の石を指して曰く。吾は金なくして石ありと。著者は庭の代りに壁に面して曰ふ。吾は金庫なくして紙庫ありと……

最新刊發賣

小紙庫一卷、收むる所は銅臭に非ず金色に非ず實に新興日本の**最高思想**也。現代を超越して而も現代を離れず、博大の識、深邃の學、眞に有らゆる問題に觸れて、其觸るゝ所必ずや**靈光の閃**を見ずんば止まざるもの、古今東西の論壇を通じて只獨り靈活偉大なる先生の筆あるのみ

本書は大正以降、最近に於ける先生最も**會心の文字**を網羅せるもの、字々珠玉、句々皆經典荷も先生の思想を研究し、其文章を玩味せんとするものは**金庫**を賣つて此の**紙庫**を購はざる可らず……

▲百代不朽の名著出づ！

第一、世界の大勢
第二、政治と人物
第三、社會と生活
第四、風敎、修養

東京市麴町區平河町一丁目
發兌 耕文堂
振替東京三四六六七番

(中付一の二)

當代第一流諸名家の直話

見よ目次の一斑を

戰後の研究 百人一話

戰後に對する國策の精華盡く本書に集まる

戰後經營の根本的精神(大隈侯爵)——軍備充實と平和運動(三宅博士)——日米親善策(金子子爵)——日本と米國と支那(石井大使)——日支提携(倉地鐵吉)——戰後の自營自給策(原敬)——列國の國營主義(原富太郎)——戰後の國際貿易(高橋是清)商工業は軍隊式に遣れ(田尻子爵)——根本的國策の樹立(大石正巳)世界の大勢と戰國の使命(床次竹次郎)——戰後日本の地位(添田博士)——大に航空軍を擴張せよ(松波博士)——軍團編制の急務(佐藤中將)戰後商人の修養(佐野高商校長)——戰後商人の修養(佐野善作)戰後富國の要訣(鎌田榮吉)——戰後の航路補助問題(内田嘉吉)——戰後の經濟市場(早川千吉郎)——戰後の事業界(池田謙三)大亞細亞主義(内田良平)——戰後の工業界(阪田貞一)——戰後の農業(古在博士)戰後の電氣事業(神戸擧一)戰後の綿絲紡績(藤正純)戰後の化學工業(鴨居博士)戰後の造船界(寺野博士)——教育前途の障害(山川健次郎)——教育の刷新(岡田文相)——道德的及身體的修養(嘉納治五郎)——大學の刷新(澤柳博士)——戰後の婦人(湯原元一)——戰後の家庭生活(山脇博士)——戰後の染料工業(中谷弘吉)——戰後の農村振興策(濱口雄幸)——戰後の婦人問題(三輪田元道)

其他悉く七千萬同胞が眞劍に自己當面の問題を考案すべき唯一資料ならざるはなし。苟も日東大帝國々民として思を戰後に致すものは必ず一讀せざるべからず。

菊判五百五十頁
壹圓五拾錢
(郵稅八錢)

東京神田 **富山房** 振替五一〇

中付一の三

吉田絃二郎氏新著

新刊發賣

創作集

島の秋

著者最近の傑作選集

私は冷たい理智や、批判や、狹いイズムの上から人生を取り扱はないで、できるならば嬰兒のやうな謙虚な心で、この幽玄な人生の底深くはいつて行つて見たいと思ふ。私は解剖刀を持つ科學者の眼で人生を見ないで、直觀の境に於いて自然と瞑合する詩人の心を持つて人生を見たい。この心から出發して靜觀した私の人生は、いつも死と悲哀と流轉の相を背景として、刹那より無限に暗い一路を辿つてゐるものであつた。私はこの觀照の底に映つた心影をさながらに私の貧しい收穫の中に取り容れやうと試みた。（著者）

内容目次

▼島の秋
▼別れ行く人々
▼落葉の路
▼眠られぬ男
▼土堤店の息子
▼雪の夜の旅
▼磯ごよみ

四六判最上製美本全壹冊
正價金壹圓卅五錢　郵税八錢

最新刊

日蓮主義概論

日蓮宗大學講師
『法華』編輯主幹
文學士　小林一郎先生新著

日蓮主義講話の姉妹篇出來す

日蓮主義は現代の人の宗教的要求に應ずべき最も進歩せる教義なり。國運の發展も個人の安心も此の教義に基きて初めて可能なり。本書は著者が何れの宗派にも囚はれざる自由の見地より、日蓮上人の眞精神を發揮せんが爲に特に執筆せるものにして、先づ法華經の梗概を擧げ、次に日蓮上人の教義の精髓を語り、現代思想との交渉近世科學との關係に論及し、極めて大胆に又極めて眞面目にその所信を告白せるものなり。思想問題に注意せる人は必ず本書を一讀するの要あるべし。

四六判最上製美本
紙數六百卅頁箱入
正價壹圓七拾錢
郵税金八錢

東京市神田區表神保町七番地

◀大同館發行▶

振替貯金口座東京八七貳番

（中付一の四）



人形師松本喜三郎

高村光雲

古來の名匠名工と稱せらるゝ者の中でも、刀鍛冶とか、畫師とか云ふ方面には、聊か逸話といふ樣なことも殘つて居りますが、其他には比較的お話が少ない。それで私もどうか少しでも世の中に名人の名前が殘したいと不斷に考へて居りますが、さて之を殘すとなると其事蹟を調査したり、順序を立てたり、なか〳〵容易なことではありませんから、今はたゞ自分が見聞したまゝを秩序も何も構はずにお話をすることに致します。

今こゝでお話致したいと思ひますのは、肥後熊本の生れで松本喜三郎と云ふ人形師の事でございます。これは安政年間に現はれた人で、明治二十年頃迄現存して居たと思ひます。それで此人のお話をするに就きまして、少し廻り遠い所から申上げねばなりません。それは安政二卯年十月二日の夜の四つ時で、只今の午後十時でございます。其頃は今日のやうに時計がないので、拍子木をチヨン、チヨン、チヨチヨチヨンと打ちます。これが四つであります。拍子木には打ち方があつて、五つ時になると、チヨン、チヨン、チヨン、チヨチヨンと打つのであります。それから前に二つづゝ二度チ

ヨン、チヨン、チヨチヨン、後に一つチヨン、これでも五つ。それから二つ打つて五つでござい、四つでございと、言葉で斷つたのもございます。それは知らせと云つて、二度しか打たぬ。チヨン、チロンと打つて四つ時でございと斷つた。これは餘計なお話でありますが、そのチヨン、チヨン、チロチヨンの拍子木を相圖に江戸八百八町に大慘害が起りました。年配のお方は御承知の安政年間の大地震、實に前代未聞の恐ろしい大騷動が起りました。グラ〳〵と云ふ震動が少し靜かになつて外へ出て見ると、東西南北に火の手が揚がる、負傷者は數限りが知れない、死人は積んで山をなすと云ふやうな有様、貴賤貧富の嫌ひなく、子は親を喪ひ、親は子を失ふと云ふ大慘狀。今日では種々なる救濟の機關も備つて居るが、安政二年、丁度徳川政府は少し動揺して、浦賀表へは外國の使臣が開港の談判に黒船をもて來ると云ふやうな譯で、餘程國事多端の時であります。それで十分なことも屆かなかつたやうであります。死骸の如きはどうするかと云ふに、これを片付けるに棺がない。四斗樽、簞笥の抽斗、小さい人は蜜柑箱、或は素麵箱、それでも足らぬので米俵や、炭俵へ入れ、大八車で曳くと云ふ有様でございました。今日は北海道から來る鮭でも、銚子邊から來る鮪でも、少し良いのは皆箱へ這入つて居るが、その時分は人間が澤庵大根と同じやうに、菰へくるんで大八車に載せて搬ばれたと云ふやうな恐ろしい光景でありました。

併しこの騷ぎも一時の事で、追々片付いて參りますと、さて惡い後は善いと云ふ諺に相違ありませぬ。その通り非常なる慘害を被りましたが、此の地震のために大層金廻りが好くなつた。この金廻りの好くなつたのは、先づ第一番に一般の商賣が繁昌し始める。それから家職の繁昌は非常なもので、とても江戸の工人丈けでは引張り足りない所から、近國の工人が皆集ると云ふやうな有様でありまして、何事を措いても先づ大工、材木、それに附隨した職工が大繁昌である。そこでこの地震の騷ぎがやゝ暫く經つてから、世直しの地

震と申して、もう恐ろしい事も忘れて大層喜んだくらゐ。それはその譯でございませう、その時分の大工や左官と云ふやうな家職は、先づ普通の手間が三匁から三匁五分、御錢にして四百文、一日稼いだ所で、一朱と云ふのが丁度可なり宜い手間賃。その上は四匁、それより上はない。一朱と云ふのは三匁七分五厘、一朱の銀が十六で丁度一兩即ち六十匁になる。一朱銀が二つで二朱、これが七匁五分。三つで三朱、十一匁二分五厘。四つが一分で十五匁。一分が四つで一兩即ち六十匁であります。さういふ譯でございまして、手間賃は安いが、その頃は金に位があつて、物價に位の無い時代で、今日でもその時分の話が殘つて居ります。四貫相場に米八斗、今日で申すと一兩(圓)で米が二俵買へるので、四斗俵一俵五十錢の世の中だ。一月に三貫の御錢を以て「姉御頼む」といふと、居候が食客大明神といふので御客樣、横の物を縦にもしない。今日の三十錢抛り込むと一月大威張りで寝て食つて居られた。その時分の話に、我々の職業仲間では、出來るとか出來ないとか云ふことに就て一つの喩があつた。「貴樣にこれがどうして出來るものか止せ〳〵」、「イヽエやります」、「イヤ出來ない、貴樣が百が物を一時に食つて町内中糞を垂れても出來ぬ」といつて、一錢の物は食へぬとして居た。若し食へば町内中糞を垂れるだけの量があつた。そんな例になつたくらゐ。大變なお話であります。併しこの三匁とか一朱とかの賃錢を取る人の手間賃が、地震の結果で一分と飛び上つた。前申上げる通り、十六日稼がなければ一兩の金が取れなかつた人が、四日稼げば一兩懐に這入つて了ふ。所へ持つて來て、この時分は江戸ッ兒のチヤキ〳〵、宵越しの錢は持たない。持てば持つ程勢ひよくなる。それはモウ大變だ。吉原の假宅がドン〳〵流行て、忽ち普請金を取上げて元地へ立派な普請が出來る。それで切見世で遊んだ人は小格子、中見世の人は大見世で遊ぶ。隨つて大小の料理屋から總て盛り場所は全で火の燃ゆるやうな勢ひ。その時分に私共能くは覺えませぬが繪草紙屋に諷刺畫が出て居つて、大きな鯰が一尾轉が

つて居る。其鈴を打撲る人と制める人と半々に描いてあつた。そんなものであります。

それで是は世直しの地震。どう云ふ時でも賢いのは坊さん。宗教家は欲が無いやうな顔をして居るが、ナカ／＼機敏なもので、此結果、直ぐに弱點を見つけた。それは斯う云ふ恐ろしい大變事があつて、先づ生命は助かつた、少々の怪我で濟んだとか、又は子を亡くした親、親を亡くした子、冥福の爲めとか、追善の爲めとかいふて信心氣が殖へたので佛法が繁昌した。人氣なもので地藏様が繁昌した。又如意輪觀音は夫婦で死別れた人が二世を祈ると云ふやうな事でありました。それから淺草觀音様の五重の塔の九輪が、その翌年即ち安政三年八月の大風に曲つた。これを修繕する時に内を檢めると、三代將軍家光公が御寄進になつたことが分つたので、その眞木の檜で以て一寸八分の觀音様を彫刻して世間へ出しました。これが千體出たか千五百體出たか非常なものであつた。さう云ふ工合に人が信心氣が出て來た。そこで坊さん達も、サア此處たと、アチラでもコチラでも江戸市中で開帳を始めた。中には只坐つて居つては不可いからと云ふので遠國から出開帳。そこで本所の回向院、或は深川の靈巖寺といふやうな大きな寺々では出開帳があつて、人がドシ／＼行く、大層な繁昌。其中に淺草の觀世音も矢張り居開帳をやる。この開帳に喰付いて騷ぎ出すのは何だと云ふと見世物、見世物が無ければ矢張り開帳も繁昌しない。開帳が繁昌すれば見世物も流行る。相持だ。大變頓珍漢なやうだが、これは何かの因縁である。さういふ譯で大層開帳が流行りましたが、それでも奇態なもので、同じ佛様神様でも、矢張り中には外づれるのがある。どう云ふ譯で外づれたか、その外づれた理由は能くは知れませぬが、京都嵯峨の淸凉寺の御釋迦様の出開帳が外づれた。その時に落首が出來て居る。そこで開帳が外づれたから見世物が流行らない。見世物師は皆損を致しました。その時の落首に、

見世物も釋迦の御弟子で皆尊者（損じや）

モウ一つ、お竹大日如來が外づれた。是は丁度時候

が惡かつたのでございませう、雨期に入つたのと見えます。降つたり照つたり些とも人が出ない。始終雨勝でございます。一月の中に十日雨が降ると三十日降つたやうな心持が致します。丸ッ切り降つたといふ譯でもございますまいが、雨勝であつた。そこでこれも落首が出來た。

　犢鼻褌を忘れて來たかお竹さん
　　六十日をフリで開帳

　そこでこの淺草觀音樣へ初て生人形の見世物が出ました。此時に江戸市中の人形師が眠つて居つた眼をパッと一度に開いた。驚いて肝を潰した。少し御話が後へ戻つて、この開帳の未だございませぬ前に、肥後の熊本から突然新門の辰五郎と云ふ人の處へ宛てゝ菰包で荷が着た。辰五郎が檢めて見ると、肥後の熊木松本喜三郎と云ふ名で荷が來た。一向早や取上げない。「何だ馬鹿々々しい、花の御江戸の中へ、しかも巳の名宛で肥後の熊本くんだりから何を送つて來たか知らぬが、迚も見世物になる譯で無い。マア何處かへ拋り込んで置け」と云ふやうな次第で、丁度花川戸に吉原の假宅の明店があつた。そこへ入れて置けといふので、拋り込んでそれッ切りにして置いた。そこで喜三郎の方でこの新門の辰五郎と云ふ人へ宛てゝ來るといふのは妙なものであるが、是は新門の辰五郎は申す迄も無い消防夫の頭で、有名な人であるけれども、これに宛てゝ來る理由がある。

　新門の辰五郎と云ふ人は傳法院の御抱で淺草寺の出入、觀音の奥山は辰五郎が悉皆支配をして居つた。その時分の見世物の場所は淺草奥山の外に山下（下谷の）、只今の丁度停車場の在る處で、山下の大掃溜と云つて、この邊總て。それから兩國廣小路、兩國の橋を渡つて向ふへ行くと下等な見世物。それからチョッとの間ありましたのが芝の久保町の原、京橋の釆女町等で、その頃はこの中で一番上品な種の良いのが淺草の奥山。それでこの奥山で觀せて貰ひたい、同じ見世物でも兩國や山下で觀せたくない、奥山の桁舞臺で觀せて貰ひたいといふのが製作者の考。それで態々新門の辰五郎

の處へ送つて來たのである。

この新門の辰五郎と云ふ人の話をチョッと致しますが、この人は四十八組の中のを組で十番の仕事師だ。餘り場所の良く無い場末の頭でございますが、器量といふものは恐ろしいもので四十八組の牛耳を執つた。末には徳川家の肝煎と勤めて帶刀御免になつた。それで新門といふのは傳法院の西門を預り、その門の脇に住宅を構へて居つた。この西門が何時出來たか兎に角傳法院の門の中で一番新しい門と云ふので新門と言ひます。丁度幡随院長兵衛の如きこれが稱へで、新門の辰五郎で通つて居た。本當の名をいふと餘り人が知らない。私も知りませんでしたが、この間竹内先生（故竹内久一氏）に聞きますと、本當の姓名は町田仁右衛門と云ふ。家名は中村屋といふさうであります。この辰五郎が丁度傳法院の西門で、今で申しまするると六區の公園の見世物の場所、ルナパークの在る處、元とパノラマの在りました處に新門があつて、チョッと小半町、一町まではなかつた田甫がありまして、さうして傳法院の庭へ這入る。その新門に住つて居て、傳法院の用を達し、また奥山見世物一切をも支配して居りました。それが爲めに新門辰五郎の名の方が通つて居つた。斯うした譯であるから、この人の處へ宛てゝ來なければ淺草で觀せることは出來ないから、辰五郎へ宛てゝ來た。

そこで愈々淺草の開帳。地震後の開帳で是はモウ必らず人が出る。世間の大層榮つて居る時の開帳であるから、そこで見世物を一つ拵へねばならぬといふので、ふいと氣が附いたのが、「さうだ、折角肥後の熊本から送つて來た荷物があるから、開けて見て何か取合はして何處かの隅で一つ觀せてやらざあなるまい。折角己の處へ持つて來たものをアゝして置くのは氣の毒だ、兎に角開けて見やう、」

そこで假宅の明店へ行つて荷解きをして蓋を取つて見て喫驚した。是は大變、マア大變な物が來たと驚いた始末。その時に向ふから送つて來たのは肥後の熊本清正公様で見世物にしたのをソックリ送つて來たので

す。その時が丁度松本喜三郎先生二十八歳の時であります。矢張り名人は名人、その人形は島人の人形が四組、それから長崎の丸山の藝子といふのが二組、タッタ六組であつた。しかも是が大變配合が宜しい。島人は汚ない、丸山の藝子はクッキリと奇麗なもの、そこで美醜といふ對照を現はして居る。その時分人形師の困難なのは裸體である。人形は多くは手頭を拵へて人形の胴組をして着物を被せる。足に足袋を穿かせるといふことで、餘程逃げが出來る。裸體のものは繼目が無い。全身作らねばならぬ。餘程困難だ。その困難な製作を意地にやつた。即ち皮肉に人のやらぬことをやつた。その島人の人形といふのを私は微かに覺へて居る、誠に夢の如くで、五歳か六歳の時でありました。父に連れられてそれを見ました。それが評判なとは湯屋髪結床のやうな人の集る所で、この人形の噂の無い所はない。「どうだ見たか」といふやうなもので、見て驚いて迚も叶はぬといふのが一般の評でありました。その時の幟が日本生人形元祖松本喜三郎といふので、本人の心から出たのぢや無い。これは見世物師の仕事だけれども、兎に角日本生人形の元祖といふ大きな幟を立つて見せました。それが一つは島の人形で、足長奴が手長奴を負て、その手長奴が手を伸ばして鯛を一尾提げて居る。濱邊で後ろの書割は海でありました。浪打際に岩があつて一面の砂地に立つて居る、丁度大人にしては少し小さい、十七八位の人の脊格好で、それが結構に出來て居ります。江戸の人形師は申すに及ばず、彫刻師でも總て製作家として多少關係のある人が見て皆驚いた。どうして斯んなものが出來るだらうと言つたくらゐ。それから無腹國といふて、腹の無い人が三四人集り、地面に圖を描いて其中へ玉を打込んで遊ぶ所の圖で、能く覺へませぬが、まだ其外に穿胸國と云ふて胸に穴の明いた人。其穴へ棒を通して二人が擔いで居る所で、その次の丸山の藝子と云ふのはこれも肌を觀せて居る。矢張り着物を脫がせて美しい所の肌を見せ、總て浴室の拵へで、雛妓が後から糠袋を持つて附いて來る。大妓が手拭をチョイと股へ當てゝ、こ

れから風呂へ這入らうといふ處であります。これも實に見事なもので、それからモウ一組は湯から上がつて、鏡の前で髪を直して御化粧をして居る所で、實に見惚れるやうな何ともいへない出來で、これはこの内でも非常な評判でした。

さて出來は結構でも數が六組では大小屋の見世物にはなり兼る所から、辰五郎始め見世物に關係せる人々、并に其頃江戸の人形師で名人と云はれる秋山平十郎、或は鼠屋、武田縫之助等の人達が集つて大評定、是はどうしやう、何んぼ結構でも六番では大きな見世物にならぬ。是は何か拵へ足さねばならぬ。第一に招きの大舞臺を拵へて、それから見流しの番數を多くして立派な見世物にしなければならぬ、斯う云ふことにしやう、それで宜しいといふ譯で相談一決した。サアどうも江戸の人形師が肥後の熊本の喜三郎に負けちや業腹だといふ所から、一生懸命になつて三四の名人が腕を揮つて拵へた。それで立派に一つの見世物が出來上つた。その時に武田縫之助といふ人が招きの大舞臺を引受けました。

こゝで一寸この武田縫之助と云ふ人のお話しを少々致します。この人は淺草の門跡樣の西門に居りまして、ナカ／＼達者な人で、八十歳位まで仕事をして居りました。全體ゼンマイ仕掛の名人で、人形も餘程上手であつた。この人が死んで以來、今日機械の世の中で居ながらアレ丈けのとは出來ない。それで武田のする仕事が又一種特別な仕掛で、見世物の切舞臺で唐子が獅子舞をやつて、その唐子が差金で梯子段を登つて、さうして丁度外を通る人に見へる招きの處、二階の欄干の處へつッと出て來て、其處で一條狂獅子を舞つて、それが終ると獅子は後ろへ引繰り返して御辭儀をして、クルリと後ろを向いて元との處へ歸つて來る。それはジヤリ糸の仕掛で、これが今申上げる武田縫之助と云ふ人の仕事。一寸人形が手で弓をひいて的を射中てる位のことは幾らもありましたが、これ程のゼンマイ仕掛はございませぬ。この人が外から見へる正面の招きを拵へまして龍宮を作つた。これが又仕事の大

變早い人で、忽ちの間に龍宮を拵へ、間口十二間奥行十五間位の見世物、丁度招きの間口は少くとも五六間あります。それが舞臺一パイに龍宮城を造つて乙姫樣が行列をする。鯛だの鮪だの河豚だのを頭に乘せた奴が、旗を持つたり、軍扇のかざしを持つたりしてお供をする。水中の龍宮の行列は見物の招きとして實に考案もよし、大層結構に拵へた見世物で、これが非常に當つた。大變な入を取つた。

この入を取りました小屋が今日では殆ど影も形も無い。それは奥山の丁度淡島樣の先き、北の突當りに矢場がズッと列んで居る。その矢場の左手の隅の處にあつた。それが定小屋と云ふて新門辰五郎の持つて居ります小屋でした。元來見世物小屋といふものは大抵取毀しのものでありまして、丸太を繩結にして菰を掛けてあつた。兩國あたりの見世物は皆これで、力持或は輕業といふものでありました。その時分甚しいのは、或は鰐の齒を使つて、さうして蝦蛄の甲羅で背中を拵へて、不思議な名を附けてそれでも見世物になつた。また驢馬一匹あつても唐子の服を着た小供を附けて是が太夫さん。羊とか驢馬とかいふ物があればその時分は一つの太夫さんである。さういふ世の中でありますが、この定小屋だけは年が年中取毀さない爲めに定小屋といふ名が付いて居る。これは切組んだ材木で本建にして屋根を葺いてある。淺草の奥山での此定小屋は見世物の帝國座といふところです。此處は何時來ても大抵ある。この小屋は生人形が專門であるが、小屋が大きいため、これに入れる丈けの見世物がないときには、チャンと〆切て休んで居る立派な見世物小屋であつた。これを喜三郎が知つて辰五郎を手賴つて荷物を送つて來たのも、畢竟其處で觀せて貰ひたかつたからであります。それで喜三郎の製作は非常に結構なものであつたので、江戸の人形師もとう／＼冑を脫いで喜三郎の六番の見世物の御供をしたといふ位の名人でありました。

然しながら、この名人がナカ／＼見世物を拵へない。また出來ない譯だ。毎年菊細工をやるやうには出

來ない。それで喜三郎の仕事は非常な親切なもので大變な手數が掛かる。それで決して職人を餘り使はない。また弟子もない。一人でボツ〳〵拵へて、十年目位でなければ一つの見世物が出來ない。

それから、喜三郎が江戸へ出て來て拵へました見世物が四十八癖、これも定小屋でやつた。人は無くて七癖、有つて四十八癖、妙な所を覘ふ。丁度番數がよい、四十八番。假令小さくても一人舞臺でも四十八舞臺。眼に變化があつて見物が嬉しく見られる。その人形の中には女もあり男もあり、坊さんもありませうし、醫者もあります。總て各種の人物を網羅してそれ〳〵製作が違つて居た。その次は忠臣藏、これも四十七組で結構に出來ました。それで招きが兩國橋の引揚、即ち吉良上野介の首を討つて兩國橋へ引揚げるといふ好い招きです。それから内は四十番程の見流しで、その中には和久半太夫幷に清水一角と云ふ上杉家の附人が、義士を相手に切り結んで居る趣向、これなどにもチヨツと御話がある。或日何處かの藩の劍術師範をする人が來て見て、松本喜三郎と云ふ者は劍道の心得のある者であるか、藝術の上から自然に悟つたものか、或る舞臺の如きは實に一點の隙もない。名人と名人の斬合ひである。泰平の御代に圖らずも眞劍の勝負を見て面白かつた。威服に堪へない。然し惜い哉あの中に一ケ處對手が器物を投げて、義士が刀の鍔元で受けて居る場がある。あれは受留めずに體を交して空を打たせた方が宜いのである。アレを直したら宜からうと注意して行つたといふ位。ナカ〳〵傑作でありました。

それからこの人の製作に就ては段々お話し致しますが、こゝに不思議なことがある。元とからさういふ趣向が無いではなかつたのでございませうが、併し喜三郎が元祖のやうになつて居るのは、改良に改良を加へた結果だらう。それは人形に胡粉を溶いて塗る。所がこれまで塗り揚げた人形はどうも人間の皮膚と思はれない。矢張り人形であつた。然るに喜三郎のはバラで行くのであります。今でいふ霧吹きであります。胡粉を非常に鄭重な拵方をやるので、胡粉を煉るばかりで

も一仕事である。一日や二日で煉れるものでなく、その解いた胡粉を肉色にしてパラを霧のやうに蒔くので、自然と艶なしに人肌のやうに見へます。今日でもその流儀で皆やつて居りますが、一寸見は同じだが、能く眼を着けて見るとパラが粗くて、迚も喜三郎のやうに細かいパラには蒔けないのであります。それから頭の毛の植方は、羽二重の裂へ髪の毛を一本づヽ通して裏で止めて頭の地へしつくり貼り付け、活た人と同じやうに梳櫛を掛けてチヤンと頭髪を結ひ上げる。それで髪も自分で結はなければ氣にいらぬ。それは他人に結はせれば苦心して拵へた顔を汚されるからで、また丸い顔や長い顔もあり、剛い顔、柔和な顔もあるから、それに似合ふやうには是非自分で手掛ねばならぬ。さういふ譯で無暗に髪結さんにやらせるわけにはいかぬ。髪の種類も、御殿女中の片ハヅシ、島田、丸髷、オバコ、立兵庫、是は女の髪、男の髪もナカ〳〵各種ある。それを皆自分で手に掛けてやつた。それから衣裳はどうであるかといふと、人形の衣裳といふ物は仕立屋で拵へて着せるといふ譯にいかぬ。餘程變則なもので、仕立方に大層な工夫が要る。普通の形をして居る物なら左程のことはないが、異樣な形の物は矢張自分で仕立てヽ被せる。それにこの人の性質として、また熱心の餘り、他人の仕た事がどうも氣になる。この點に就ては妻君が餘程手助をしたといふ話しである。實に親切なものであつた。それから人形の胴組の事に就ても、今日でも人形の胴組を拵へる所を見ると、袢纏を被た職人が大勢寄つて竹の割つたのや、針金に藁を巻いたのを曲げて籠のやうに絡げて居る。マアそれは無雜作なものだ。所が喜三郎のはナカ〳〵そんな物でない。人形の年頃と身體の大小强弱によつて、一厘一毛を爭つてスツカリ寸法を合はして骨組をする。この人の胴組は提燈胴といふもので何處へ持つて行くにも縮まるやうに出來てゐる。十五歳位の年號の人なら、その年號丈けに寸法を極めて肋骨などの骨を組合せにし、手や足の骨も伸縮自在であつて、一個の人形は小さい箱へ這入つて仕舞ふやうに工夫したものだ。是は

一時的の見世物といふ考でない證據で、保存のためである。それで一個の人形の振付をするのに、それはナカ／＼一日や半日ぢやない。やつて見ていけなければ幾らでも手間を掛けてやる。後へ退つて眺めては直し、眺めては又直す。中にはスラ／＼と自分の氣に入つた通りに行くもありませうが、サア行かないとなるとそれを手傳する人は泣き出して了ふ程のことになる。「實にあの御手傳は閉口だ。面白くも何とも無い。話もしない、默つて眺めて居る、さうしてそれを直す。只ホンのその時に庖刀を持つて來いとか紐を持つて來いといふ丈けで、附いて居る者は面白くも可笑しくもない。閉口する。」と言つたさうです。何しろ土臺が名人にしても、この親切といふことが最も肝要であります。見世物は誠に一時の物のやうに人は思つて居るが、喜三郎の人形だけは決して一時的のものぢやない。惜しいことに是が美術品と違つて永く保存が出來ない。保存が出來ないことは無いのですが、後を閉ぢて仕まうと散亂する。誠に殘念なことであります。

それから暫らく間を置きまして‥‥その間にチヨイ／＼と唯だ一舞臺二舞臺位づゝ名人の寄合で、合作といふやうな見世物はおり／＼ありましたが‥‥その後私は何年の何月といふことは申上げられないのは殘念でありますが、これも奥山の見世物で、切舞臺といふ一番仕舞の舞臺に喜三郎が一ッ家の婆さんを拵へた。これがどうも實に見事な出來で、結構過ぎて凄いものであつた。これは花屋敷の角の水茶屋に團子を賣つて居たお花さんといふ婆さんを取つたので、若い時には非常に好い女で評判であつた。この人が年を取つて歯が拔けて恐ろしく可恐い顔になつた。喜三郎はこのお婆さんを今日でいふモデル、その時分の型にして作り上げた。それは自分の想像と技倆とを以て作つたが、これも非常な評判であつた。のみならず、その見世物の宿直、宿直といふと直打があるが小屋番です。その番人が毎晩魘される。「モウ私は勤まりませぬ、迚も怖なくて居られませぬ」といふのは神經でございませうが、顫聲でさう言ふから「それは貴様意氣地が無いた

めだ」といふので、また代りを入れる。これも矢張り可恐い。戦慄へながら番をして居た。その時辰五郎の息子に仁右衛門といつたから仁ィさん〱と言つた人があつた。この人は仕事師らしくない、肥満した上品な仁で大變用ゐられた人だが、惜しいことには早死をし、親爺の辰五郎より先に死んだ。この人が「イヤそれぢやア己が行つて晩に寢やう」といふので自身に小屋番をした。所が翌る日に歸つて可恐ないとも何とも言はないで「アレは燒いて了へ」といふ。何ういふ譯か分らぬが、何しろ彼奴は置いては不可い燒いて了へといふので、惜しいことにお婆さんを色々な燒草を積んで火刑にして了つた。そこで一方に一寸不思議なことは、その一つ家の婆さんが出來上ると、モデルにしたお花婆さんが死んだ事で、これが可恐ない原因かも知れませぬ。それでこの人形にはお花婆さんが憑り移つて居るといふやうな話でありましたが、新門の仁ィさんが燒いて了へといつたのを見ると何か事實があつたかとも思はれます。

それから暫く經つて、矢張りこの定小屋で名人鑑といふ見世物が出來ました。それが今戸の戸澤辨司、松本喜三郎、鼠屋、それから伊豆の長八、小松豊次郎など云ふ人達が思ひ〱に作をした。その中報恩寺橋の小松豊次郎といふ人は、當時宮彫の名人で、木彫で軍鶏と矮雞とを拵へたが、大變好く出來ました。また左官の名人と云はれた伊豆の長八は衝立に交肴の圖を漆喰で色を使つて拵へたが、鯛や海老を薄肉に塗り上げ、衝立は唐木で實物の通りに結構に出來ました。何しろ名人揃ひと言ふので、一舞臺々々本當の腕較べであつた。それから喜三郎は江戸の人形師二三の人と一緒になつて、その後の觀音の開帳に生人形を一舞臺合作で拵へた。それは今の駒形堂即ち觀音藜堂の故事を圖題としたもので、濱成友成等三人の漁師が宮戸川から網にかゝつて上つた一寸八分の觀音樣を川岸の草原へ安置したのを、十人の草刈童子が竹や木の切れを持ち寄つて堂の形を造り、藜といふ草の葉々集めて家根を葺き、その内へ觀音樣を勸請する所で、どれもこれも

負けず劣らず、伎倆の點は好く出來た。が、品格の違ひが大變である。成程草刈童子といふ者は誰も同じで、田舎の小供といふを主眼とし、眞黒に日にやけ、さうしてツンツルテンの着物を被て、赤ン坊を負つて青洟を垂らして居るといふやうな、如何にも下品なものが多かつた。所が喜三郎のはポンとそれを拈つて了つて、草刈童子といふ趣意には叶はぬかも知れませんが、二人の兄弟を拵へた。それが美しい稚兒で、先づ田舎でいへば身分のある人か郷士の若樣とでもいふ人物にして、草刈童子といふ事を外づして了つた。それだから喜三郎の人形丈けはスツクリと目立つて居た。兄が屋根へ上つて下から弟が細い丸太を出して居る所で、人形が只二個に過ぎなかつたが、外の者はモウ是れで文句が無くなつて威嚴に壓されて了ふといふ具合。併し草刈童子といふのに餘り懸け離れたものを作るのは宜しからぬかも知れないが、喜三郎の意匠は何を拵へても、斯ういふやうに少しづゝ普通の人のやり方とは違つて居つた。

そこでこの見世物が終つて稍々十年、喜三郎はその間、時々二ツ三ツ宛の見世物は觀せて呉れるが、大きな見世物は一つも見へなかつた。所で明治七八年頃でございましたか、十年にはならぬと思ひますが、こゝにまた觀音の開帳があつた。この時に何時拵へて居つたか、ポツ〳〵拵へて積んで居つたのが西國三十三番の札所、これも好い思付で、觀音樣の開帳に觀音の靈驗、その作は實に結構なものであつた。その次に拵へたのが、本朝孝子傳と云ふので、これがもう最終で、この時のは少し劣つて居ました。それが愈々喜三郎の終りでございました。けれどもその三十三所の靈驗記が喜三郎の終作と言つて宜しい。實に結構な出來で、何とも言へない作でありました。

その時分は博覧會とか展覧會とかいふ調寶なものがございませぬ。古作品などは御寺の虫干にでも見る外なかつた。況して新作品を見ることは皆無であつたので、私はこの喜三郎の三十三番の靈驗記は度々行つて見ました。終には何番目のは何ういふことをして居つ

たといふ位まで見覺へました。私ばかりではない、その時分の製作家は皆御覽になつたらうと思ひます。

この見世物も矢張前申上げた定小屋でございましたが、これは殊に大きい見世物でありましたので、大抵は木戸番は四人ですが、この時は片方に三人、片方に三人、都合六人で間に合はぬ位に札を賣つた。それで客が突掛けて來て這入り切らない。別にまた札を賣る所が出來て其處でも三人位で賣つた。それで漸く間に合つた位でありました。

その時分の見せ物は餘程劍呑なもので、今日では巡査が出張して居て、少しゴテ／＼すると直ぐにコラコラと云ふから大丈夫だが、その時分はさうは行かぬ。ナカ／＼面倒臭い。見世物の眞中にある木戸を鼠木戸と云ふて、漸う／＼身體がすれ／＼に這入る二尺許のもので、その左右に木戸番が居る所を見世物師の方で薪割臺と言つて居りますが、マゴ／＼するとその上で打撲られる、薪割臺に乘つて居るやうなものだ。それで木戸札は鐵砲笊の中へ幅三寸位、長一尺五寸位の板で黒く大入と書いた札が五十枚で一杯であるが、色々見世物の極があつて、誰には一枚やらねばならぬ。誰には二枚やらねばならぬといふやうに特に札を出すので、五十枚を一杯として居つても五十六枚位のこともあつて大概五十枚以上になつて居る。これを一杯と稱へてそれで見物人の數が分かる。それで當時の見世物で百杯這入ると大變なものであります。大抵なものでも五十杯、それ以上に六十杯這入つたとしても三千人であります。それに小屋は一等小屋でも何百坪といふので千坪以上はございませぬ。だから少し這入ると人が溢れる程であります。それで見世物の六かしいのは今申上げた通り鼠木戸といふのがあつて、其處で札を買つて內へ這入ると直ぐ裏木戸で札を受取る人がある。それは所の顏役で能く顏の賣れた人で、これをもぎりと稱へる。その上に又高場と言つて金主の目代が坐つて居る。それは見世物の木戸番が惡い事をするか何うかといふとを見張つて居る。所が折々札を買はずにデン坊の奴が來る。立派に何所の子分と名乘つて來る。

ン坊ならまだよいが、さうでなく醤油で煮〆めたやうな手拭を冠てオンボロを着てブラリとやつて來て、ぬうと默つて這入る。「オイ何處へ行く」といふて木戸番が突くと默つてフイと歸る。歸ると是は喧嘩を持つて來る。此等は或處の顏役の家の飯炊き位の奴で、これが誠に困り物であります。それが親方の家へ歸つて今日は觀音の奥山の何といふ見世物で突かれたといふと、「宜しい」といふので、その親分とか子分とかいふ連中が押掛けて來て唐突喧嘩が始まる。これ等の見分をするのが裏木戸に居る人で、それは突いちや不可いとか、それは默つて通して歸りに御馳走でもしてやらねば不可い、唯だ觀せたばかりでは不可い小遣錢でも少し持たしてやらねばならぬ奴だといふ、その見分けをする人が裏木戸に居る。

それから喜三郎の見世物では、木戸錢はどうするかといふと車に積んで直接に同人の家へ搬んだ。喜三郎と云ふ人は金主を持たない。それが一つの不思議。大抵どんな人形師でも見世物師でも金主の一人か二人附かない者は無い。所が喜三郎にはそんな者はない。ポツリ〳〵拵へて出來上る迄一切自分でやる。人形から衣裳からスッカリ自分でやる、またやらなければ氣に入らぬ。金主などに金を出して貰ふと、磨つた揉んだを言つて儲からない。損が行く上に自分で此所は一つ立派にしやうと思ふてもさう行かぬ。それで自分でそれ丈けのものをズッと拵へるから、喜三郎の見世物は一種別段であります。

なほ喜三郎がその仕事に凝つて居る一例を申しますと、衣裳の如きも頗る立派なもので、間に合はないときは假の衣裳を被せて置いて後で取替へる。現にこの三十三番の觀音の一番打止めの美濃の谷汲寺の觀音の場で、大倉信滿といふ人の衣裳が間に合はないで木綿の着物を被せてありました。が、最早十日か五日でお終ひになるといふ時にそれが立派な衣裳に變つた。本人は何うもさうせねば氣が濟まない。それだから衣裳の良いのも評判の一つになつて居りました。

この見世物の招きは西國三十三番の内の十七番、京

都六波羅密寺の十一面觀音であつた。是は天暦五年に京都の洛中に惡しき病氣が流行りました。(今日で申す虎列拉の類でございませう)それを大僧空也上人が御歎きになつて、何うかしてこの人民を救ひたいといふ所から、自から十一面觀音を作つて、これを車に載せて洛中の志ある善男善女をして、その綱に捉まつて車を牽かしてグル〳〵廻つた。この功徳に依つて、その車の廻はつた處は何處も病氣に罹らず、或は煩つて居る人もそのお蔭で平癒した。丁度村上天皇の御宇であつた。さういふ緣起がある。その十一面觀音を拵へる時に初て私は喜三郎と云ふ人にお逢ひ致しました。それは私しが未だ師匠東雲の家にてポツ〳〵仕事をして居ります時で、師匠の處へ喜三郎さんが來て、「私は三十三番觀音靈驗記を作るに付て六波羅密寺の觀音を作りたいが、何うもアレは人形ぢや不可い。何うしても佛師の製作した觀音でなければまずいが、何か東雲先生參考品は無からうか」といふことでありました。その時に私の師匠が「それは好い參考品があります。併し私の手元にあるのは皆小作で大作の參考にはなり兼ねるが、それには好い趣向があります。本所五ツ目の五百羅漢の螺蠑堂にある百觀音の內に、佛師法橋康慶といふ人の十一面觀音がある。これを參考になさつたら宜からう」と言つた。(何故百觀音の內の康慶の作品を指したかといふと、康慶の弟子が法橋鳳雲で、その弟子が私の師匠の東雲であるといふ緣故からであります)、さうすると「それは何うして借り出せませう?」、斯ういふ至極世事に疎い人であつた。師匠が「それはお寺へ行つて譯を言つて御借りになれば宜い。只貸せと言つては困るだらうから、功徳の爲めに觀音樣の修繕を寄進する事にして借出し、後で修繕料其他を散財すれば宜しからう。」「それは有難うございます。」といふので、康慶の彫つた十一面觀音を借出して、それを參考として拵へた。丁度高さが八尺か九尺ありまして、それを大八車に載せて曳いて居る。實に良く出來ました。それで塗上げで、總金で何うしても寺に飾つてある觀音樣の通りである。そのまた工夫が面白

い。かゝる大作の觀音様は運搬にも保存にも不都合であると云ふ所から細かく毀はれるやうに拵へ、衣紋から衣紋の合せ目で十か十一に分たれ、それを組上げて見ると少しも分らぬ、これは大に參考になるものでした。またさう申すと可笑しいがそれが康慶の十一面觀音よりも餘程良い出來で、佛師の手に成つた、木彫の上を刷毛で塗て金を置いたものと少しも異なる所がなかつたが、實は張子でありました。またこれに附隨して車に取付いて綱を曳ばつて居るお婆さんや、お爺さんや、若い奇麗なのも、それは意匠の有らん限りを盡したもので、その一番先きに鹿角の杖を持つた空也上人が立て居る。その上人の面貌など實に何とも云へぬ出來であつた。その坊さんの側に可愛らしい十二三位の娘、帶を古風な矢の字に結んで盞盆の上にお拈りを載せて出して居る。その對照の宜さ、實に招きとして感服なものでありました。

それから次が十番、是は京都の御室戸の觀音様で、京都の川田村の農婦が蛇に魅込まれた所の圖を作つた。そのいはれは、かの農婦が大層觀音を信心したさうして佛心の深い人で村人が澤蟹を澤山捕へて町へ賣りに行くといふ處へ丁度出會つて、自分が賃仕事をしたり機を織つたりして稼ぎ溜めた小遣錢を出して澤蟹を買取り、これを此澤に放したといふことがあります。それからして、又その阿爺がさういふ娘を持つ人だけ矢張り慈悲心が深い。或時耕作をして居ると蛇が蛙を呑み掛けて居る。これを見た親爺は戯れでありませうが、その蛇に向つて「貴様蛙を呑まないで助けてやれ、その替り己の娘をやる」と言ひました。さうするとその蛇が半分呑み掛けた蛙を吐き出して姿を隱した。が程なくその蛇先生が非常に奇麗な若衆になつてやつて來て、約束だから娘を呉れろといふ。親爺さん途方に暮れ、七日日延を請ふた。一週間經つとまたやつて來て今度は動かない。娘は豫てその事の顚末を親から聞て居りますから、一間へ籠つて日常信仰する觀音の普門品を一心不亂に讀誦して居る所へ、若衆の蛇は部屋の側まで來たけれども、普門品の功力に依つて

近づくことが出來ない。ウロ〳〵して居る所へ、何處からともなく數限りない蟹が出て來て若衆の身體を挾むだので、若衆は忽ち蛇の正體を現はして何處ともなく逃げ去つた。これが蟹滿寺の觀音で、その製作がまた頗る結構なものである。少し愁ひを含むだ奇麗な娘が、机を前にし一心不亂に讀經して居る。その後に容貌は奇麗だけれど、何となく凄い邪氣ある人相の若衆が立つて娘に魅入つて居る所で、鬼氣人を襲ふといふ光景よく現はれ、また若衆の腰から下は袴の裾が段々と蛇の尻尾(しつぽ)になつて大うねりになつて居る具合も、實によく出來て居る。側で見ても離れて見てもノロ〳〵動いて居るやうな氣味の惡い程である。それから蟹も大いのが一尺位、小さいので五寸位、その蟹が餘程の數で、それが蛇體の腰の周圍から尾先までに四五十疋配置よく鋏を上げてはさんで居る所で、それも精巧なものでした。

それから、その次は十五番で、蓮華王院の千手觀音、その觀音の由來は、後白河院様が御腦を惱んで御頭痛がなさるゝといふことで、熊野に參籠して祈願をすると、洛陽の因幡藥師を祈れとあり、それで因幡堂の藥師にも七日御參籠なされた。その時の夢に、後白河院様の御前生は紀州熊野の蓮華坊といふ者にて六十六部の御經を廻國し、これを納めた功徳に依つて皇帝(みかど)と生れた。その前生の髑髏が岩田川の畔の柳の木の根へ挾まり、その柳が生成するに隨つて風の當る度に根が動き、その根の動くにつれて髑髏が動く。その度に頭痛がする。それで柳の木を伐つて取去れば御惱は平愈するといふ藥師の御告があつた。それから段々穿鑿致しますと、成程岩田川の畔に大きな見上げるやうな柳があつた。その根が髑髏を通して水中に下りて居る。その水中の髑髏を取らんとする所を術へたもので、舞臺の趣向は今日の水族館の工夫で、川岸を向ふに見せて舞臺は一面水中の心持とし、前に水色の薄幕を張つて、その中へ水練に達した人が飛び込んで、兩手で鋤を持つて髑髏を見付て今や柳の根を伐らんとする間で、水中で働く人を横面から見へるやうした意匠の非凡な

る、また水色の幕上が向ふの堤と平行して足が二本水上に出で、身體は水中に泳いで居る姿勢等、實に至れり盡せりともいふべき趣向でありました。それからこの柳を伐つて供養のために觀音の尊像を作つて、髑髏をその法髮の中に納めたといふ緣起であります。それでこの蓮華王院の本尊は十一面觀音で、別に頭痛山平愈(俗寺に三十三間堂と稱す)といふ山寺號があります。

それから二十番、山城の善峯寺の觀音、是は開山が源算上人、この人懷胎中母を苦しめたれば不祥の子だといふので、籠に入れ、觀音經を添へて山中に捨てられたが、後年母の追福の爲め剃髮して叡山に上り源算上人となり、承德三年三月年百十七歲にて寂すと傳へられて居る。その緣起に依つて拵へましたので、舞臺一面山中の笹籔で、籔中に誠に奇麗な可愛らしい赤子を籠の中へ入れ觀音經を添へてある。其處へ二疋の狼が現はれて赤子を食はんとするに、觀音經の慈力に打たれ(經文から光明を發する心持ち)狼は身をすくませて居る所を拵へたのです。その意匠が無邪氣なる赤子と兇惡な狼との取合せ面白く、またその狼の毛の植方非常なる出來で、その毛は光澤よくザラ〳〵して居る具合眞に迫り、凄い顏面も今尙目に付いて居ります。

それから今一つは三十二番、近江國觀音寺の緣起で、昔聖德太子が江州石寺村を通行の時、芦原の中から面は人にて身體は魚の形ちのもの現はれ、我は前世に殺生を好みし業に依て人魚となる。願くば太子の功德に依つて前業の消滅を願ふと。太子乃ち觀音の尊像を刻んで與へ給ふ。この緣故で作られた舞臺は古治の芦原の所に丁度六尺位の人魚が現はれてゐる圖で、その人魚はよく市中の藥屋の店前などにある半身人間、半身魚ではなく、惣てが魚であつて、それで何んとなく人間らしい面影があり、今沼からぬる〳〵と上つて、全身の鱗から水が垂れるやうな所など、只だ人魚一疋だが實に見答へのある良い出來でありました。

その次は三十三番の美濃の谷汲觀音、是は最終の切舞臺で一番大きい。背景は遠山で全體田甫道の光景を寫し、こゝに大倉信滿といふ人が驚いて立て居る。そ

の後に厨子があつて、その内から観音が抜出した心持で、此所へ観音がせり出します。この観音が人形の観音でなく、また本尊として禮拜すると云ふ観音でもなく、丁度その間を行つた誠に結構な出來で、頭に塗笠を冠り、右の手に塗杖を持ち、左の手で或方を指して居る圖で、袈裟と衣は紗の如き薄物へ金の模様を施し、天冠を戴き、衣は透き通りて肉體が見へ、實に美事なものでしたが、それは切舞臺の事とて喜三郎も非常に注意して作つたやうに思はれます。この縁起は奥州の金寶大倉信満といふ信者が、長德年中熊野へ參詣して観音の尊像を授かり、これを背負ひて美濃國垂井の庄まで來りしに、観音の尊像俄に重くなりて一歩も動く能はず、依て此處は尊像に有縁の地ならんと國元より金を取り寄せて堂塔を建立せしに、信者次第に増して屈指の靈場となつたといふ次第であります。

　これで先づ製作に關するお話は終りましたが、序に喜三郎その人に就て少々お話して置きたいと思ひます。同人はこれ丈けの作者でありますから、定めし立派な人物で非常な權式を持ち、如何にも先生らしい人であると何人も想像致しませうが、私は面會して實に案外に思ひました。至つて背の低い口數の少い田舍風の老人で、風采の揚らざること夥しい。着物は綿服、羽織は鐵色の極く短いので、千草色の股引を穿たるさ所は、一見田舍から江戸の青物市場へ野菜の仕切を集めに來たやうな風體で御座いました。それでナカ／＼の信心家で、お金が出來ると皆本願寺へ納めたさうです。住居は淺草寺々中の寢釋迦堂の裏で、家内は妻君の外に手代が一人位で、殘念な事には子供と弟子が無い。製作の手傳は妻君が專ら助けて居ました。それで弟子や職人を置きません理由は、前申上げた通り、製作に熱心の餘り何も彼も皆自分で仕なければ氣に入りませぬし、また弟子を置いて敎へてもナカ／＼出來得るものでないと思つて居たらしい。然し晩年になつて據ろなく一人弟子を置きました。これは淺草山之宿の質商の主人で日本畫を善く描き、その名を隣春と云つて、故人の市川團十郎や尾上菊五郎の畫の師匠であつ

た。その隣春の伜親之といふ人でございます。この人を各方面から頼まれて二三年の間弟子として世話を致しました。親之はその後淺草寺の境内で淺草人形と云ふ物を拵へて居りました。是は一刀彫に色彩を施した一寸風雅な物でありました。右の次第で喜三郎の跡を繼ぐ者の無いのは實に殘念でありますが、これが名人二代無しの諺の通りでございます。

今の帝國大學がまだ東校といつた時代だと思ひます。人體解剖の人形を造るために故松本順先生に目出されて、同校の製作を餘程暫くやつて居りましたから、今の大學にはその製作が多分殘つて居ることゝ思ひます。當時の製作中で可なり大きな耳の全部と、[illegible]の解剖とを覺へて居りますが、實に異物を大きくして見る通りで、その手際には驚くの外ありません。それから明治十年の第一回内國勸業博覽會の出品中に、何んでも生糸に關係ある商人の出品で、大瀧の飾り物を拵へました。これは生絲で瀧を造り、繭で瀧壺から水の飛散する所を拵へ、岩は惣て蛹(さなぎ)を用ゐて見事に出來て居りました。生絲の瀧は月並のやうですが、その意匠や糸の用ひ方等は到底他の工人の及ぶ所ではなく、當時の出品中で一際(ひときは)目立つて居りました。

新畫是非

臨風生

「書畫器物も傳來あらば、重寶たるべし、千兩の價也とも、辻立の中にてもとめし古器に同じ、松屋源之丞が慈照院殿より賜はりし肩つき茶盃、又徐熙の鷺の畫と云ふ、肩つきの器は誠に古物也、鷺の繪は名も印

もなし、しかも大なる物を後に切たるものぞと、若し市に鬻がば、此ていの物は一夕になりかねると、世庸が云ひしなり、されど傳來たりし、かも公の御羽織を戴きて、表装したれば、いつまでも千兩々々」(膽大小心錄)とあるが如く、書畫骨董は傳來があつて、光輝も加はり、從つて飛んでもない價格を生ずるので、之は今も古も異らぬ。藝術品として、それ自身の價よりか、傳來と云ふ箔に依つて、實際の價格以上に價づけられるのである。一つは、傳來に依つて其品の正確なるを證明するからであらう。しかし實際に於てはいかさまものであつたにしたところが、傳來が鉛を化して金とする場合も少くない。して見ると、品の正不正は傳來だけで證明するわけにゆかぬ。けれども、鑑定と云ふことが難事である以上は、傳來と云ふ力も大したものと云はねばならぬ。或は鑑定以上の勢力を持つてゐる。

近頃見せに來る光琳の畫幅中十に八九は贋物であると抱一は云つてゐるが、其抱一を評して、立原杏所は、抱一が專門とする光琳宗達の僞物を眞跡とする所を見ても、其他の鑑定は無論不鑑であると、冷笑してゐる。古畫備考に、光琳畫僞造者として、松田ユウアン、依田如水、下河邊玉水、大倉是水の名を擧げてゐる。此等は著名の光琳贋物屋であるが、其他のものになると、恐くは數へ切れぬほどあつたであらう。其贋物がうよ〱と昔からしてあるのだからたまらない。中には丁度善く時代のついたものもある、又擬ひで殆ど眞に迫るのもあるだらう。鑑定家先生が頭をひねるのも尤も至極である。

抱一の如き光琳專門家でも、杏所には彼是れ云はれてゐるのであるから、鑑定の難事たるは云ふばかりもない。畫家自らでさへ、自家の舊作に逢ふと、往々に戸惑ひすることがある。眞物を僞物と斷定して揚足を取られたり、僞物に時々箱書させられたりなどすることもあるさうな。現に僞物專門屋が時々試驗をして見ると云つて僞物をこしらへて、正眞の先生の所へ持ち込むと、案外にすら〱通ることがあるので、どうだ

ゑらいもんだらうと放言してゐると云ふ話を聞いたこともある。尤も此場合には、其作家の畫いたものを其通に寫して、こしらへるのである。畫家も此畫ならば此間書いたと知つてゐるから、信じて疑はないのである。又此僞物と云ふものは、多く絹本にあつて、紙本には割合に少いやうである。紙本の畫を絹本に寫したりなどして、盛に人をくらませてゐる。殊に地方から持ち込む書畫になると、古畫は無論だが新畫にも贋物が七八割はあると云つてよろしい。

博物館でいつやらやつた南畫の展覽會を見たものは、博物館の鑑定眼を疑はざるを得ない。此間の美術協會の催しであつた雪舟畫の展覽を見ると、其玉石混淆に一驚する。あすこいらの連中は鑑定に一隻眼を有してゐる筈であるが、實地に就いて見ると、甚だ心細い感を起す。要するに鑑定は難事であると云ふのが適評である。現に堂々たる美術雜誌の挿畫中にも往々異論を挾む餘地のあるものがある。つまり鑑定は其作家の作品を餘計見た人が比較的確かだと云ふだけで、誰のでも彼のでも鑑定が出來ると思ふのは大の素人考で、間違ひである。又畫家は案外に鑑家力が鈍い。局部に囚はれて、全體に通じないなどと云ふ缺點があるからでもあらう。殊に畫家になると、自家の屬する流派以外のことは殆ど瞽者である。文展の審査員を作家ばかりに求めると云ふことは、此點から見ても考へ物である。畫家の鑑定書を見ると、間々此感を深うする。

鑑定なるものが難事で、當にならぬとなると、古畫を購ふことは容易でない。古畫には古筆家の折紙がついてゐるものも少からずあるが、此折紙の不信用さは言語道斷である。元來御禮問題で、どうとも折紙をつけるのであるさうなが、恐くは、古筆家なるものゝ鑑定の明は極めて乏しかつたであらう。よし鑑定の明があつたにしろ、是を是とし、非を非とする正しい批判家ではなかつた。現に道具屋仲間でも黒人と許し、自身も鑑定の明を以て誇つてゐた先生が、嘗て大買立をして、非常に賣上高を擧げたことがあつた。しかし

其賣立品中にもいかさまが少からずあつたやうである。けれど持主が持主だけに、其いかさまものも、本物で通つたものと見える。之を眞なりと信じてゐたとすれば、其人の鑑定眼も大したものでなく、之を贋なりと知つてゐたとすれば、甚しい沒道義と云はねばならぬ。古筆家なるものもまあこんな所であつたらうと思はれる。

此う云ふやうに鑑定書も當にならず、今の鑑定家の批判も頼むに足らずとすると、古書畫骨董はどうしても傳來に依るより外はない。傳來それ自らが尊い上に、保證をしてくれるのであるから、傳來が珍重されるのも決して無理ではない。傳來品必ずしも金玉ばかりではないが、既に箔がついてゐる以上は、さう容易に光輝を失ふものでない。故に我々の家に在つては僅々數金のものでも某貴族の家に藏せられて、傳來が正しいとならば、數千金にも數萬金にもなる。茶器の如きは別して傳來が肝要である。

然るに此傳來の正しい書畫骨董はさう澤山轉がつてゐるものではない。尤も伊達家の賣立以來華族連中も急に金が戀しくなつたと見えて、到る處に舊家の賣立が流行する。家重代の寶を惜氣もなく糶にかける。中には位負けのしてゐるものもないではない、怪しいものも混じてゐないではない。けれども傳來の正しい由緒のやかましいものになると、隨分思ひ切つた値段で飛んで行く。一寸した成金では手が出せず、又出したところが成上り者の家庭の周圍のものとは釣合が取れぬ。

斯う云ふ様に見て行くと、古書畫類は面倒くさいから、そこで、鑑定も容易で、筋の分かつた新畫に向つて來るは、自然の傾向であらう。一方では文展設置以來藝術熱が昂まつて來てゐる。雅邦や芳崖やが困苦したことなどは、昔の話で、そんな時代があつたか知らんと云ふほどの美術全盛期である。書畫屋は盛んに書畫熱を煽り立てる。新畫の價は一瀉千里の勢で暴騰する。曾ては見向きもされなかつた美術院派の如きも、新しいと云ふところで、盛んに歡迎される。殆ど隔世

の感がある。

故菱田春草の畫會は一口二十五圓であつたが、なか〳〵入會してくれる人がない。どうか入つてくれと云ふと、まさか春草でもあるまいと、鼻も引つかけぬ。然るに數年後の今日は、どうであらう。其時の二十五圓の畫が千五百圓から二千圓になつたと云ふのであるから、變れば變る世の中である。畫會の會費三十圓の畫が、今日では二千圓三千圓で賣買される。獨り故人の畫ばかりではない、現在の畫家で古大家を凌ぐ市價のあるものは少からぬ。洵に新畫全盛の世と謂ふべきである。

藝術品には殆ど定價がないと云つて可なりで、價の高くなるのは當然と思ふ。之を西洋の名畫に比すると、猶廉價である。立派な名品なれば、どし〳〵上るべきもので、美術の鑑賞が盛になるにつれ、世間の景氣の善くなるにつれて、騰貴すべきは必然である。殊に新畫の流行は、藝術の進歩から云つても結構なことであるから、新畫の高くなるのは、決して惡い現象でも風潮でもない。

藝術品でも市中へ賣買されれば、云ふまでもなく商品である。藝術家が展觀の際に賣價を附せらるゝを忌ひ、己れの作品は藝術品であつて商品でないと威張るは、頗る自家撞着したことで、甚だ以て可笑しい。現に文展だの、院展だのにも、麗々しく目錄に賣價を附けてゐるではないか。それを展觀の際に忌だと云ふのは、畢竟作家に依りて價の高下あるを嫌つての致す所で、藝術品であつて商品でないなどと云ふ議論は成り立たぬ筈である。しかし此神聖なるべき藝術品も商品どころか、書畫屋に取扱はれると、株と同樣である。一つ誰を煽がうぜと計畫すると、無暗に高價を吹聽したり、作品を買占めたり、思ひ切つた高價をつけて、僞電報で買ふやうな氣配を示したりする。此次は誰にしやうなどと物色されるのであるから、新進作家たるものは大に警戒を要する。それで上つた切りになれば善いが、そこは株と同樣であるから、亂高下をする。此う云ふ作家の作品は危險性を帶びてゐると云つて、

書畫屋の方でも決して所藏してゐない。ずん〳〵右から左へ飛ばして、寸時の停滯をさせぬのである。けれど作家の方も中々心得てゐるから、成るべく作品を出さぬやうにしてゐる。作品の少いのは、價格を高める所以で、經濟上の原則から云つても無論然るべきである。

一體に成金が多くなり、大きな住宅が建築され、二間床などが出來るから、二尺五寸だの三尺だのと云ふ大きなものが製作される。必ずしも斯る大作は多くの需要があると云ふわけでないが、どこの展覽にも此種のものを加へてゐる。書畫屋と云ふものは、もと藝術の鑑賞などと云ふ頭はてんでないのであるから、紙本よりは絹本を尙び、水墨減筆よりは、極密を喜び、此種のものに思ひ切つた高價をつける。買ひ入れる方でも何も藝術を淸鑑しやうと云ふわけではない。現代大家が力作した大きな畫幅でもないと、幅が利かぬやうに思つて、大金を擲つのもあるし、商賣半分に、値が上るだらうと見越をつけて買ふのもあるし、賣る積でなくても、價の上るのを嬉しがつて買ふのもある。既に斯う云ふ風であるから、紙本よりは絹本に、疎畫よりは密畫に向ふのは、又自然免れざることである。しかし藝術から云ふと、もと〳〵さうではない。こんな考へならば刺繡を買つた方が善いかも知れぬ。

今の所で見ると、新畫の價格は、寧ろ書畫屋に依つて左右せらるゝのである。しかし書畫屋は又文展や院展やの成績に見て、見込みをつけるのである。けれども書畫屋も又一種の必要なる機關に相違ない。素人から作家に依賴したところが急に作品が出來るわけではなし、又出來たところが果して氣に入るかどうかは分らぬ。それよりか出來たものに就いて、高くても買つた方が嗜好慾を滿足させる。

新畫はいつまでも高いか、もう下りさうなものだと思ふがどうか、などと云ふ質問を折々受ける。けれども高くなるのは當然である。唯世間の景氣に伴ふことは無論であるから、景氣が惡くなれば、自ら低落は免れないが、好いものはもと〳〵下るものではない。

普通の品は低落しても名品は愈々高くなるばかりであると思ふ。逸品になれば、今日其高價に驚くとも、異日必ず今日の價格の低廉なるに又一驚する時代もあらう。たゞ書畫屋に依りて株同様に煽がれるものは、其運命の危険を免れぬ。又或作家の作品が痛く低落して、或作家ののが非常にもてはやさることは之亦當然あるべき現象で、更に怪むに足らぬ。其他に於ては何か大なる變動のない限りは、新畫全盛期はつゞくに違ひない。但し新しいものが一般にもてはやされる傾向のあるのは、喜ぶべきことであるが、それだけ、早く飽かれるべき性質も帶びてゐる。しかし作家は市價や書畫屋などのことを眼中に置かずに、不斷の精力を以て、自家の藝術に忠實ならんことをつとめねばならぬ。

或人云ふ、此う新畫の展觀が多くあつては、買ふ方で食傷して、今に賣れなくなるであらうと、けれども之は杞人の憂で、新畫熱は次第に估客を殖やしもするし、估客の方でも次第に眼が高くなつて向上するから、一時食傷の現象があつても、又旨く捌けて行くに相違ない。くれ／＼も作家に戒むべきは濫作である。濫作家の末路は到る處に悲慘な殘骸をとゞめてゐる。又作家たるものは清廉にして淡泊であると云ふことは、其作品に奥床しい所が見えるものである。梅逸一流は甚だ取らぬ。

新畫全盛の餘波として、若い作家が何等の苦い經驗をも嘗めずに、一躍して賣れつ子となり、ちやほやされる。此等は、藝術界から云つても、其作家自身から云つても、頗る面白からぬ現象である。少年高科に上る、一の不幸なり、との金言は、今も昔も少からず適中する。

現代戀聟戀嫁の解剖

鐵拳禪

一

なべて薬罐頭の親爺は、ともすれば湯氣を立てて、『今の若い者は、戀だの、ランプだのと騷いで不可ん。ランプが何だ、最う電氣の世界になると云ふぢや無いかつて云ふと、いえ、ランプぢや無い、ラブだと云ひ拔ける。然うラブもアブも一緒にして、五月蠅がられちや溜つたものぢや無い。斯うたしなめると、古い人達は花を引くが、トランプを厭がるやうに、新しい私共の情感を理解し得ないんですとさ。その言草が小面憎いぢや無いか。佐田白茅であつたか、ランプ亡國論を唱へた事があつたが、若い者が大切な生命の油を搾つて、新しい戀の火を點すなんかん云つて、花南瓜に頭を突ッ込む虻のやうに、尻を出してラブだ何だと唸る今日は、義理にもラブ亡國論でも擔ぎ出さざなるまい。』と人も無げなる、逆上せやうをする。處が、その親爺が、伜や娘の見ない蔭で、晩酌の二合の酒を傾けやうものなら、微酔の上機嫌になつて、頭の汗を撫で廻し乍ら、『お前も、あの時は若かつたな』と、『あの時』に力を入れて相好を崩す。それでラブ亡國論は消滅したのかと思ふと大間違ひで、若い者を見ると、又むづかしい顔になるのである。

『今の若い者は、それだから不可ん。學問の片手間に、猫の啼聲などを眞似て、僕の戀を愛する眞情を掬んで下さいと、目を細くする。私のあなたを愛する切ない胸の中を割つて見せる事が出來ますなら、割つて見せたいと思ひますわと、俯向いて長い睫を動かす。愛すと氷をごつちやにして、割つて見せるの、掬んで呉れのと、ほざいて居る。それだから温氣と氷と觸れ合つた時だけは、曖昧のありさうに湯氣を立てるが、融けて了ふと冷たくなるんだ。氷の胸を割つたが最期、掬んで下さる時までには、疾うに水になつてるぢや無いか。若い同士の愛するのは、お互に高利貸をしたり、高利借をしたりするやうなものだ。あれ程高い犠牲を拂つて愛したのですけれども、金魚のやうに鈍い泳ぎ方をする樣になると、最う顧みて下さらなかつたのですと、大抵歸着點は極まつてゐる。貸金が取れないと云つて催促し、果は差押まで遣つた所で、元金は返つて來まい。それが即ち失戀と云ふ奴さ。アイスるなんて云ふから延喜が惡いのだ。其處は、昔のやうに父母の定めたもので、滿足するに限る。全くアイスると云ふ聲を聽くと、冷々するよ。』と、脂の詰まつた煙管の雁首で唐金の火鉢を叩き付ける。何の事は無い、三浦梧樓が時局を慨慨

して、『今の青二才には政治ば分らぬ、國家の前途を何うする積りかッ。』と吹鳴りながら、朱羅宇の長煙管で火鉢の縁を叩き付け、何本も煙管を叩き折つて了ふのと同格である。

『戀も愛も、畢竟(つまり)は惚れることです。』と若い者が辯解すると、『然うか、惚れることか、其の事なら俺も多少經驗があるよ。』と目尻の劍がとれたが、煙草を一吹吸ふと、又調子を張り上げて、『今の若い者は、何でも分り易いことを難かしく云ふ癖があつて不可ん。難かしく云ふから、古い者にも分ることが、分らなくなるんだ。ラブなどと云つて、アブとランプの戸惑ひさせるよりも、惚れると輕く柔かに、ふうわりとした感じを出すと、蒸し立ての、ほや〳〵した、ふつくらした饅頭のやうに、さも旨さうに見えるものだ。其の快い感じで以て、頑固な親爺の感情を融和せにや不可ん。さうすれば、如何に固い藥罐頭でも、若い時の温味を思ひ出して、强情ばかり張つて居れなくなるぢやらう。』と云ひ終つて、醉醒の欠伸を一つしたが、其の時一粒の涙を紛失した。それを膝の上に求めて、指頭で押潰した。春宵一刻値千金などと微吟して、長火鉢の前に脂下(やにさが)つたことでも思ひ出したのか、心地よげに煙草を吹かしてゐる。最う火消壺を用意して、ラパアの話をする要も無い程に、感情が柔いで來たやうだ。又ラパアと云へば、屹度ラッパと混線する恐れがあるから、『私、あの、惚れた人』つて調子で口を切れば、『云、然うか。』と耳を傾けるに相違ないと、親爺を說きつける手段を考へるやうになる。

戀愛を汽車同樣に取扱つて、舶來のラブを一等、戀を二等、惚れるを三等にしてるが、和製の方が何うも感じが好い。三浦同格爺の氣焔で無いが、惚れるの方が庶民的で、そして情味がある。天明の蕪村は、『酒を醸(か)む家の女房ちよと惚れた』とやつたが、『惚れた』の三字が、全幅を躍動させてゐる。惚れると云ふ言葉其物を俗惡なやうに思つてる者は、眞に惚れた情味を解しない者である。明治の世が大正に變つても、矢張惚れた、惚れたが普通に通用する。『今の若い者は』と口癖のやうに云ひ、四角四面に威張つて居る人でも、昔を洗つて見れば、戀もあれば絲瓜もある。味噌と戀は、古くなれば黴が生へると云ふが、鹽加減の好い味噌なら何時までも保つてゐる。表面に黴が生へても、内味は確かりしてゐるのみならず、古ければ古いほど味ひが好いのである。戀仲の長く變らないで、圓滿に納まつてるのも、矢張惚れ加減の好いのであらう。

二

戀のナポレオンは單行本に、鐵血のビスマークは廣告看板に出て居るが、戀の山縣公を書いた單行本はまだ無いやうである。東郷大將でさへ、平氣で東郷鋼の廣告看板に顏を貸してるのだから、謹嚴な山縣公も戀愛本の表紙繪に顏を出しても可い筈である。明治維新の元勳も十指に數へきれぬ程であり、内閣大臣も最う百人以上に達したが、其の中で戀の何とか書かれる人は、然う澤山は無い。戀の伊藤公、戀の桂公、戀の井上侯などは免れない處だが、既に世を逝つて了つた。現存の元勳で、其の選に入るのは、山縣有明の外に無い。公は隨分筆豆な人であつて、井上

などよりも然うした材料に富んで居るかも知れぬ。併し性格だけに、其の打込み方も眞劍で、眞面目で、そして可なりに根强い執着力を持つてゐる。戀は思案の外とは、隨分古い言草であるが、それが嚴肅な山縣の上にも新しく繰返された。繰返されたからとて、別に珍しいと云ふのでは無い。英雄色を好むのは、古今東西の通り相場で、ちやんと歷史の格付に上つてゐる。色好みの大臣(おとど)などは、王朝以來ざらにある。別に維新の新記錄でも無く、山縣の建てた新相場でも無いが、今日の山縣を昔の顏にして見る所に面白味がある。維新の英雄とは、他人は勿論自分自身も許して居ないやうであつたが、戀の狂介、盛んに花より花を慕ふ蝶のやうに狂ひ廻つたものである。

和久屋の小高、宮屋の津山太夫を手活の花とする事の出來なかつた狂介は、最う馬關の花に興味の大半を失つた。しみじみ素人の娘が戀しくなつた矢先、料理店松久の娘に、お鶴と云ふ評判の美人があつたが、それを見染めて、足繁く通ふやうになつた。お鶴はまだ十七の少女で、何を云ふのも奇兵隊の猛者の心の謎が解けず、唯能く來る親切な客としての親しみを持つに過ぎなかつた。冗談の一つも云ふと、直ぐ母親に云ひつけると脅すのであつた。已むなく奇計を用ゐて、閨房まで引き寄せたが、その純潔な心を何うする事も出來なかつた。彼れは少女の心一つすら占領する事の出來ない苦しみに、日夜悶えて居る間に、時勢は變轉して、幕軍と火蓋を切るやうな始末となつた。彼れは出陣の裝ひを整へ、一目會つて別離の情を敍べたいものと、お鶴の家を訪ふと、最う馬關から餘程離れた村落の親戚の許に避難した後であつた。翌夜彼れは村の庄屋を訪れ、お鶴を召連れて來て貰ひ、漸く會ふには會つたが、衷中を打明ける段取まで進まないうちに、親の迎へに驚かされ、『達者で暮して居れ』と云つたきりで別れて了つた。其後彼女は對帆樓の若主人に嫁し、子まで擧げたと聞いて、新政府の功臣、明いた口が塞らなかつたさうである。

失戀の狂介は、石川良平の娘を得て、其の淋しい心の中に、樂しい春を喚び回した。友子夫人は嚴格な武士の家庭に育つて、父に云はるゝ儘に山縣に嫁いだのであつたが、山縣から見れば、天にも地にも代へ難い戀女房であつた。彼女は古い『女大學』の思想を吹き込まれた、所謂良妻の典型的婦人であつて、能く家政を整へて、聊かも嫉妬がましい素振を見せなかつた。それ程愼ましい、貞順な女性であつたが、公も惚れた慾目ばかりでなしに、美い女だと思つて、心から敬愛もし、信頼もして居たやうであつた。が、桃を見れば桃、躑躅を見れば躑躅に目移りのする公は、家の花のみに心を留むることが出來なかつた。あれが欲しいと思ふと、如何に手間暇が掛つても、それを手折らずに措かないと云ふのが、公の强い執着心であつた。その執着心は、新橋春本のお松と、萬龍を伴にした。そして、お松を手活の花として居たのであつたが、夫人はそれを知つて居ても、別に厭な顏もせず、春本の女將にも邸內の出入を許して居た。お松には盆暮に反物などを與へて、優しい言葉を掛けてやるのであつた。夫人の粹な遣り口に、公は密かに赤面して、お松に手切

金を與へて、綺麗に別れて了つた。

今の貞子夫人は、新橋吉田屋の大和の後身である。大和の母は待合寒菊の女將で、父は日本橋藝妓小歌と心中した男であつた。明治二十四年頃、公に落籍(ひか)されて、玻盧に圍はれて居つたが、友子夫人の逝去後、本邸に乘込んだのであつた。彼女は浮いた父母の血を享け、浮いた稼業に身を持ち崩したので、迚も貴族の家庭に永續きする筈は無からうと、朋輩同士の噂の種となつて居たが、其の氣象を知る者は『あの人は一風變つた人ですもの、屹度辛抱してよ。』と頼まれもせぬ辯護の勞を取つて居た。その辯護通りに辛抱して、老後の樂しい日を京都の無隣庵に送つてゐる。つい此程も、公の拌杖(ステツキ)と彼女の洋傘(パラソル)が打揃うて散歩してる嬌態が某新聞の五面を賑はして居た。政界の耳目が、容易に公の身邊を離れぬ筈である。

三

最う廢つたが、先年憲政の神様に祭り上げられた犬養毅は、口は惡いが、小柄なせゐか女には持てる。秋田の新聞記者をして居た青年の頃は非常に其筋からちやほやされたものだ相である。戀女房の千代子の外に愛妾もあつて、妾腹の子女が三四人ある。岳父の威光で外務省政務局長に座る手順になつて居るとか、居ないとか噂された芳澤謙吉の細君だけは、千代子夫人の本腹に出來た愛娘(まなむすめ)である。

犬養は假令三日でも文部大臣になつた。文部大臣にした爲に、隈板內閣が内から崩れて了つた。その内閣の瓦解も厭はぬ程に、侯大隈は彼れを愛し、彼れを信じて居た。何時であつたか、政黨の領袖株數人が隈邸に會合して、深更まで凝議した揚句、餘り遅いからと云ふので、一同泊り込む事になつた。大隈母と枕を並べて、床に就いた迄は立派な犬養であつたが、暫くすると大聲あげて『お千代や、お千代や』と呼んだ。あとは無若夢若と寂入つた了つたので、寢言と分つたが、それを聴いた早耳の侯は、『彼奴、餘ッ程御座つてるな。』と口の中で云つて、早速一狂言を腹案しつゝ眠に落ちた。翌朝犬養を始め威儀を正して火鉢を圍み、時事を痛論して居ると、軈て銘々の食膳が供へられた。侯は別室に待たせて置いた千代子夫人を一同に紹介し、『今朝の饗應は吾輩のするのでない。實は昨夜犬養君の寢言に、細君のおのろけを聴かされて、うんざりした。そこで、早朝この趣を御夫人に申上げると、それは何とも御氣の毒な次第だから、犬養に代つて皆様にお詫をすると云つて、お見えになつたのである。所謂のろけ賃の代償、諸君その積りで、緩くり飲んで呉れ給へ。』とやつたので、犬養は頭を掻く、夫人は顔を火のやうにして逃げ出すと云ふ喜劇を演じ、滿座哄笑、暫くも鳴りやまなかつた。それ以來犬養の惚氣と云へば、又戀女房の事かと云ふ風になつた。

當年の無冠の宰相朝比奈知泉も老衰と病氣には勝てず、涎を手の甲で拭くやうになつた。それでも官僚の蔓は絶たれずに居ると見えて、官僚の捨扶持を貰つて、參謀本部に勤めてゐる。一時は飛ぶ鳥を落すやうな勢で、大臣や次官なども、彼れの鼻息を窺つて居たものだが、彼れの影

が薄くなるに連れて、其人以外には誰も顧みないやうになつた。彼れも今昔の感に堪へぬ事と思ふが、花の曲輪に殘る情話だけは、長くへに彼れを若やかに見せる。

おろく夫人がまだ二十二三の頃、新吉原の角海老に住み込んで、お職を張つて居た。一夜の逢瀨が緣となつて、二人の仲は遂に離れ難いものとなつて了つた。『あなたに別れて、私は生きて居られない。』彼女は然うも云つた。それが世の浮かれ女の戯れ言では無いやうに彼れの胸に懲いた。早く落籍さうと思ふのであつたが、思ふに任せぬものは金力であつた。彼れの戀敵の中には、松方幸次郎の名もあつた。何うしたものかと思案して居る際に、末松謙澄が東京新報を創刊するから、其の編輯をやつて呉れぬかと云ふ相談を持つて來た。彼れは渡りに舟と快諾して、手附金六百圓を受取つた。それを懐にするや否や角海老に驅け付け、早速身受の話を極めて、勝氣に一騷ぎ騷いだ。こんな事のあらうとは知らぬ末松が、朝比奈を顧めば最う占めたものだと安心してゐると、一兩日何處に雲隱したものか遣つて來ない。さあ大變だと、手分をして搜索して見ると、此の始末であつた。彼れが碌堂の雅號も、彼女の名から出たので、畢竟おのろけの記念と見ることが出來る。

四

或日の或新聞に、二組の結婚が傳へられた。一つは六號活字で小さく、一つは一號標題で大きく、而も寫眞まで挿入されてあつた。實業家大田黒重五郎の伜の元雄が、醫學家の廣田千鶴江と結婚し、日比谷大神宮で其の式が濟んだと云ふのが小さい方。夏目漱石の忘れ形身の筆子が、文學士の松岡讓と婚約が整つて、近く結婚式を擧げると云ふのが、大きい、寫眞入の方。筆子二十、讓二十八と云ふ年格好も恰度よく、それに漱石の娘で、戀人のロマンスまでが織込まれてゐると云ふので、若い人々の血を湧かせ、世の好奇心を唆るに充分であつた。

昨年の花咲く頃、松岡の親友で、同じ門下生で、新進作家の久米正雄が鏡子未亡人に、令孃を私の妻に貰ひ受けたいと云ふ、切なる意中を打明けた。未亡人は、それには諾否の明答を與へなかつたが、或點までは同情して居た。然るに、久米は其後未亡人の期待を裏切るやうな事もあり、又先輩の嫉妬反對等もあり、筆子の熱愛も亦彼れの上に無かつた事が愈よ明瞭するに至つて、昨年十二月故人の一週忌前に立消になつた。久米は同家に出入するうちに筆子を知り、其の優しい言葉の一つも聽くのが樂しみであつたが、それが戀に變りつゝあつた。我と我が心を抑へ兼ねて、結婚を申込んだ時は、既に筆子の胸には人知れず松岡が宿つて居た。松岡は昨年の夏頃から同家に寄寓して、色んな世話をして居たのであつたが、不圖したことから久米と絶交せねばならぬ破目に陷つた。その事情を未亡人と娘の前に告白すると、『あなたがあるから、久米さんとも交際して居たのです。』と云ふやうな事が、始めて判然したのであつた。筆子の愛情が、日一日と松岡の上に加はつて行くのが目に見えて來た。けれども、松岡は、友人の戀人を奪ることと、夏目家

の女弟として最上の者でないこと、其他二三の事由を開陳して、一應は斷つたのであつたが、雛子の戀は愈々燃のるみであつた。更に病氣にさへなつた。それを見ては、松岡の心も動かざるを得なかつた。然うした經路を辿つて、此の結婚は成立したのであるから、松岡は雛子の爲めには、天下晴れての戀聟であつた。併し松岡に少しの愛情もなく、「病氣になつて可哀いさうだから娶つて遣れ」と云ふやうな、義理一片の安價なものでは無いと見るべき理由がある。

元雄は聞く所に據ると、若い批評家で、ピアノに堪能だと云ふ。昨秋音樂學校で催した音樂會で、千鶴江の摩律に合せて、ピアノを彈奏した事もあるさうだ。兩人の戀は、その間に成立つたものと見える。斯うなると、何れが戀聟で、何れが戀女房か一寸見當が付かぬが、相應の理解の下に出來合つたので、戀の夫婦と稱するのが、偏頗の無い所であらうか。

斯う云ふ戀の夫婦は、音樂學校からは幾組も產出し、若くは產出した例がある。土井晩翠の夫人八枝子は、音樂學校の出身で、彼れが詩賦にも上る程の戀仲であつた。安藤勝一郎の夫人幸子は、幸田延子の姉で、矢張同校の出身で、そして教授である。帝大の英文科を卒業して、同校の教授になつた勝一郎と相知り、軈て結婚にまで進んだのであつた。聲樂家の柳兼子は、文學士柳宗悅の戀女房で、舊姓を中島と云ひ、矢張同校の出身である。音樂を解しない者が、下手に音樂家を背負ひ込むと、藤井善一と環のやうな悲劇に終る。一生不快な目色をして、雌蝶雄蝶の戯るゝ様を、指を咥へて見て居なければならぬことになる。文學者と音樂家が共鳴して、緣の絲を結ぶのは、手輕で、そして最も都合が好いやうである。閨秀作家ならば、洋畫家と一緒になるやうに――

岡田三郎助の小山內八千代と結婚したのは、戀仲であつたか何うかは疑問であるが、新聞では能く奥様天下の中に數へてゐる。尾島菊子の小寺健吉に於ける、平塚明子の奥村博史に於ける關係は、先づ戀聟の方だらうかと察する。奥村を世間では若い燕と云ふから、繪草紙にでも在るやうな業平式の優男だらうと思つて居るが、實は背の高い頑疊な體格の男である。明子よりも、一寸見はふけて見える。明子の眼は、雛子など とは尠からず聟の選び方を異にしてゐる。田村俊子夫婦は同門下の戀仲であつたが、何うも旨く行かないやうである。松魚は骨董屋を營み、俊子は千代紙の雛人形を製造販賣し、別れ別れに生活して居る。松魚が無理解なのか、俊子が放縱なのか。一時俊子が小說界の人氣者となつた頃、夫が妻に唱和するやうにも見えたのであつた。俊子の作は深い思想の產物では無く、熱からの噴出物である。蒸氣釜を冷さぬように、絕えず燃料を供給するの必要があつた。松魚の燃え盡した石炭滓は、新しい火力を起すに充分で無かつたのでは無からうか。戀仲の一緒になることは、最う當世の難問題では無いが、さて巢籠りしてからが難かしいのである。家庭の調和は、惚れた脹れたばかりで行かれないのは、結婚後に幾多の悲劇が演ぜられるので分る。老の水濟を緞るやうになつてからも、惚れた當時の氣分で、甘酪を半分宛分けて「あなた食べて見ない」など

とやらかすのは、餘程上川來の方である。

五

大町桂月は鹽井雨江の妹、河東碧梧桐は靑木月斗の妹、田山花袋は太田玉茗の妹を娶つた。何れも友人の妹で、遊びに行く毎に顏を火照らし『全く好い氣候になつたわね』などと云つて居たのだから、仲の惡からう筈は無い。花袋が始終藝妓と卽いたり離れたりする趣向の小說を書いても、胸倉を取つて小突き廻されるやうな事のないのは、細君が能く彼れの心情と職業を理解してるからであるに相違ない。單に惚れた腫れたの手輕に、輕卒に、一夜漬の戀愛で出來上つた、嫉妬深い女なら、炭團のやうに圓く燃えて、長持する筈は無いのである。桂月の家庭も、暢氣な親爺と、忠實な細君が、別に蚊遣の煙に咽せるやうな事も無く納まつてゐるさうだ。『私が、こんなに貴郞を愛してゐるのを知らないんですかッ。』と金切聲を振立て、婚約の指環をはめた手で、戀爭の頰を引つ搔くの類とは、同日の談に非ずだ。

群馬の代議士で通つた日向輝武は、米國歸りの當時、若い欣子の容貌に惚れ込んで、まだ泥水に染まない許の雛妓程度の處で引き拔いて、自分の園池に移した。それから女學校教育を受けさせ、人に羨まれこそやうな細君に仕立てたのであつた。輝武も一寸した出來心から黑い手を出して、飛んだ悲劇を生んだのであるが、欣子は『みんな自分の至らないからだ』と半生の榮華を省みて、異國の神樣に念じて居るさうである。大

稲新太郎、降旗元太郎、何れも美しい藝女房を持つてゐる。博士江木衷の夫人榮子は、左褄を取つてる時分、榮子の方から博士に人情が有つたのだとか聞いた。所謂思が叶つたので『本當に嬉しいわ』と、狐のやうな齒を見せると、博士も亦大きく笑つて、微醉の眼を細くして居た。晝は博士辯護士の辨務時間なので夫人もそれに手傳ひ、夜は榮子の社交時間なので博士もそれに應援して、至極圓滿に進行してゐる。それに博士は夫人を愛して、夫人を綺麗に綺麗にと作らせ、流行の衣服なども金を惜まず買ひ與へるさうで、流行の事なら江木の奥樣に訊けば可いと、呉服屋仲間でも云つてるやうな評判があつた。愛兒の無い淋しい家庭では、細君の若やかな、はしやいだ笑ひ聲は、夫の心を明るくするランプである。ランプが消えて、夫が明るい灯の街などをあさり歩くやうになると大變だから、細君には鎌め然らさせないだけの工夫は肝腎である。

與謝野晶子夫妻は、全く歌に詠まれたやうな睦仲である。杉村楚人冠田中舍身は、興聟の方では無いかと思ふ。杉村夫人は、伊豆山溫泉宿の娘で、夫思ひの親切なたち。男阪谷芳郞は、男澁澤の女聟で、大藏大臣にもなり、東京市長にもなつた。市長になつた時、澁澤が市會の有力者に向つて『餘り虐めないやうにして呉れ、虐めるなら出して遣らぬ。』と云つたさうだが、それ程に男は男を可愛がつてゐる。男は男の二女琴子の指定聟で、目に入れても痛くない程可愛いのである。戀聟となれば、明子でも、菊子でも、細君の方で可愛がつてやるが、指定聟は然うは行かぬ。背後に金力が控へて居るから、夫人に多少の權力がある。と云つ

て、始終細君の機嫌ばかり取つて居なければならぬと云ふやうな事はなく、お互の交讓妥協によつて家庭の和が保たれてゐる。琴子は大家育ちに似ず、家政の一切に通じて、非常にしまりやだと云ふ事である。

六

伊藤燁子は、近來評判の戀女房である。彼女は伯柳原義光の妹で貴族の妻となるべく教養されて居た。傳右衛門は船頭から坑夫となり、偶ま炭鑛を捜し當てたのが儲けの基で、ぐん／＼運が向いて來たと思ふと、何時しか炭鑛王に祭り上げられて居た。然うした好運な男でも女房運は惡かつたが、代議士となつて姓名の書き方を習ひ、政界の空氣にも觸れて見ると、事業の中に目ざめたと云ふ格好で、東京の女に惚れ始めた。併し代議士の重荷では、生來にない苦痛を嘗めたので、最う二度とならうとは言はず、炭鑛業の擴張に腐心して居た。さる程に、爵員の姫御前を見せられたのが目の毒で、すつかり病みつきになつて、持參金を逆まではあるが、當方から何萬でも出すと云ふ事になつた。つまり結納金を山と積むと云ふ事になつたのである。燁子姫には固より惚れさせ給うた譯でもなく、其の話だけでぞつと身顫へしたのであつたが、周圍の事情を何うする事も出來ず、唯運命とあきらめて、金力に嫁いで行つた。伯溝口の久美子姫が、大倉の伜の嫁になつたのと、その運命が稍似てゐる。

金力に嫁いだ者の慰藉は、金力に由つて慰藉をを買ふことである。『虚榮』は、心の滿足を得ない者の最も好い住家である。燁子の若い心は、狂ふが如く何物かを搜し求めて、悶えに悶えたのであつた。『春の香おくて靜かに眠らばや小がめの花も崩るゝ夕』と歌ふかと思へば、『悲しかれいよゝ辛かれ天地の運命呪いて生命果つべく』とも叫んだ。併し『何を怨む何を悲しむ黒髪は夜半の寢ざめにさめ／＼と泣く』とも、『今日もまた髪整へて紅つけて唯おとなしう暮しけるかな』とも詠んだ。彼女は、傳右の茶飲み友達たるべく餘りに若かつたのである。併し又思ひ返しては『殉教者の如くに淸く美しく君に死なばや白百合の床』と殊勝なことを云つて居た。白蓮の匿名で、自費出版の歌集は、彼女が煩悶の記念塔であつた。鈴木德子は好いた役者の女房となつて、女やくしやを廢業した。浦の濱は戀女房を持つて、角力が弱くなつた。胸中の不平を餘技につやつて、餘技の上達する者もあれば、戀の滿足を得て好きな藝術を棄てる者もある。本職を疎かにする者もある。戀の夫婦の利害に對する結論は、なか／＼難かしくなつて來る。

犬養を揄揶つた侯大隈は、『實に妻と云ふ奴は可愛い物だね、吾輩は妻より外に、天下廣しと雖も美人は一人も居らんと信じてゐる。だから、吾輩は妻を娶つてから、決して女子に惚れたためしが無い。』と是れだけは古今東西の例を引かずに、自己の經驗だけを語つて居た。それ程にサイノロヂストの侯が、娘の聟を生木を裂くやうに引き裂いて了つた。

戀は片一方だけでは可けず、金力や腕力や親爺の威光で、合せても面白くは行かず、夫妻は双方の理解の下に成立つた、戀仲でないと不可ないやうである。が、同じ戀仲でも、輕卒に出來合つたのは喧嘩別れをす

る。藥罐頭の所謂猫の嘀聲を眞似たのは、何うしても本當の所まで見てない陰蔭がある。火消壺を用意して掛かるやうな眞劍なのは、賴母しいには賴母しいが、相手が眞劍に戀してるか否かを確めないと、自分だけ眞黑になる後悔がある。何うせ合せ物なら、親の合せて吳れるのが、一番面倒でなくて可いかも知れぬ。離れた時は、いつでも親のせゐにして了ふ。それでも餘り親不孝なやうだから、双方の理解の上に成立しなならば、親の快諾を經て、結婚すると云ふ段取が、理想的、實際的であるやうに思ふ。學生の出來合同士が、家根裏の六疊で、手鍋を提げるなどは餘り感服せぬ。前外相の倅と、提督伊東の忘れ形見が約婚して、其の睦まじさを慈善市（バザー）などで見せつけるやうなのなら、本人同士には青春の樂しみが多くて、可いには可いが、ラブとアブをごつちやにする舊弊な親爺の頭腦（あたま）では、前途遼遠である。こゝ暫く、和製の方が流行するかと思ふ。何事にも己惚の强い侯大隈のやうに、女房の外に美人なしと云ふことになれば、何事も圓く納まるのである。羽織の裏にいかさまな繪を描いてそれを見せびらかし、役者買を平氣でするやうな女は、金で買はれた獸女房でもなければ、然う澤山有る筈のもので無いのである。

（大正七・五・一九）

妖婦時姫

村松梢風

一

もう追つ付け西三條の若殿がお越しになる筈である。時姫はいつものやうに、離れ座敷の机の前に座つて男の來るのを待つてゐた。

そこは、彼女の父の春日井三位が在世の頃書齋にしてゐた座敷で、荒れ果ててはゐるが可なり廣い庭を前に取つた、八疊と六疊の二た間續きである。根岸塗の壁が處々剝げ落ちて斑に白い地膚が現はれ、張り雜ぜの襖や天井板は焦茶色に煤び返つてゐる。外には竹椽が廻らしてあつて、破れた板廂には、晝間見ると青々した苔が生へてゐる。

時姫は朱塗の經机に凭れて、歌集などを繙いてゐたが、心は絶えず暗い庭の方へ引きつけられてゐた。薄桃色の羽二重の小袖に輕さうな綾の裲を被つて、眞中から割つた髮が頸筋から肩へかけてうね／＼蜿つてゐる彼女の横顏を、浮き彫りのやうに美しく照し出してゐる行燈の灯が、椽先から三つ目の飛石あたり迄流れ出て、じめじめした庭土へ軟かさうに染み込んでゐる。生温い風と共に、何かの花の匂ひが漂つて來る。彼女は、玉に導かれて飛石傳ひに近寄つて來る男の姿を何遍も暗がりの中に想像してみた。戀しいやうな、もどかしいやうな、胸苦しいやうな思ひが寄せて來る。

母屋へ通ふ廊下の開き戸を徐かに明けて一人の女が這入つて來た。おばこに髮を結つて何やら小紋の着物に黒の帶を貝の口に結んだ。歳比三十恰好の女である。

「姫様、嘸お待ち遠いで御坐りましよう、待たるるとも待つ身になるなとやら‥‥したが、姫様ほどのお方にそれ程想はれるとは、西三條の若殿様も果報なお方、で御座りますなあ」

　女は次の間との境の敷居際に座つて、姫の顔を覗き込むやうに見ながら、薄笑ひを浮かべて云つた。時姫は一寸そちらを振り向いたばかりで、そ知らぬ顔をして再び歌集へ眼を移した。すると女は少し膝を進めて

「さうから申すうち、追つ付けお見えになるで御座りましよう。したが姫様、先頃から玉が度び度び申し上げました事、今宵こそは大丈夫で御座りましようなあ」と、急に眞面目な容子になつて云つた。

　時姫は、見る／＼困惑したやうな表情を浮かべた。

「あの事ばかりは、妾の口からは申されぬわいの。そちから頼んでみたがよいではないか」

「また姫様としたことが‥‥。玉で濟むことならかやうにお願ひはいたしませぬ」女はじれつたさうな顔をして「それ、一寸お話し遊ばすだけのこと、造作もないでは御座りませぬか」

「でも其のやうな卑しいことを云へば、何時か維高様も妾をお見捨てなさるに違ひない」と、時姫は心細さうに云つた。

「ほゝゝほ、それこそ取り越し苦勞と申しますもの、殿御の方から何呉れと世話をいたすのが、何れの國へ參つても戀路の定法で御座ります。又、是れはあなた様などお辨へのないことながら、下世話にも、遣つた金に未練が殘るなどと申しまして、とかく金を遣つた女子ほど深くなるもの、上つ方でも下々でも、人情に變りは御座りませぬ」

「そちはさう云やるけれど、堀川の少將でも、阿士の侍從でも、それ故に妾を見捨てたではないか」

　時姫はかう云つてこゝろもち顔を紅くした。女は一寸困つたやうな顔をしたが、直ぐ

「それは相手にもよりまする。堀川の少將様は思ひの外貧乏で御座りました。あの方がお越しなさらなくつたのは、御家賃の何んとかの節までお拂ひ遊ばして、

もう何一つお賣りなさる物もなくなつたからで御座ります。又阿士の侍從樣の吝嗇といへば名高いもの。したが、その締りや樣でも、到頭五十兩といふ證文をお卷きなされたでは御座りませぬか」と云つて誇らしげな顏をした。

「もう宜い、もう宜い。妾が承知してゐるほどに、そちは向うへ退つてゐや」

時姫は耐え切れぬやうに聲を慄はせて云つた。それでも女は根強く其の場に坐つたまゝ

「前のお二方に比べましたなら、西三條の若殿樣は、同じ堂上樣と申しても大した御身分違ひ。もと〳〵御裕福のところへ、將軍家の御臺所の御緣邊とかで、年々江戸から何百俵とかの仕送りが參るさうでは御座りませぬか。それ程の家の若殿樣が、愛しい姫樣の御無心をば何んでとやかう思し召しましよう」

「もう分つたといふに、早うあちらへ行きやらぬか」

「では吃度で御座りまするなあ。慾も得もない色戀は、浮世の苦勞を知らぬ生娘のすることで御座りますぞえ」

女はかう云つて冷やゝかな眼で姫の顏を見据えて置いて、徐かに起つて出て行つた。

時姫は、雪のやうな白い腕を投げ出して、いつ迄も机の上に突つ伏してゐた。どうすることも出來ない悲哀が、劇しく胸を衝いて來た。

「何んといふ淺ましいことだらう……。自分のしてゐることゝ、遊女傾城の業と何處に差別があらう……」

彼女は穢らはしい自身の肉體を、滅茶々々に踏み躙つてでも貰ひたいやうな氣がするのであつた。「それにしてもあの玉は、なんといふ惡い人間であらう」と、彼女は今更のやうに玉が恐ろしくなつた。

二

玉が初めて春日井家へ奉公に來たのは、今から五年前、主の三位が薨去してから間もない頃であつた。世間慣れてゐる上に、利口で眼端の利く玉は、直きに邸中の人から可愛がられたり重寶がられたりするやうに

なつたが、とり別け時姫の大のお氣に入りであつた。

玉はよく時姫に向つて種々の咄をきかせて呉れるのであつたが、其の頃十四五歳にもなつてゐた時姫には、玉の咄は何よりも面白く、事々に好奇心をそゝられるやうな咄ばかりであつた。それも最初のうちは、世間の珍らしい出來事とか、或ひは町家の娘達の風俗、せい〴〵芝居淨瑠璃のはなし、といつた類であつたが、次第に話題が盡きて來ると「是れは誰れにも仰つしやつてはなりませぬぞ」と念を押したりして、玉は祇園島原の太夫の咄などまできかせるのであつた。

「君傾城といつて卑賤しいものぢや」

時姫が何かの本で見た言葉を思ひ出してから云ふと、玉は滅相な咄だといふやうな顔をして、

「姫様などは、本統のことを御存じないのでさう思し召すので御坐ります。島原の太夫などになつて御覽なされませ、それは〳〵大層なもので御坐りますぞえ」

と力をこめて云つて、太夫の驚くべき豪奢な生活振りから、天女のやうな美しい姿をして大勢の供を連れて道中をする時の有様などを、さながら眼に見えるやうに話したり、「それに太夫となると權式の強いもの、どれ程金の山を積みましても、好かぬ客には肌をふれぬといふくらゐなもので御坐ります」などと云つたりして、何處か腑に落ちぬやうなところもあるが、とにかく玉の云ふ通り、大層なものだと時姫を感心させて了はなければ止まなかつた。

しまひには、玉の咄といへば、男が女を見染めたとか、やれ驅け落ちだとか、心中だとか、そんなことばかりになつて來た。そしてうつとり聞き入つてゐる時姫に對つて、「いまに姫様にも、玉が好い殿御をお媒介いたしますぞえ」などと云つてよくからかつた。時姫はすぐ眞紅な顔をして逃げて行つたり、振り袖で顔を隱したりするのであつたが、それでも玉の言葉はなんとなく頼もしいことのやうに感じられた。やうやう眼醒めて來た胸のうちに、彼女はさまざまの幻を描いて暮らすやうになつた。

奥方が中風症で寢たきりになつてしまつてから、

邸内の事は總て、丹澤幸内といふ用人と玉とで切り廻すやうになつた。幸内は譜代の家來で、先年妻に先き立たれてからは獨身で暮してゐたが、至つて實直な、亡き殿のお覺えも至つてめでたかつた男である。

時姫が十六の春を迎へたばかりの時であつた。或日彼女が唯一人で座つてゐる處へ、玉がにこ〳〵笑ひながら這入つて來て「姫樣、よい物をお目に掛けましよう」と云つて邊りを見廻はしてから、懷から手紙のやうな物を出して渡すのであつた。時姫は何氣なく披いて見たが、それは男から來た文であることが直ぐに判つた。

時姫は吃驚して、文を其の場へ捨てたまゝ起たうとした。すると玉は聢かりと其の裾を押へて「もう姫樣、一旦お開遊ばしからは、是非共お返しだけはなさらねばなりますまい。堀川の少將樣は名高い風雅なお方故、失禮なことを遊ばして笑はれるやうなことがあつてはなりませぬ」と云ふて、無理失理其處へ座らせてしまつた。時姫は、嬉しいとも羞かしいとも譯の分らぬ氣持で、玉のいふがまゝに筆を取つて返事を

られてしまつた。

それから間もない或夜のこと、時姫が何時ものやうに離れ座敷で讀書をしてゐると、ひよつこり庭の方から玉が這入つて來て、彼女の耳へ口をあてて「少將樣をお連れ申しました」と囁いた。そして玉は、片手で聢かりと娠の軀を抱へるやうにしながら、片方の手で暗い庭の方へ向つて手招ぎをした。時姫はどうすることとも出來ないやうな氣持で、唯ぶるぶる慄へてばかりゐるのであつた。

堀川の少將は、やうやう三十になつたばかりの、瘠せた寂しい顏立ちの人であつた。妻も子もある身でありながら、其の後は忍んで時姫の許へ通ひ始めた。時姫は、さほど少將を好いてゐるとは思つてゐなかつたが、それでも男の來ぬ夜はなんとなく淋しかつた。

まる一年ばかり少將は通つて來たが、何うした譯か、急にふつつり姿を見せなくなつてしまつた。時姫が心配して文を書かうと云ふと、玉は「それには及び

ますまい」といつて止めるのであつた。

「それでも、若しや御病氣にでも擢られたのではあるまいか」

時姫が氣がかりらしくかう云ふと、玉は冷やゝかな笑を浮かべて、

「少將樣がお越しなさらなくなつたのは、お屋方お金がなくなつたからで御坐りましよう」と云つた。

玉が堀川の少將から金をとつてゐたことを、時姫は初めて知つたのであつた。彼女は嘗へようもなく駭いて玉を詰つた。すると玉は、其の金が無ければ邸の活計が立たなかつたのだから仕方がないといつて言ひ譯をした。我家の豊でないことは豫々時姫も知つてはゐたが、玉の言葉に依ると、それは想像以上の貧窮であるらしかつた。父の在世中は、學問の教授などをしてどうにかかうにかやつて來たが、現在のやうに知行所から來る僅かな收入だけでは半歳の暮しを立てるさへ困難なところへ、おまけに古い借財などが澤山あるので全く何うにもしようがないといふのであつた。時姫は、泣くにも泣かれないやうな氣持で、玉の話をきいてゐた。

阿土の侍從の事があつてから、玉は全く恐ろしい人間であるといふことが時姫にも判つて來た。それは夏の夜のことであつた。彼女が蚊帳を吊つて一人で寢てゐるところへ、突然玉が這入つて來て

「姫樣、お喜びなされませ。少將樣がお越しなされました」と云つて、ふつと有明の灯を吹き消して出て行つた。すると入れ違ひに男の這入つて來る氣配がした。——その男が、堀川の少將でないことを知つた時には、もう彼女はどうすることも出來なかつた。

男は阿土の侍從であつた。侍從は、顔一面に痘痕があるので、世間では彼れのことを菊石の侍從と呼んでゐる、もう四十を越した、恐ろしい程醜い男であつた。「侍從樣には五十兩といふ負債が御座りまする故、それを何とか片着けるまで、お厭でも御辛棒なされませ」と、あとで玉は、泣き伏してゐる時姫に對つてさながら命令するやうな調子で云つた。玉の態度は、其

の時分からガラリと變つてしまつた。用人の幸内との關係なども、次第に公然に時姫の眼に映つて來た。「玉の申すことをお聞きなさらぬと、姫樣の秘密を殘らず世間へ發いてしまひますぞ」玉はよくかう云つて時姫を脅やかした。

玉といふ人間も怖ろしいには違ひなかつたが、それよりも時姫は、阿土の侍從が厭で厭で堪らなかつた。侍從は毎夜のやうに通つて來た。

「左樣にお嫌ひなさるものでない。そもじのためならば、麿はどのやうな事でも厭はぬと申すではないか」

好色らしい眼つきをしてこんなことを云ふ侍從の顏が、時姫には變化のやうに怖ろしかつた。「なんとかして侍從を來させなくする法はないかしら」時姫はそんなことばかり考へてゐるうち、ふと妙案が浮かんで來た。それは、侍從から金を絞り取るといふ策であつた。堀川の少將が來なくなつたのも金を取つたからである。まして侍從は、玉の咄しに依ると大の吝嗇家だといふから、金を貪ぼり取れば必ず來なくなるに違ひはない、と時姫は考へたのであつた。

此の計略は美事に成功した。時姫は、何れ位の金を取つたか覺えはないが、五十兩の證文を卷かせた上に、なんでも餘程澤山の金が玉の手へ這入つたやうであつた。阿土の侍從は、到頭半歳經たぬうちに足を絕つてしまつた。

三

庭の方から人の來る氣配に、時姫は吃驚して顏を上げた。と、檜葉の茂みの向うから、ほの白く男の姿が現はれた。玉と、西三條の浮橋大納言の若殿維高であつた。

玉は自分が先きに上つて褥など設けながら、靴脫ぎの上に立つてゐる維高の方を向いて調子よく云つた。

「さあ〳〵早うお上り下さりませ。若殿樣のおいでが遲いばつかりに、先き程から姫樣が夫れは〳〵きついおむづかりやうで、玉が一人でどれ程難儀をいたしましたか分りませぬ」

維高は莞爾々々笑ひながら上へあがつて來て、薄紫の狩衣を寛ろげて時姫と並んで座つた。

「今宵は折惡う用事が出來て遲うなつた。然し、いつもは早う參り過ぎる故、偶にはお待ちなされてみるも一興であらう」

「あれまあ、あのやうな憎いことを。姫様、あなた様もなんとか仰しやつてお遣りなされませぬかいなあ」と、玉が口惜しさうに云ふ。

時姫は默つて下を向いてゐた。先刻玉に云はれたことを思ひ出すと、男に顏を見られるのが疾しいやうな氣がしてならなかつた。維高は直ぐ氣掛りさうな顏をした。

「姫はどうかなされたのではないか」

「否、まだおむづかりが直らぬと見えまする。したが、このお守はあなた様に限ること」と云つて、玉はさも面白さうに笑つた。

「はゝゝは、それは麿にはちと大役ぢや」かう云つて維高も、鐵漿の黑々とした齒を見せて笑つた。聽て玉は手早く邊りを片着けて向うへ退つて行つた。それでも時姫は、いつ迄も顏を上げなかつた。兩方の袖を口に當てゝ、しよんぼり差しうつ向いてゐる姿が、消え入りさうに媚やいでゐた。維高が耐り兼て顏を覗き込んで見ると、時姫は泪を一ぱい浮べてゐるのであつた。

「そもじは泣いてゐたのぢやな。然し、これには何か仔細が御座らう。包まず麿にお話しなされ」と、維高は吃驚して女の肩へ手を掛けながら優しく訊いた。

すると時姫はしくしく聲を立てゝ泣き始めたが、維高がいろ〳〵賺して譯を訊いて見ても返事もしなかつた。

「そのやうにお隱しなさるなら、もうお訊ねは致すまい」と、仕舞ひに維高は態と憤つたやうな顏をして云つた。

「妾がどの様な事を申しても、あなたはお蔑みはなさりませぬか」時姫はやうやう泣き腫した顏を上げた。

「そもじを蔑む? 何しに左様なことがあつてよか。

う」

「それではお話しいたしまする。妾は、家が貧しいばかりに、憂き目を見るので御坐りまする」と、時姫は悲しさうな眼つきをして云つた。

彼女は杜切れ〳〵に、我家の貧窮な有様を維高に話してきかせた。そして、實は今日もさる處から古い負債の督促を受け、彼女は聞くに堪へられぬやうな侮辱を與へられたといふやうなことを、誠しやかに語るのであつた。かう云つて話してゐるうちに、彼女は次第に自身の悲しい言葉につまされたやうな氣持になつて來て、我れながら嘘とは思へないくらゐ眞實らしい言葉が自然に口から出て來るのであつた。維高は、痛はしくて堪まらぬやうな顏をして聞いてゐた。

「して、其の金は何れ程で御坐るかな」

「三十兩で御坐りまする」時姫は口から出委せに答へた。

「それ丈で濟むことならば、何もお案じなさる迄もない、麿が拂うて進ぜよう。」

「でも、其の樣なことをして頂いては……」

「ならぬと仰つしやるか。それは又水臭いと申すもの。そもじの難義は、つまり麿にも難義では御坐らぬか」

かう云つて維高は莞爾笑つた。眞實男がなんとも思つてゐないらしい樣子を見ると、時姫は初めて「ほつ」と重荷を卸したやうな氣持になつた。包み切れぬ喜悦(よろこび)が彼女の顏へ上つて來た。

「妾は死んでも忘れはいたしませぬ」

と、時姫は惱ましいほど媚を漂へて男に云つた。

四

翌日維高から約束の金を屆けて來た。玉は、其の日のうちに呉服屋や小間物屋を邸へ呼んで、時姫のために種々(いろいろ)の物を買ひ調へた。美事な髮飾りや眼の醒めるやうに美しい反物などを堆く時姫の前に積んで

「それ御覽なされませ。姫樣のたつた一と言で、こんな立派な物が幾らでも出來るでは御坐りませぬか」と、玉はさも手柄顏に云つた。

から云はれて見ると、時姫も滿更そんな氣持がしないでもなかつた。全く、自分の一と言で、欲しいと思ふ物は何んでも直ぐ眼の前に列べることが出來るのだ。それも、心に染まぬ男に金で操を賣るといふ譯ではない、自分は眞實死ぬ程維高に戀してゐるのだ……こんな風にも考へられた。彼女は珍らしさうに、反物を展げて見たり、頭道具を手に取つて眺めたりした。

時姫は、其後も度び／＼玉に勸められて維高に金の無心をした。其の都度維高は、彼女の云ふがまゝに調へて與れるのであつた。

男から金を取るといふことが、次第に彼女にはさう苦痛なことではなくなつて來た。同時に、泣いたり笑つたりして見せさへすれば、男はどうにでもなるものだといふやうにも考へられた。贅澤な衣裝や持物が眼に見えて殖えていつた。彼女は美しく着飾つて、物見遊山に出歩くやうなこともあつた。

或晩、突然維高がやつて來た。

「今宵は寂しい思ひをいたさねばならぬと存じて居りましたに、でもまあようお越し遊ばしました」

と、時姫はイソ／＼しながら直ぐ男の側へ寄り添つて云つた。すると維高は、邪險に其の手を拂ひ除けた。

「今宵麿が參つたのは、そもじに少し訊ね度いことがあるからぢや」と、維高は苦り切つた顏をして云つた。何時にない不機嫌な男の容子を不思議に感じながら、時姫は尙更艶やかな笑顏を見せて

「改まつて妾にお訊ねとは、どういふことで御坐りまする？」

「ほかでもない。そもじは、よくも今迄麿をお瞞しなされたな」

維高は力めて平氣を裝つてゐるらしかつたが、聲が顫へて中途から掠れてしまつた。そして顏中の神經を蟲のやうにピク／＼動かした。何んでこんなに男が憤つてゐるのか、時姫にはさつぱり譯が分らなかつた。

「これはまあ思ひも依らぬ、妾が何時あなたをお瞞しいたしました？ さあ、其の譯を仰つしやつて下さり

ませ」と、時姫は膝を擦りつけて口惜さうに云つた。

「譯を云へとならば申さう。そもじは、堀川の少將のことをよもや忘れはなさるまい」

時姫は氣息の止る程駭いた。何うしてあの事が維高の耳に這入つたのだらう……然し、今はそんなことを深く考へてゐる餘裕はない。彼女は咄嗟の間に、何んでも知らぬと云ひ張つてしまふに越したことはないと考へた。

「堀川の少將が、何うなされたと仰しやるので御坐ります？」と時姫は不思議さうな顔をして云つた。

「何うなされたのでもない。そもじのために、可哀相にあの男は、家の寶まで賣つてしまつたといふばかりぢや。姫、もう隱しても無駄であらう。阿土の侍從のこと迄、麿は殘らず知つてゐるのぢや」

かう云つて維高は冷やゝかな眼で睨み付けた。時姫は思はず顔の色を變へてしまつた。それでも執念深く云つ張つた。

「何んと仰せられても、一向身に覺えのないことばかりで御坐りまする」

「覺えがない？ふん、さらば覺えのある品をお目に掛けよう」

維高は懷中から一通の手紙を取り出して時姫の前へ置いた。時姫は眞蒼な顔をしてブルブル顫え出してしまつた。それは、彼女から阿土の侍從へ宛てた文であつた。

「そもじは見掛けに依らぬ恐ろしい女子ぢやな。あの菊石の侍從にまで操を賣るとは、なか／＼遊女傾城も及ばぬ業ぢやよ。さうとも知らず、夫婦の約束までいたした麿は、何んたる愚ものであつたらう」と、維高は溜息をつくやうに云つた。

時姫はもう顔を上げることも出來なかつた。口惜しいとも、恥づかしいとも、悲しいとも、名狀し難い心持が、旋風のやうに頭の中を掻き亂してゐた。彼女は下着の袖を喰ひしばつて、疊の上へつッ伏してしまつた。

五

維高はそれきり來なくなつてしまつた。

「なあに姫樣、今に玉がもつと〳〵好い殿御をお世話いたします。姫樣ほどの御標緻なれば、男などは選り取り見取りで御坐ります」

玉はかう云つて時姫を慰めた。然し時姫は、維高のことが何うしても思ひ切れなかつた。殘酷な愛相盡かしを云つたり侮辱を加へたりした男の仕打ちを恨めしく思ひながらも、矢張り忘れることが出來なかつた。

浮橋大納言家へ、西國の或大名から嫁が來るといふ噂を聞いたのは、もう秋も半ばになつてからであつた。時姫は、一と夜を寢ずに泣き明かしたのであつた。

或日、時姫はぼんやり座敷に座つて物思ひに耽つてゐた。木の葉が見てゐるうちに散つて、うすい秋の陽ざしの中をヒラヒラと狂ひながら地に落ちた。たゞさへ荒れた庭が、一層物哀しく寂れて來た。

と、向うの切戸を明けて玉が莞爾々々笑ひながら這入つて來た。

「姫樣、よいものをお目に掛けますゆゑ、一寸こちらへおいで遊ばしませぬか」

玉は飛石の上に彳んだまゝ、何やら面白いことでもあるらしげな顏をして云つた。時姫はなんとなく人戀しくてゐた折柄、玉が來て呉れたことが譯もなく嬉しかつた。

「なんぢやぞえ」と、彼女がイソイソしながら庭下駄を履いて下りて行くと、玉は無言で先に立つて切戸の方へ連れて行つた。

「姫樣、あれを御覽遊ばしませ」

玉は小聲でかう云つて門の方へ指さしをした。見ると、其處へ一人の花賣りが荷を卸してゐた。花賣りは二十二三の若者で、汚い木綿の布子に淺葱の腿引、素足に草鞋を履いて、甲斐々々しく尻を端折つてゐる。側で用人の幸內がしきりに菊の花を撰つてゐた。時姫は花賣りの顏を一と眼見て驚いた。色白の顏立ちとい

ひ、物を云ふ時の口元まで、維高にそつくりである。
「よう肖てで御坐りましようが」と、玉は主人の顔を見て云つた。

時姫は默つて頷いたまゝ、凝と花賣りの顏に引きつけられてゐた。暫らく遠のいてゐた維高の面影が俄かに胸に甦つて來ると同時に、彼女は眼前の花賣の若者に對しても、異樣な懷かしさを感じるのであつた。軈て彼女は、玉の耳元へ口を寄せて何か囁いた。すると玉は笑ひながら合點合點して、直ぐ花賣の側へやつて行つた。

「もし花屋さん。お邸の姫君樣が、お前の花をお召し下さるといふ仰せぢやぞえ」と、玉は勿體らしく云つた。

「へいへい、夫れは有難う御坐ります」花賣りはぺこぺこお辭宜をして「お花はどれに致しましよう。黄菊、白菊、それからこちらに錢菊の面白いのも御坐ります」

「あれ、わたしが見ても分らぬわいな。直ぐ〱姫君へお目に掛けようほどに、お前その花を持つて、わたしと一緒に來て下され」

「へいへい、畏まりした」

若者は中から目ぼしい花を拔き出して大事さうに小脇へ抱へ込み、幸内に一寸會釋をして玉の後へ隨いて行つた。玉は、花賣りを離れ座敷の庭先まで連れて行つた。

時姫は机に凭れて何か見てゐる樣子であつた。何氣なく玉の後へ隨つて行つた花賣りは、氣高い姫の姿を見ると吃驚して、思はず其の場へ蹲踞まつてしまつた。

「姫君樣、花賣りを召し連れまして御坐りまする」と、玉は縁側へ手を支えて、何時もより改まつた調子で云つた。

「御苦勞でありました。これ花賣り、其のやうに遠慮しやることはない。花は殘らず求めてとらすほどに、これへ持つて參るがよい」

時姫は優しく聲を掛けた。花賣りは恐る恐る前へ進んで竹縁の上へ菊の花を置くと、又もや後へ退つて畏

まつてゐた。時姫は白菊の一と枝を手にとつて眺めながら、
「美事な菊ぢやな。是れはそちが作つたのであるか」
「左樣で御坐りまする」
「そちは花作りはなか〳〵名人と見える。して、そちは何處の者ぢや」
「山科村の、長作と申す者で御坐りまする」
「なに、長作といやるか」かう云うて、時姫は玉の顏を見て嫣然笑つた。
「これ長作殿とやら。丁度姫君樣も御退屈のところ故、そなた、何んぞ面白い咄でもお聞かせ申さぬかいなあ」
と、玉が橫合から云つた。
「へい……お咄と申しましても、素々卑賤しい花賣り風情、何も辨へは致しませぬ。然し、永年花作りを渡世に致して居りますれば、花のことなればお答へが出來まする」
　かう云つて花賣りはチラと時姫の顏を偸み視たが、直ぐ眩しさうな顏をして眼を伏せてしまつた。小心な正直者らしい花賣りの容子がなんとなく時姫の心をひいた。彼女はからかつて見度いやうな氣持になつた。
「そちに取らせる物がある」
　時姫は机の上にあつた短冊を手にとつて「何にさく色そめかへし匂ふらん花もてはやす君もてなくに」と認めて、玉の手から花賣りに與へさせた。花賣りは有難さうにそれを押し頂いたが、彼れには歌の意味は解らなかつた。

六

　天から降つて來たやうな幸運が、花賣り長作の身に與へられた。其の夜長作は、玉の手びきで春日井家の奥庭へ忍び込んだのであつた。
「餘り勿體なくて、わたくしは冥利が怖ろしう御坐ります」と、長作が感激に顫へた聲で云ふと
「あれ何をいやるぞえ。戀に上下はないといふではないか。妾はそなた一人を男と思うてゐるゆゑに、いつ迄も見捨ててたもるなや」

時姫はかう云つて花のくづれるやうに寄り添うた。

長作に對しても、時姫は折にふれて我家の貧窮な有樣を誇張して話した。男から金を取るといふ興味ばかりでなく、我身の悲しい境涯を訴へて泣いて見せるといふことほど、男の心を强くひきつけるものはないと彼女は思ふのであつた。長作は痛はしくて堪まらぬやうに涙を流して聞いてゐたが、或夜かなり纏つた金を持つて來て、何かの足しにして頂きたいと云つて時姫に渡した。

「そなたも定めて貧しいであらうに、か樣なことは無用にしや」時姫が氣の毒さうに云ふと、

「否々。其のお心遣ひは却つてお恨らみで御坐ります、わたくしは、あなた樣のためならば命でも差し上げまするつもり、この後とても、及ばずながらお力添へを致しましよう」と、長作は思ひ上つたやうに云ふのであつた。

其の金を玉に見せると、流石の玉も駭いてゐた。

「姫樣もいつの間にか、凄いお腕におなり遊ばしましたなあ」と、玉はさも感心したやうに云つてしげ〳〵と時姫の顔を眺めた。

長作はせつせと金を運び始めた。しまひには、時姫も玉も不氣味になつて來た程、花賣り風情に似合はしからぬ大金を持つて來ることもあつた。

さうかうするうち、玉は又もや大きな魚を網に掛けて來た。それは三條邊の名高い太物店の隱居で、京でも屈指の金滿家であるといふやうなことを話して、

「少々歲は取り過ぎて居りますが、其の代りお金は箕で量る程あるので御坐ります」と、玉が相談を掛けると、時姫にはニタリと笑つて、

「それが何よりではないか」と云ふのであつた。

初めて來た晩、土產物として絹幾疋かに小判十枚を添へて置いて行つたので、二人ともすつかり有頂天になつてしまつた。もうかうなると時姫は、長作のことなどはまるで忘れてしまつたやうに名前も口にしなくなつた。そして、長作が日夜邸の周りを迂路ついてゐるといふやうな噂を聞いても、別段氣にも掛けなかつた。

或日のこと、玉が困つたやうな顏をしてやつて來て「姫樣、あの花賣りにも弱つてしまいまする。今日も折惡く外で出遇ひますと、一生の賴みだから姫樣にお屆け申して呉れと云つて、か樣なものを渡すので御坐ります。眼の色を變へて、本統に氣味が惡いやうで御坐りました」

かう云つて玉は懷から手紙を出して時姫に渡した。其の手紙には、時姫に對する怨みの數々や、自分の苦しい思ひの丈が書いてあつた。「所詮未遂げられぬ戀とかね〳〵諦め申候へども、たゞ〳〵餘りお情なき仕打ちをお怨みに存候、私事あなた樣へお貢ぎ申し度きばかりに盜みを働き、家に母一人御坐候へ共左樣な譯にて今は身も立ち難く……」

「まあ——何んたる男で御坐りませう」橫から覗込んでゐた玉が呆れたやうな顏をして云つた。

時姫は眞蒼な顏になつて、軈てズダズダに其の手紙を破つてしまつた。

それから幾日か經つてからのことであつた。

或朝——其の朝は大地にも屋根にも雪のやうな厚い霜がおりて、向の寺の境內では、夜の明けぬうちから烏が氣味惡く鳴いてゐた——春日井家の仲間が、寢ぼけ眼をこすりながら表門を明けると、門前で一人の若者が咽喉を突いて死んでゐたので大騷ぎになつた。其の若者は、此の邊へよく來たことのある花賣りであるといふことが直ぐに判つた。

檢死の役人が來て調べて見ると、死人の內懷から「何にきく色そめかへし匂ふらん花もてはやす君もこなくに」と後撰集の戀歌を書いた短册が一枚出て來た。

創口から流れた血が胸まで傳つて、短册が半分紅く染まつてゐた。

知名の兄弟を産んだ父母の研究
其遺傳的方面と教育的方面（二）

（五）正宗兄弟
文學者　正宗白鳥
洋畫家　正宗得三郎

▽父より胃病を母より神經過敏性を

正宗白鳥

私は胃病を父より神經の過敏性を母より傳へられました。兩親とも我々の行動には干渉しません。二人とも堅實な人だと思ひます。しかし兩親もその兩親もこれといふ非凡な點は全然無いらしいです。從つて私の大勢の弟妹もみんな凡庸なものばかりらしい。瓜の蔓に茄子はならないのでせう。たゞ兩親のどちらに似ても懶惰者にはならない筈です。だから私でも十年も机の前に坐つてコツ〱やつて來ました。

▽自分の家

正宗得三郎

親の歳を知らぬ子は馬鹿の不孝者だと云ふ事です。僕はその通りです。そして殆んど自分の家を知りません。目に見た事と自然耳に這入つた事丈です。更に自分で尋ねた事がありません。そして教育と云ふ程の事はなかつたのです。成る樣になつたのです。ですからに次ぎに書いた事は、幼い時からの自分の身に受けた記憶の一端にしか過ぎません。御尋ねの件と話しが違ふかも知れません。

僕の家の曾祖父は繪畫を好み、詩歌茶の湯を慰みとしてゐたと云ふ事です。

幼い未だ七つ八つ位の時二階の物置き部屋に這入ると澤山な錯刀や、又葛籠の中には繪畫が投げ込まれてあつた。又他の箱には錦畫があり、書籍が可なりあつた。祖母の炬燵の後ろの小屏風には今想ふと、江之島か何かを背景として、旅の女達が馬に乗せられて、春信相に結び紐の着いた煙管で煙草を吸ひながら、景色を眺めてゐる三枚續きの錦畫が貼つてあつた。そして家の内中どの唐紙や、屏風の貼交にも錦繪があつた。そして是れは曾祖父の江戸土産だと云つてゐた。又黄土色の砂壁のざら〱落ちる暗い二階の梯子段の間の押込には茶道具が、幾年もその位置

かれてある曾祖父時代のものは、邪魔物となつてゐる。

幼い時、これ等の日光の差さない物置きには彩色美くしい錦繪があると共に、不氣味な物が潜んでゐる樣な氣がしてゐた。獨りで這入るのは氣持が惡かつた。夏土用干しには、海を見晴すその二階に一パイそれ等の書畫が列べられる。眞物かどうか分らないが、應擧の「曲水宴」、眞黒な煤ぶつた徽宗皇帝の「鷹」があつた。文晁や、謝春星のものもあつた。父からそれを聞いて。これが畫家の中で豪い人だと聞かされた。又食客にゐたと云ふ五峰の南畫が數知れぬ程あつた。そしてその鷹は何日の間にか賣られた。

又軸の中に曾祖父の肖像があつた。鼠小紋の上下を着た、短い一本差しの、ちよん髷の像がそれである。幼い我々にそれが可笑しくてならなかつた。僕達兄弟は錦繪の中のを一二枚貰つて喜こんでゐた。

村は佳い景勝地ではありませんが湖水の如く包まれた入江です。後ろの山麓と、中腹とに西と東とに別れて寺があります。西の寺は聖武天皇時代に建立したものだと、曾祖父の帳に記入してあるのを見ましたが、曾祖父はそんな事に名をつけて自分で面白がつてゐたのだと想ふ。西寺は今は廢寺です。その中に一つの閻魔堂がある。私達が泣くとその閻魔堂から赤鬼や青鬼が捕りに來ると云はれたものです。東寺の一部は僕等の小學校に當てがはれてあつた。そこからも灣は一目に見える。

村は漁村の常として喧嘩がある。又稀には遠洋の漁業に出懸ける者の難破がある。何日であつたか僅か一里足らずの前の島に行く途中でその渡船が沈んで、草刈女の中七人死んだ事がある。小學校友達の母もその一人であつた。學校傍の本堂の椽には七つの白い棺が列んだ。僕は小供心にどうしてこんないやな事が人の中にあるだろふと思つた。又殺人がその當時は年に一二度必ずあつた。夜死體の投げ込まれた海岸を燈をつけた提灯がうろつくのを見てぞつとする事があつた。

父は書なぞ好んで書いてはゐますが、物に對して餘り趣味はない樣です。それより一度傾いた家財を安定に置き度いのが一心の樣です。小供は澤山生れるし、父自身から進んで敎育する意思は殆んどない樣です。時々漢書を敎へて吳れた位です。而して僕達の職業も何か安全に自活が早く出來る道を欲してゐました。僕はその三男の三郎で、いたずらものでした。兄弟の誰れともよく喧嘩をしては呵られてゐました。そして泣き蟲でした。僕が十九歲になつた時、小供は九人生れた。そしてその小供は父の餘り欲しない職業を望む樣になつた。併し父は文學にしろ畫家にしろ、その職が嫌いではなかつたのです。安全に生活して行ければ、名譽とか、高名とかを少しも欲しません。だからその意味で、冒險的職業を撰む事を欲しません。それに九人もの小供に一々何日迄も學資を送る事に堪へなかつたのでしよ。今思ふとそれでもよく出して吳れたと想ひます。僕は前に言つた樣に畫なぞ見て育つた間に何日となく畫が好きになつた。遊戲と繪とは殆んど日々の日課でした。職業を撰定する時それを撰びました。それには兄が畫に同情風のものを持つてゐたのも力になりました。併し日頃の樣子では死ても父は聞き入れ相もない。そして僕は

母にすがつてゐた。愈々その意志が父に通した。父は畫家に成る事をそれ程不賛成ではない、四五年修業したら必ず生活出來るかをあやぶんだのです。母は好きならしかたがないと言つてゐたが、田舎廻りの旅畫家を連想して心を惱ましてゐた。愈々それがゆるされる樣になつたのは、兄が學校を終へて僕の學資の補助をして呉れる事になつてからです。

父は總てに向つて放任主義です。その代り立入つて世話もしません。自分の身に立入らない限り子達の勝手にします。我々はその意味で父に氣兼をした事がありません、年に一度の便りをしなくつても父は平氣です。二年振りに合つても三年振りに合つても、相不變ず「どうだこの頃は食へるか」と訊ます。

併し母は多くの小供の事で終日頭が一ぱいの樣です。今でも會ふと小遣をくれます。父は病氣と言へば胃で困つてゐます。僕の胃の丈夫でないのもその爲めかも知れません。

（六）小山内兄妹
文學者 小山内薫
文學者 岡田八千代

▽父と母その他の周圍

小山内 薫

私の父は（名を建と言つた）陸軍の軍醫だつた。西南戰爭に出た軍醫だから、随分古い軍醫である。名古屋の衛戍病院に歴代の院長の肖集めた額があるが、その額の順を見ても父が一番初めの院長だつた事が分かる。父の同僚だつた人々の子に西洋史論の權威長[illegible]麒輔氏がある。露西亞語の碩學八杉貞利氏がある。私などは軍醫の子として、甚だ不出來だと言はれなければならぬ。

私の父は陸奥國弘前の生れで、津輕の藩士だつた。それは私の家の名で直ぐ分かる事である。小山内といふ名は青森にしかない名である。そして、青森へ行くと少しも珍らしくない名である（この頃では北海道へも大分渡つたやうであるが）。チサナイのナイがアイヌ語なる事も明らかな事である。（私は東京つ子を以て自任してゐるが、秋田雨雀氏などに言はせると、やはり津輕の人間らしい所があるさうである。衣にも食にも住にも餘り意を介しない點などがそれを現はしてゐるのださうである。私の顔が佐藤紅綠氏に似てゐるも、同じ津輕の血だからであらう。）

父の實父の事はいまだによく知らないでゐる。兎に角父は小山内家の養子だつたらしい。私が大學へ這入る時分まで弘前に生きてゐた私の祖母（名を伊佐と言つた）は、父の養母だつたのである。

父は十五六歲の時分に弘前から江戸へ出て來て、醫學を學んだものらしい。父が帶刀結髪の書生だつた時分の寫眞を見ると、先の樫村などといふ人が一緒に寫つてゐる。軍醫になつたのは西南戰爭の直ぐ前あたりらしい。その時分の事だから、いきなり二等軍醫だか一等軍醫だかになつたものらしい。兎に角、それから一等軍醫正（當時は中佐相當官）に

まで累進して、廣島の衛戍病院長から東京の衛戍病院長へ榮轉する際に急に死んだのである。行年三十八歲（私が丁度その年である。）明治十八年二月二十六日の出來事だつた。

　父に別れた時、私は五つだつた。妹の八千代は三つだつた。外に伍能な九つになる姉があつた。母は幾つだつたか、兎に角まだ若かつたらう。三人の幼兒を抱へて、暫くは呆然としてゐたさうである。父の死はそれ程急だつた。愈々廣島から東京へ歸任する事になつたので、どこかの送別會に臨んだ、その席上で氣持が惡くなつて、家へ歸つて來ると、直ぐ喀血して死んだのである。それは、私と妹とが生れた大手町二丁目の家だつた。

　葬式は廣島で行はれた。父の遺骸は比治山の陸軍埋葬地に葬られた今でもそこに墓がある。碑文は長三州の筆で、長い文章の終りに「孝子薫掩涙建之」としてある。併し、その時分の私にはまだ父の死といふ事が分からなかつた。自分には父がないのだ。父はもう死んで了つたのだといふ事が分かつて、ほんとにその悲哀を感じたのは、小學校へ行くやうになつてからであつた。

　母は葬式を濟ますと、直ぐ私共を連れて、汽船で東京へ歸つて來た。そして、改築をしかけてゐた東京の宅（それは父が明治六年頃に買つた家だつた）の改築をやめて、その儘そこへ住む事にした。尤も、一軒の大きな家を二つに切つて、私達はその平家の方に住んだのである。そして、二階家の方は人に貸す事にしたのである。これらの事は總て亡父の先輩たる石黒忠悳氏の勸告に依つたものらしい。石黒氏は親切にも父の遺産調べにまで參與して、私達に後顧の憂なからしめようとした。この頃、古い文庫の中を調べて見たら、その時分私の家の財產狀態を時々石黒氏に報告する帳面のやうなものが出て來た。私はそれを見ると、この頃石黒男爵に一向御不沙汰をしてゐる事がひどく申譯のない事のやうに思はれて來た。

　亡父は三十八で死んだ人としては——しかも自分一代で作つたものとしては——可なりな財產を殘したのであつた。私達母子四人はその當時から、私が大學へ這入る時分まで、殆ど二十年の間座食したのであつた母が若し財政に巧みな人であつたか、私が若しもう少し早く物心がついてゐたら、私の家は今でも父の遺產の一部を保ち續ける事が出來たかも知れない。併し、私の母は派手好きな江戸つ子で、財政の道などにはまるで暗かつた。その上、母は父が私達の後見として殘した人達を、兎角に嫌たがつた。それが爲に、私が大學の二年になつた時分から——富士見町の家と地所とを賣つて、巢鴨へ家を新築して住んでから間もなく——私の家はひどく困るやうになつた。私と妹が人の世の苦勞をし始めたのもその頃からだつた。

　私の母は二百五十石程を領した舊幕臣小栗信の長女だつた。母は私共の小さい時分に、小栗上野之介の話をして、あれも自分の家の分かれだと言つた。母の生家は江戸の切繪圖にも出てゐる。私達が子供の時分鳴らした髯の長い公使に青木周藏といふ人があつた。あの人の屋敷か、

小栗家のあとだと母は言つた。上六番町だか下六番町だかである。

母には同胞が大勢あつた。男の同胞はみんな不出來で早死をしたが、女の同胞は私の父の世話で、それぞ〳〵相當なところへ嫁に行つた。父の世話だつたから、嫁入り先はみんな軍醫だつた。一二年前に朝鮮總督府醫院の院長をやめて、今は市外大久保の百人町に閑居してゐる軍醫總監の藤田嗣章がその一人である。藤田の長男嗣雄は法學士で、この頃陸軍省の參事官になつた。次男の嗣治は西洋畫家で、今西洋に行つてゐる。軍醫監まで進んで、陸軍をやめて、今では廣島で病院を經營してゐる渡邊泰造、これが私の第二の叔父である。渡邊の長男旭は慶應を出て、今は大阪で紡績の會社に出てゐる。次男滋は法學士で藤本ビルブロオカア銀行の大阪本店にゐる。三男寛は京都の醫科大學にゐる。多分一等軍醫正で陸軍をやめたと思ふが、今は新潟で病院を經營しながら市會議員などになつてゐる島村信司、これが私の第三の叔父である。藤田の叔父にはまだ娘が三人あつて、それが何れも軍醫の嫁になつてゐる。渡邊の長女は陸軍砲兵大佐の妻になつてゐる。

さういふ風だから、私の家はひどく陸軍と緣故が深かつた。父が死んでからも、幼年の私が年始に廻る家はその頃の川上中將だの高島中將だの大島(久直)少將だの野崎少將だの、さういつた人達ばかりの家であつた。私が中學時分に軍人志願だつたのは、強ち日淸戰爭の影響ばかりではなかつたのである。

幼年學校の入學試驗に二度落第して、軍人志願を思ひ諦めた私は、實際何になつて好いか分からなかつた。私が高等學校の文科を受けは、全く或偶然な動機からであつた。勿論、親戚にそれを賛成する者は一人もなかつた。親戚はやはり私を軍醫にしたかつたのである。少くとも醫者にしたかつたのである。

併し、私の死んだ父は、私を醫者にしようとは思つてゐなかつたらしい。勿論文學者にしようとは思つてゐなかつたらうが、醫者にしようとは思はなかつたらしい。

私の父は美しい人だつたさうである。そして、非常なおしやれだつたさうである。毎朝顔を洗ふのに三十分は掛かつたといふ話である。冬でも蝙蝠傘をさして歩いたといふ話も傳はつてゐる。それから、下手な癖に、字や畫をかく事が好きだつた。畫箋紙や絹本にいたづら書をしたのが、いまだに私の家に澤山殘つてゐる。「全天樓」とか「輝堂」とかいふ號を彫つた石印も澤山殘つてゐる。漢詩も作つたらしい。歌も讀んだらしい。端唄なども作つたらしい。西南戰爭の時に使つた手帳を見ると、野戰病院へ收容した負傷者の表などが書いてある間々に鉛筆で歌が澤山に書いてある。骨董も好きだつた。その方の遺產も大分あつたのだが、それはもう大抵私がなくして了つた。併し、廣島で澤山買ひ込んだ山陽などは大抵僞筆物だつたところを見ると、餘り鑑識は高くなかつたらしい。

兎に角、餘程の道樂者だつたらしい。勉强もしたが遊びもしたらしい。忘れもしないのは、私達が子供の時に骨牌のやうにして遊んだ日本各地

の藝者の寫眞である。それは數にして四五十枚もあつたらうか。いづれも父が實見したものと見えて、寫眞の裏には一々自筆で、女の名や年などが書いてあつた。

母は酒も飲まず煙草も飲まなかつたが、遊藝や芝居は好きだつた。若い時から後家を立て通した人だけあつて、役者を招いたりなどした事は決してなかつたが、富士見町にゐる時分、よく藝者は家へ遊びに來た。私がまだ富士見町に藝者屋がほんの一二軒出來始めた時分の事だつた。私が少しでも先代菊五郎や九代目團十郎の舞臺を知つてゐるのは、全く母のお蔭である。母は私を可愛がつてゐた。芝居へ行く時なども、妹は連れて行かないでも、きつと私は連れて行つた。

私の家は可なり人出入の多い家だつた。なんにも用のない家だつたから、用のない奥さん達が方々から集まつて來て、毎日琴を彈いたり三味線を彈いたりした。併し、私が高等學校へ行くやうになつてから、さういふ事は全くなくなつた。

私が今まで自分を愛して呉れた母といふものに段々反抗して來て、今まで侮蔑し切つてゐた妹といふものを段々愛し始めたのも、その頃からだつたらう。

母は段々に私といふものを失つて行つた。勿論、妹には始めから餘り愛がなかつた。母は寂しい愛を悉く低能な姉に傾け盡した。

その内、母は不治の病にかかつた。脊髓癆といふ病氣である。(小せんの病氣と多分同じである。)とう／＼足が立たなくなつて了つた。ぶく／＼肥つてゐた人がまるで痩せて了つた。十二三年その病氣に苦しんで、とう／＼轉地先の逗子で死んで了つた。息を引き取つたところは大杉榮君が斬られた時這入つた千葉病院である。母は姉の事ばかり言ひながら死んだ。四年前の事である。

私は私達兄妹が父や母から何を貰つたか、それを自分で言ふ事は出來ない。それは不可能な事である。唯、私達兄妹の父母はこんな人だつた。そして、私達兄妹はこんなものになつた――と、唯それだけを言ふ事が出來るだけである。

▽幼な時分の事ども

岡田八千代

振り返つて見る私の幼な時の生活にはかなりに種々な人が立ち混つてゐる。

父は私が生れて一年と二ケ月になつた時其赴任してゐた廣島で、もう翌々日東京へ歸るとなつた晩に俄かに死んでしまつた。

私達は間もなく故郷の東京へ歸つて來て富士見町の家に落着いたのであつた。私達の住んだ方は平家建で、隣りの三階家は軍人でなければ貸さぬといふ條件つきで貸家にしてあつた。二軒の前を細い溝が流れてゐた。その溝に小いさな板の橋が掛かつてゐて、私達は夫を渡つては學校

に行きお稽古に行つた。そして夕方歸つて來ると、此橋を渡つた處にある門のがら〳〵戸を開けて其敷居に乘つて門を動かして遊んだ。

私はおしやべりでは無かつたけれど、かなりなお轉婆だつた。離れの家根の上へ乘つて、葡萄も取つた。裏の馬屋の側に聳えた梅の木にも上つた事がある。けれ共、一體には從順な娘だつた。只他（よそ）へ行く時足袋を穿くのと襦袢の縫目が背中に觸るのが嫌ひで泣いたのを覺えてゐる。

私達の母は兄には一目おいて居たけれど、私にはかなり酷な母であつた。掃除をするのに障子の一こま一こまを左の手で撫てゝ見てざら〳〵のないやうにしなければならぬといふやうなやかましい事まで云つた。しかし、又私には種々な事を習はしてくれた。踊も三味線も琴もお茶も花も習ひにやつて吳れた。けれども私はそれ等のものを見てゐるのは好きであつたけれど、習つて見ると詰らぬやうな氣がして、よくあくびをしたり、もぞ〳〵してはお師匠さんに叱られた。そして今ではなんにも覺えてはゐない。

此の裏の空馬屋に續いた馬丁室に大學へ通ふ二人の青年が勉强をしてゐた。其一人は色の白い背の高い人であつた。も一人は色の黑い小男である。そして私達兄妹が此人達に口を利くのには、まだ餘りに幼ない頃であつた。三浦政太郎さん。夫が色の黑い方の人の名であつた。そして今では有名な環さんの良人である。

私が一番はじめにほんの少しの間踊を習ひに行つた師匠の家は中坂の中村虎治といふ女師匠であつた。其處の姪に松島お何（なに）ちやんといふのがゐて、私が富士見小學校の高等四年にゐた時、たしか尋常一年位に——其頃の小學校は尋常高等併せて八年制度である——此お何ちやんがゐて、あんまり可愛い顏をしてゐるのと、叔母の虎治が歌昇と云つて三崎座へ出勤するのに連れて子役などに出るので、よくからかつて遊んだ事があつた。これが今の歌扇ではないかと私は思つてゐる。

子供は女芝居を見るものだと云つて能く私達は三崎座へ連れて行かれたものであつた。私達は其處で芝居のいろはを習つたのであつた。學校を半日休んで能くもちのき坂の急なのを下りて三崎町へ行つた。其連れは母と母のお友達のTのおばさんと久（チヤア）ちやんと兄などであつた。久ちやんは私と同い年だけれども、今ではもう理學博士になつて髯（はや）を生してゐる。その久ちやんの乳兄弟に當る、やつぱりTといふ日本畫家の家へも私は能く連れられてもゆき、自分でも遊びに行つた。Tのおぢさんは澤山有名な小說家を知つてゐた。紅葉、眉山、小波、思案、櫻桃などの先生を皆んなお友達に持つてゐた。そしてお正月の歌留多會にはこれ等の人がみんな集つて子供のやうに遊んだ。私達の目からは其頃の紅葉先生などは五十位に見えた。鼠縮緬の襟卷をして碁石投げをしてゐた先生の顏は今でも能く覺えてゐる。中に細かい節糸のくちや〳〵の羽織を着ていつも百人一首の讀方に廻る人があつた。色の白い小男で、眼鏡をかけてゐる。そして讀む節が變に訛つて可笑しいので、お姉さん——T家の令孃——に聞くと、あれは泉さんといふ小說家よと敎へて吳れた。家へ歸つて兄に話すと、「それがお前鏡花さ、知らないのか。蛇喰ひをお讀み。」

と云はれた。それから私はすぐに「蛇いちご」を讀んだ。そしてひどく私は蘆花熱に浮かされた。「新小說」の中に出てゐる小說で、なんでもその時の表紙には小櫻の模樣がついてゐたと思つた。なんでも兄がまだ高等學校の頃である。

もう廿年も昔の事になつた。そして其頃のおぢさんやおばさん達は一ツも年を取らずに自分丈が年を取るやうな心持がする。

(七) 北兄弟

社會評論家 北輝次郎
哲學者 北昤吉

▽我々兄弟の父母から受けた遺傳性

北昤吉

父母祖先其の他周圍から受けた影響を中心として我々兄弟のことを書いて見よとの仰であるが、我々は未だ世間へ紹介される程の仕事もしてゐないから、斯かる仰せは當然御辭りすべき筈のものである。況んや自分で傳記めいたことを書くに至つては、却つて末路を思はせる樣なもので決して芽出度いことではない。併し我々の生れ故郷は佐渡が島といふ一寸奇拔な所であるし、今年は祖先の祭が三つも重なつてゐることでもあるから、故郷や祖先の爲めと思つて聊か書く氣になつた譯である。我々兄弟は佐渡の湊町といふ所で生れた。東は兩津灣が湖水と開けて西は周圍四里に近い鴨湖といふ風光極めて明媚な湖水がたゝへてある。湖水の北には海拔三千八百尺の金北山といふ金の出る山が聳へてゐる。島の小さい割には湖と云ひ山と云ひ道具立ては頗る大き過ぎる。我々は兩津灣の日の出を仰ぎ湖水の一角に夕日を送つて育つて來た。そして暇さへあれば父と共に海へ釣に出掛け、湖水では兄弟で能く鮒を釣つたものだ。又秋には湖水の對岸の自分の家の林へ松茸狩りに行くのが例であつた。

家は名主の家柄であつた。佐渡は金山の關係上代官地であつたから、今日士族は一軒もない。從つて名主で六左衞門といふ屋號をもらひ、帶刀一本を許された自分の家柄は先づ一流と云はなければならぬ。佐渡といへばアイヌの子孫かと疑はれやうが、自分の先祖は尾張大納言の家臣であつたから、此の點、名譽の爲めに一應辯明して置く。併し何の爲めに佐渡へ流れて來たと聞かれると少し怪しくなる。職業は昔から酒造家で通稱「酒屋」で通つてゐる程である。母の家柄も名主の家柄で母の弟たる我々の叔父は現に佐渡選出の山本悌次郎君の參謀格の田舍政治家である。我々は家のことなどには無頓着で育つて來たから自分の職業などからは何等の影響を受けなかつた。唯父が十數年も町長を勤めて德望家であつたから、自分の家はえらいと云ふやうな自惚は充分養はれた。今日我々どもが頗る附きの我儘なのは、こゝに一部の原因がある。父は無學であつたが、非常に情にもろい方で、町の爲めにも、又女の爲めにも可なりの金を費つた。之に反して母は現に健在であるが男優りの氣象で

理性の勝つた方である。我々が中學時代に學校から四里隔つてゐる家へ歸ると、天氣さへ良ければ父と共に釣に出る。漁の多い時には、父は月曜一日學校を休んで釣らないかと誘ふたが、常に反對する者は母であつた。併し父母共に大きな聲の持主である。今日我々が人並以上の物騷な聲を持つてゐるのは、全く父母の賜物である。

我々の町には萩野博士と同門の立派な郷先生がゐた。父は我々を高等小學校入學の年になると必ず先生の塾へ通はせ、中學入學まで四年間漢學と手習ひを學ばせた。家庭では父母から大きな聲でどなられる位なもので字一字と學んだことはない。今日兄も僕も文章を書けば漢文調に傾くのは、一に郷先生の影響である。

兄は極めて早熟で、小學時代と中學時代と二度も學年を飛び越した程である。廿三歳の時に書いて發賣禁止された「國體論及び純正社會主義」は既に十八歳の時「佐渡新聞」へ連載したものである。兄の遊學には父は大反對であつたが、祖母が父の就寢の間に船に乘せて上京させ、學費も祖母が負擔した。祖母は眞宗の篤信者で、地震の時でも、火事の時でも、先づ佛壇で念佛を申してから騷ぎ出すといふ風であつた。僕が今日禪の信者であり、兄と弟（北昤目下新日本社にゐる）と共に猛烈な日蓮信者となつてゐるのは祖母よりの隔世遺傳かも知れぬ。母は今日でも無神無魂論者で盗賊が這入れば追つかけたりする程の野性を持つてゐる。實に我々の亂暴な性質は母系から來てゐる。父も祖父も大きな體格で素人角力位は取つたものである。我々兄弟は母が小さい爲めに退化して了つたが、併し力筋は爭はれないもので、僕などは小作りながら中學當時は角力でも擊劍でも端艇でも第一選手で佐渡の寒さを袷一枚で通して、大に父のプライドを滿足させてやつた。又父も祖父も大の酒豪で皆酒で夭逝した譯であるが、我々が多少左のきくのも遺傳性かと思ふ。兎に角父は我々を小學當時に塾へこそ通はせたが、中學當時は成績の席次も尋ねず、却つて缺席を勸めた位であつたから、我々は何等教育の御蔭否教育の害毒を被つてゐない。父は自分の豪酒と蓄妾を辯護した譯ではあるまいが、『一人前になつたら酒も女も構はないが夫れまでは斷じていかぬ』と云ふ位が父の唯一の訓戒であつた。現に僕などは、酒こそは少々飲むが、もう一方は極めて無粹な方であるから、未だ一人前とならない證據である。要するに我々は父母の遺傳性と佐渡の自然の力とに依つて善くも惡くも養はれたのである。

父は僕の十八歳の折死んだので、其の後は酒造業も止めて後事を前記の叔父に一任して、兄弟三人で母と共に上京し皆一度早稲田の門をくゞつて見た。併し兄は聽講生たること半歳にして失望して去り、弟は病氣の爲め退學し、僕のみ無事卒業して、其の緣故で早稲田で飼はれてゐた事もある。兄は十數年前から支那革命に關係して產を破り、又其の著作は「國體論」以後昨年の「支那革命及び日本之外交革命」に至るまで四種共發賣禁止となつてゐるから、我々の貧乏に對しては政府の責任も決して輕くない。殊に僕までが少し筆を執れば其の筋から睨まれると來ては、遂には佐渡にでも歸つて釣でも遣り度くなる。僕は此の機を利用して『我が佐渡は昔こそ罪人の流し場であつたが、今では日本犯罪者最も少なき蓬萊島であり、我が祖先は何れも官尊民卑の良民であつた』と辯明して置く。

(八) 松岡兄弟

醫學博士 井上通泰
貴族院議長 柳田國男
海軍大佐 松岡靜雄
畫家 松岡映丘

▽嗚呼我父母

醫學博士 井上通泰

私達は男ばかりの八人兄弟で、女の姉妹は一人も無い。次男と四男五男とは共に夭死したので、殘つて居るのは五人である。長兄鼎は家を繼いで松岡を名乘り、今千葉縣で醫者をして居る。此兄の修業時代は一家が最も窮迫して居た時なので、家からは全く補助を受けずして東京大學醫學部の別科に入つて醫師となつたのである。後に父の後を繼いでからは弟達を育てたり敎育したりする爲めに、自分の一生を犧牲にして惜しまなかつた人である。私は三男で、十二の歳に親戚の井上家に養子に行つたのである。柳田國男は六男で、彼れも法科大學を出た後に柳田家を繼いだ。七男は松岡靜雄と云つて今は海軍大佐になつて居る。畫を描く松岡輝夫(映丘)は一番末である。

父は維新以前は姫路藩のお抱へ儒者で、非常に精神上の優遇を受けて居たから、從て物質上にも困るやうな事はなかつた。私は其の一家が未だ盛んであつた時分に、姫路の官舍で生れたのである。(他の兄弟は皆、父の鄕里兵庫縣神崎郡辻川で生れた。)それが廢藩置縣になると職を失つて、自分のものと云つては多勢の子許りで、土地も家も金も無い身の上となつた。それに父が久しい間煩つて居たものであるから、一家は隨分窮乏してゐた。であるから前に云つた長兄の如きは、丁度修業盛りであつたが充分な敎育も受けられないので、中には友人などからの補助もあつたらうが、全部負債で修業した。私にしても若し養子にでも行かなかつたら、或は今日高々比較的出來の好い郡書記位に止まつゐたかも知れない。之れは餘談であるが、斯く一家が非常に貧乏で、一枚の着物を賣つて十日なり半月なりの生活費に充てなければならぬ境遇にありながら、兩親は決して我々小さい子供に物價を知らせなかつた。私にしても東京へ遊學に出て來る迄は、自分で物を購つた事が無かつた。東京で五錢燒芋を買つて澤山あるのに驚いた事さへある。私は此の事を大變心ある敎育法であると思つてゐる。

父の母親即ち私達の祖母と云ふのが、婦人でありながら偉い學者であつた。辻川と云ふ僅か五十戶位しか無かつた僻村に生れて、一生一歩も其村を離れた事の無い人であるが、漢學は勿論國學もやれば佛學も出來た、のみならず算數にも通曉して居た。或家の庫が閉つて何うしても開かないのを、祖母が算盤で理詰めに開けたと云ふ俗說が鄕里に遺つて居る位である。詩も文章も歌も立派なものがある。更に淨瑠璃の作さへ遺つて居る。しかも其の國學なり漢學なり佛學なりが皆獨學で、一人の師匠も無かつたといふのである。元來祖母は家付の娘で養子を迎へたが、舅と姑と氣性が合はぬ爲め離緣となつて其間に儲けた父を女の手一つで

育てた。父が九歳の時から祖母は自ら學問を教へた。であるから二人は母子であると同時に師弟の間柄であつた。父が十三歳の時四五里南の姫路へ學問修業に出ると、祖母は幼くして他郷に出た父の身の上を案じて度々手紙を父に寄せた。其手紙は「南望錄」と云つて今に保存されて居るが、全部漢文である。こんな風で祖母は普通の女の藝能には餘り熟達して居なかつたが、當時行はれた凡ゆる學問に精通して居たので、村民は勿論近村の坊さん達まで、屢々講義を聽聞に來たさうである。傍ら社會問題と云ふと大仰であるが、村の問題にも沒交渉でなかつた。辻川附近は貧乏村で、殊に昔から墮胎の盛に行はれる所であつたが、祖母が墮胎の人道に外れた所業であると云ふ事を說いたので、各村共に忽ち其惡風が熄んだと云ふ話が傳へられて居る。土地で唐詩選の加留多が行はれたり、豆腐屋や焙烙屋の主人までが詩を作るのと皆祖母の感化である。其祖母の子として、父は十三歳で母の膝下を離れ、姫路に學問修業に出たのであるが、固より學費を持つて行つた譯でないから、人の家の世話になつて遂に一廉の儒者となり、後に姫路藩のお抱へ儒者に登用されたのである。辻川の寒村に生れた一布衣が、藩の儒者に召されたのは非常な拔擢であつたに相違ない。

私は十二歳までしか實父の傍に居なかつたし、其間も父は多く病床の人であつたから、其の性格や人と爲りに就ては弟ほどに能く知らない。唯非常に記憶のよい人で、他から故事などを訊ねられると、速座に五十も六十も列擧する事が出來た。一生讀書に沒頭し了つた人で、世間の事は何も知らなかつた。死ぬまで錢の勘定が出來なかつた一事に見ても、大凡其の人柄が分るであらう。「嫁に來てから此年齢になるまで、お父樣は一度だつて食事について選り好みを云はれた事は無かつた」とは母が晩年能く我々に語つた所である。衣服などでも母が留守で換へてあげる人がなければ、何時でも一つものを着て平氣でゐた。姫路に居た時の話であるが、父の知人が町家を通ると、或家の玄關に父が立つて居るのを見た。其人が二時間程して再び其家の前を通ると、未だ父が立つて居る。傍に近寄つて、如何した譯ですと訊ねると、其家の主人が父の門人であるから訪ねて來たが、一度音なつても取次ぐ者が無いので、其儘佇んで人の出て來るのを待つてゐるのだと答へた。其處で知人は更めて案内を乞ひ其由を告げると、全く取次の者が父の案內を乞ふ聲を聞き洩したのである事が知れ、其處の主人は非常に恐縮して、其失禮を詫びたと云ふ話がある。私が徒町に居た時、或夜盜賊が忍び込んで種々の物を持つて行つた。翌朝家人がそれと知つて騷いでゐると、父が傍から盜賊の這入つたのは今曉二時頃だつたと云ふ。何うしてそれをお承知かと訊ねると、二時頃玄關から臺所を通つて裏手へ手ランプを持つて行つた者があるのを知つてゐるからだと答へる。では何うしてそれを家人に知らせて下さらなかつたんですかと反問すると、泥棒とは思はなかつた。唯不思議の人も居るものだと思つてゐたと云つた。こんな氣風で、父は讀書の外には野心も何も無かつた人であつた。

斯ういふ世事に迂遠な、金錢に恬淡過ぎた父の妻として、又多勢の子

供を貧困の中から育てなければならなかつた母は、しつかりした勝氣の積極的な婦人であつた。不幸な人で早くから母に死に別れ、貧乏な家に育ち、家庭で教育を受ける事も出來なかつたから、一生儒者の女房であつたに拘はらず、文字は無かつた。然し裁縫や其他の所謂女藝には巧みであつた。それに記憶は父と同じく極めて好く、書生が四書などを讀むのを傍で聽いてゐて、其處が違ふ、此處は斯うだと能く注意してゐた。之れが悉く記憶から言ふのである。又算術が大變上手であつたが、之れとて算盤に置くと云ふのではなく、皆暗算である。加減ばかりでなく隨分複雜な乘除などを迅速に正確にやつた。父が全然他人と沒交涉な、自分丈けの生活をして居たに拘はらず、母は義俠心も强く、隨分人の世話をした。知り合ひの間では、何か面倒な事でも湧き出すと、松岡の家へ行つて解決して貰はうと言つた風であつた。要するに父と母とは其性格に於て、黑と白と云つたやうに鮮かに、相反した極端な夫婦であつた。唯共通な處は兩人共非常に記憶力が好かつた事である。其間に出來た我々兄弟が、父と母との性格の何方を多く分けてゐるかは、兄弟の性質を見れば直ぐ分る。輝夫(映丘)は子供の時にはぼんやりしてゐて馬鹿ではないかと云はれたものである。これは少くとも小供の時には、寧ろ父に多く似てゐたかと思ふ。國男は小供の時から何事でも好く出來て、兄弟中で一番怜悧であつた。靜雄は小供の時から一番勝氣であつた。

父はそんな性格の人であつたから、子供の教育などに就ても極めて自由な態度を執つてゐた。世間普通の父親に見るやうな、無暗に矢釜しい底の「嚴格」さは持つて居なかつた。然し或る點では極めて嚴格であつた。私は寐ころんで本を讀んでゐて叱られたのと、本居宣長先生の事を宣長と呼び捨てにして叱られたのと、前後二度叱られた記憶を持つてゐる。宣長先生の如き景仰すべき大學者を、小賢しくも呼び捨てにするのは許すべからざる不謹愼だと云ふのである。こんな點になると父も大變矢釜しかつた。

私は祖母から、文字の手ほどきとして「いろは」と「源平藤橘」とを教へられた。それが濟むと父は私に『日本紀』の「神代の卷」を假名書きにしたものを渡して讀めと云つた。これが私の書物を讀んだ最初である。それも父が教へて呉れずに、自分獨りで假名を拾ひ〳〵讀んだのである。一體父は廢藩置縣後は姫路から辻川へ歸つてゐたが、別に衣食の道が無いので、近村の者などに書物の講義などしてやつて居た。それにも拘はらず、私には素讀をして呉れなかつたのである。「神代の卷」が濟むと『國史略』と云ふ片假名交りの國史と、分らない字があつたら之れで引けと云つて字引を與へられた。そして矢張り素讀をして呉れなかつた。然し此の最初に「神代の卷」を讀ました事と、分らぬ字は字引を引けと云はれた事とは、私の將來に大變影響を與へた。私は生長するに及んで漢學の塾にも入り、又自分の專門を研究する爲め洋學も修めたが、然かも拜外的の氣風にならなかつたのは、最初に讀まされた書物が「神代の卷」であつたからであらう。字引を充てがはれた事は、私に獨學の氣風を與へて呉れた。今日私の有する歌學、古典學の智識は、父

が教へた獨學の方法で得たもので一字半句といへども人から教を受けたもので無い。

▽兩親についての感想

松岡映丘

私は末子であるし、又幼少の時に兩親に死別れたのであるから、父母について知つて居る事も少ければ、家庭の教育を受けた分量も僅かである。だから取立てゝ言ふ程の材料も無いのであるが、唯自分が東西を知るやうになつてから兩親に死に別れた迄の時期に、私の眼に映じた事柄について話して見やう。

父は世事に就ては極めて無頓着の人であつたが、子供の育て方についても日常の行儀作法などの細節には餘り干渉せず、或る部分には全く放任的であつた。然し人道とか國家とか云ふ風の問題になると極めて矢釜しかつた。例へば歴史上の講話をする場合に、事が苟も皇室に關すれば忽ち坐り直して襟を正し、言辭をも更めた。又忠臣義士の事蹟などは極めて熱誠なそして嚴粛な態度で物語るのが常であつて、もし奸臣君を惱し奉る條に至れば、滿面朱を濺いで憤るのであつた。母は別段學問の素養は無かつたが、日常の行儀作法等、凡て父の放任的な部分には苛酷と思ふ程嚴格であつた。私は末子ではあり、母が年寄つてから生れた子であつたから、他の兄弟に比べて末子的に甘やかされ、可愛がられた方である、でも隨分日常の作法などについては嚴しく躾けられたものである。

父は讀書三昧で生涯を送つた人で、學問の上では隨分博覽強記であつたが、世事に就ては極端に迂遠であつた。計數の觀念に乏しく、金錢の智識などは皆無であつた。父が如何に正直で世事に暗かつたかといふ事を證する一例がある。私が十二三の頃である。或日父が獨り他からの歸途、辻車を雇て歸て來て、家人に命じて約束の賃錢を支拂はしめたが、あとで母がその賃錢の餘りに高く、車夫に乘ぜられた父の迂闊を笑つた。其時父の辯解は次の如きものであつた。自分も都會の車夫の狡猾を聞いて居るから、決して車夫に乘ぜられる樣な愚を演ぜぬ。豫め車夫が請求した時、高過ぎはせぬかと念を入れたら車夫が決して高くはないと言つた。既に商賈人の車夫が言明して居る、汝等の門外漢が口を出す餘地はないとて、却て家人を叱責した。全く父は世の中に懸引なるものゝ存在を一生知らなかつたのである。そんな父の性格が遺傳したものか、或は幼少の時分に父の感化を受けたものか知らないが、自分にも稍もすると利害の觀念を欠き懸引の巧ならぬ性格がある樣に思ふ。

反對に母は日常の事には記憶もよければ、又理解もよかつた。物事を決して呑込み違ひする事の無い、神經質なそして勝氣な嚴しい氣性の人で、何事でもはつきり解決を附けなければ承知が出來なかつた。であるから何方かと云へば、他人からは親しまれるよりは畏敬される風であつた。自分に兎角溫い雅量や襟度を缺いて、詰らぬ事に頭を消費したり、

俗事をも相應に處理して行けると云ふやうな、藝術を天職とする自分としては不用な、寧しろ好ましくない性癖があるが、之れなどは寧ろ母から受けた感化ではあるまいかと思つてゐる。

父は幼少の私に向つて、いろ〳〵の話をして呉れたが、或る時は子供の頭腦に這入り易いやうに圖解して見せて呉れた。つまり繪話にして呉れたのである。又自分は五六才の頃から繪が好きであつたから、何かお祭とか芝居とかを見て來ると、父は直ちに其模樣を描いて見よと要求した。又父から聞いた話をも一々繪にせよと命じた。で私が子供の感じで繪を描くと、父が何にかと批評して呉れた。こんな事が私が今斯うして畫を書くやうになつた動機ではないかと思ふ。

一體私は父が晩年の子であるから、他の兄弟のやうに自分の手で十分に教育する根氣も無かつたし、又其頃漸く學校教育が盛になり出して、學齡以前から子供に家庭などで餘りいろ〳〵書物を讀ませたりする事は却つて兒童の圓滿な發育を妨げると云ふやうな意見を聞かされたりした爲めもあつて、自分は兄達と違つて、家庭で儒學や詩文の教育を餘り受けなかつた。其代り其當時既に家督を長兄に讓つて隱居してゐた父は、閑暇だものだから毎晩私に一つ宛噺をして呉れた。これは四つ位から十四五の時まで毎晩殆ど缺かした事が無かつた。初めはお伽噺をするのであつたが、何にしろ毎晩の事なので種が盡きたし、私も段々生長するのでそれから歷史譚に移り、終には水滸傳とか弓張月とか云つた稗史小說や、白縫譚とか諸國物語のやうな草双紙、さては近松や出雲の院本迄に及んだのであつた。此事は自分が現在懷古的趣味を有し、故事や傳說に興味を有つに至つた原因であると思つてゐる。

(九) 鳩山兄弟

辯護士 鳩山一郎
法學博士 鳩山秀夫

▽父は德育母は智育

鳩山一郎

僕等の幼時の學問の方の教育は、主として母がして呉れた。今日でも母が僕等に書いてくれた算術や代數等の雜記帖が長持に一パイ殘つて居る。小さい時から朝は四時頃に起されて、數學や英語を教へて貰つた。算術は前の晩に題を書いてくれて、驗算まで三本位ちやんと揃つて、机の上に置いてあつた。僕等がそれを遣つて居る間に、母は朝の身仕度を整へて二階から下りて來て、其成績を見て直し、それから英語を教へて呉れるのであつた。漢學は小學校を卒へてから教はつたやうに覺えて居る。

僕等の性格を作る方は、學問の教育とは反對に、主として親父(おやぢ)が受持つて居つたらしい。碁や將棊やトランプなどの遊戲をする間に、僕等の品性を養ふ事を努めた。例へば、碁をする間にも待ツ手に絕對にさせない、他人の待ッ手は心よく承知してやるといふやうに、微に入り細に涉

つて注意した。遊戯中一寸でも誇張した言葉を使ふとか嘘でも言ふと『嘘は泥棒の始り』といふやうに訓戒したのであつた。

大學に入つてから後は、母に教育を受けるといふ事は段々になくなつて來たが、父には時々英語を敎はつたり法律を見て貰つたりした。

親父は僕等に對しては常に最も完全な人間として接しようといふ心掛をして居つた。母も亦父を一點の非難なき人間として、僕等の前では極端にまで褒めて居つた。今から考へると、斯かる態度を取るといふ事は非常に苦しい事であつたらうと思ふ。家庭の中には女中や書生などが居るから、彼等に對する態度まで、僕等の品性の養成といふ事から餘程注意を拂つて居つた。大學を卒業する頃までは特に注意して居つたやうである。

僕は隨分と遊びたい方であるから、若し放任されて居つたなら、高等學校の入學試驗には一度や二度は失敗し、大學の學課も辛かつた事と思ふ。然し前に述べたやうに母から教育されて居つたから極く樂であつた。小學校や中學校は、内で敎はつたよりは程度がずつと低いから、先生の言ふ事を聞かずに他所見をして居る事もあつた。高等學校の入學も極く樂で、大學の過程も比較的呑氣であつた。

弟(秀夫)の方は頭が特別はいゝのであるから、放任して置いてもあの様に始終首席で通して行くであらうが、僕の頭は弟のとは違ふのであるから、母の努力がなかつたら、一度位は乾度しくじつて居つた事と思ふ。

大體、母の方が學問の教育を受持ち、父の方が德育を主として居つたといふ譯になる。父の所謂德育は大抵夜の娛樂や日曜の遊戯の間で行はれた。日曜は全く『本當の日曜日』であつて、『本日不在』といふ札を門前に掲げて、一日中來客を斷つて僕等と遊んだのであつた。テニス、器械體操、玉突、クリケット、相撲、碁、將棊、トランプ等皆親父は僕等と一所に遊んだのであつた。然し散歩以外の外の娛樂、例へば芝居や活動寫眞などは一切嚴禁された。散歩も矢張り父と一所にした。又友人の家庭や親戚さへも訪問する事を禁ぜられた。其代り内へは幾人友達を連れて來ても構はなかつた。だから時には友達が十數人も遣つて來て、親父等と一所に遊んだ事があつた。詰り家庭内より外では何等の感化を受けさせないといふ方針であつた。斯ういふ有様であつたから、僕が初めて代議士に當選した時、或新聞の記者は『鳩山は大學を卒業して初めて上野公園へ行つた。而して「東京は廣いなア」と驚いたさうだ。斯んな世間知らずを衆議院へ送つて何になるものか』と言つた事がある。此批評は一面に於て當つて居るが、要するに、斯かる教育の方針は果して良いものであるか惡いものであるといふ判斷は、之を世の中の人に任かして置かう。

これで子供の教育といふものはなか〳〵六ケしいもので、僕等が一寸でも行儀の惡い事をすると、僕の家の子供などは直ぐ其の眞似をする。言葉癖など特に眞似たがるものである。僕等の父母は此點を餘程注意したものと見えて、亂暴な言葉とか、怒つた態度とか、泣いた顔などは一

度も見受なかつた。斯らいふ細かい事まで注意するといふのは非常に辛かつた事と思ふ。僕は今日子供を持つて見て猶更ら父母の此深い恩を有難く思ふて居る。

▽兩親の經歷

法學博士　鳩山秀夫

祖父は博房といふて、岡山縣下美作國勝山藩に任へて、學問といふよりも武術の師範をして居つた。

父は安政三年の春江戸の藩邸で生れたので、幼時は海保塾で漢學を學んだ。父が海保塾にはいることになつたに付ては一寸立志の動機とでもいふやうな話がある。始め父の兄に重太郎といふ人があつて、性頗る穎悟十歳餘にして頗る大人の風があつた。祖父は此重太郎こそ鳩山家の名を擧げるものと、大いに囑望して居つたところ、不幸にして夭折した。父は祖父の落膽を見るに忍びず七つ八つの惡戯盛ではあつたが自ら祖父に請うて海保塾に入り、兄重太郎に代つて鳩山の家名を擧げ祖父の心を慰めやうと決心したのであつた。

明治三年父は歳十五で、藩主の選拔に遭ふて大學南校の貢進生となつた。後ち開成學校に進んで主として法律を學んだ。其時分天顔に咫尺し奉つて泰西法學通論を進講した事もあつた。前後を通じて常に首席ではあつたが一番年少なので、よく燒きいもを買ふ使にさせられた事などがあつたさうである。又温順しかつたので、皆んなからおねいさん〳〵と呼ばれて居つたさうである。其時分の同級生には故の小村伯菊池武夫氏それから穗積陳重男などが居られた。

明治八年に法學生第一の成績を以て、米國留學を命ぜられ、ニューヨークのコロンビヤの大學に入り、更に十年ニューヘブンのエール大學に移り、十一年に法律學士となり十三年には博士論文を呈出して法律博士になつた。此論文は『ローマの家族制度と日本の家族制度の比較』といふので、卒業式の時卒業生を代表して演說した有名な題目である。

恰度米國留學央ばの頃、鳩山家には突然の災難が起つた。それは祖父の突然の死亡である。遠き異境の地に於て此報を聞いた父の落膽と煩悶は非常なものであつた。父の立志の動機が、前申した通死んだ兄に代つて大人物となり祖父を喜ばせようといふのにあつたところ、其肝心の祖父が死んだのであるから、其失望と悲歎とは想像するに餘がある。併しながらいつまでも泣いては居らなかつた、やがてもう少し大きい處へ眼をつけて研究を繼續し、立派なる成績でエール大學を卒業することを得たのである。

明治十三年に歸朝して後、法科大學に教鞭を取つて居つたが、十五年の卒業式の時に、米國に六年も居つた關係で自由といふ思想を抱いて居るところから、佛蘭西革命の話や教育當事者の無定見を嘲罵などしたのが問題になつて、危險だなどと、小言を言ふものがあつたので、遂に大學

を辭職するに至つた。

大學を辭職すると直ぐ辯護士の試驗を受けた。其の時周圍の人々は、米國の博士ともあらう者が辯護士の試驗で落第してはいけないと頻りに止めたのであるが、父は元來、辯護士といふものは社會に重要な職業であるから、第一流の人が之に從事して其地位を高めねばならぬといふ思想を有つて居つたので、敢て之に臨んだのであつた。此試驗に及第すると直ぐ其組合會長に選ばれ、次いで東京府會議員となつた。猶十八年に外務大書官に擧られ取調局長をも兼ねた。十九年には再び教育界に入つて法科大學の教頭になり、廿一年には法學博士を授けられた。廿二年には條約改正中止の政變あるに方つて、大隈外務大臣と共に掛冠して再び野に下つて辯護士の業に從事した。其後或は衆議院議員に當選し、或は衆議院議長となり、或は外務次官となり、或は憲政黨の院内總理となり、或は米國エール大學から簡選されて大博士となりなどしたのであつた。之を要するに父は大體に於て其前半生は教育に從事し、後半生は政治家として働いたのであつた。そこで、兄一郎は恰度父の後半生の仕事を續け、私は父の前半生の志を繼いで居るやうな譯けであるが之は何も父の命令に出でたといふ譯ではなく、各自の趣味性行等から自らさうなつたのである。

母は信州松本藩の大參事であつた多賀努といふ人の女で、小さい時から記憶をよくして居つたが、十二歲の時竹橋女學校に入り、後女子高等師範を卒業したのである。學校に居る間に加藤錦子さん丸橋光子さんと共

に文部省から米國留學を命ぜられたが、後に當局者に變更があり『女子を留學させるのは餘り突飛だ』といふやうな理由で留學命令は取消されてしまつた。それまで母は一年二年とずん〳〵飛び越へて進級して居つたのであるが、留學の命令が出てから取消されるまで殆ど半年間學校を休んで居つたから、再び學校へ行くとずつと學業が遅れた譯になつた。それを取返す爲めには母は隨分骨を折つたものであつて消燈時間後には袋戸棚の中へ入つて燈火一本を相手にして勉強したさうである。

思ふに父が祖父の訃を聞いた時と、母が留學の命令を取消された時との心持は、いづれも大なる失望落膽であつたが、それに撓まず屈せず狩らしい勇氣を振り起して一層の努力を續けたといふ事が、父母兩人の強い意思と人格の力とを現はして居るものであらうか。私共も此エピソードを時折思ひ起して刺戟を感じて居るのである。

母は子供の教育には隨分と苦心をしたもので、此點に就て御話すれば極めて長くなるが、それは既に兄が御話したさうであるから總て述べますまい。元來私は生れた時は非常に弱い兒で、醫者からは見放されて居つたのであるが、母の丹精で漸く乳がすへるやうになり今日まで生きて居る譯である。

(十) 谷崎兄弟

文學者 谷崎潤一郎
文學者 谷崎精二

▽私の家系

谷崎潤一郎

私は、私の家系について、何等の誇るべきものも持たない。私の父祖のうちに、えらい人間が出た事もなし、さうかと云つて、家柄がいゝと云ふ譯でもない。私の家は、代々江戸の素町人である。

若し「江戸つ兒」と云ふ事に、誇るねうちがあるとすれば、私の一族は父の系統から云つても、母の系統から云つても、こゝ一二代は純粹に下町の江戸つ兒である。ただし、私の妻は東京生れではないから、私の子の代になつて、初めて江戸つ兒の血が不純になつた次第である。

私の祖父は、私の三歳の時に死去したので、どんな人であつたか、全く覺えがない。祖母についても、特別に此れといふ感想はない。

父も平凡な、眞面目な、堅儀な町人風の人間である。

母もやつぱり平凡であつた。母は娘の時分比較的裕福に暮したので、相當に教育はあつたやうだ。私は子供の時分、十八史略の分らない所を母に質問して教はつた事を覺えて居る。彼女は非常に潔癖で、便所から出て來ると、兩手の指をホウノキズミで擦つて、鹽をつけて洗つて居た。

先づこのくらゐである。外に何もない。甚だ貧弱な家系である。

▽父母の事

谷崎精二

私の父母は共に東京で育つた平凡なブールジョアである。父は昔神田川で代々屋號を玉川と云つた酒問屋の三男に生れて谷崎家へ養子になつた身の上である。玉川と云ふのは江戸時代に屈指の酒問屋で、藏が十幾つとか並んで居たと云ふ話を私は父にだか、他の人にだか聞いた事がある。然し父の兩親が早世した爲めその店は潰れてしまつたさうである。

母の實父は深川で名高い釜六と云ふ金物商に永年仕へた番頭で、何でも百人近い奉公人の中で主人の前で胡坐をかく事を許された唯一人の番番頭であつたと云ふ事を私は母から聞いた事がある。此の母の實父―私の祖父―の先祖はどう云ふ人であるかは今日迄私は聞いて居ない。祖母の實家は士族であつたさうだが、大した家柄でもなかつた事と思はれる。

祖父は私が生れて間も無く死んでしまつたので私は少しも覺えて居ないが、かなり聰明な、進取的な、而して慾望のあつた人らしい。中年から獨立して商賣を始めやうとしたが、主家でどうしても暇をくれないので一生涯決して同商賣の金物業はやらないと云ふ證文を書いてやつと主家を辭したのだと云ふ。而して比較的短日月でかなりの資産を築きあげた。だが其の財産も祖父の死後家督を相續した長男が道樂を始めてすつかり使ひ果してしまつた。祖父には多勢子供があつたが、甘やかして

育てたと見えて卑嶽くならなかつた。貧乏はしたが私の母などが比較的平隱な一生を送つた方だと思ふ。

さう云ふ譯で私の一門は悉く商人ばかりである。文學者の系統などは私の知る限り少しも引いて居ない。(小中村清矩と云ふ古い國文學者の姻戚が私の伯母に當つて居るが之れは無論遠縁である。)従つて私の父母も私達を文學者にしやうなどとは決して思つて居なかつた。私達は――少くとも私自身は――文學者にならうとする爲めにかなり兩親に反抗して困らせた事を覺えて居る。

私の父はいろいろな商賣をした。日本橋の近所で西洋食料品店を開いてみたり、今はもう殆どなくなつた様だが、市中の家々の軒先へ石油ランプをつける日本點燈會社と云ふのを創立して經營してみたりしたが、皆思はしく行かなかつたと見えて漸々一家は零落して來た。私も、兄も、小學校を出るともう其れ以上の學校へ入れて貰ふだけの餘裕が無かつたので、めいめい自分達の學費を稼がねばならなかつた。兄は某家の家庭教師をして居つた。私は都下の一發電所の夜勤員となつて學校へ通つた。

ただ父も母も善良で、よく子供を愛してくれた。貧乏はしたけれども家庭生活では私は比較的幸福だつた。殊に母は數多くの子供の中で一番私を愛してくれた様に思はれる。母の日々の生きて行く氣持は多く私の一擧一動によつて左右された様にさへも思はれる。私は私の唯一つの眼色が母を喜ばせ、唯一つの言葉が母を悲しませた、餘りに數多くの鮮かな記憶を持つて居る。母を思ふ毎に、どんな幸福であつた時の母を思ふのできへも、私には涙無き能はない。

私の知つて居る或老人が曾てこんな事を私に云つた事がある。「幼ない時分に父母に死別れるのは大きな不幸だが、年老いてから兩親に先立たれるのも或る意味で尚悲しい事だ。人間には大概青年時代に一度、父母などはどうでも良いと思ふ様になる時がある。其の時親を失ふ人は比較的不幸でない人である。」

私は生來の臆病と小心との爲め、人並の遊蕩をしたり、酒を飲んで暴れ廻つたりする時期を唯本許り讀んで馬車馬の様にむきになつて駈け抜けてしまつた。だが其の私にも二三年前に微か乍ら父母の膝下を離れ出たいと思つた時代があつた。然し其の時代は瞬く間に過ぎて私の氣持は今父母の許へと這ひ寄りつつある。而して去年の五月、私は最愛の母を失つた。

年老いた悲しき父は次第に其の頭上に白さを加へつつある、而して亡き母の思ひ出は日毎に鮮かに私の胸によみがへる。私は衰へ行く父の姿と、悲しい母のまぼろしとを涙ぐましい氣持でぢつと見つめつゝ一人書齋に閉ぢ籠つて「製作へ、製作へ。」と自らを勵ます。

(十一) 平沼兄弟

早大教授　平沼淑郎
檢事總長　平沼騏一郎

▽幼時の教育は父母よりも寧ろ祖母に受けた

平沼淑郎

私の父は晉（すゝむ）と申して美作津山の藩士である。天保三年の生れで、私は父が三十三の時生れた。私が生れた元治元年から明治初年に至るまでは全く國家多事の際であつたから、父は常に東奔西走殆ど家を省みる暇がなかつた。私が生れた當時、父は只今の香川縣小豆島の津山藩領地の奉行として其他に在任して居つた。其後、任終つて歸國し、暫時藩校に勤めた事もある。又或時は長州征伐の役に從ひ、或時は周旋方として京都に滯留したこともある。要するに家庭に於ては、席暖まるの暇がなかつたので有る。故に私共兄弟幼少時の教育といふものは、專ら祖母の手によつて行はれたものである。そこで此際一寸祖母の事を申述べる必要がある。

祖母は學問にはさほど深い人でなく、只其當時の婦人相應の智識を有つて居つたに過ぎぬのであつた。然し祖母は私共兄弟を教育するに方つては種々なる工夫を凝らしたものである。例へば、詩加留多を以て文字を覺えさす一助とするといふやうに、萬事之に類する工夫をした。習字の時は必ず傍に在つて之を監視した。祖母の主義とするところは、『學問の修行上必要なる物品は之を與ふるに吝かならず』といふにあつた。詰り色々の物品を以て智識の發育を奬勵するといふ主義である。又餘り學問に深い人でなかつたから、時々了解出來ない事があつた。其場合には少しも勞力を惜まず、早速親戚や知己の處に走つて行くなどして其道の人に質問し、而して後私共兄弟に敎へるといふ風であつた。故に今日でも私共が故鄕に歸つて古老に會ふと皆『お祖母様は隨分と貴方方の敎育に努められましたぞ』と異口同音に言ふのである。

母は父より十歲も弱かつた。性頗る嚴格で、子供の躾もなかなか嚴しかつた。例へば、坐作進退の如きは勿論、殊に長上に對する言語態度については頗る喧しく言ふたものである。今日私共が長上を尊ぶ念について自ら厚いと信じて居るのも母の此感化である。又口癖のやうに言つて居つた事は、例へば『君の將に死せんとする時、父の將に死せんとする時、いづれの急に赴くべきか』といふが如き質問である。これで大體母の性格を了解して欲しいと思ふ。母は不幸にして、私が十五歲で弟が十三歲の時、三十六歲を一期として病沒して了ふた。

父は漢學の素養はかなりあつた。今でも詩文など澤山遺つて居る。書もかなり書いた。之は東京勤番の間に、川村澤香について學んだものである。其性格は頗る名利に淡白で、運動をしてまで名を求めるとか、利を欲するとかいふ事は絕えてなかつた。然し日々の經濟の如きは頗る精確で、厘毛の差も之を調査するといふ風であつた。斯様な譯であるから餘財は餘りなかつた。明治の廢藩置縣の際、藩主の家扶になつた。家扶といふ役は今日の所謂三太夫であるが、其當時の家令又は家扶と稱す

るものは、今日のとは其趣を異にして居つて、藩士の中から選拔せられたものであつた。此事は當時の狀態を知る爲めに一言して置く。明治四年單身藩侯に從つて上京したが、翌五年暫時の暇を乞うて歸國し九歳になる私一人を引連れて再び上京した。只今は私の郷里から東京まで僅か二十四時間で來られるから郷里を出て上京するに方つて何人も之を怪しまず、又別れを惜しむといふやうな事はないが、其當時親父が幼い男の子を連れて上京するといふ事は實に破天荒の事であつた。道中で宿屋の主人など私を見て『お母さんをお失ひになつたのではありませんか』と質問した位であつた。斯樣にしてまで私を連れて上京したといふ事は、詰り父が如何に子供の教育に熱心であつたかといふ事を證明するものであらうと思ふ。其翌年家族全部が上京したから、弟も其時上京した譯である。

上京以來私共兄弟は、箕作秋坪翁の膝下にあつて洋學漢學數學などを習つた。翁の家塾は三叉學舍と稱して恰度藩邸の隣りにあつた。且又秋坪翁も私共と同じく津山藩士といふので、父はよく私共兄弟の前途について翁の助言をきいたものであつた。これが私共兄弟の近世的學問をする初めであつた。明治十年父は病を以て職を退いた。前言ふ通り名利には頗る淡白で家には餘財なく又強いて職を求めようといふ念がないからして、爾來家道振はず困窮に陷る事幾度なるかを知らなかつた。然し父は毫も屈する事なく、子供の教育には力を盡くして努めたものである。私共兄弟も時々は内職をし今日の所謂苦學をした事もあるが、然し私共をして内顧の憂あらしめるやうな事は少しもないやうに努めた。斯かる窮道衰へんとした際、最大の不幸は母が病沒した事である。そこで祖母が家事に從ひ、幼い妹が之を助けるといふ事になつた。普通の人であれば私共をして他に簡易な職を求めしむるといふ道に出たかも知れぬ。又斯んな際であるから何かに就職さした方が都合がよからうと忠言を入れた人も少くなかつた。然し父は毫も之に耳を傾けずして、赤貧洗ふが如き間に精神的の富を蓄積せしめたのであつた。父の此精神は私共兄弟をして非常に奮發せしめるところの大なる興奮劑となつたのである。

父の教育法は『細故に拘らず』といふ主義であつた。即ち子供の精神は十分伸びる丈け引き伸ばさねばならぬ。些細な事について壓迫を加へる時には、腦の自然なる發達を害するから『細故に拘らず』悠然拘らざる氣を養はねばならぬといふのである。故に私共兄弟も小過ある場合に於ても、自發的に之を改むるといふに止まつて、敢て父から小言を受けた事はない。以上は事の是非善惡如何を論ずるのでなくて、只在りのまゝの事を述べたのである。要するに、如斯にして感化された私共兄弟が世に出たのである。而して私共が世に出た後は父は全く風月を友とし名利を求めず、富貴を追はず、優游自適、八十三歳の老齢を以つて世を去つたのである。

かくして私共を育てゝ呉れた祖母及兩親に對して何等報恩の道をも講ずること能はずして、存へてゐるのは誠に恥かしき次第である。昔し父の墓前にて賦した詩の中に『孝道全レ終竟失レ期。名揚身立果何時』と云

つた。是れが私の眞情である。(談)

(二十) **尾竹兄弟**
畫家 尾竹越堂
畫家 尾竹竹坡
畫家 尾竹國觀

▽家貧うして

尾竹越堂

私共の出生地は越後の中蒲原といふ小さい町です。玆で父が柏崎名物の白根絞りの紺屋業を營んで居ます時分、つい近在の横戸の小飯田から母が嫁いて參りまして、私共が出生した譯です。

尾竹といふのは珍らしい性でありますが、之は昔長尾爲景の弟に當る武士が佐渡國の佐竹といふ醫者の娘を妻として、それに生ました子供に長尾の尾と佐竹の竹とを取つて其姓としたのが、此姓の初まりで、之が詰り私共の先祖となつて居ります。

私の記憶して居るところでは、曾祖父の代からです。曾祖父は米商を營んで居りましたが、よく新潟の遊廓などへ入り込んで、金を撒いて遊んだと聞いて居ります。祖父は金藏と申しまして、佛壇師を業として居りました。業が盛んな時倉を建てたところ、其屋根に松が三本生えましたので、其時分生れた父の名前を倉松とつけたのでした。父の倉松は若い頃其町の紋屋(上繪屋)へ弟子に入つて居りました關係から、白根絞りを遣へる紺屋を業とするやうになつたのです。

母の先祖は小飯田館與三兵衛孝貞といふ武士になつて居ります。なんでも此人は戰爭に敗けて其小飯田といふ土地に隱れたとか申します。母から四代程前に當るさうです。

父は元來まけん氣の强い質ですから、白根のやうな小さい町に居る事に滿足せず、私が七八歲の頃新潟へ出まして染物業を營みました。小さい時分上繪屋で今日の所謂圖案といふやうな事を遣つた故か、繪を描く事が非常に好きでした。又佐竹の祖先の中に、何んとかいふ繪家で鶉かきの名人があつたといふ事ですが、其血統が續いたものでもありませうか。素人ではありますが、繪は極く器用でして、常に古畫などを模寫して樂んで居りました。今でも元信とか探幽とか雪舟などの繪を寫した物が遺つて居りますが、なか〳〵上手に遣つて居ます。

一時はなか〳〵盛大に業を營んで居りましたが、幸福といふものは永く續かないものと見えまして、段々と家が傾いて參りました。私共は其貧困時代に育つたのです。『國亂れて忠臣現れ家貧うして孝子出づ』といふ言葉がありますが、我々三人の今日あるのは、詰り若い時代の艱難が其母となつて居るのかと思ひます。

父は所謂田舍氣質で、隨分と嚴しい方でありました。何分時もあんな時であり、土地も狹い處でしたから、十分其藝術家としての技倆を延ばす事を得ませんでしたが、若し今日のやうな時勢であつたなら、もつとエライ者になつて居つたらうかと思ひます。父の性格は當前でありました

が、母の身體は人並優れて巨大で、力も普通の男子よりはずつと强くありました。若い時は米の俵を片手に持つて、片手で庭を掃くといふやうな事をもしたさうです。性質は極めて無邪氣で、何事に對しても惡もコセツカないといふやうなところが特長であります。其偉大な體格と其豪放な性質は、藝術家を生むに適して居るかと存じます。子供は一切で十一人生みましたが、只今生存して居りますのは、男子三人と女子二人で、後は皆死んでしまひました。

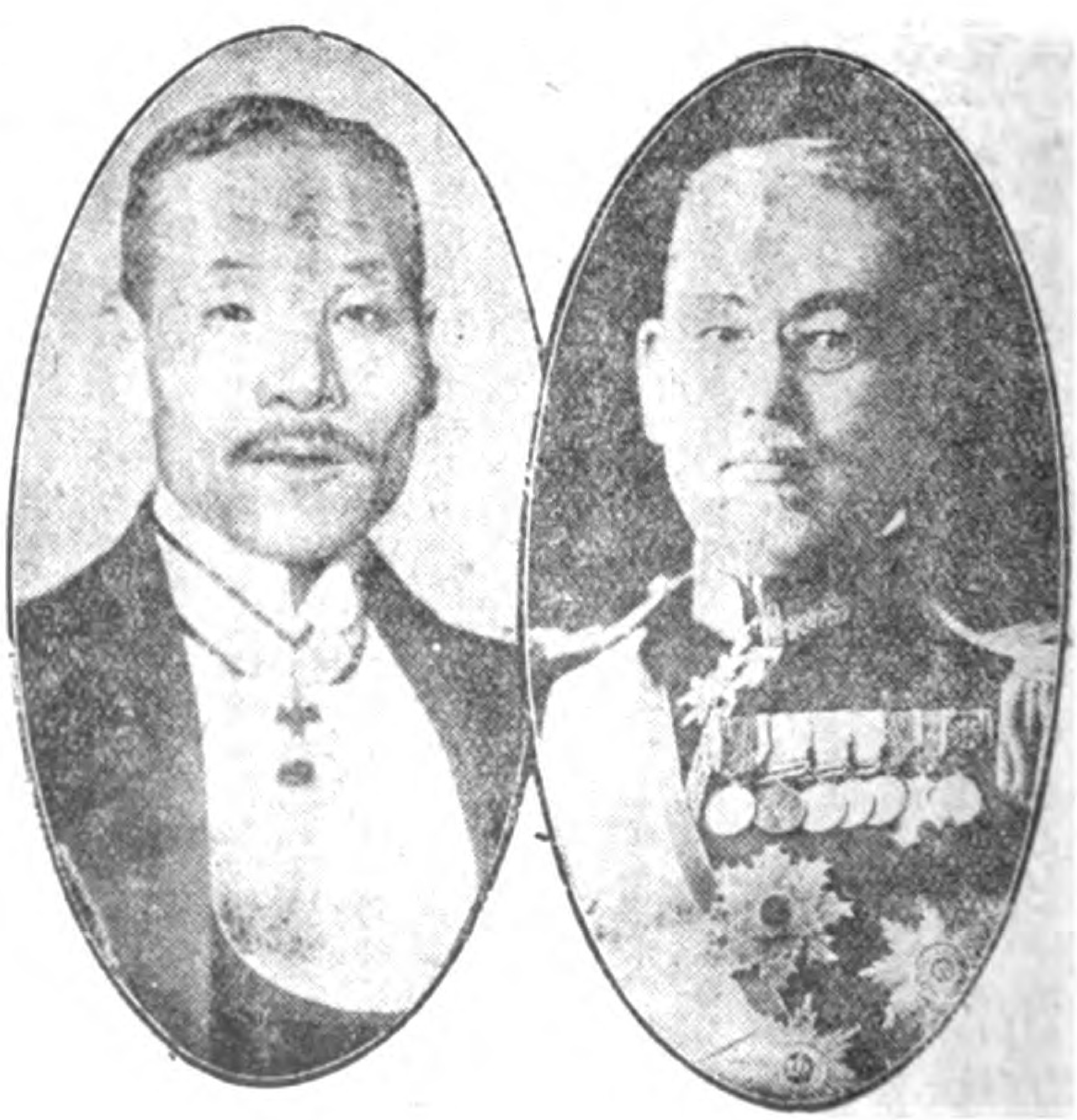
私も父の感化を受けて小さい時分から繪を描く事は好きでした。張物の手傳をする暇には、伸子を持つて地の上へ繪を畫いたりしました。其時分の教育は寺小屋ではありませんが、寺を借りて遣ります頗る不完全なものでありました。私は九歳の時勉强する爲めに東京へ出ましたが、それは失敗ですぐ歸つて來ました。十七の時再び東京へ出まして、今度は或る繪の塾に入りました。毎日繪を畫いて十錢貰ひ、それで一切の生活をするのです。一食は二錢いくらかで濟まし、三度で約七錢、後の三錢が詰り小使で墨や筆や紙などを買ふといふ有樣でした。繪を畫くのはよろしいが、子守をさせれたのには困りました。其時分にも上野には矢張り繪の展覽會がありましたので子守をしながら見物に行きました。其時弟の竹坡は七歳國觀は五歳でまだ少さかつたものですから、父は一番大きな私を膝下に置きたかつたので『困らすれば今に歸つて來る』といふので、態と苦しめる爲めに一文も送つて來ませんので、それでこんな苦學をした譯です。塾の先生はさう上手ではありませんでしたが、私は足掛け三年間居りました。其間國の方では、小さいながら竹坡と國觀が矢張り繪を描いて父を助けて居りました。其の時分の繪はまだ殘つて居りますが、文珠菩薩とか不動明王などといふやうな守本尊を書いて賣つたのです。父は『東京へ行つて居る兄に敗けないやうに』と二人の者を勵まして頻りに繪を畫かせたのです。弟は二人共矢張り繪を畫く事が非常に好きでしたから、夜もろく／＼寢ずに描いたものです。

三年の後私は兵隊檢査の爲めに故郷へ歸つて、二年ばかり弟達と一所に父を助けて繪を畫きました。後私一人外山へ出まして、其處で塾を開きました。而して間もなく家族一同をも外山へ迎へました。十五六人の門弟がありまして、寫生などをして競爭して勉强しました。中にも弟二人は非常に熱心で、夏など蚊帳の中でも繪筆を取るといふ有樣でした。

以上がざつと私共の生立ちですが、此間父は嚴しく監督して呉れますし、母は鷹揚な愛情を有つて獎勵してくれたのでした。

人物評論（九十四）

後藤新外相と水野新内相



▽内外兩大臣

川尻東馬

（一）

▲後藤男は多年の宿願成就して、到頭霞ヶ關の主人公となつた。井上、大隈の兩侯以來、絶えてなかりし霞ヶ關門外からの飛入り大臣と云ふので、世間からは意外の歡迎を受けた。男其人の人格、政見等に對しては、平素頗る敬意を拂はぬ吾人も、此霞ヶ關門を破つたといふ點に於て、實は内心痛快に思つた程である。況して男自身の得意や想見するに足るべしだ。

▲男外務に轉任した後任として、水野次官は鰻上りに一躍内務大臣となつた。之れは事實世間の意外とする處で、恐らく水野君自身も、斯く開いた口に牡丹餅の早く落ち來るべしとは豫期せなかつたであらう。實を云へば、後藤男の外務に轉任することさへ、數日前から風説傳はりしにも拘らず、世間は多く信じなかつたのである。多分寺内首相の兼任だらうと云ふのであつた。併し首相の病氣其重任の兼攝は不可能であるとして、思ひ切つた男の轉任は、例令世間多少の怪訝の念に襲はれしものありとしても、夫程意外の椿事と迄は云ふ必要がない樣だ。只强いて云へば、多少滑稽味が起る位の處である。

▲されど水野君の内相昇任は、寧ろ椿事に比すべき破天荒の出來事と云つて然るべしだ。後藤男の後任ならば、田逓相が榮轉すべきが當然の順序で、其又逓相後任者としては、有松法制局長官の榮轉すべきが、普通官界の筋書と云つてもよろしいのである。而して有松君の後任に、水野君が親任待遇となるべきが、何人も認めて適當の昇進と肯定する遣方である。一層の事、内相としての適任者を云へば、田逓相よりも有松長官の方が數等上位であらう。併し之れは政友會に氣兼ねをする現内閣、殊に其機嫌取りに日も之れ足らざる後藤男としては、到底斷行し得られぬ事であらう。

▲加之、後藤男個人としても、田逓相を轉任させるとか、又有松長官を榮轉させては、モウ自身の息が通らぬ内務省となつて了ふ。即ち他人に全然横奪される氣持になる。外相は多年の宿望だが、さればとて内務を全然捨て了ふのは惜しい。外務はドウセ霞ヶ關系の畑、自分の大臣となつて居る間は、活動の範圍も自ら自由であるが、一旦辭しての後は、何等手懸りになる地盤でない。夫れにしては内務と鐵道院、之れは野に下つても、或る程度迄根據地として恃むに足る自信がある。此好根據地をむざ〳〵他人に明渡してたまるものかとは、男一流の二股も三股もかける遣方。宛も近時實業界に流行する、重役の切賣商賣と同一趣旨から出て來た算段と睨んだは僻目か。

▲夫れにしては、自身の大臣時代から任せ切りにして置いた水野君を内務に、中村君を鐵道院總裁に昇任させる程、安全第一な遣方はない。斯して後藤男は、身外務大臣でありながら、同時に内務大臣兼鐵道院總裁の實權を握つて居るも同然である。男は平生水野君を捉へて「水野大臣」と諧謔を云つて居たが、今度本當に水野君の大臣となつた以上は、水野君から「後藤兼任内務大臣」と云つて然るべしだと思ふ。殊に有松君は勿論政友會に鬼門だが、田男を据へるよりも、水野君を昇ばせた方が、政友會には氣受良好、別けて原君などは、同時に自分も内相兼任の氣分になつて居るに相違ない。口には是々非々主義を唱へて、而も内實は或る程度迄、内務省を我屋敷同樣に扱ひ得る身分、如何に冷靜な原君でも、決して惡い氣持ちのする筈がないのだ。

▲後藤男の依然内務大臣氣取りに就て思ひ出したのは、過般春秋會が、後藤、水野兩大臣、田尻東京市長を主賓として、晩餐會を開いた時の事である。食卓に着いて雜談中「オイ水野、君は秋田人だと云ふが、何の邊か」と、全く下僚に對する呼び下し。之れに對する水野内相の態度は？と見てゐるに「私は秋田は秋田ですが、上屋ですから生れは東京で

す」との返答。是れが何れも大臣にして、當日の主賓たる食卓上の問答振である。懇意同志の呼び下し合ひと云ふのは、世間能くある實例だから不思議もないが、此問答振りと其態度を見て居た春秋會員には、寧ろ當惑の外なかつたとの事だ。

▲近頃の官界では、陸海軍は別として、其他の文官連の間には、何省でも大臣が局長課長を呼ぶにも皆君付である。然るを後藤男は、威張りたいが身上の人だから仕方もないが、兎に角同格の大臣、水野君に向つて公式の會席に其呼び下しは餘りに侮蔑過ぎた遣方。此一事に徴するも、依然水野君に對しては、次官同樣に頤使する心事の、偶然にも此處に發露したのだと認めて至當である。

▲序に一言したいのは、寺内首相の餘りに意氣地なかつた、今度の大臣奏請振りである。一體首相の平素から云へば、何も取所はないが、謹嚴眞面目が身上の人物である。然るに如何に牧野男、内田子に外相就任を拒絶された苦し紛れとはいへ、後藤男を外相に任ずるとは、何と考へても眞面目の態度、謹嚴な平生に對して、受け取れぬ事題である。勿論自身は病軀、迚も餘裕を許さないし、夫れに内閣の運命も、前途幾何もない昨今、一方伊東子は頻りに男を勵めての勸說、止むなく山縣公其他にも同意を求めた次第であらうが、當人は其心事境遇を諒とするも、首相は確かにヤキが回つたと評されても、此點に對しては、恐らく辨解の辭があるまいと思ふ。況して水野君の昇任運動に同意する杯は、例令原君に氣餘ねしての結果に相違なしとしても、優にナツて居らん腕い人物だと云ひ度なる。確かに首相は今や心身共に疲勞困憊の極にあることは、此一事に見るも明かに夫れと讀めるのである。

(二)

▲外相に新任された後藤男は、内心得意の笑みを漏らして『我輩は丁度箝口令を布かれた樣なものだ』と、内地新聞記者に對する就任の挨拶をやつた。一方外字記者に面會しては、大に今後の外交上に對する抱負を述べた。夫れが外國電報によりて逆輸入され、内地新聞記者は、今更らの如く驚かされたのであつたが、外相としては、夫れが外國新聞の好評を博して、好反響を與へたので、實は内々非常の大得意、『我輩の外相振りは、こんなものさ』と、内に北叟笑んで居たことは、疑ふ迄もない推定である。

▲日支軍事協定は、本野外相時代から、内地新聞雜誌の揭載禁止事項であつた。一寸した記事を揭げても、忽ち發賣禁止といふ恐ろしいお灸を据へられつゝあつた。處が頭を隱しても尻を隱すこと能はずで、支那の新聞ではドシ〳〵素破抜く、剛も夫れは嘘半分に五割も誇張しての、支那式煽動的書き振り。夫れが日本在留の支那留學生間に喧傳せられて、非常な反感を起させる原因となつた。初めの間は集會決議位であつたが、愈々引揚げて歸國するもの多數となつたのに驚いた外相は、周章狼狽害なるものを交附して、之れが緩和手段を取らねばならぬ羽目に陷つた見苦しさ。夫れでも内地新聞紙には公表しなかつたが、霞俱樂部から一ト振ち振ちられて、澁々ながら發表することとなつたのも滑稽で、外相としての遣方は、玆に全く鼎の輕重を問はれて了つた。人間は案外脆く又甘いとの批評は、誰れ云ふとなく其頃から傳へられたものだ。

▲兎角する間に、例の『言論機關の指導』問題が持ち上つた。男謂らく、こんな小倅共、少し御馳走でもして吹きつけると、何の事はないと多寡を括つたのであらう。外相官邸の特別應接室に委員數名を招待して、茶菓の饗應に事寄せ、猛り立つた記者連中を丸めて了ふ作戰を立てた。處が案外に強硬でコーヒー一杯も口にするものがない。結局喧嘩分れで、

霞俱樂部は不信任の決議をする、一方外相は何の小癪なと、出入禁止立退を命ずるといふ大騒動。併し外相としては、小僧共定めし困るに相違ない、今にお詫びを云つて來るから……と、飽迄輕視してかゝつた。

▲處が案外なる哉、記者團の態度益强硬で、他の二十餘記者團も起つて之れに應援するといふ光景。常にお出入記者の多數を有すると稱され、所謂言論機關の指導を實行しつゝあるとの定評ある男も、流石に此狀態には一驚を喫せざるを得なかつた。定めし霞俱樂部に立退を命じた其夜は、お出入記者の誰彼れを呼び寄せ、多少の相談はあつたことと想像するが、平素の關係が關係故、恐らく誰れ一人として進んで苦言を呈したものがなかつたに相違ない、皆其意志に迎合して御無理御尤で引退り、大した事になる筈がない位の返答をやつたことと推測されるのである。夫れや之れやで形勢打算を全然誤り、到頭收拾すべからざる有樣と迄なつた。

▲こうなると新聞社の方も多少不便を感ずるが、外務省は夫れよりも一層痛切に感じて來る。毎日の發表物は一々各社に電話で取りに來る樣通ぜねばならず、新聞社では、給仕さへ走らせれば多少時間の遲れる位で外務省程の困却はない。夫れで何でも、外務省の發表物は、内閣からするといふ内交涉もあつたらしいが、内閣擔當記者團の永田俱樂部は、斷然之れを拒絕したとの附隨問題も持ち上つてあつた。

▲結局困り拔いた外相は、春秋會に仲裁を依賴して、體裁の好い『言論機關の指導』なる章句の訂正、並に霞俱樂部の出入禁止立退命令を撤回することに折れたが、却つて聯合記者團は却々に應じない。併し春秋會も一且外相に對して責め方を引受けた體面上、無理にも聯合記者團に讓歩せしめたそうだが、此喧嘩は全然後藤外相の敗戰である。最初に威嚇りて、遺憾なく男一疋の雙男に徹底せんず氣勢を示したかと思ふと、忽ち形勢の惡化に閉口して、哀を春秋會の軍門に乞ひ、解決を聯合記者團の門前に負ふ杯は、何と云つても見苦しき敗北振り。殊に夫れが外務大臣といふ、虛々實々の交涉事件には、最も秀でゝ居るべき筈の人物なるに於ては、何と評して好いか、殆んど適當の形容詞さへ發見し得ざる程に呆れさせられる。

▲然るを何ぞやだ。貿易業者の大會に招待された際、此一件の質問に會すると、例の調子で傍ら人もなげなる大氣焰『政府は國民を監督し又指導するものである。新聞記者も國民であるから、監督し指導するに何の不思議もないことだ。夫れが厭といふものは、即ち自ら非國民であるといふも同樣である。此意味に於て非國民たることを自任する新聞記者共に、外務省は室を貸して置く譯に行かぬと云つたのは、理義に於て當然だろう』と、如何にも偉うさうな豪語振り。夫れ程確信があり理由があるなら、何故春秋會に仲裁を賴んだのか。内外表裏斯くも二枚舌を使ふ國務大臣は、吾人國民として、汚辱、不安、實に此上もない重大問題と云はねばならぬ。一個の後藤新平男なら、俗に引かれ者の小唄と冷笑しても相濟ますべきだが、苟くも外務大臣たる位置に省みて、今後は深[illegible]讀んで貰ひたい。夫れよりも『アヽあれか、モゥ大體形ついたから、新さんことにしよう』位に輕く出て居たなら、如何に奥床しく人物も[illegible]大きく見へるのに、さりとは平素の修養を頭の頂上か、足の爪先にでも[illegible]して居ると見へる。

▲現在の外交問題に就ても、少々書いて見たいが、如何せん到る處暗礁だらけ、若し少しでも觸れたら最後、自身は生命に別條ないが、肝腎の乘せて居る船役の『中央公論』が難破の憂き目を見ることになる。依りて此方は當分遠慮するが、何でも時效を急いで、短命の間に何か一ト仕事と、色々焦つて居る相當の大きな問題があるらしい。併し前途の支那

留學生に四古垂れたり、記者團にお辭儀したりするお手際で、歐米諸國を相手に如何なる結果が得られようか。セメては效果など少しも願はんから、甚だ間違のない樣に丈けでもして欲しい。ドウセ前途の知れ切つた內閣の下に、而も脫線で有名な外相を相手にして、諸外國とて眞面目に協議する氣遣はない。下手に蜂の巢を突き壞した樣な事をされては、第一國家國民こそイヽ迷惑、後繼內閣も其跡始末に無駄骨を折らねばならぬ大難義。此點は吳れ〲も國家國民の爲めに、反省自覺を希望して止まぬ所以である。

▲本野外相を見限つて、寧ろ其介錯役迄やつたと云はれる伊東子は、男の外交最高顧問として、永田町に控居ると、本野時代と些の變化がない。外交調查會で犬養君をも合せ、深く提携を繼續しつヽ來た此三人者は、世に所謂三角同盟を形成して、本野時代よりも數倍密接離るべからざる關係となつて居る。三角同盟の暗中飛躍、之れは外相としての男には問題外だが、併し次の內閣に向つてもアヮ好くば殘留せんず陰謀作戰振り、兎に角物騷な人物揃の秘密結社とて、政界各方面の視聽は、最も此三角同盟なるものに注がれて居るのは事實だ。內外兩大臣を兼て居るさへ却々の大役だのに、外交內政雙方に向つて大車輪の活動振り。後藤男たるものも亦多忙多事なる哉である。但し其元氣滿々、精力絕倫なる一點に至りては、吾人後進者の確かに取つて以て範とし、則とすべき好個の生きたる教訓であらねばならぬ。

（三）

▲後藤男兼原君の月代として、內相の椅子に榮進した水野君は、秋田縣舊藤田岩崎藩主佐竹子爵の藩士である。後藤男も故鄉は岩手縣、原君は無論何人にも明かな舊南部藩士だから、岩手の目代に秋田がなつた杯、當時惡洒落を云ふものがあつた。君は多年內務省に於て生字引の定評あつた人物で、參事官から秘書官を兼任して居た時代にさへ、循吏の典型的人物と云はれた程、好評の官吏であつた。原君の屢々內務大臣となるや、君が大に之れに私淑し、原君も亦君に信賴する處多大であつた。斯くて何時の間にか原君の意氣に感じた君は、終ひに政友會に入黨して、純然たる政黨員となつたのである。君の此急激なる生活狀態の變化に對しては、君を能く知れる者は勿論、單に其人物を傳聞し居たる人々に至る迄、殆んど一種の奇蹟として、事の意外に驚いたのも無理はない。君は徹頭徹尾循吏として永年國家に盡すべき人物なりとは、官界は元より一般世間に於ても、疑ひなき一人として算し、又認めて居たのである。

▲寺內內閣組織せられ、後藤內相の下に次官となるや、政友會を脫して其任に赴いた爲め、愈々逃げ出したとか、官僚畑の根性終に忍耐出來ずとか、君の出處進退は、隨分と政界の問題に供せられた。政友會內にても種々冷嘲惡罵するものもあつたが、兎に角夫れが偶然にも今日の登龍門、思はざりし大臣の椅子に据はる基となつたのである。金錢目當に擧子郞入するのが當世氣質と云ふから、元と官僚畑に永年發育成長した君が、一時の宿借り同然な政黨生活を抛ち、再び元の古巢に立ち歸り、官吏生活を初めたのが開運の端緒となつた杯は、同じ當世向きの遣方でも、比較的非難の少ない方であらう。

▲內相としての君は、次官も局長も殆んど無用な位、事務に精通して居るから、下僚の遣り難いことも澤山あらうが、併し元々多く若い時分から養成教育されて來た弟分揃の場所、されば下僚共とて、實は內々の心持で居るに相違ない。又地方官も大半は君の手にかゝつて養成された人々であらうから、丁度久し振りに故鄉に歸つて、弟妹澤山の家督を相續した樣な氣分であらう。無論居心地もよく、又何の氣兼ねもなく、內部の

統一は思ふ通りに運びついて行くに相違ない。

▲單に一の行政長官としては、洵に申分なき智識經驗、手腕頭腦を持して居ようが、一方國務大臣としては、如何に贔負目に見ても、第一貫祿がない、從つて押しも利かなければ、威厳も氣魄もない。一言にして云へば、全然政治家の素質はないのである。勝田藏相を第一の小僧大臣、君を第二の小僧大臣杯、世間蔭口を云ふものあるのは、遺憾ながら此點に於て又止むを得ないことであらう。

▲多年内務省の官吏としては、令名こそあれ非難攻擊されしことなく、又政黨員としても、何等問題を起す樣な人物でなかつた。惡るく云へば平凡平調な事務的の人材、善く云へば眞面目にして些の間違もなき頭腦の明晰な紳士である。只過般全國多額納税者資格問題に付、鑛業税、水産税其他の雜税を納付するものは、其資格を有せずと、極めて狹義の解釋を下した爲め、貴族院や政黨からは突き込まれる、世間からは非難される、お膝下の内務省高等官會議では激論となる。揩つた揉んだの末は終ひに前通牒の訂正、廣義の解釋と改めた事が、水野君近頃の失策として、數へ上げられる位のものであらう。併し此問題は、吾人之を世俗に所謂上手の手から漏つた水として、深く追窮し度ない。

▲最後にイクラ小僧大臣でも、兎に角明治ッ子にして大臣になつたのは先づ勝田藏相、第二に君である。此點に於て吾人は、天下は漸次明治ッ子に回り來りつゝある兆侯を悦ばざるを得ない。

▽妙味ある未知數と見懸けによらぬ果斷

小川平吉

▽

後藤君の外交官に成つた事を、外務省の連中は驚異の眼を以て觀て居るが、我々は餘程面白い事と思ふ。本人も外交の上には勿論相當の抱負が有る事と思ふ。殊に外務省部内には先例習慣に囚はれる風習があつて外交官は恰かも外國交際の技手のやうな觀がある。從つて何時も交際其物をのみ本位として、自己の國家の都合を第二に置くやうな傾がある。此等の弊風は歐洲各國あたりでも往々にして免かれない所であるが、我國の近來は殊にそれが甚だしい。此弊風を打破して外務省の空氣を一新し、且つ廣く人材登用の道を拓いて、將來有爲の外交を作るといふ事は今日の急務である。此點に就いては本人も十分なる覺悟を有つて居るだらうし、又我々も大に期待して居る。

後藤といふ人は元と醫者であつた。昔の諺に「醫者の上等なるもの即ち國手は國の病を癒す」といふ事がある。後藤は醫者から出てよく政治家になつて結構やり通して來た。之れ本眞の國手である。内務省でやり通した以上、外務省でやり通せない事はない。昔桂公が能く話された言葉に、「各方面の局部局部の智識と技能とは、赤靑黄等の色の如きものである。七色を合すれば白色となるが如く、各方面の智能を集めて大成するのは即ち政治家である。故に政治家は行くとして可ならざる無し。自分は陸軍の用兵の法を以て政治を行るのである。」と云はれたが、一理あ

る。外務大臣が外交官出身でなければならないとか、司法大臣が司法官出身でなければならぬと云ふが如きは、技手と政治家とを混同した議論である。此點から論ずれば後藤の外務大臣と成つたのは、少しも怪しむに足らない。本人は經文一枚知らない者がお寺に這入つたやうに云ふけれども、彼は仲々熟く經文の意味を理解し、お葬ひも出來れば、說敎も出來る。今や靜まり回つて沈默して居るけれども、彼は將に如何なる點に向つて外科のナイフを下さうかと云ふ事を、心を潜めて硏究して居るだらうと思ふ。

彼は仲々能く硏究もし計劃も立て、又能く斷行もする。併し乍ら餘りに硏究し、餘りに計劃するが爲に、却つて技巧に陷るの恐れ無きにしも非ず。又其斷行の意氣に於ても、多少世人より疑ひの眼を受けて居る。我々は彼が正々堂々と大道を濶步する底の行動を以て、外交界に一大斧鉞を揮ふ事を希望する。ナイフの小細工は後藤其人に向つて期待する處で無い。彼も才幹もあり、勇氣もあり、粗般の如くにして仲々綿密な男である。彼に交際ふ人は、彼の何處かに一種の未知數の有る事を感ずるであらう。此未知數こそは彼の人と爲りに於て妙味の存する處であつて、常人と異つた所の種々樣々なる言動は、皆此未知數より發して來るやうに思ふ。願はくば此未知數をして、段々と大成するやうに向はしめたいものだ。

▽

水野君は內務大臣として最も適當なものと斷言して差支へない。あの人は身體が小さくて溫和な人であるから、人は柔弱のやうに思ふかも知れないが、決してさうでない。必要と認めれば隨分思ひ切つた事を斷行する勇氣を有つて居る人である。又內務省の事情に明い事に於いては、恐らく之れ以上の人は少からう。當り前あらば一木などよりもずつと前に內務大臣に成つても宜しい人である。官海游泳術は寧ろ下手の方であ

らう。若し日本の政界に破天荒の大革新を行ふとでも云ふ事になつたならば、水野といふ人は或け思ふ程には役に立たぬかも知れないが、大抵の改革ならば躊躇なく斷行する事が出來ると思ふ。

寺內內閣が人間の頁目とか年功とかいふものに眼も吳れずして、眞の人材を取つて內閣に入れたのは、確かに美擧の一つたるを失はないと思ふ。民間の政黨社會などに於ては、未だ〳〵之れまでの思ひ切つた事は出來ない。民間の政黨社會には如何にも新陳代謝が鈍ぶくて、仲々進步の機運を認める事が出來ないで、却つて官僚社會に一籌を輸するの感あるは、甚だ殘念の次第である。憲法政治の前途も亦容易で無い事を痛切に感ぜざるを得ない。

▽外相としての後藤男

前田蓮山

一

▲大隈內閣の時、予が麻布の私邸に後藤男を訪問した時の印象記が予のノートに殘つて居る。一寸夫れを紹介しやう。

▲郡役所とでも云ひさうな木造洋館の玄關に立つてベルを押すと、御役所で見るやうな洋服の少年給仕が『どうぞ其のまゝで』と靴のまゝ應接室に導く。薄暗い大きな室であつた。裝潢物や、支那物や、西洋物や、日本物や、種々雜多の飾品が、其處の隅、此處の壁を占領して、中央にテーブルと大きな椅子が四脚。總ての光景が大陸的で、大ザッパの

引き締りが無いやうにも感じた。

▲紺絣の單衣に縮緬か何かの兵子帶をグル／＼卷き付けた男爵、ヤアと大きな聲をかけて、ニヤ／＼笑ひながら這入つて來た。正しく堂々たる風采。白髪交りの髭髪を三角に刈り込んだ色白の顔にも品が備つて、身丈高く肉豐かに、西洋人の中に押し出しても、是れ程立派な男振りは少なからうと思はれた。大きな肱掛椅子に大きな腹を安置するや、男爵は先づ葉卷の口を切つて、

『面白いニユースがあるかね』

▲六十一歳だと云ふのに、聲が如何にも若い。人間の精力は聲に現はるゝさうで、多くの人に接して經驗を積める藝妓などの話に依ると、顔を見るよりも、襖を隔てゝ聲を聞いた方が、其の人の年齢を能く言ひ當てると云ふことであるが、後藤男などは聲だけ聞けば四十臺にも誤まられるであらう。予の知れる人々の中で、老人で若い聲を持つて居るのは、原敬翁を除けば後藤男である。平田東助子なども、自らは病氣だ／＼と言つて居るが、聲は割合に若い方である。加藤子は壯健のやうであるけれども何か持病があると聞いたが、聲は年齢相當であらう。伊東子は顔は若いが聲は頗る老いて居る。是れは鼻と咽喉とに何かの病氣があり、又た齒が惡い爲めであらう。犬養氏は年齢相當で、尾崎氏は甚だ若かつたが近年俄かに老いて聞へる。

▲新聞の報道に依ると、大分御活動のやうですねと予が言ふと、

『世間では吾輩を一日もヂツトとして居る事の出來ない人間のやうに思つて居るやうぢやが、吾輩は是れで三日でも四日でも瞑想に耽つて暮す事が出來るんだ。それは妻に訊いて見給へ、妻が能く知つてるよ……吾輩は近來全く讀書三昧でね、政治運動はチヨツトもやつて居ないんだ』

▲斯う話して居る間に、男爵閣下は椅子の上に胡座をおかきなさつた。そして間もなく立ち上つて隣の寢椅子に腰を下ろした。

『大隈には呆れて了ふね……だが無邪氣な老爺だ。何と言つても凡人ぢや無いよ』

と大口を開いてカン／＼と笑ふ。

▲暫くして予は寢椅子の上に横になつて居た男爵を見出した。そして二言三言話して居る内に、

『一體支那は何うなるんだ』

と言つて起き上り、他の椅子へと移つて、葉卷の吸ひ殘りを灰落しに突き込み、更に新しき一本の口を切つた。

『何うも困つたね、露西亞が負け氣味だと言ふぢやないか。獨逸人は勝利か然らずんば死かと叫んで居るのぢや。實に容易ならん敵だね』

▲又た立ち上りながら、

『勝利か死かだ……』

呻るやうに言つて他の椅子へと腰をかけた。鼻眼鏡を和服の襟にブラ下げ、チヨイと首を傾しげる容子は、道に御醫〆様らしい。素性は爭はれぬものである。……玄關前に自動車が止まつて、給仕が支那公使の名刺を持つて來た。新任の挨拶に來たらしい。男爵は『是れでは餘りひどいだらう』と獨語して『羽織と足袋を持つて來い』と給仕に命じた。

二

▲後藤男が外相に轉じたのは、別に大した意味もあるまい。寺内首相は最初から新たに外部から入閣せしむるやうな事はせず、内部で遣り繰つて置かうと云ふ考へであつたが、唯だ一應伊東巳代治子に交渉をして見る事はして見た。山縣公も伊東子を說いたさうである。夫れに如何程の誠

意があつたかは知らぬが、伊東子にも毛頭野心はなかつた、

▲世間では伊東子が臨時總理大臣を兼ねてならばと云ふ條件を出したかのやうに噂して居るものもあるやうだけれども、开んな事は知つて後藤男等が伊東子を說いた文句であらう。寺內首相の病勢如何に依りては、臨時首相代理を置かなければならぬから、旁々入閣しに與れと、親交の間柄で話したかも知れぬ。

▲後藤男が外務省の畑以外から這入つて行つたのが痛快だと云ふ評が世間にあるやうであるが、是れは聊か解からぬ話である。外務大臣の選任に就ては陸海軍大臣のやうに制限せられてはない。又た外務省に外交官閥あつて、外から入る者を排斥すると云ふ傾向も見へない。適任者でさへあれば誰れでも構はぬのであるが、唯だ從來の內閣組織者が、適任者と認めて大公使から選任したと云ふまでの事である。

▲痛快に思つて居るのは犬養氏の如く、加藤高明子に反感を持つて居る連中であらう。加藤子が所謂外務省畑の先達で、日本の外交家は俺一人だと云ふ顏をして居るのが癪に障つて居る者には、後藤男の外相就任は正しく痛快事たるに相違ない。平田東助子も伊東巳代治子も原敬氏も此の點に於ては共鳴する所があつたであらう。そして外務省畑の有方者と認められて居た本野子の實價が解かつたので、詭辯許り上手でも、外交は駄目なものだと思つたであらう。

▲而して政友會が亦た多少痛快であらう。何故なれば、憲政會は總裁が日本唯一の外交家であると云ふのが自慢で、政友會が外交家を持たぬと云ふ一事は、正しく同會の弱點であると言つて居たのであるから、今度後藤男が外相として成績を擧げたなら、政友會は憲政會の鼻を折る事が出來るし、又に自ら心を強ふする事が出來るからである。

▲併し吾々は單に後藤男が外務省の畑以外から這入つたのが痛快だと言つて喜んで居るわけには行かぬ。吾々の考慮する所は、後藤男が果して外相として適任であるか否やと云ふ一事である。英國などでも、民間に於ては隨分議論のある事で、專門家以外から外交官の適材を選べと云ふ聲が高いけれども、イザ實際に選ぶとなれば何うも專門家以外には適材が少ないので、主義としては廣く適材を擧げる方針であつても、事實に於て自然專門家に限らるゝやうな形となつて居るのである。

▲英國に於てすら尙ほ且つ然り、日本の如きは愈以て外交家の適材を求むるに困難である。歐洲各國は人情風俗も大同小異で、各國間に結婚も盛んに行はれて居ると云ふ有様であるから、素人が飛び出して何處の大公使になつても、何うか斯うか勤まるやうなものゝ、日本人はとてもさう云ふわけに行かぬ。外交專門家と云ふ者がないのは米國だけだらうが、米國には殆んど外國なきに等しで、あんな傍若無人の事で押し通し得れば結構と云へるかも知れん。

▲米國と日本とは同日に論ぜられないので、維新當時から日本では外交家の適材が少ないに苦勞した。大隈侯などは書生時代に長崎に居て、切支丹に關する事情などを知つて居たと云ふので、外交官として召し出され、參議にまで列した位である 副島伯が外務卿になつたなども、長崎で外國の事情を知つて居た上に、漢學に通じて、支那との交渉に都合が好からうと云ふのが、主なる理由であつた。

▲明治元年正月に外國事務掛が設けられた時に、之れに任ぜられたのが後藤象二郎、岩下方平、寺島宗則、町田久成、五代友厚、伊藤博文、井上馨、木戸孝允の八名。次で元年二月外國事務局判事が置かれ、之れに任ぜられたるが岩下方平、町田久成、伊藤博文、五代友厚、寺島宗則、井上馨、井關盛艮、大隈重信、後藤象二郎、小松清廉、大木喬任等で、以來日清戰爭前まで日本の外交は此等の人物の系統でずつとやつて來たも

のである。

▲所が日清戰爭以前の日本の外交は甚だ單純なもので、外務大臣は外國語を話し得なくとも事は足りた。公使でさへ金でも澤山に使へば勤まつたもので、鍋島直大、蜂須賀茂昭、淺野長勳、戶田氏共、德川篤敬、岡部長職などと云ふ大名などが全權公使に任ぜらるゝといふ有樣、薩閥外の者は外交官にでもならなければ立身の餘地がないと言つて、いや〳〵ながら此の方面に趣いた位であつた。

▲岩手の原敬、高平小五郎、福島の林權助、赤羽四郎、青森の珍田捨巳、佐藤愛麿、愛知の加藤高明、大分の小村壽太郎、佐賀の本野一郎、福岡の栗野愼一郎、山座圓次郎、熊本の內田康哉、靜岡の林董、埼玉の石井菊次郎、三重の加藤智雄、平戶の稻垣滿次郎など、外交官には藩閥外の者が多い。

▲日清戰爭で日本の外交が漸く複雜多端となつ時に、恰此度等諸人の羽翼が發育して居た所だつたので、陸奧伯がどし〳〵彼等新人を用ひたものである。今日世間で謂ふ外務省畑と云ふものは、陸奧伯が基礎を作つたのであるが、是れは外務省の閥を作りたわけではなく、維新以來發成して來た專門的外交官が漸く生長し、實際の必要上から陸奧伯が彼等を用ひたもので、三十三年靑木周藏子が外務大臣時代までに、所謂外務省畑なるものが立派に出來上がつたのである。

▲斯く如く專門的外交官が出來たと云ふ事は、維新以來の苦心が成就したわけで、國家の爲め祝すべき事柄であるが、段々と弊も生じて來た。いや其の弊と云ふのは、外務省自身が作つたものではなく、世界外交團に嫉まれる弊を受けたものであるが、國民の一部には專門的外交官だから此の弊に感染するのだと考へられたのである。

▲外交官には一種厭ふべき空氣があつて、外交界に持て囃されやうと思へば、諸國中の有力者の御意に入らねばならぬ。否な寧ろ有力者の夫人の御意に入らねばならぬ。令嬢の御意に入らなければならぬ。一且有力者の夫人令嬢の御意に入れば、夫人令嬢は大騷ぎで其の男の提灯を持ち廻はり、他の夫人令嬢も亦た之れに附和雷同しなければ後難が怖ろしき故に、提灯持の手傳ひをすると云ふ有樣で、斯うなれば本國政府では、彼れは手腕があると云ふ事になつて重用するのである。

▲斯う云ふわけで、外交官として立身出世せしやうとならば、外交團の流行兒となることである。而して外交團の流行兒となるには、女小供から彼の人は親切だとか、容子が好いとか、金使いが奇麗だとか、英國贔負だとか(有力者が英國ならば)思はれる事である。故に日本の外交官と云へば毛唐人の眞似をして、外國の贔負をする者と相場が定まつて居るやうに思はれて居る。

▲陸奧伯などの專門的外交官を必要としたのは、斯んな事を能事する外交官ではなかつた。故に陸奧伯も小村侯も右に述べやうな外交官としては成功しなか たのである。併し大公使としては、或程度まで右の如き交際も餘儀ない必要があるであらう。要するに大公使はとても飛び入りの人間には勤まるまいが、外務大臣は英語位が出來れば大なる不自由はあるまいと思はれる。唯だ必要なのは外交上の識見及び勇氣である。

三

▲後藤男は外交調査委員として、最近外交の事情行掛も知つて居るし、殊に對支外交に就ては一家の見識を有して居る。男が滿鐵總裁の頃、支那問題を根本的に解決しなければならぬと云ふ考へを起し、其れに就ては豫め列國の障碍を取り除けて置かなければならぬと云ふので、朝鮮に行つて之れを伊藤公に說いた。(伊藤公は當時韓國統監であつた)

▲伊藤公は最初後藤男の說に重きを置かなつたが、男が三日三夜に渡つて切論するのを聞くに及んで、漸く決心してハルピンに行く事になつたのである。最初男が隨行する約束であつたが、偶々第二次桂內閣が組織せられ、男は遞相として入閣したので、伊藤公は伊東子に同行を勸めたけれども、事情を知らぬ伊東子は却つて公の旅行を引き止めると云ふ有樣で、公は遂に一人で出かけ、あの變に遭つたのである。

▲後藤男は伊藤公の變死の報を得て大に落胆したが、今は桂公をして之れを實行せしむるより外はないと思つたので、伊藤公の兇報が達した日、桂公と密室に會し『實は伊藤公をハルピンにやつたのは自分である。此の上は何卒閣下に伊藤公の志を繼いで貰ひたい』と委細を語した所が、桂公は一旦大に驚いたが、遂に男の說に贊成した。

▲斯くて機會を覗ふ內、桂內閣の末葉、一年後には必ず支那に革命が起ると云ふ見込みで、辭職後は專ら之れに對する準備をやつて居たが、少々見込みが脫れて革命が思つたよりも半年早く突發したやうなわけで、プログラムに變動を生じ、四十五年の夏になつて、辛つと露國に出發するやうになつたが、明治天皇の崩御で又々計畫は頓坐したのであると云ふ。

▲男が獨逸語――夫れも充分とまでは行くまい――だけであると云ふ事は聊か不自由ではないかと思はれるけれども、大公使としては兎も角、大臣としては其れが爲めに落第と云ふ程ではあるまいと思はれる。而かも男は他に之れを補ふ長所を有して居る。

▲男の長所は勇氣にある。男は細心に考へる人だけれども、其れは男の獨り長ずる所でもなく特色でもない。男に執るべき點は、其の完きを求めずして、荒削り的に事を運んで行く勇氣である。此の點に於ては或は陸奥、小村以上かも知れぬ。

▲後藤男は計畫好きの活動家である。而して其の計畫はザット寢て考へ出したものではなく、飛び廻はつて居る間に、ピョコン〳〵と直覺的に沸ひて來るのである。男は自ら三日でも四日でも默想に耽つて居る事が出來ると云ふけれども、夫れは此の直覺的に沸いた計畫に何とか理屈を付ける事を考へる位の所であらう。男は科學をやつた人であるから、自分の計畫を說明する事は可なり巧みである。

▲所謂直覺的計畫であるからして、天才的の奇計妙策もあるが、又た屑も甚だ多い。長所は即ち短所で、勇氣に任かせて猪突し、才に任かせて多くの計畫を立てると云ふ所に、また人をして危な氣を感ぜしむる缺點がある。宜しく大勇を振ひ大計を立つべしである。是れは今一段の修養を要する所であらう。

四

▲田遞相を內務省に移し、有松氏を遞信省に廻すのが順序であると云ふ說が、政府內部にもあつたやうに聞いて居るが、後藤男が寺內首相を說いて、水野氏を內務大臣としたさうである。吾々の考へでも水野氏は鐵道院總裁に持つて行つたら何うだらうと思はれるが、後藤男は中村氏を是非總裁に坐せてやりたかつたであらう。そして田男に內務を開け渡す事は好まなかつたであらう。

▲後藤男としては、政友會系統の水野氏を鐵道院總裁とする事は、田男に內務を開け渡すよりも惜しかつたであらう。而して水野氏を內務大臣とすれば政友會に好感を與へる事ともなるので、旁々寺內伯も後藤男の說に聽いたのであらうと思はれる。現內閣成立の際には、平田系と後藤男との間に暗鬪があつたが、今や平田系たる田男、有松氏、岡田氏など有るか無きかの有樣となつた。田男は伊東已代治の弟分とも云ふべきも

のであつたが、近來後藤男の方が伊東子に親しく、田男は後藤男に一歩を讓らなければならぬやうになつて居るらしい。

▲勝田氏が大藏大臣になつた今日、水野氏が內務大臣となるのに不思議はない。但だ水野氏は內務行政には精通して居るだらうが、政治的手腕があるか何うか、是れは勝田氏と共に甚だ心細い感がある。殊に內務は大藏よりも政黨に交渉があるので困難な點が多いだらう。

▲後藤男と水野氏と、適任なるにせよ然らざるにせよ、寺內首相の心中には數ヶ月の腰掛と思つて居るのではあるまいか。恐らく寺內首相は適不適を考へるまでの事もないと思つたのではあるまいか。日支軍事協商に調印されたさうである。更に貴族院の總選擧、此等は寺內々閣の一里塚ではあるまいか。

▽疑問の外相・平凡の內相

吉野臥城

一

▼男後藤新平は、譬へば、軌道を疾走するの汽車に非ず、電車に非ずして、大地を縱橫自在に疾驅する自動車なり。人に好かれもすれば、嫉まれもす。乘用者は其の快速力を喜び、路傍の人々は其の香臭を厭ひ、危險を虞れ、傍若無人の行動を憤慨す。彼れは味方に歡迎さるゝ反對に、敵に憎惡さる。現代に於て、最も彼れに似たる物は自動車なり。

▼歐米にいざ知らず、我が國にありては、自動車は實用よりも、寧ろ贅澤の爲めに、虚榮の爲に使用さるゝ傾向あり。彼れの性格は既に自動車の如く、彼れの性癖は派手好き、廣告好きにして、自動車を使用する現時の傾向に合す。如何ぞ、自動車を愛用せざらんや。彼れの威風堂々を市上に廣告するに自動車を以てし、その怪音、香臭を以て、行路の目を峙てしめつゝあり。

▼自動車を疾驅する者の、行路の耳目を買ふは、獨り男後藤のそれに限らず。然れども、彼れは先ず始めて遞相たりし時、威風堂々辯の爲に銀座街頭に事故を生じ、京孃をして寒樹男爵の蠻勇を歎ぜしめたることあり。爾來彼れの乘物とし云へば、蠻勇を發揮するものと思ひて、多少の畏怖を抱くに至れり。

▼斯の如きは、市井の些事のみ、彼れが洛陽の市價に關せずと雖も、亦人氣の瓦落に影響せずと云ふべからず。人氣の瓦落は、瓦落するの時に瓦落するに非ず。必ず因つて來る所のものあり。今日彼れに人氣なきに非ず、又內閣の花形ならざるに非ず、而も世評の芳ばしからざるは、何等謂はれなしと云ふべからず。蠻勇敢て惡しきに非ず、之を傍若無人の振舞ふに於て、男後藤の聲價の意外に失墜するを知らざるべからず。

▼彼れの外相たるや、人氣頓に引立ち、聲價甚だ揚れるの觀あり。是れ新平の實質、一時に優良化せるに非ず、新平の面目、一時に激增せるに非ざること勿論なるも、全く畑違ひの者の、霞ヶ關に入り來れるが故に、毛色の變れる者なるが故に、何等か目新しき仕事をなすべしと期待され、その思惑買の上に、偶然にも人氣を引立てたるなり。

▼近年の外相、悉く外交官の出身にして、所謂霞ヶ關の畑に育ちたる人物なり。山芋化して鰻となり、下流より上流に鰻登りに登りたる者なり。外交事務に錬熟し、電車乃至汽車の軌道を誤らざるが如く、軌道の上に廻轉する機械的人物なり。一定の軌道を疾走せしむるに於て、誤な

きを得べしと雖も、少しく無理に方向を轉ぜんと欲すれば、忽ち脫線す。機轉の利かず、融通の付かぬこと夥しき者なり。

▼然るに、毛色の變れる男後藤は、大地を自在に疾驅する自動車なり。車體堅牢にして、動力だに充實せば、目的地の何れなるを問はず、意の儘に赴くことを得ん。軌道に束縛さるゝの不自由なく、活躍の範圍廣大無限なり。事務的外交を排して、經綸的外交を試み得べしと期待するゝは之が爲なるも、果して能く其の期待に裏切らざるを得るや。

▼彼に恐るゝ所のものは、軌道なきを幸ひに、平地、丘陵、河川の見境なく、全速力を以て疾驅せしめ、遂に轉覆乃至墜落の憂を見んこと、是れなり。彼れが把手を執るの手腕、甚だ巧妙ならざるが故に、優良なる運轉手を附するの要あり。事務を見る所の次官其人を得ば、先づ大過なかるべしと信ぜらるゝも、彼れに活躍の能力ありやは疑問なり。

二

▼男後藤は就任の當初、外交に關しては素人なることや、辯口を餘儀なくされ居ることやを、世辭旁言明せり。外交官の經歷なきを以て外交の素人とせば、彼れは確かに其の言の如く素人なり。所謂その素人なる所が、黑人よりも珍重されたる所なり。彼れの多辯饒舌――と云はんよりも、寧ろ大言壯語するが故に、首相寺內より口を辯せられたるなるべしと雖も、その辯口を披露するだけが、愚直と云へば愚直なり。

▼秘密外交は霞ヶ關の特色にして、外相の辯口は後藤に始まりたるに非ず、敢て申譯する迄も無きことなり。畑違ひの新平出でて外相たる以上、從來の秘密外交を排し、官僚臭を脫して、何程か國民に接近し、文字通りには非ざる迄も、國民外交の眞似事位は行るならんと、豫想せる者尠からず。然るに、出でて外相たるに至れば、依然として舊式の秘密外交たり。彼れの世辭愛嬌を聽きて、愛嬌を蕩かさざる者幾人かある。

▼彼れの愚直は、愚直と見えて愚直に非ず。愚直は單に表面のみ、內面深く本音を藏す。世辭の後には赤き舌あり。彼れが辯口を云々せるは、彼れが外交方針を吐露するを避けんが爲なり。彼れにして、眞に畑違ひの腕の凄さを見せんと欲せば、世辭愛嬌を抜きにして、彼れが執らんとする所の政策を宣明すべかりしなり。

▼男後藤は、雄辯家の定評なきも、十人並以上の辯才辯力を有す。更に其の辯才と辯力を補ふに、生彩煥發の風丰と、威風堂々の修飾を以てす。彼れが經綸抱負の一端を仄かすも、尙政界の喝采を博するに充分なり。廣告好きの男にして、之を敢てせざるは、彼れに何等の抱負なきか、語らざる事の却て空虛を蔽ふに都合好きか、何れにしても稱すべきことに非ず。のみならず、彼れの大言壯語家にも似合はぬ事なり。

▼國民の前に秘密を守ること斯の如く嚴なる彼れは、歐米に對して極めて開放的にして、毫も其の聲明を吝まず。外相後藤の聲明が歐米に好感を與へたりとの海外電報は、實に吾人の耳を驚かせり。國民に對して鼻息荒き彼れは、歐米の鼻息を窺ふこと、一に何ぞ溫柔なる。知らず、外交の極意は、海外の意を迎ふるを以て足れりとなすか。

▼惟ふに、彼れが對外の聲明は、彼れが廣告癖の發露なり。之を國內に發表するよりも、海外に發表するの、如何に華々しきかを想像せるに相違なし。是に於てか、派手好きにして、廣告好きなる彼れは、早速歐米の好感を買ふべく、而して又本野以上の聲價を得べく、發表せりと推せられざるに非ず。彼れの食へざる所は、此の邊にあり。

▼其の日支軍事協約の交涉を開始するや、之を絕對秘密に附し、之を報導する新聞あれば、忽ち發賣禁止を命じ、言論を極度に抑壓し乍ら、支那留學生の續々歸國するに狼狽し、一部有志家の前に覺書を提出せるが

如き、何としても輕卒の非難を免るる能はず。臆病武者は風の戰ぎにも膽を冷すと云ふが、對手國の留學生の歸國に平靜を失ふ所の外交家は、是れ又臆病外交家の所爲に非ざるか。彼れの人氣取外交、廣告外交は、遂に小刀の小細工の外、何等見るべきもの無からんとす。

▼殊に外交記者團の霞俱樂部と衝突し、確執を生じたるが如きは、内に對して如何に鼻息の荒きかを證す。而して彼等の決議を刎ね付け、外務省の一室より撤退を命じたる迄は、蠻勇を意の儘に揮ひたるの觀ありしも、他の記者俱樂部の結束して反抗するや、默々として之に屈從せるが如きは、人氣の前に如何に腰の弱きかを證して餘あり。

▼外相對新聞記者問題に對しては、吾人別に說ありと雖も、玆に之を論ずるの煩を避け、外相の言動のみに就て一見せんに、彼れの爲す所は、激情に左右され、突發的飛躍を試みるも、其底に深き思慮を運らさず。暴に報ゆるに暴を以てするかと思へば、多勢に捲かれて意久地なく泣寐入に終る。斯かる些事に對してすら外交的手腕の敏活を缺くに見て、夫の紛糾錯綜せる對支外交に關し、大局より打算して、圓滿に收拾し得るや掛念なき能はず。

三

▼男後藤の問題を誘起し、身邊匆忙なるに似ず、新内相水野錬太郎は平凡の裡に、その錬達せる手腕を事務の上に動しつつあり。彼れは後藤の後釜に据りて大臣たるも、未だ次官の氣分を脫せず、次官の心持にて働き居るに非ずやと思はる。彼れの上には後藤あり、後藤は外相にして内相を兼ぬるが如く、橫柄に振舞ひつゝあるやの觀あり。地方長官會議に於ける後藤の言動は、宛然たる内相の口吻なり。

▼水野の就任後、二三地方長官の更迭を行ひたるも、後藤時代の豫定せる所のものを、彼れに至りて實行せる者の如し。今次地方事務官の大更迭を斷行せるは、彼れが方寸に出でたるもの。何となく次官水野の遣り口なりと、感ぜしめんば非ず。地方長官會議の小手調べの結果、思ひ切りてそが陶汰を行ふに至らば、玆に始めて大臣の箔は付くべきなり。斯く云へばとて、彼れに貫祿なしと云ふには非ず。仲小路、勝田の輩も尙大臣たり。彼等に比し、何等遜色なきのみならず、或點に於ては大に勝る者ありと雖も、之からが本當の光を發すべき舞臺なり。

▼水野は後藤と反對に、軌道を必要とし、軌道の上を誤なく疾走せんとす。事務官として機械的に活動し來れる彼れは、飽くまでも機械的能力の上に成績を收めんとすべし。省内の事務は卽ち擧らんも、其他に對して多くを望む能はず。彼れは動もすれば法律に囚はれ、形式に拘泥し、其の精神を遺却せんとす。夫の長者議員の資格に關し、非常識の解釋を試み、之を强行せんとして物議を釀せるが如きは、其の一例なり。

▼彼れに事務的手腕あり、その遣り口に堅實味あるは、稍や平田の内相振を學爲せしむるものあり。予の骨子と見えて策士なるが如く、彼れは學者と見えて事務家なり。政黨を出でて官僚に復歸せるは、其の事情の如何に拘らず、蔑視くべき所に落着きたるもの。其の陞進も亦偶然に非ず。

（大正七・五・二五）

評論

地方長官會議及び諸大臣の訓示

大山郁夫

官吏の心理は、官吏以外の者には到底理解が出來さうにもないものゝ様に見える。兎に角、日頃はその各自の任地に於て飛ぶ鳥を落す勢を見せて居る全國の各府縣知事も、一たび中央に於ける地方長官會議に召集せられるゝ時には、週餘に渉つて連日指定の場處に參集し、各大臣が諄々として語り出だす訓示に畏つて耳を傾くることに於て、その各個が幾十年も前の幼年時代に小學校の教室に於て受持教師の講話を謹聽した時の經驗を再び繰返して倦まざる根氣强さを見せることは、彼等以外の普通の人々の驚歎に堪へずとする所である。如何に御役目柄とはいへ、將又、如何に規律訓練が官吏生活に運命の様に附き纒ふものとはいへ、立派な有髯男子の身を以て、殊に日頃表面上だけでも地方人の畏敬の標的となつて居る身を以て、召されて都に上つた刹那より、毎日斯の如き他所目には卑屈とも見られ得る絶對服從の境涯に身を置かねばならぬことは、如何に彼等が自らその神經を鈍ぶらせて掛つても、彼等に取つて非常に大なる苦痛であらねばならぬことは分り切つて居る。殊に各大臣の訓示なるものを檢すれば、揃ひも揃つて孰れも極めて平凡且つ低級なる訓誨や説明を臚列したものたるに過ぎないのであつて見れば、彼等の苦痛はそれがために更に倍加するものであらねばならぬ。無論訓示事項やら、注意事項や

ら、指示事項やらの外に、諮問事項などいふものがあつて、之に關聯して彼等の各個は理論上自發的に舌端に運動を與へる機會を得るともあるのであらうが、それにした所でその時間に自然の制限が置かれてある以上は、皆が皆まで此機會を利用するとは出來ない筈である。斯の如く考へ來れば、少くとも該會議繼續中の幾日間に於て示さるゝ彼等の忍耐力は、實に普通人の驚異に値するものでなければならぬ。職務に對する忠實からか、但しは俸祿に對する執着からか。孰れにしても、彼等は克くも斯の如き試錬に堪へ得る力を持合はして居るものである。

併し乍ら、彼等の異常の忍耐力は大に之を多とせねばならぬものであるにしても、何の用もなきに國家の名に於て之を濫用することは、僅かに彼等の精力を浪費することであり、從つて斯の如き制度を存置することは、一の重大なる國家的罪惡であらねばならぬ。問題は地方長官會議そのものゝ有用か無用かに依つて決するものである。

我等の見地よりすれば 少くとも現制度の儘に於ける地方長官會議は、全然無用であるのみならず、そが何の利益もなきに徒らに各地方長官の時間と勞力とを浪費し、且つ之に多大の精神的苦痛を强制する點に於て、寧ろ甚だ無慈悲なるものであり從つて甚だ有害なるものである。今回の地方長官會議のみに就いて之を見るも、各大臣の訓示なるものは、第四十議會に關する粗雜なる報告とか、各省の政務の進行の實績に關する放漫なる摘要とか、各種の行政事務遂行上の心得と云つた樣なものを包含し、之に國民思想指導に關する注意といふが如きものを配した樣なものを以て、その主要部分として居た樣である。而かも斯の如き議會に關する報告や、政務の實績の摘要の如きものは、既に各場合に於て諸新聞紙が當該大臣の訓示に於て見るよりは遙に詳細に之を報道して置いた所のものであるから、今更物々しい訓示などに依つて再び之を各地方長官に傳達するのは、彼等が日頃新聞紙を閱讀して居ないものと假定して掛つて居るものであるかの樣に見え

て、よくよく彼等を馬鹿にし切つた仕打であるとも言ひ得られる。又各種の行政事務遂行の心得といふ樣なものは、今更事新しく取立てゝ彼等に說き聞かせる迄もなく、彼等が官職拜命以來の昔より夙に承知して居る筈の種類のもの計りである。其他幾多の煩瑣なる「注意事項」とか「指示事項」とかの銘打つて言ひ渡されたものゝ如きは、よく〳〵必要なものならば印刷物にして各府縣長官に配附する方が餘程效果の多かるべきものであつて、態々彼等を大臣の御膝元に呼立てゝ之に說き聞かせる程のことはないものである。又「諮問事項」の如きものにしても、その各項目に關して各地方長官の意見を徵する心要があるものならば、彼等をして文書に依つて建言せしむる方が遙に賢明なる處置であるし、萬一彼等をして或る特殊の項目に就いて集會討議を盡くさしむる必要があつて、その目的のために特別の會議を召集するのならば、是は決して無意義のことではないが、併しながら一般的意義に於て形式的に召集したる地方長官會議に於て、而かも短少時間を利用して、學生の試驗問題にも髣髴たる多數の諮問事項を排列し、之を一度に彼等に提示するが如きとは、喜劇的效果の外には、何の得る所もなかるべきものである。

若し夫れ首相、內相、文相等の訓示中に現はれたる國民思想指導に關する項目の如きは、毎度のことながら、國民の立場より見れば、甚だ目障り千萬のものである。國民は今更思想的方面に於て、時勢遲れの思想の代表者たる官僚——殊に動もすれば思想上の鎖國攘夷主義排外主義の因襲に囚はれて居る官僚の指導を煩はさねばならぬ程も無力なものではなく、又官僚に取つても內外の思想上の交通の極めて自由なる今日に於て、此方面に於て有効なる指導を行ふことの不可能である位のことは心得て居る筈であるにも拘らず、彼等が常に此點に口を出したがるは、一見極めて不思議千萬なることである。今日の我國の思想界に於て官僚が何等の創造的貢獻をなして居ないことはいふまでもなく、彼等が此方面に於て何程の理解を有して居るかさへ、甚だ疑問とすべき所である。官僚側に言はせれば、

思想上の指導の任に當る者は、必ずしも思想上の創造的活動に從事する者たるを要しないと言ふのであらうが、それにした所で、思想上の理解のないものに思想上の指導が完全に出來やう筈がないことは判り切つて居るではないか。けれども官僚の國民思想に對する從來の態度より推論すれば、官僚の用ふる語義に於ける思想上の指導とは、實は思想の上の抑壓のことを言ふものであつて、從來思想界と官僚との交渉は、常に此思想上の抑壓を中心として起る衝突反撥の埒外に出でたことがないのである。唯若し官僚が幾分にても思想上の方面に於て指導の名に相應はしいことをして居るものがあるとすれば、それは彼等が全國の青年團を軍閥の俘虜とせんがために、その間に彼等が勝手に「戰時氣分」とか「軍國的精神」とか呼んで居る一種の偏狹なる島國的排外的精神を普及せしめんがために企てゝ居るプロパガンダに關聯するものであるが、斯の如きプロパガンダの惡効果は、素よりその波及する範圍が非常に廣大であるだけに、決して之を輕視すべからざるものであるが、而かもそれが我國の思想界の主流よりは甚だ遠く退いて居るものであることだけは、爭ふべからざる事實である。要するに官僚が我國の思想界の要部に對して貢獻して居る所のものは、毫もその建設的効果にあらずして、徹頭徹尾その破壞的効果であることは、今更何の證明を必要としない程までも世人が熟知して居る所である。その官僚が縱令彼等の内輪同士の訓示に於てにもせよ、假初めにも國民思想の指導を云爲するのは、聽者に擽つたい感じを與ふる惡戯とも謂ふべきものである。

尙ほ首相以下の訓示中の國民思想に關する部分に於て注意すべき一要點は、彼等が時局に伴ひて發生若しくは渡來せる新思想を無闇に危險視することである。彼等が新思想と稱して恐怖の情を示せるものゝ抑も何であるかは我等の關知せざる所であるが、恐らく昨年來の露國に於ける猫眼的政變の根柢をなせる過激派思想の如きものを指して居るのではあるまいか。若し果して然りとすれば、我等は彼等の着眼點の餘りに甚だし

き見當違ひの所に置かれてあるのを憐まずには居られないのである。過激派思想の如きは今日に於ては別に新しがる程のものではなく、又別に恐怖すべき程のものでもない。過激派思想をして勝利を得しめたものは、實に露國の舊政府の苛酷なる專制的秕政であつて、過激派思想そのものゝ本質的價値に依るものではない。無論過激派思想の如きものは、或る場合には絶大なる國家破壞力を有するものであるが、過激派思想がその破壞力を逞うする場合は、時代錯誤的官僚專制政治が、幾分でも進歩せる政治思想を有する國民の間に、抑へ難き不平不滿を釀成して居る樣な狀態の存立して居る場合である。現に露國流の勞兵主義の傳染力に痛く神經を惱まして居るものは、英米の如きデモクラチックの國家の政治家ではなくして、獨墺の如き封建的統治の餘習を尙ほ多く保存して居る國家の政治家ではないか。健全なる國家に於ては、恐怖すべき思想はない筈である。故に我國の官僚にして、眞に過激派思想の破壞力を恐怖するものならば、見えざる勢力を以て流動する思想を抑壓せんとするが如き徒勞を企つるよりは、寧ろ幾分にても斯の如き思想をして跳梁せしむる根據を構成して居る要素たる自家の專制的政治主義を此際思ひ切つて拋擲するを以て得策とすべきではないか。殉教者の墓には、花環が絶えないといふ。思想上の宣傳者を迫害することは常に迫害實行者の豫期とは反對の結果を齎らし來る傾向を有するものである。

併し官僚者流が彼等の所謂新思想を過度に危險視し而してその危險が今にも國民の眼前に迫つて來て居るかの樣に言ひ立てるのは、別に或る他の心理的動機より來て居るものであることも考へ得られる。即ち彼等が柄にもなき國民思想の指導を云爲し、その陰に隱れて國民の言論の上に多大の干渉を加ふることは、如何なる點より見ても非立憲的であることは蔽ふべからざる事實ではあるが、而かも彼等は自家の權勢維持のためには、此非立憲的なる言論干渉をも屢ば行はなければならぬ必要のあることを知り拔いて居る。而して此種の言論干渉の警察政治的活動に對して、如何にも有

理なる根據とも見えるものを與へることの得策なるとも亦、狡猾なる彼等が思ひ附かない筈はない。是に於て彼等は此目的を貫徹するために、その聲を大にして新思想の危險性を如實に說き立てゝ以て、彼等の言論警察の徒爾ならざる理由を國民の前に證明しやうとして居るものであらねばならぬ。尤も或は彼等自らは此動機を明瞭に意識して居ないかも知らないが、彼等がそれを明瞭に意識して居ると否とに拘らず、彼等の行爲をその根源に溯つて考ふれば、自然に此結論に到達せざるを得ないのである。無論斯の如きことは、立憲政治の制度の下に專制政治の餘習が存續せる國家に於ては、決して珍奇なる現象ではないのであつて、而してその最も極端なる實例は、革命前の露國に於ける政治的秘密警察部が、陽に革命思想を嚴重に取締りながら、陰には却て之を激成し、時にはレニン一派の輩に或る種の保護を與ふることを敢てしたことである。我國に於ては素より斯の如き亂暴なる狀態が存在して居る筈はないが、それにしても或る種類の思想及びその宣傳者に危險思想とか注意人物とかの銘を打たなければ或る種類の官職がその存在の意義の大部分を失ふべきものではないかといふとも考へ得られないではない。表面上極めて嚴肅に見える言論警察も、裏面に廻つて見れば幾多の滑稽的事件がそれに附き纏つて居る――若しくは居るものではないかとは、誰しも一應は考へて見ることである。

要するに現在の制度の下に於ける地方長官會議は、政治上のパターナリズムの象徵としての外は、單に無用なものであるのみならず、同時に有害なものであつて、何故に斯の如き制度が存置せられてあるかの意義の全然不明なるものである。而して之を廢止することは、國民の側より見て無論大に歡迎すべきことであるが、同時に之を召集する政府の側より見ても、將又之に召集せらるる地方長官の側より見ても、共に何の失ふ所なくして、大に得る所があることの明瞭なるものでなければならぬ。卽ち少くとも多大の時間と費用とがそれに依つて節約し得らるることの外に、立派に成人

せる各府縣知事を學童扱ひにすることより生ずる政府及びその官吏の威儀の喪失が恢復せらるる見込さへ當然之に伴ふものである。

（七――五――一三）

▽對露政策の刷新

法學博士　吉野作造

（一）

五月央ばの新聞に據ると、東部西伯利在留邦人の代表として某々數名の士が、本國政府に陳情の爲め來京したといふ報道が有つた。何等の陳情か詳細の報道は無かつたが、此等の人々の談話として斷片的に掲げられた所に據つて見ると、帝國政府の對露方針が確立して居ない爲めに、在留邦人は大變迷惑して居るといふ事情を愬へんとするものゝ如くに思はれる。も少し具體的に云へば、帝國政府は西伯利內部の紛亂（例へば過激派と反過激派との抗爭の如き）に對して傍觀の態度を執るにある如くにして、而かも一部好事の士が多數西伯利に入込んで彼の地の內紛に關與して居るのを默過して居るやうにも見える。之が爲めに西伯利に於ける日本人の滯留はだん／＼不便に且つ危險になり、折角多年の苦心で築き上げた彼等の經濟的地盤は、今や根柢から覆されんとして居る。之れ在留民の心ある者が、遙々陳述委員を東京に送つて、對露方針の確立を中央政府に愬へしむるに至つたものゝやうである。詳しい事は分らないが、唯之れ丈けの事實に就いて我々の深く反省せねばならぬ事は、帝國政府の知ると知らざるとの如何に拘はらず、兎に角國民が西伯利士民の多數の疑惑を蒙つた以上、日本人の彼地に於ける各方面の發展は極めて困難である、否殆ど不可能であるといふ事實である。如何に帝國の軍隊が浦潮に上陸して威揚を示しても、士民の反感を其儘にして置いては、我々の經濟的發展の前途に到底何等の光明を認むる事は出來ない。此點に於て我々は所謂「國威の宣揚」を唯一の好餌として、輕佻なる民心に乘ぜんとする彼の

一部の嬌激なる出兵論の、如何に盲目的愚論なるかを反省せねばならない。他人の虚につけ入り、武力の後援で帝國の國旗を閃めかした丈けで、日本帝國の威光が本眞に世界に發揚するものと考へた時代は夙ふの昔に過ぎ去つた。我々は武力を動かす前に先づ土着住民の心を獲るに成功しなければならぬ。

（二）

予輩は土着住民の意思の尊重を一の理由として、之れまで屢々西伯利出兵論に反對の意見を公表したものである。然し西伯利出兵は必ずしも絶對に土着住民の意思を無視して爲し得ない事はない。土着住民の意思を無視して出兵を敢行し得る場合は少くとも二つある。一つは西伯利に於て獨逸の勢力が現實に瀰漫する場合である。も一つは獨逸勢力の瀰漫に由ると否とを問はず、西伯利の紛亂が遠く東亞全局の平和を攪亂し、以て我日本の安全をも脅かす惧れある場合である。今年春初めて唱へられた頃の西伯利出兵論は、主として前者の意味に於てゞあつた。蓋し當時短見なる一部の評論家は、露獨單獨講和成立の結果、獨逸の勢力はちに歐露本土を通して遠く西伯利に及ぶべしと盲信したからである。而して西伯利に於ける獨墺俘虜の武裝の誇大的風説は、一層右の懸念を深からしめた。尤も内には虚報を知りつゝ爲めにする所あつてかゝる風説を流布せしめたものも無いではない。けれども兎に角以上の如き理由で、出兵論が一時盛んに唱へられたのであるが、若し斯ういふ事實が果して實存するものとすれば、我々は獨逸の勢力を鏖滅すると言ふ聯合軍共同目的の見地から、暫く土着露國民の意思を顧慮する處なくして出兵を決行する事が出來る。尤も此場合に於ては、此出兵は日本一國の單獨的出兵にあらずして寧ろ聯合國共同事業の分擔と觀なければならない。從つて豫め聯合國との間に相當の協定を爲し置くの必要あるは言ふを待たない。併し乍ら此意味に於て果して出兵するの必要ありや否やといふに、恐らく今日何人も之に對して然りと答ふるの確信を有する者は無からう。何故なれば今日だん／＼と事情の明かなるに伴れ

て、西伯利の何處を叩いても、獨逸の勢力を直接に代表すると見るべきものはないからである。然し獨逸の勢力が西伯利に於て何等恐るべき理由無しとするも、若し現在のやうな紛亂其ものが東亞全局の平和に重大なる障害を與ふると言ふならば、自衛を名として我々は單獨に出兵する事が出來ないではない。浦潮に陸戰隊を上陸せしめた如きは惟ふに此點から說明せらるべき出來事であらう。併し乍ら今日西伯利は全體として夫れ程紛亂してゐるかと言ふに、今日までの處まだ格別に去る事實は現はれてゐない。して見れば此點から土着住民の意思を無視しても出兵を決行すべしと言ふ議論は成立たないやうに思ふ。

然らば今日の狀況の下に我々の西伯利に出兵し得るは、必ずや土着住民の希望に依る場合に限らねばならない。而して我々が彼等の希望に據つて出兵すると言ふ事は、言ふまでも無く彼等の內爭に關與する事たるを忘れてはならない。何となれば西伯利に於ける今日の紛亂は、一方が敵國獨逸の勢力を代表するものと見るべからざる以上、畢竟國內に於ける兩勢力の抗爭に外ならないからである。

西伯利に於ける今日の紛亂は歐露本國に於けると同じく、謂はゞ過激派と反過激派との勢力爭ひである。歐露本部に於て過激派が屢々其沒落近きにあるを報ぜられながら、依然として其勢力を保ちつゝあるが如く、西伯利に於ても彼等の勢力は侮り難きものがある。反過激派の最も安全な根據と見られて居つた浦潮にさへ、五月二日彼等の完全なる占領に歸した。哈爾賓滿州里方面に於て、所謂セミヨーノフ軍の多少の發展を報じ來るも、之よりも寧ろ過激派の勢力の發展の方に目覺しきものがあるやうである。然し一二ヶ月前までは殆ど言ふに足らなかつた反過激派が、今日兎も角あれまでに結束を固めたのは、非常なる變化と言はざるを得ない。而して今や此等の反過激派の連中は、此勢ひに乘じ更に聯合與國の援助を得て、大に過激派を壓倒せんとして居るのである。茲に於て我國にも往々にして此等反過激派の誘ひに應じて出兵すべしとの議論を見る

事があるのである。此等の派が正式に我國に援助を求めて來たのか、少くとも何等かの形で彼と我との間に此意味の交渉が開かれたのかは、予輩の全く與り知らざる所であるけれども、唯我々は世界的大戰爭の參加者の一人として、又東亞全局の平和の維持に關し最も重大なる責任を有する者の一人として、又殊には露國の友邦の一人として、反過激派の運動を援助すべきや否やの問題に關し、少くとも明白なる態度を決定してくの必要はある。而して此問題を決定するに際して、我々は少くとも次の諸點を考慮の中に加へて置く事が必要である。

(一)我々は過激派の成功を喜ばざる特種の理由がある。第一に彼等の思想の成功する事を一般に危險なりと認める。加之、彼等を成功せしめては露國は永久に獨逸に對する有力なる索制力として復活するの見込みはない。

(二)我々は特に反過激派の成功を希望すべき理由がある。何故なれば露國が獨逸を索制する有力なる力として復活する事は、彼等に據つてのみ之を希望し得るらである。加之、露國の將來は恐らく結局に於て極端なる過激派の統治に安定せずして、彼等の勝利に歸するだらうと思ふからである。

(三)よし過激派は結局に於て沒落すべき運命なりとするも、彼等を急いで人爲的に撲滅せんと焦るは決して目的を達する所以でない。殊に彼等を撲滅する功を急いで、外國の勢力を利用するが如き事をすれば、民心は却つて彼等の味方をし、彼等を自然的覆滅の淵より拯ひ出すの功を擧げるに止まるであらう。

(四)現在の處、兎も角も過激派は露國民多數の支持を得てゐるの事實は之を蔽ふ事が出來ない。我々は所謂露國民多數の希望なるものは何處に存するやの打算に於て、極めて愼重なる態度を採らなければならない。

(五)終りに我々は所謂反過激派と稱する者の間にも、我々の援助を希望する者と然らざる者との二派あるの事實を看過してはならない。一般に露國の反過激派は過激派の横暴に困憊するの餘り殆ど民族的常軌を逸し

て、一時の急を逭れんが爲めには外國の援助を招來するを厭はないやうである。之れは露西亞ではないが昔の露領の一部たる芬蘭の如きは、露骨に獨逸の勢力を籍りて居る。芬蘭は過激派撲滅の爲め、其初め各國に向つて援助を求めたのであるが、之に應じたものは獨り獨逸であるの結果、今や芬蘭は獨逸と結托し、否、獨逸の走狗となつて露西亞本部の過激派と戰つて居る有樣にある。本來獨逸の傀儡たるに甘んぜざる彼等が、今後如何にして獨逸の桎梏から脫し得るやは今後の見物である。歐露本部の反過激派は直に獨逸の援助を籍らうとはしない。五月三日の新聞にはアレキシーフ、グチコフ、ミリウコフ、ロヂヤンコ等の立憲民主黨員は、露都に於て反革命政府を樹立し、ブレスト・リトヴスク講和條約の無効を宣告したとある。又五月十四日の新聞には、莫斯科に於ける同黨中央委員會は、露國の再興の爲に獨逸の勢力を籍るべからずとの決議を爲したとある。然し彼等は絕對に何れの國の援助をも拒絕するものではない。否彼等は芬蘭の反過激派が獨逸に依つて居るが如く、英佛の勢力に賴らんとして居るが如くに見える。英佛側は一つには彼等を起して聯合國共同目的の爲めに働かしむる爲め、又一つには獨逸勢力の侵入を防ぐ爲め進んで反過激派を助けんとして居るやうである。唯遺憾ながら歐露本部に於ては、地勢上適當の手懸りを得るに苦しんで居るが、西伯利に於ては實に此双方の間に相當に密接の關係があるやうに思はるゝ。斯くして最近頻りに活躍して居るホルワット將軍若しくはセミヨーノフ將軍は、好んで外國の援助の下に立つものであると認められて居る。併し乍ら西伯利に於ける反過激派は、凡て皆ホルワット將軍やセミヨーノフ將軍と同一の態度を執るものなりやと言ふに、決してさうではない。尙他の少からざる有力なる分子の間に、英佛日支等の援助によるを不得策とし、寧ろ米國の經濟的後援の下に獨立の反過激派團體を作らんとする者がある事を看過す事は出來ない。五月十七日の哈爾賓電報が、露米通商協會の設立を報じたが、之れ恐らくは此種の運動の一端ではある

まいか。而して此種特別運動の發生を促せる原因の一つが、彼等の間に近來起りつゝある排日思想であるといふの風說に至つては、我々は大に之を冷靜に反省するの必要がある。

（三）

西伯利の問題に對して我々は如何なる態度を執るべきかは、同地方の形勢の混沌たるだけに、今日容易に之を斷定する事は出來ない。而かも事東亞の平和に關し、殊に我國に重大の利害關係を有するだけ、一刻も早く何とか態度を確立するの必要がある。予輩は玆に具體的の成案を以つて政府に迫らんとするものではないが、唯西伯利に於いて我同胞が多年の苦心に由つて築き上げた經濟的地盤が、今や將に根柢より覆されんとするの狀況にあるを見て、兎に角對露政策の刷新を希望するは、强ち不當の事では無い。日本の經濟力の減退と反比例して、後からやつて來た米國の經濟力の隆々たる發展に對しては、殊に警戒と反省とを要する。我々は徒らに米國の成功を妬んで女々しき怨言を發する前に、何故に斯くの如き失敗を見るに至つたかを深く反省する事が必要である。何れにしても愼重綿密なる反省攻究の上に、對露政策を根本から刷新し、新たなる方針の下に正々堂々の行動に出づる事が必要である。暗號電報の禁止に對する我國の抗議が、アベコベに過激派政府より西伯利に於ける一部日本人の陰謀に關する說明要求の逆襲に逡巡ぐやうでは、到底西伯利問題を根本的に解決する事は出來ない。況んや西伯利に於ける帝國利權の確立おや。

▽敵國の情勢と講和問題

法學博士　吉野作造

（一）

敵國側の情勢は依然として分らない。墺匈國の困憊を極めて居る事は疑ひ無いやうだが、唯獨逸が今日尙

相當の實力を蓄へてゐる事は、最近の西部戰線に於ける活動に觀て明白である。唯多くの評論家が說く如く、又予輩の前號に於て暗示せるが如く、最近の攻擊は結局失敗に終つた。少くとも攻擊の目的を十分に達して居ない。目的の達成に十分の成功を收めざるの結果、國情更に一層の困難を增すべきは、又自ら明かである。然らば此際兩國の國情を考へて觀る事は、必ずしも不急の閑問題ではない。

（二）

墺匈國內狀の一端は、最近佛蘭西に於て暴露されたカール皇帝親翰一件に於て、略ぼ之を知る事が出來る。カール皇帝が親翰を佛國大統領に送り、獨逸に背いて單獨講和の擧に出でんとした事は、或は五月央ばの英國の議會に於てバルフォーアの言つたやうに、「實際に平和を欲せざる者が相手國の聯盟を攪亂せんがために爲せる陰謀の一部」であるか、若しくは眞に墺國一個の窮策であつたかは姑く問はずとするも、墺匈國に於ては獨逸の如く此上戰爭を繼續して爭はねばならぬ程の重大なる問題は無く、又國內の動搖は多少の犧牲を忍んで速に和するの得策なるを確信せしめて居る。殊に國民の間に於ける講和の希望が、昨今更に甚だしくなつた事は、四月末以來の電報にも表はれて居る。糧食缺乏の爲め各都市に騷動が有つたとか、海軍部內に謀反を計る者があつたとかいふやうな報道の眞僞は明かならずとするも、今日現に未だ開く可き議會を開かずに居るの事實は、國內の動搖の容易ならざるものあるを語るものである。

獨逸に就いては之れ亦國內多少の動搖あるべきを推測し得べきも、未だ之に關する適確の報道は無い。唯五月十七日の電報の普魯亞選擧法の改正案の運命に關する報道は、偶々以つて同國內情の容易ならざるものあるを推測せしむるに足る。普魯亞の選擧法が極めて舊式のものであり、其結果同國の議會には殆ど自由主義者の選出せらるゝ見込み無き事は、曾て本誌に於て之を論じた。而して政府は民間に於ける自由の要求に耳を傾け、從來の階級主義を排し、所謂平等の普通選擧主

義に革めやうとしたのであるが、官僚軍閥の巣窟たる保守黨は之を削除した。仍で少數の自由主義者は再び平等選擧權の復活に關する修正動議を提出したが、之れも五月三日一八三に對する二三五の多數で否決された。而して選擧法改正案は平等選擧權の條項を削除したまゝで、五月十七日第三讀會を通過したと言ふのである。當り前ならば斯くの如き結果を政府では大に喜ぶべき筈であるのに、同じく新聞の傳ふる處に據れば、閣員の一人たるフリードベルグは平等主義の復活の爲めに、政府は今後凡ゆる立憲的方法を採つて、飽くまで努力する所あるべきを宣明し、若し議會がどうしても政府の希望に添はざる時は、解散を斷行すべき旨を宣明したとある。之れ皆政府が議會に蟠屈する保守黨の希望に背きて、民間多數の自由の要求に調和せんとする事を語るものであつて、之に據つて我々は獨逸に於ける保守的軍閥と自由的民間との間に、漸次溝渠の深く成り増さりつゝあるの事實を想像し、且つ又今日の當局者が此事實に對して深甚の憂慮を懷いてゐる事を認むるものである。之れ以上に獨逸の內情を推測すべき何等の報道も無いが、之を要するに最近攻勢の失敗に關連して、民間に一種異常の空氣の磅礴いてゐるのは疑ひ無いと思ふ。

五月央ば獨墺兩國は更に二十ヶ年の期限で同盟條約を更新したとある。又別報には此兩國はウクライナを手に入れて後高架索の方へ手を出し、遠く印度を脅かさんとして居るといふ報道もある。獨逸國內の論壇には獨逸、土耳古、波斯三國同盟の說も盛んであるといふ事である。四月央ばロイド・ジョーヂは印度總督に宛て「獨逸の支配者は今や歐羅巴に於てのみならず、亞細亞にまでも其毒手を伸ばさんと企圖しつゝある事明白である。予は印度の政府と人民とに向ひ、更に一層の努力を爲さん事を望まざるを得ぬ。」といふ電報を發したといふから、英國として安心の出來ない程度に、獨逸の活動が初まつて居る事は疑ひを容れない。然し此等局部々々の運動に由つて到底大勢を左右するの道は拓けないから、獨墺兩國が內部に於て困憊の種子を有

つて居る以上は、昨今又他方面から傳へられる講和の風說の如きも全然之を無視する事は出來ないのである。

（三）

五月初旬獨逸外相キユールマンの旨を承けたと見らるべき和蘭の政治家コリン氏が英國に這入り込んで、非公式に講和の提議をなしたといふ報道があつた。當時新聞の傳ふる講和條件なるものは、略ぼ次の如きものであつた。（一）獨逸は西方に於ける一切の要求を抛棄する。從つて白耳義の獨立は完全に恢復せられるであらう。（二）アルサス・ローレンには獨逸聯邦の一として十分なる自治を與へる。（三）東方方面は現狀の儘に之を維持する。（四）匈牙利はトレンチノの一部を伊太利に讓與する。（五）巴爾幹問題は國際會議によつて之を決する。（六）植民地問題は交戰國全部の會議によつて之を決する。（七）獨逸は支那に於て或種の經濟的讓與を受けるを條件として、膠州灣に對する一切の要求を撤回する。かゝる條件では英佛側の固より承諾する筈はないので、コリン氏も其目的を遂せずして歸つたやうであつた。五月六日外相バルフォーアは下院に於て獨逸より何等正式の講和提議無かりし事を明言した。「コリン氏は獨逸の旨を承けて來たやうだけれども、我々の決心の堅きを觀て、自分に授けられたやうな條件では言ひ出しても無効だらうと考へて、初めから何等の提議を成さずに歸て了つたものらしい」と言つて居るから、獨逸側に和議を提唱するの意思の有つた事丈けは疑ひを容れない。但斯くして獨逸の希望する處は終局の平和なりや、一時策戰上の便宜としての試みに過ぎざりしやは今明白でない。

何れにしても之れ丈けは疑ひない。第一に、獨逸は國內に於ける民心を鎮撫し又之を轉換する爲めに、平和の提議をなす事が必要であつたと思はる。成功せば卽ち和議不應の責任を敵國に嫁して、民心を激勵するの効はあるからである。第二に、之に據つて敵國內の平和運動者に油を注ぐの効はある。現に之まで獨逸の平和提唱の陰謀の爲めに、聯合國の足並がどれだけ

亂されたか分らない。第三に、若し幸にして獨逸の和議提唱が幾分でも敵國の耳を傾けしめる事となれば、夫れ丈け獨逸に於ける文治派の氣勢を昂める事になる。キユールマンは即ち文治派政治家一方の代表者である。斯くして我々は少くとも獨逸の文治派政治家の間には、今日現に適當の時機に適當の條件を以つて和を講ぜんとする考ある事を認めるものである。唯何を以つて適當の條件とし何時を以つて適當の時機とするやは、何日でも講和問題の暗礁である。此點に關する双方の考は未だ〳〵容易に接近すべくもない。之が接近するまでは、如何に平和の風が吹き棚引いても、交戰狀態は依然として繼續せざるを得ない。故に予輩は昨今講和の風潮が段々濃厚に成つて居るけれども、戰爭は今の所容易に終結を告げるものではないと認むるものである。

唯一つ我々の特に注意せねばならぬ點は、歐米の政治家は一方に極力戰爭を繼續しつゝ、他方絶えず平和の交渉に耳傾くるを忘れざる事である。我々日本人の考へでは、戰爭に熱中すれば平和を忘れ、平和を考れば戰爭に倦むと言ふ風に考へるのであるけれども、歐米の政治家は決して斯く一本調子ではない。墺國皇帝親翰事件に表はれたるが如く、例へば聯合國首腦者の間に一時平和の内相談が交換されたからとて、彼等は既に戰に疲れ、機を見て突嗟に和議を成立せしめんとしつゝありと觀るのは決して穩當でない。さればと言つて彼等は最後の目的を達するまで飽くまで戰爭を中止せずと宣明しつゝ、又同時に適當なる講和の機會の到來を茫然逸し去るものでもない。戰爭によつて達せんとする終局の理想を眼前に描きつゝ、和戰兩様の準備を具有する處に、彼地政治家の頼母しい所がある。我々は顧みて斯くの如き頼母しき政治家の我國に見出し難きを嘆ずると共に、戰亂の中に平和の閃光の活躍を拒まざる歐洲政界の機微を誤算してはならない。

▽小題小言

法學博士　吉野作造

○青年團全國聯合大會と教育者の無氣力

去る五月五日青年團全國聯合大會が帝國大學の講堂に開かれた。一木樞密顧問官中央部幹事として開會の辭を述べ、續いて水野内相・岡田文相・大島陸相・加藤海相の奬勵の辭、高柳陸軍少將・田尻東京市長・安保海軍少將の講演があつた。並べ立て見ると軍人の顏か眼に立つ程多い。協議會に於いて議長は田中參謀次長であつた。

此聯合大會は全部軍人のみの指導でないとしても、軍人の主として指導する所たるは爭はれない。而して予は必ずしも之に異議を申立つる者では無いけれども、併し乍ら軍人に托するの斷じて正當に非ざるを信ずるのみならず、又本來青年薫育の任に膺るべき教育者の、お株を軍人に奪はれて平然として居るのを不甲斐なく思ふ者である。

青年團の精神教育に就いて、最も多く發言權を有すべき者は教育者であるべきである。然るに底事ぞ、中央に於ても地方に於ても、青年の指導に就いて一々軍人の指揮を仰ぐとは。之れ教育者の不見識を自白するものではないか。それも今日の軍人が相當青年を理解し、又青年薫育の方針を誤まらざるものならば、未だしも我慢が出來る。然るに事實は全然之に反し、予輩の觀る所では軍人は啻に青年薫育の任に膺るを自ら避くべきのみならず、自家の職務たる壯丁の薫育に就いても、須く教育者の説に耳を傾くべきである。殊に青年團の如きは專ら指導薫育の任を教育者に讓り、軍人は傍から之を助くるの地位に居らなければならない。而して今日青年團の實際が此點に就て主客顚倒の觀あるは、啻に教育者の無氣力として咎むべきだけの事柄ではない。又實に帝國の將來に關する重大なる問題である。

○米國に於ける青年團の一例

米國には專ら少年に軍隊的訓練を與ふる目的のものがある。之に軍人の關係するのは固より當然であるが、それでも主として世話するものは敎育者や地方の紳士に多い。普通の米國青年團は之に反して、專ら青年其ものを社會の一員として健全に薫育する事を目的とする。從つて彼等が入團の際に宣誓する所は次の三條である。(一)神と祖國とに對する義務を果し、且つ團規を遵守する事、(二)一日少くとも一善を爲し、以て他人を助くる事、(三)自分自身を生理的に强く保ち、精神的に目醒めて居り、道德的に正直なる事。而して團規として奉ずべきものは、信義を守る事、忠節を盡くす事、他人に仕へる事、友愛なる事、禮讓を盡くす事、親切なる事、柔順なる事、快活なる事、節儉なる事、剛毅なる事、淸潔なる事、敬虔なる事との十二ヶ條である。何事にも「用意してあれ」といふのが彼等の標語である。之を以て觀ても米國に於ける青年團の目的は、我國などのやうな偏狹のものではなく、一個の全なる市民を造るにあるの趣意が明白である。而かも此等の規則は唯口に云ふ許りでなく、世話する者が實踐躬行して範を少年に示すのである。役人や軍人が晝は青年を集めて勇壯活潑の德を鼓吹しても、夜は地方有志家の阿諂的招待に應じて、旗亭に醜業婦と戲るゝが如きとは全然其選を異にする。數年前の統計に據れば、青年團の爲めに盡力しつゝある有志約七千の內、約二千五百人は宗敎家、牧師及び基督敎青年會關係者であり、千七百人は地方の名望家、約千人は敎師並に大學生、其他は銀行會社員とか技師とか法律家とか醫師とか云ふ階級がある。我々は青年薫育の爲めに貴重の時を惜しまざる軍人諸君の勞を多とするも、而かも尙ほ青年團と軍人とが離るべからざる關係にあるかの如く思惟する妄想を極力打破するに努むるの必要を認むる。

○米國講座新設に對する文相干

渉の風説

東京帝國大學に於ては米國へボン氏の寄附を受け、新に米國の憲法歴史及び外交に關する講座を新設するの議あり、寄附者の趣意に添ふ爲め、取敢ず二月以來講義を開いて居る。然るに五月初旬二三の新聞は、所謂米國講座の新設は即ち米國的民主思想の廣布なるの理由を以て、文相に之が新設を許さゞるの意有りと傳ふるものがあつた。米國の憲法歴史及び外交に關する研究と講釋とが、何故に民主思想の傳播を意味するか。又所謂米國的精神なる民主思想の傳播は、何故之を制抑するの必要があるか。後者は姑く之を措いて前者にして、若し許すべからずとせば、米國の研究は凡て之を學校の課目より取り除かなければなるまい。其極西洋歴史を教へても不可い事になる。之れ實に秦の始皇が書を焚き儒者を坑にしたと同一の筆法で、如何に頑冥でも今日我國の文教に與さはつて居る人に、斯くの如き妄想を抱く者あらうとは到底考へられない。寧ろ文相が斯くの如き侮蔑的報道に對して誹毀の訴を新聞社に加へなかつた事を訝むものである。無稽の報道固より歯牙に懸くるに足らざるも、斯の如き風説の生ずる所以は、畢竟我國昨今の思想界に驚くべき反動的分子の横行するもの有るに由るものにして、此點に關して予輩は此機會に於て、一つには文相の寃を雪ぎ、一つには國民に警戒を促すの必要を認むるものである。

廣重畫

保永堂版

東海道五十三次

橋口五葉編纂及監督

原寸大 六十枚揃

豫約募集

一、申込期限 六月三十日

二、申込金貳圓（申込金は最後の會費に補充し中途脱退者に戻さず。）

三、拂込

毎月拂 一圓五十錢

一時拂 二十八圓（申込金不要）

二回拂（第一回十六圓五十錢 第二回十二圓五十錢）（申込金不要）

四、送料（別に申受く）每回につき 東京市内四錢 內地十二錢 外國六十二錢 臺樺卅錢 鮮滿金四十錢

五、大正七年五月より毎月五枚宛配附し一ヶ年を以て完結す。最後にタトフを添ふ。

在來の複刻品と異れる本畫集の特色

一、廣重畫東海道五十三次の複刻は在來數種あり。然れ共其總てが後版後摺を手本とせしに反し此複刻は專門家間に丸子入東海道と呼ばれたる藝術的價値最高き保永堂版の初版初摺（廣重の親しく査閲せしもの）の稀品によれる事

二、目前の利に捕はれ全然摺師に一任せる在來の複刻品と異り本畫集は木版畫の權威橋口五葉先生が敬虔なる態度を以て廣重の藝術的才能を後世に傳へんことを努力せる事

附言。本畫集の一枚毎に責任を負ふため五葉先生自ら檢査の印を捺す。

三、原畫五十五枚の外に圖柄の最も異りたる後摺の複刻五枚を加へて六十枚として更に廣重の他の五十三次畫集の代表的畫を十種以上寫眞版として添え且つ廣重の東海道作品に關する五葉先生の解說及び研究論文を添えたる事。

四、用紙は原版畫に用ひたるが如き上質の伊豫柾を用ひ繪具は原版畫に用ひたると全く同種なる事但し藍のみは現今の藍と異るが故に現今の藍によりて同じ感じの色を出すに努めたり又取扱上一枚毎に臺紙を附したるも是元より畫その物と關係なく亦之れが爲め價格の嵩まんことを恐れ臺紙は特に極めて粗惡なるものを選びたり。

見本 御入用の向は送料共金五十錢送附せられたし

東京神田南神保町 電話本局一一四〇・三六八八 振替東京二六二四〇

岩波書店

人蔘界の權威劑

トモヱ人蔘劑の特色

本劑は純朝鮮開城產高麗人蔘中の優良なるものを最新の學理に基き絕對に他物を混せずして精製し主任藥劑師一々嚴密なる檢査の上封緘したるものにして奏効の確實迅速なる事坊間有りふれたる人蔘劑と同日の比にあらず

主効

病後衰弱　貧血症　神經痛
リウマチス　子宮病　神經衰弱
ヒステリー　慢性秘結　營養不良
腦病　胃腸病　心臟病
肺病　感冒　腎臟病

トモヱ人蔘腦

十日分　一圓二十錢　二十日分　二圓二十錢　三十日分　三圓
五十日分　五圓　百日分　九圓

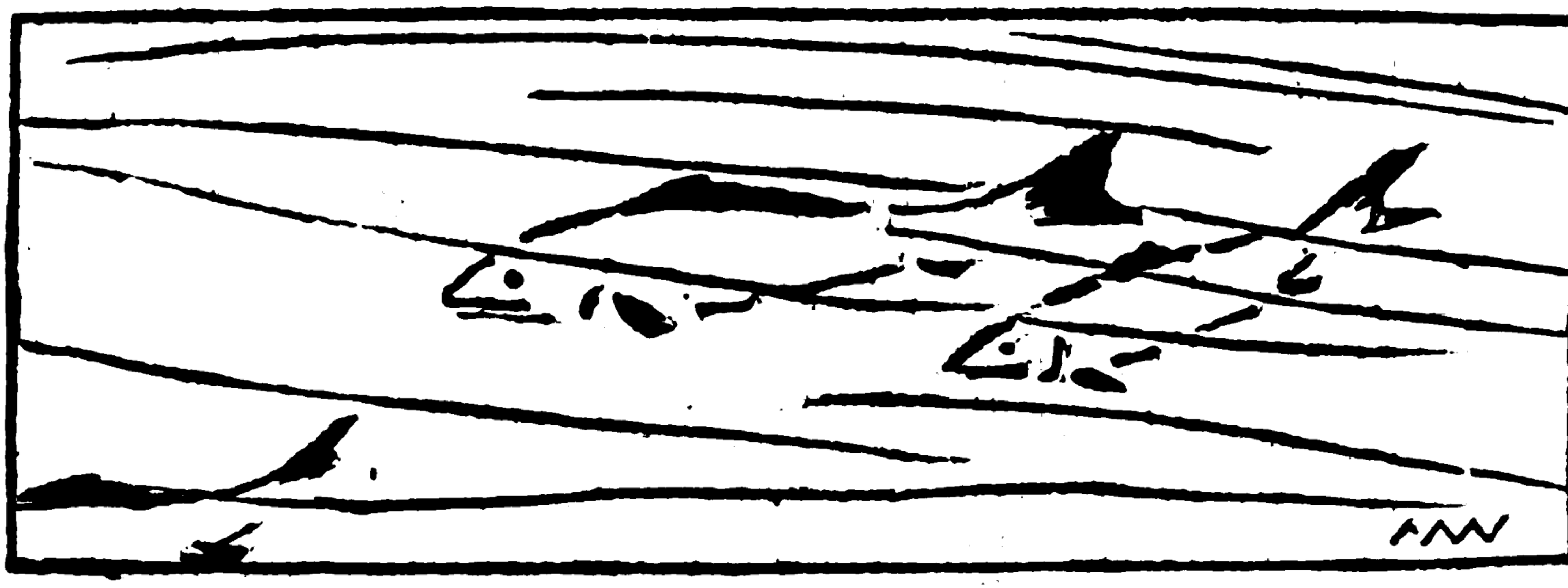
トモヱ人蔘錠

百錠入　一圓　二百二十錠入　二圓

△葉書の注文あれば即日發送す　△實驗者報告申込次第送呈

東京市麴町區三番町四十九番地
朝鮮蔘藥合資會社
電話番町二七一七番
振替東京四〇三三一番

出張所　朝鮮京畿道開城



舞ひの袖

長田幹彦

微風(そよかぜ)の吹く鴨川の夏の夜を、やさしい絹張りの雪洞と、浮々した妓達の笑聲で賑はしてゐた涼床もいつの間にか一つ二つと歯がぬけたやうに取り拂はれて、急に寂しくなつた河岸つゞきの席貸しの軒には夜毎に悲しい秋風がひそ／＼と啜り泣いていつた。磧の礫原も白く洒れて、朝夕はせゝらぎ流れてゆく川水も紫色に澄んで、比叡から南につゞく東山の三十六峯には一沫の胡粉をはいたやうな霧がかすかに低迷してゐた。佗びしい時雨に明け暮れる秋の色が日に日に京の町に深くなつてゆくのであつた。

舞妓の千賀勇が客をとるといふ噂は、その頃からぽつ／＼祇園の廓で人の口の端にのぼりそめた。千賀勇はとつて十六、すんなりとした細面の、眼の切れの長い、京風の髷のよく似合ふ美しい顔容であつたが、殊に氣立ての優しいのと溫和しいのが評判で、祇園に數ある舞妓のなかでも十の指のなかへ數へられる妓のひとりであつた。生れは西陣の貧しい機屋の娘で

やつと物心のつく頃から今の屋形の西村へ貰はれて來て、そこで舞妓の店出しをするまでいろ〳〵なことを仕込まれたり、座敷の法を見習はされたりして、子供心には辛苦の多い月日を送つて來たのであつた。なかでも彼女は自分もひどく好きで一心になつて師匠についたので、彼女の舞ひの手振りは實に鮮かなものであつた。鮮やかといふよりは、彼女のしなやかな體つきや、白魚のやうな細りした手が舞ひをまふのに打つてつけな形に生れついてゐたのであつた。

屋形の西村の姐さんといふのはおまさといつて祇園でも一二を爭ふ老妓なので、その家は今に辛氣くさいと云はれるほど古風を守つてゐた。舞妓が十三四になればもう極まつて客を取らせる今風の習慣に倣まず、家はどんなに辛くても、外では千賀勇にもあどけなく振舞はせ、舞妓は舞妓らしく座敷をとりまわすのを誇りとしてゐた。お連れの舞妓達は立派な旦那が出來て、贅澤三昧に日を暮らしたり、若い役者と浮いた噂を立てられたりしてゐるなかに、千賀勇ばかりは相變らず白蠟の火の息づく影で好きな絽刺しをしたり罪もない緣結びの戯れに耽るやうな妓に育つてゐた。それ故十六にもなつてゐながら男のその字もまだ彼女の心には映つてゐないのであつた。そんな風であるから、時偶は自分より年の少い舞妓達からも退けものにされて、何を云はれても「さうどすか。」と靜かに答へて、友禪の長い袖を膝のうへへ重ねながら唯やさしく微笑んでゐた。舞妓達は陰へまわると、

「ほんまに千賀勇はんのやうな賴りない人私知らんわ。まるで阿呆みたいなわ。」などゝ云つて笑つてゐた。

千賀勇の旦那にならうといふ客は、今迄にも數へきれぬほどあつたが、今度のは神戸で名うての船成

金で、廓では四條の芝居で演じた新狂言のなかへ出て來る藤兵衛といふ敵役の顔に生寫しだといふので、「とうべはん」といふ渾名をつけられてゐる今大盡であつた。此の人は自分の商賣柄から妙に緣喜を祝つて、年廻りのいゝ舞妓と見ると金のあるに任せて、片ッ端から蕾の花を散らして歩くのを自慢にしてゐた。茶屋でも間には可哀さうだと思ふことがあつても、三百金五百金の金を惜しげもなく投げ出すので、それには一も二もなく卷かれてしまふのであつた。その「とうべはん」の手にかゝつて、むざ〳〵と舞妓の誇りを捨てゝしまつた妓は今迄にも幾人あつたか知れなかつた。その順が廻りまわつて、今度は愈千賀勇が人身御供にあがらなければならない時が來た。

屋形ではお母はんも姐さんも折角これまで意地をたてとほして來たものをと妙に惜しいやうな氣もしたが、しかし千賀勇もゝう來年はどんなことをしても襟代へをさせなければならない年頃になるのである。襟代へをすれば何を云つてもいゝ旦那を持たせなければ第一千賀勇の體に退け目がつく。その旦那にも望みがあつて、いつそとるなら京で老舗の手堅い商人か何かで、廓で何の誰某と昔から名の通つたやうなお大盡をつけて、末長く面倒が見て貰へれば此れに越したことはないのである。一時にぱつと金を遣はれて、今の惡いけば〳〵しい風儀に染むよりも、地味にそして手堅く暮らしていけるやうな道をとつてやり度いのであつた。しかし「とうべはん」はもうこれと當りをつけると、殆んど花は買ひ占めてしまふ、今日は大阪へ芝居見物に明日は須磨の別莊へ遊びに連れてゆくといふ風で、千賀勇のためには千金も惜しまないといふやうな散財振りをみせる。從つて茶屋の方でも躍起となつて懸け合ひに來る、その熱心さに動かされて、さすがの屋形のお母はんも男衆もゝう斷はりきれないやうな羽目になつ

てゐた。初めのうちは、

「あんな氣のあかん妓どすさかい、とても末長うお客さんのお氣に入るちうよは出來まへんよつて、……。」などゝ云つて言葉を濁してゐたお母はんも、先の茶屋の女將が直談判に來るやうになつてからは、もうどうにも出來ないやうな顏をして、ほと／＼當惑してしまつてゐた。そこで、西村では老妓のおまさともよく談合したうへ、妓で今の相場でないやうな途方もない枕金と、そのうへいろ／＼小むづかしい條件をつけてやつたら、あんな遊び方をする云はゞ田舍者のことであるから、きつと呆れて手を引くに違ひないと思つて、もう千賀勇には何事も云はずにその計らひをしてしまつた。それも千賀勇の身が可愛いゝと思へばこそ、屋形にとつては爲めになる客であるにも拘らず、此方から體よく斷るやうなことをしたのであつた。

ところが案に相違して、先方も張り合ひになつたとみえ、二つ返事で此方の要求を承諾して來た。仲へ入つて困つたのは屋形であつた。まさかと思つて安心してゐたのに、向ふからさう出られてはもう何と斷はりの云ひやうもなかつた。そこで到頭屋形では退くに退かれなくなつて、已むを得ず今度は老妓のおまさの口から千賀勇の方を說得するやうなことになつていつたのであつた。

秋も日一日に更けて、丁度その頃には祇園の歌舞練場で名代の溫習會が初まる季節が近づいて來た。千賀勇は師匠の推薦で、その年は晴れの舞臺でお三輪を舞ふことに略ぼ決つてゐた。舞臺へ立つには衣裳から萬端の支度に可成りな額の金が要る。屋形ではそれがずつと以前からひどく荷になつてゐた。且那といふ後楯のある妓なら何もそんな苦勞はなかつたが、一體に西村は腕一本の妓達ばかりで維持して

ゐる屋形なので、さういふ時にはまことに心細いのであつた。屋形の方から云はせるとそんなこんなもいくらか心を動かす源因になつてゐるのであつた。

千賀勇は溫習會へ出られるといふので、その日が近まるにつれもう晩になると夢にまでみるほど樂しんでゐた。家にゐると起つにも坐るにも舞ひの手振りをしたり、唄の間をとつたりして、朝から晩まで子供らしい歡びに耽つてゐた。老妓のおまさは今度の旦那のことを云ひ出すには、先づどうでもその溫習會を嵩に着るより他はないと思つた。それで責めるのは罪な話でもあるし、ひどくいぢらしくも思はれたが、併しそれより他にはもうどうにも仕樣がないのであつた。

或る寂しい秋雨の降りくらす夕べ、その日は幸ひいつもよりお花の時間が遲かつたので、屋形のお母はんと、おまさは二階の部屋へ千賀勇を呼びあげて、いよ／＼そのことを切り出して、茶屋からの話に從つて、あの「とうべ」大盡を客にとれと型のごとく正式に申渡した。

千賀勇は部屋へ入るや否やお母はんやおまさの物々しい顏容をみて何かしら不安な顏色を浮べてゐたがその口からとうべはんのことをきくと、急に膝を堅くして、兩手をきちんと袂の下へ重ねて、顏を伏せてしまつた。もうこの頃ではそれとなく「とうべはん」の噂も千賀勇の耳へ入つてゐたので、彼女もいつかはそれを云ひ出されるものと覺悟はしてゐたと見え恥かしさに隱したその顏には、京風にあげた鬢の下から耳朶が燃えるやうに紅くなつてゐるのがちらりとみえてゐた。

おまさは何を云つても千賀勇が默つてゐるので、少し氣をせいて、

「なあ、千賀勇はん。そないに默つてゐては分らへん。どつちやなと返事をおしやしたらどうどすね。

と、云ふ。

千賀勇はその時やつと少し顏を擡げて、低へ聲で、

「姐はん。私その他のことやつたら何んでもしますさかいに、どうぞそれだけは、あの、それだけはどうぞ頼みどすさかい堪忍しとおくれやすな。」と、とぎれ〳〵に云ふ。

屋形のお母はんは却つて優しく云つては事面倒と見てとつたので、乾とした顏になつて、

「あんたそんな阿呆なこと云ひ出してはほんまにあかんなあ。あんたも今年はもう十六やないか。來年はどないにしても襟代へをせんならん人やないか。十二や十三の孩兒ではあろまいし、そんな氣のあかんこつではほんまに仕様がないわ。藝妓はんになつたらなんぼ厭やゝ云ふたかて、旦那はんを取らんならんのや。どうでさうなるのやつたら今のうちにあんじようしといて、襟代への折も旦那はんにちんとして貰ふた方が何んぼえゝや分らへんやないか。」

千賀勇は口籠りながら、

「お母はん、さうかて、……」と、云つたが、あとは言葉が出て來ない。

おまさはそれと傍から引取つて、

「千賀勇はん。あんたそないにお云ひるけど、これは舞妓はんやつたら誰かてせんならん勤めやさかいなあ、そ、雛蝶はんかて、菊葉はんかて、あんたのお連れはもう誰かてちんとしてやはるやないか。私らも初めはほんまに死ぬほど厭やつた。それでも一度はどうでせんならんと思ふて、その死ぬ思ひを耐へて旦那はんをつけて貰ふた。その時にはほんまに叶はんと思ふたけど、あとになつてはそないにも思

はへなんだ。厭やと思ふのもほん初めのうちだけで、あとは又えゝやうにして呉れやはるさかい、そないに心配せいでもえゝもんどつせ。」と、云つて、おまさは自分が旦那をとる時の話を笑談のやうにして、面白可笑しく話して聞かせた。

千賀勇はぶる〳〵肩を慄はせながら默つて聞いて居た。ふと擡げたその顏を見ると、美しい眼には一杯に涙が輝いて、白粉をしたばかりの頬には涙のあとが乾きもやらずにひと筋ながく流れてゐる。胸のうちの切ない思ひはその眼の底にまでくつきりと現はれてゐた。

お母はんはやがて茶屋の方への返事をしたことから、屋形の事情まですつかり噛んで含めるやうに話した末、飽くまで舞妓の法といふのを楯にとつて、どうかして千賀勇を納得させやうとした。しかし千賀勇は唯悲しげに啜り泣くばかりで、なか〳〵うんと云はなかつた。

お母はんもしまひには持て餘して、到頭心にもなく聲を荒らげながら、

「千賀勇はん。あんたがそないに聞き分けがないなら、もうどうなとあんたのえゝやうにおしやす。そのかわり今度めの溫習會には家からは何んも構うて上げへんよつて、お師匠はんのところへいて、そないに云ふて斷はり云ふといでやす。」と、云ひ放つた。さうは云ひながら、お母はんは自分でも云ひ甲斐もなく涙含んでゐた。

千賀勇はそれを聞くと耐えられなくなつて、そのまゝ疊のうへゝ泣き伏してしまつた。

おまさは默つてそのさまを眺めてゐたが、かうまで厭がるものをほんとに可哀想なと思つたかして、自分も貰ひ泣きをしながら、

「ほんまに私らは厭な役目どすなあ。」と云ひながらお母はんの方を向いて寂しく笑つた。
そこへ千賀勇がよく行く川端の松代といふ茶屋から電話でせいて來たので、彼女はそのまゝおまさに宥められて、お花にいく支度をした。顔を直して、ちやんと友禪の振袖に着換へて、青磁色の美しいだらりをゆらめかしながら屋形の門を出て行く時、おまさは上框のところまで送て出て來て、そこの薄暗がりで
「なあ、千賀勇はん。お母はんもあないに云ふとゐやすのやさかい、あんたもよう考へとみやすや。さいぜんも私が云ふた通りどうでも一度はせんならんことやさかいなあ。」と、やさしく云つて聞かせた。
千賀勇は「おほきに」と、涙聲で云つてそのまゝこぼ〳〵の音をつゝましやかに踏みならしながら今雨の降りやんだばかりの宵闇のなかへしよんぼり出ていつた。

川端の松代へ來て見ると、そこの仲居はこぼ〳〵の音を聞きつけて、暖簾の陰から顔を出しながら、お客はんは今木屋町の井とめへいかはつたからすぐに先方へいつて呉れと云ふ。千賀勇は。
「へえへ、おほきに。」と、素直に云つて、やがて俥を雇つて貰つて、そのまゝ木屋町へいつた。
縄手から三條の大橋を渡る時、いぢけたやうな雨あがりの夜靄に滲む木屋町の燈影が今夜に限つて、妙に涙ぐんでゐるやうに悲しげに瞬いてみえた。千賀勇はどうでもあの「とうべはん」を旦那にとらなければならないのかと思ふと耐らなくなつて、つひ又われにもなく涙含んでしまつた。もしそれをしな

ければ來るべき温習會でお三輪を舞ふことは出來ない、千賀勇の小さな胸中にはこの世の中で何よりもそれが悲しいのであつた。つれない秋の夜風は彼女の涙にしめる頬を冷たく吹いて行つた。

木屋町の川添ひにある席貸しの井とめへ來てみると、自分を招らして呉れた客といふのは思ひ懸けもない石井といふ東京の客であつた。京都が好きで、年に必ず四度や五度はやつて來て、一週間なり二週間なり馱々羅遊びをしつゞけて行く客であつた。殊に舞妓が好きで、來る度に彼等の云ひなりになつて、大阪へ芝居見につれていつてくれと云へば一緒に連れていつて呉れるし、今日は宇治、明日は嵐山と何んでも氣隨氣儘にさせてくれる舞妓達の所謂えゝ人のひとりであつた。今度も大阪へ急用があつて來た序に、つい今しがた七條の停車場へ下りたばかりだと云つて、湯上りの血色のいゝ顔に嬉れしさうな色を溢へながら先に來た二人の舞妓とひとりの若い藝妓を相手に頻りに盃をあげてゐた。

千賀勇は店出しをしたばかりの頃からいつも變らず贔負にして呉れるので、僅かに二ケ月振りに逢つたのでもひどくなつかしかつた。彼女はいきなり石井の傍へつていつゝましやかに坐りながら、

「ながいこと。どないにしといやしたんどす。」と、云つて、挨拶をしたが、その眼には嬉れしさが輝いてゐた。

石井は例の物にかゝづらはないやうな笑ひ聲を立てながら、

「お、千賀勇さん。しばらくだつたな。機嫌ようしてゐるか。」と、半分は態と京言葉を眞似ながら云つて冷たい彼女の手を握つて呉れたりした。その輕い調子までが千賀勇にはひどくなつかしかつた。

その晩もいつものやうにくさぐさの旨い食べものなどを取寄せて、トランプをしたり、字取りをした

りして、多愛もなく遊び暮らした。千賀勇も初めのうちは何事も打忘れて、面白く遊んでゐたが、漸次と夜が更けて來るにつれ氣が滅入つて來るやうに思はれて、しまひには自分でも不思議な位默り込んでしまつた。長い睫毛を憂はしげにしばたいて、彼女はかすかに嘆息ばかり吐いてゐた。

石井はふつとそれを見咎めて、

「千賀勇はん、えらいしづんでゐるぢやないか、何處か體でも惡いんぢやないのかい？」と、やさしく聞いて呉れる。

千賀勇ははツと我れに返つて、心もち顏を染めながら、

「そなことあらしまへん。」と、云つたが、何かなしにもし溫習會へ出られなくなつたらといふことだけが胸に迫つて來て、言葉は自づと澱んで來る。

石井は眉を顰めて、

「いや、さう云へば顏色も惡いよ、ほんとに何うかしたんぢやないのかい。」と、訊いてくれる。

千賀勇は唯頭を振つたが、親切に云はれるとつひ悲しくなつて、我れ知らず涙含んでしまふ。

座にゐた松代の女將はそれを見るとうすく笑つて、石井の顏をみながら、

「あのなあ、千賀勇はんは此頃きつうしゆんでやはるのどつせ。ちよつと叶はんことがありましてな。

……」と、笑談のやうに云ふ。

千賀勇はそつと指先で涙を拭いて、

「姐さん。どうぞそなこと云はんと置いとくれやす、私叶ひまへんわ。」と、云つて、耳の附根まで眞紅

になつてしまふ。他の舞妓達もにやにや笑つてゐた。

石井はそれを聞くと根掘り葉掘りいろいろなことを訊ねるので、女將も隠しきれなくなつて、到頭「とうべはん」のことを話してしまつた。

石井は大きく笑つて、

「ふむ、愈々旦那はんが出來るのか。そりやお目出度いねえ。千賀勇はん。さぞうれしうおつしやろなあ。」と揶揄のやうに云つたが、それでもその眼には妙に寂しさうな色を浮めてゐた。

千賀勇は友禪の袂で顔を掩つて、

「姐さん、私叶はんわ。頼みやちうてんのに……ほんまにいけずやなあ。」と、云つて、そのまゝ體ごとぐるりと後へ向いてしまふ。美しいだらりの銀絲の繡ひが電燈の光を受けてきらりと輝く。

女將はそれから石井に「とうべはん」の遊び振りから、千賀勇が「とうべはん」を嫌つてどうしても厭だといつてゐる話などをこまごまと語つて聞かせた。石井は漸次と眞顔になつて、しまひには憤慨に堪へないやうな顔色になりながら、

「そりやどうも實に怪しからん話だねえ。それほど厭だと云つてゐるものを無理に取らせるのは可哀想だ。相手が成金だけに、我々貧乏人は腹が立つねえ。」

女將も眞顔で、

「さうかて、こればかりは廓の法どすさかいなあ。仰山なお金を積まれたら厭ちうことは云へまへんわ。私の家のお客はんやつたら、こんな孩兒(やゝこ)に罪なことせんとおいきやすちうて、千賀勇はんのえゝや

うにしてあげるのどすけど、他のお茶屋はんではなあ。それに又私のやうに可哀想やちうてお客さんの云ふこと聞かなんだら、又お商買の方が立つていきまへんしなあ、ほんまにむつかしいもんどすなあ。」と、しみじみ云ふ。

今迄喋いでゐた石井はそれと一緒に急に默り込でしまつた。何か深い思ひに耽つてゐるやうに、時々盃をあげて酒ばかり飮んでゐた。藝妓も舞妓もそれに引入れられて妙にひつそりしてしまつた。

ふとみると後向きになつて耕鹿の子の襟に顔を埋めてゐる千賀勇のしんなりとした肩先はこまかく慄へてゐる。だらりの銀絲はそれと共に電燈の光を吸ひ寄せて嘆息を吐くやうにぶるぶる慄めてゐるので、石井はそつと顔を近寄せてその顔を覗き込んでみると、彼女は嗚咽を呑みながらしきりに忍び泣きをしてゐるのであつた。

石井はやさしく宥めるやうな調子になつて、

「千賀勇はん。そんなに泣くのはおよしよ。なにも泣くだけのことはないぢやないか。それ程厭なものなら、厭だときつぱり云つて斷はつてしまつたらいゝさ。いくら成金だつて、大臣だつて厭なものは厭なんだ。それを無理にと云ふのは野暮の骨頂ぢやないか。」

女將も力なげな調子になつて、

「それがあんたはん、なかなか徹らんのどすわ。お茶屋はんがやかましく云はるゝのどすさかい、なんぼ屋形で斷り云ふたかてあかんのどすがな。なあ、千賀勇はん、さうやろ。あんたとこのお母はんはえゝ人やさかい、決して無理なことは云ははらへんに極つたる。お茶屋はんがやかましいのやなあ。」

と、千賀勇の方を向いて云ふ。
　千賀勇はかすかにうなづいて、
「なあ、姐はん、あの、もし旦那はんが厭やつたら、もう溫習會にも出して上げへん云はゝるのどすわ。私、それがほんまに悲しいて……。」
　女將も石井もそれを聞くと顔を見合はせて口を噤んでしまつた。
　そこへ仲居がやつて來て、千賀勇に電話だといふ。千賀勇は「おほきに」と云つて、そのまゝしぶしぶ立つていつたが、やがて雙眼に一杯涙ぐみながら歸つて來て、いきなり女將のそばへくづをれるやうに坐りながら、
「姐はん。私どないにしませう。又吉喜久はんから招らして來やはつたんやわ。」と、泣き聲で云ふ。吉喜久といふのは例の「とうべはん」のいく花見小路の茶屋であつた。
　女將は眉を顰めて、
「ま、さうか。ほんならすぐに行かんならんやろ。なあ、石井はん。えらい濟んまへんけど、どうぞ千賀勇はん上げとくれやすな。」
　千賀勇はそれを抑へて、
「私、ちよつとも行き度いことあらへんわ。こないにして石井はんから招らしとくれやしたんどすさかい、えらい濟んまへんけど、姐はんから家へ電話かけてどうぞ斷り云ふとくれやすな。ほんまに、私、賴みどすさかい。……」

女將はその顏を見て、

「そやけど、そんなことしてえゝのかいな。」

「あの、家では石井はんちうたら、聞いて呉れやはります。」

女將はやがて起ち上つていつた。併し女將の親切も無になつて、屋形ではお母はんが自分で電話口へ出てきて哀願するやうな調子でどうか花を吉喜久へ讓つて呉れといつた。千賀勇は泣いても喚いてもゝう駄目であつた。

それを聞くと千賀勇はさも悲しさうに肩を落として頻りにせぐり泣いてゐたが、やがて呟やくやうな聲で、

「なあ、へ、姐はん。誰れぞ舞妓はん落籍しとくれやす人はないやろか。」と、云つて、その肩へ泣き崩れてしまつた。

他の舞妓達も思はず涙ぐんで、

「ほんまに氣の毒なゝあ。」と、白い顏を見合はせながらさゝやき合つてゐた。いづれも身に覺えのあること故、一層思ひ遣りが深いのであつた。

石井は紅く醉ひの出たその眼にいつの間にか一杯涙を溜めて、千賀勇のいぢらしい姿を見守つてゐた。

女將はやがてそつと肩から千賀勇の顏をはなさせて、

「なあ、千賀勇はん。もうそんなに泣くもんやないの。なんぼ泣いたかて仕樣がないのやさかい、機嫌

なをしていといでやす。それでないと私が困りますわ。」と、云つて、いろ〳〵と宥め賺かしたが、さう云ふ女將も眼を濕ませてゐた。

千賀勇はやがてやつと顏から袂を離して、座敷の隅の方へいつて帶の間から手鏡を出して、頻りに顏をなをしてゐたが、それが濟むと石井の傍へやつて來て、

「ほんなら石井はん。私いてきますわ。又あとでしらしとくれやしや。ほんまどつせ。」と、云つて、そのまゝすご〳〵と座敷を出ていつた。「さいなら、さいなら。」と、いふ聲にも涙を含んでゐて、やがてそのひそやかな足音は廊下の彼方へ消えていつてしまつた。

女將はその音が聞えなくなると、石井の方を向いて、

「ほんまに可哀想におすなあ。私ほんまに男はんて罪なことしやはると思ひますわ。千賀勇はんであんたはんまできつうしゆんどしまひやしたなあ。ほゝゝゝ。さあ、お熱いのどうどす。」と、云つて、女將は仕様ことなしに銚子を取り上げた。

石井は默つて盃の縁を噛んでゐた。

戸外では鴨川の水音が滅入るやうに聞えて、秋風がこと〳〵と雨戸をゆすぶつてゆく。遠くの方の席貸しで忍び音に彈く浄瑠璃の絃の音がさびしく風の底を渡つてきた。

屋形の西村では一旦千賀勇に切り出した上は、いかに可哀想だからと云つて、もうそのまゝに打捨て

ゝ置く譯にいかないので、どうにでもして納得させようとあせつた。だん〳〵と「とうべはん」のことを聞いてみると、今迄噂に聞いてゐたほどの不粋な客でもなさゝうな氣はする。さうなると何とかして先をいゝやうに思はふとするのが人情で、たとへ千賀勇が體を任せても、仕向けやうに依つては後々まで爲めになる客のやうにも思はれてきた。

屋形ではいろ〳〵考へた末一計を案じだした。それは此際千賀勇の實母を使つて、是が非でも口説き落とさうといふのである。そこでお母はんは早速芧姆を西陣の家へやつて、すぐにも來て呉れるやうに頼み込んだ。

千賀勇の母親といふのは非常な慾人で、可愛いゝ娘をやつと物心つく頃から身代金に代へようと云ふほどの女であるから、自分の利得になることならどんなことでも引受けるやうな人間であつた。屋形へ來て、その一まきを聞くと、彼女はもう眼を丸くして、まるで金が降つて來るやうな顔をしながら、その座で娘を責めにかゝつた。

千賀勇は實母が泣いたり、威嚇したりするのを聞くとさすがにそれには反抗し兼ねた。もし云ふ事をきかなければ、早速この屋形の西村からお暇を貰ふて、大阪へ連れていつて娼妓に賣つてしまふとまで云つた。隣りの部屋で聞いてゐたおまさは餘りの言葉に却つて此方が恐くなつて、たつたひとりでしく〳〵貰ひ泣きしてゐた。

朝からかゝつてもう午過ぎる頃にやつと實母はそれでも無理押付けに千賀勇を説得してしまつた。千賀勇は眼を眞紅に泣き膨らして、實母と一緒にお母はんの前へやつて來て、もうお母はんの云ふとほり

「とうべはん」を旦那はんにしますと自分の口から泣きながら云つた。お母はんはやつと肩がぬけたやうな氣がすると一緒に何とも云へない物の哀れを覺えたのであつた。實母はいづれ後から何とか挨拶するといはれて、夕飯を御馳走になつて何んだか物足りなさうな顔をして歸つていつた。

千賀勇が承知したことは早速電話で茶屋へ知らせられる。丁度その晩は神戸からきた「とうべはん」が今朝からずつと宇治の花やしきへいつて居續けをしてゐるといふので、茶屋では又機嫌の變らぬうちに大急ぎで千賀勇を宇治の方へ送つて吳れといつた。やがて千賀勇は身じまひを濟まして、他處行きの姿に着かへて茶屋の吉喜久へいつた。そしてそこの仲居に連れられてすぐさま電車で宇治へ向つた。もうその時には彼女は一滴の涙さへ流さなかつた。涙を流すにしては餘りにいたはしい斷念めが彼女の心を暗くしてゐた。彼女は唯溫習會へ出る日のことを心に描きながらそれに依つて辛うじて胸のいたみを消してゐた。

宇治へ著いたのはもう秋の日が吹く風と一緒に寂しく暮れてしまつてからのことであつた。俥で宇治橋のうへを渡つてゆく時、千賀勇は恐ろしい水音をたてながら流れてゆく暗い川瀨の底から襟もとに水を注ぎかけられるやうな恐ろしい不安の念が迫つて來るのを覺えた。河上にともる賑やかな燈火の數々が、その時ほど厭らしく、恐ろしく映つたことはないのであつた。

その夜千賀勇を自分のものにした「とうべはん」はどうしたのかこの人形のやうな、何の手管もない

女がひどく氣に入つて、その翌日はすぐさま他の取卷きの舞妓達も一緒に宇治から大阪へ連れていつた。心齋橋筋でいろ〱な結構なものを買つて貰つたり、大阪の名代の料理屋で食事をしたりしたあとで、丁度鴈次郎の芝居があるといふので夕景から皆は浪花座へ連れていつて貰つた。大抵な舞妓ならばそれだけでもうすつかり嬉れしがらせられてしまふのに、千賀勇は唯義理一遍の返事をするだけで、につこりともしなかつた。そして芝居でも中幕すぎになると急に頭が痛くなつたといつて、仲居のおひさにどうか歸して呉れとせがみだした。

　おひさは場合が場合なのでひどく困つて、額に手を當てゝみるとどうやら熱があるらしい樣子である。宇治から歸りに風邪でもひいたものとみえて、唇の色も眞蒼であつた。で、おひさは仕方がなしにおづ〱「とうべはん」へそのことを訴へると「とうべはん」は苦い顏をして、それなら早速宗右衛門町の席貸へ連れ歸つてゆつくり寐させてやれといつた。千賀勇はやがておひさと一緒に芝居を出て、「とうべはん」が泊りつけの杉の井といふ席貸しへいつた。そしてそこですぐさま臥床をとつて寐さして貰つたが、もう夜半過ぎになつてとうべはんが芝居から南の茶屋へ廻つて、ひどく醉つて歸つて來た頃には彼女は一層頭痛が激しくなつて、子供のやうにしく〱泣きじやくりながらおひさに水手拭で冷して貰つてゐた。

　その翌朝になつても矢張り頭痛がなをらないので、千賀勇はどうかして京へ歸して呉れといつて聞かなかつた。他の舞妓達は折角面白い思ひをしてゐるのに、今千賀勇がそんなことを云ひ出しては自分達の樂しみもなくなつてしまふので、頻りにいろ〱なことを云つては引留めやうとした。おひさはひよ

つとして旦那をしくじつてはといふ懸念から態々千賀勇を別間へ連れていつて、おどしたり賺したりしてもう一日辛抱してゐろといつたが、事實、千賀勇はもう到底病苦には耐えられないやうな風であつた。とうべはんも白けた心持ちになつて、もし何ならこゝの醫者に見せて病氣のなをるまで三日なり四日なり大阪で寐てゆけと親切に云つて呉れたが、それでも千賀勇はどうしても歸して呉れと云つて聞かなかつた。で、仕方がなしにおひさはとうべはんに百遍も頭を下げて、他の舞妓達も一緒に到頭京都へ歸ることになつた。

　千賀勇は京へ歸つて屋形の二階で臥床へつくと、それから三日ばかりはひどく苦しんで暮らした。西村は舊弊な家なので、格別醫者にも見せずに、賣藥を買つて平氣で飲ませてゐた。いつも風邪心持の時などには千振りを煎じて服ませると大概は癒つてしまふので、今度も大方そんなことだらうぐらゐなことでお母はんもおまさも大して心配もしなかつた。

　そのうちに歌舞練場で温習會の催される日が一日〱に近づいて來た。もう女紅場では毎日朝から稽古が初まつてゐるので、千賀勇は寐てゐてもそのことばかり云ひ續けてゐた。女の一心といふものは恐ろしいもので、唯稽古に入り度さ、舞臺へ立ち[illegible]さ一念に、千賀勇はもうあと三日で温習會といふ日になると、突然起きると云ひ出した。お母はんはまだ早いとは思つたが、當人がそれほどまでに氣を入れてゐるものをと思ふと可哀想になつて、そのまゝ見て見ぬ振りをしてゐた。千賀勇はもう熱も下つたといつて、いつの間にか身じまひをして稽古場へ出ていつてしまつた。

　それから二時間ばかりして稽古をすまして歸つて來た千賀勇はどうしたものかけろりとして大變に心

持ちがいゝと云つてゐた。顔色は惡かつたが、僅か五日ばかり寐たぐらゐのことなので、その類にもさして窶れも見えず、平常よりも少し氣が重いぐらゐのことであつた。お母はんもその樣子をみるともうすつかり安心してしまつた。

稽古は丁度三日つゞいた。平常からしつかり仕込んであるので、千賀勇はお三輪の舞ぐらゐはさう大してさらふ必要もないのであつた。併し晴れの場所なので、彼女は師匠の云ふがまゝに一生懸命になつて稽古をはげんだ。そして屋形へ歸つてくると、さすがにぐつたりと疲れきつて、晩のお花だけは頼んで休まして貰つた。

千賀勇は臥床へ入ると一緒に息も出來ないやうな熱が出て來るのを自分だけで知つてゐた。もしそんなことが知れでもするとお母はんから又溫習會へ出てはならんと云はれる恐れがあるので、彼女はじいつと我慢して、そんな氣振りさへ見せなかつた。

千賀勇は深夜になると熱に浮かされて頻りに譫語を云つた。傍に寐るおまさはそれを疲れから來る寐言だとばかり信じてゐた。その譫語にも彼女は溫習會のことばかり云ひつゞけてゐた。

月の十日過ぎに愈祇園の歌舞練場ではこの秋の溫習會がいつもより一層賑かに催された。その日は朝からどんより曇つてゐたが、午過ぎになると妙に時候はづれの溫氣を催して來て、若い女達の頭には上血せを覺えるやうな厭な空合ひになつて來た。それでも花見小路には歌舞練場へいく人が櫛の齒を挽

くやうに往來して、客を送つてゆく仲居の水々しい丸髷や、美しく着飾つた舞妓達の姿は用もなげな店屋の内儀さんなどを門口へ引きつけて離さなかつた。いつも見馴れた姿ながらそれでも何處かに改まつた風が町中に流れてゐた。

歌舞練場へ來てみると、新らしい木の香のするやうな場内にはもう觀客がぎつしり詰まつてゐた。都踊りのある時と違つて、土間にも一等場にも劇場のやうなこまを入れて穴をしきつてあるので、何となく芝居へ行つてゐるやうな感じがする。各自々分の贔負の妓や、持ちものになつてゐる妓の技藝を見ようとする浮々した顏をして、場へ鍋臺を持ち込んで酒を飲んだり、物を食べたりしてゐた。煙草の烟りに白木づくりの場内を靄のやうに明るくしてゐた。

千賀勇の出番はもう夜も八時過ぎになつてからであつた。その日は神戸からとうへはんもわざ〳〵やつて來て、吉喜久の女將や仲居と一緖に例のごとく取卷の舞妓や藝妓を花のやうにまわりへ侍らして、大名の芝居見物のやうな大業な勢で見物してゐた。始終ひゐきになる藝妓や舞妓はしつきりなしに挨拶に來る。そこばかりは派手やかな場内でもひとしほ眼にたつて、觀客の眼は美しい白襟の妓が集まつてゆく度にそつちへひきつけられていつた。千賀勇も浮きたつやうな美しい友禪の衣裳を着て、紅いだらりをしてその取卷の妓達の間につゝましやかに坐つてゐた。

千賀勇はあんまり稽古が激しかつたので、さすがにその日はひどく元氣がなかつた。朝から妙に寒氣がして、ともするとぐらぐらつと眩暈がして來る。頭の底がその都度にきいんと痛んで、唇が乾いて、食物をとる氣力さへなかつた。それでも彼女は今日一日さへ濟めばいゝといふ氣で、一心に氣を張つて

我慢してゐた。

とうべはんはあんまり千賀勇が默つてゐるので、時々舞臺から眼を移してはさも心配さうに、

「おい、千賀勇。あんたえらうしゆんでるなあ。一杯のんだらどうや。」などゝ云つたりする。

千賀勇は顏色も動かさずに、

「へえ、おほきに、お酒やつたらもう結構どす。」と、云ふ。

吉喜久の女將もそれを押へて、

「旦那はん。お酒やつたら上げんとおいとくれやすな。まだ體もほんまにようなつたんでは御座りまへんし、今日は大事の舞臺どすさかいなあ。」と、いふ。

とうべはんはさも不服さうに、

「さうかて、一杯飲んで元氣をつけなあかんぜ。舞臺へ出てそんな浮かん顏をしとつては氣がづゝないわ。」などゝ云つたりした。

そのうちに愈々千賀勇達の出番が來た。もうそこいらになると出番も師匠の秘藏妓ばかりなので場内にも興味の熟したやうな緊張が見えてくる。幕の明く前にもう方々で拍手の音が起つたりした。

やがて小刻みな木の音と一緒に幕はさりさりと巻きあげられた。舞臺のうへには華やかな電氣の光が溢れて、道具師が手に手をかけてこしらへたお馴染みの場面が繪のやうにひろがつて來た。殊にこゝの道具師は切出しをこしらへることが巧みなので、色繪具で精巧に塗つた色調が人の心を映るやうに輝いてみえる。その晩は橘姫が舞妓の藤勇で、求馬が久菜といふ若い藝妓であつた。二人とも今美しいので

祇園で賣れ盛りの妓で、その際は場内の人氣を悉く集めてゐた。

「あゝ、えゝなあ。」

「こつちやが久菜はんか。えゝ顔してやはるなあ。」

「あつちやが藤勇はんやわ。」などゝいふ言葉がひそ〳〵と聞えてゐる。

老妓がこゝぞと聞かせる澁い唄聲と、冴えた撥音につれて橘姫と求馬は色模様になつて美しく舞ひつゞける。やがてお三輪の出になると、もう場内はひつそりと鳴りを靜めてしまつた。

千賀勇のお三輪は下手から苧卷の音をきり〳〵とかすかに響かせながら夢現のやうに走り出て來た。そして本舞臺にへかゝると燃ゆる情のきづなのやうな一筋の細糸をかせに使つて、娘らしいいとしい振りに移つたが、その時いつもの手練な千賀勇の舞ひ振りに似合はず、どうしたのか足の捌きがすきだらけであつた。さす手ひく手も何處か亂れてゐて、とんと極まるところへくると袂がぶる〳〵と慄へた。吉とみると、舞臺の袖へきて一心になつて見てゐる師匠の顔にはひどく不安さうな色が浮んでゐた。

喜久の女將は膝をのりだして見てゐたが、我れ知らず聲を出して、

「千賀勇はんが何やしら怪體におすぜ。又體が惡いのと違ふやろか。」と、云つたが、その途端に舞臺のうへでは千賀勇が苧卷きを持つて求馬とからみにならうとして、一足二足そつちへ歩み寄つていくと、どうしたのかふら〳〵と足がきかなくなつたやうに渾身を堅くして、そのまゝ耐力もなく前のめりにはつたり倒れてしまつた。

觀客席では彼方でも此方でもあつと云ふ聲が起つた。それと一緒に舞臺では、

「幕を下ろさいでもえゝがなッ」と云ふ叫び聲が起つて、兩袖から師匠と後見とがばら〳〵と走り出て來て、そのまゝお三輪をかき抱いて下手の方へ運び込んでしまつた。求馬は呆氣にとられたやうな顏をしてゐたが、師匠に舞ひつゞけろと云はれたと見えて、てれ臭さうにそのまゝたつたひとりで舞ひつゞけてゐた。

場内は俄かに騷然として來た。

かぶりつきの處で見てゐた西村のお母はんと、おまさはその騷ぎで顏色をかへて樂屋の方へ驅けつけていつた。吉喜久の女將も息をはづませながら入つて來た。

その時千賀勇はと見ると、舞臺からその儘部屋へかつぎ込まれて來て、艶なお三輪の衣裳のまゝ明るい電燈の下へ寢かされてゐた。一時の失神とみえて、濃く化粧した顏にはさした變りもなく、唯じつと眼を落して唇のところに口紅が少し流れてゐるきりであつた。

西村のお母はんは狂氣のやうになつて、いきなりその肩を抱きながら、

「千賀勇はん、千賀勇はん。」と、呼びかけたが、そのまわりにはいつの間にか師匠やら役員やらが心配して犇々とつめかけて來た。皆の瞳は限りない不安を輝やかしながら一樣にお三輪の面へそゝがれてゐる。

急報によつて表からは八阪病院から出張して來てゐる醫員が看護婦を連れてやつて來る。舞臺の方からはその間も絶えず唄聲が通つて來た。

醫員は騷ぎ立てるお母はんや師匠を取り鎭めて、やがて千賀勇の白い腕へ一筒の注射をした。その藥

がきくと間もなく千賀勇はぽつかり眼を瞬いて、まるで夢でも見てゐるやうな顔をして四邊をきよろきよろ見廻はしてゐたが、その時舞臺の方から通つて來る三味線の音が耳に入つたかして、彼女はいきなりふらふらと起き上らうとした。

お母はんはそれを押へて、

「これ、千賀勇はん。何をするのえ、靜にしてゐんといかんがな。」と、慌たゞしく留めたが、千賀勇は夢中のやうに、

「お母はん、離して、今、私が出て舞はんならんところどすわ。早う舞臺へいかしとくれやす。」といふ。

その時師匠も彼女の傍へ膝をついて、

「これ、千賀勇はん。あんたは體が惡うて舞臺で倒れたんやないか。そないに無理したらあきまへんぜ。」と、宥める。

千賀勇は狂ほしい泣き聲を立てゝ

「さうかて、さうかて、私死んでもだいじおへんさかい、どうぞ舞はしとくれやす。」と、叫んで又起き上らうとする。

皆は手とり足とりしてそれを押へた。

千賀勇はまるで駄々子のやうに身を悶えながら聲をあげて泣いてゐたが、やがてその顔をお母はんの膝へ埋めて、

「お母はん。ほんまに殺生どすわ。私これを舞ふために旦那はんも取りましたやないか。お母はん、どうぞ私を舞臺へ……」さう云ひながら千賀勇は又氣を失つてしまつた。そつと肩を抱いて引起してみると彼女は失神しながらも兩方の頰へ涙をはらはらと流してさも口惜しさうにきつと唇を嚙みしめてゐた。

事情を知つた師匠達もそれをみると思はず涙含んでしまつた。お母はんもおまさも耐らなくなつて顏を掩つてしまつた。

舞臺の方からは三味線の賑やかな拍子がひとしきり亂れて、やがて冴えた木の音と一緒に割れかへるやうな拍手の音が聞えて來た。その音がお母はんの胸には針を打たれるやうにひゞいた。

醫員の診斷では容易ならぬ容態だといふので、千賀勇は舞姿のまゝ鬘だけとつて、そつと俥で屋形へ送られて歸つた。歸るとすぐにとうべはんから電話がかゝつたと云つて、內科で有名な烏丸病院の院長が大急ぎで驅けつけて來てくれる。吉喜久の女將も見舞ひにやつて來る。松代からは態々仲居を見に寄越したりした。

院長が來た頃には千賀勇も稍正氣に返つてゐた。云ふことには埒もなかつたが、しかし眼はちやんと電燈の光をみつめてゐた。院長は巨細に診察したあとで靜かな聲で、

「何も心配することはいらんから、大事に養生せんといかんよ。」と、云つて、そつと千賀勇のうへゝ小搔卷をかけてやつた。

千賀勇は院長をつかまへて頻りに舞ひをまはせてくれとまだせがんでゐた。

院長は階下へ降りて來るとお母はんを呼んで、眉を顰めながら、

「どうもひどく體の無理をしたんで、容態が面白くないですね。まだ病名をつける譯にはいかんが、二三日模樣をみたうへで何とかしませう。何よりも頭を冷やしてやるのが第一ぢやから早く氷を買うて來て、間のきれんやうに冷してやんなさい。」と、云つた。

お母はんはその顏色ですつかり氣を腐らして、

「先生。それではまだ何んの病氣や分りまへんので？　あんな風で保ちまつしやろか？」と云ふ。

院長は首を傾けて、

「いや、それは今玆で斷言する譯にいかんですよ。大分惡いやうぢやからなあ。」と、云つて、いろいろ服藥の注意やら、療養法やらを敎へてあとで、院長は歸つていつた。

千賀勇はその晩、夜ぴて熱に浮かされてぶつぶつ譫語ばかり云つてゐた。お母はんは碌に寢もしないで、おまさと二人で氷をかへてやつたり、熱いのでともすると踏みぬぐ搔卷をかけてやつたりしてゐたが、お三輪の衣裳が薄暗い部屋の隅に艶めかしくかゝつてゐるのを見ると、さつき夢現の間にも、あの舞ひを舞ひ度いばかりに旦那はんもとつたのではないかと云つた千賀勇の言葉が思ひ出されて、新らしい悲しみは犇と胸に迫つて來た。

その翌日は昨夜より少しは熱が下つたが、千賀勇はどうしたのかまるで啞にでもなつたやうに朝からひと言も口をきかない。お母はんやおまさの顏をみると唯しくしく泣いてはかりゐた。

午後になると方々の茶屋から見舞ひに來たなかに松代の女將も交つてゐた。女將は千賀勇の顏をみると涙含んで、

「まあ、千賀勇はん、ほんまにえらいことやつたなあ。折角あないにして舞台へ來たのにほんまに殘念なことやつた。」

千賀勇はほろほろ涙をこぼして、

「姐はん。おほきに。」と云つたゞけで、やがて、「なあ、姐はん。石井はんはまだ此方におゐやすのか?」と、聞く。

女將は笑ひ出して、

「怪體な千賀勇はんやなあ。石井はんは井とめへいた明けの日に東京へお歸りやしたやないか。あんた電話でお話したやないか。」と、云ふ。

千賀勇は消え入るやうな聲で、

「さうどしたかいなあ。石井はんてほんまに親切なお方どすなあ。私が往なんちうたら泣いて吳れやはつた。他の男はんは皆いけずや。私嫌ひ。……」と、云ふ。

女將は三十分間ほど話して歸つていつた。

とうべはんからはその日も度々吉喜久をとほして見舞ひがきた。院長も又見舞つてくれた。そして容態が少しはいゝやうなことを云つてはゐたが、それでも顏色をみるといかにも心配さうであつた。

晩方になると千賀勇は二時間ほどぐつすり眠つたが、それが覺めるとどうしたのか、お母はんを呼ん

で、

「お母はん。えらい済んまへんけど、あの私の箱とつてくれやすな。」と、いふ。

お母はんは怪訝に思つて、

「箱とつて何にすんのや。」と、訊き返したが、千賀勇は小供のやうなけろりとした顔をして

「あの、私、絽刺ししますのやわ。」

「絽刺を？　あんたまあ何を云ふとゐるのえ。阿呆らしい。そんな病氣やのに、絽刺が出來るか？」

千賀勇はもう涙ぐんで、

「まうかて、さうかて、……」と、甘えるやうに云つてゐたが、「なあ、お母はん、私寂しいて叶ひまへんさかい、どうぞ絽刺させとくれやすな。」と、云ふ。

お母はんはこんなに熱のあるのに絽刺しなどをして氣をつめては體に障るといつて頻りにとめたが、千賀勇はどうしても聞かなかつた。しまひには聲をあげてしくしく泣き出してしまつたので、さすがにお母はんもそのうへとめる譯にいかなくなつて、到頭小棚から絽刺しの道具の入つた小箱を下ろして來て、枕許に置いてやつた。千賀勇は平常からひどく絽刺しが好きで、暇さへあると何もかも忘れて針をまつてゐるやうな娘だつたので、道具のやうなものも丹念にそろへてゐた。

千賀勇はその箱に頰摺りするやうにしながら、「おほきに」と、云つて、さも嬉しさうににつこりした。

千賀勇はそれから電燈を下ろして貰つて、仰向けに寢たまゝ默つて針を動かしてゐた。

もう寢る頃になつて、お母はんが階下から上つて來てみると、千賀勇もさすがに草臥れたとみえて、絽刺の針ももうそのまゝ枕の傍へほつたらかして、すやすやと寢入つてゐた。

お母はんはきらきら光る針をみると、

「ほんまに危いえなあ。」と、獨語を云つて、襟のところへ落ちてゐる絽刺を取り上げて他へしまはうとしたが、ふと縫ひかけの絽片れをみると、その面には何やら四角なものが色糸で縫ひ出してある。よくみると、それはお三輪がもつ苧卷きの形であつた。

お母はんはそれで又泣かされてしまつた。

千賀勇はそれから丁度三日目の曉方に、いろいろと手を盡した甲斐もなく、夜半に散る梧桐の一葉とゝもに、十六のその春を一期の名殘りとして、到頭他界の人となつてしまつた。病名は急性の肺炎で、常から纖細い體は遂に燃えつのる苦熱に得耐へなかつたのであつた。

西村の家は悲嘆の涙に包まれてしまつた。

それから二日經つて、今熊野の尼院でさゝやかな葬式が營まれて、憐れな千賀勇の亡骸は鳥戸野の山に吹きすさぶ秋風のなかで空しく荼毗一片の烟と化してしまつたのであつた。葬式萬端のことはせめてもの罪亡ぼしだといふので、とうべさんが一切やつて吳れた。

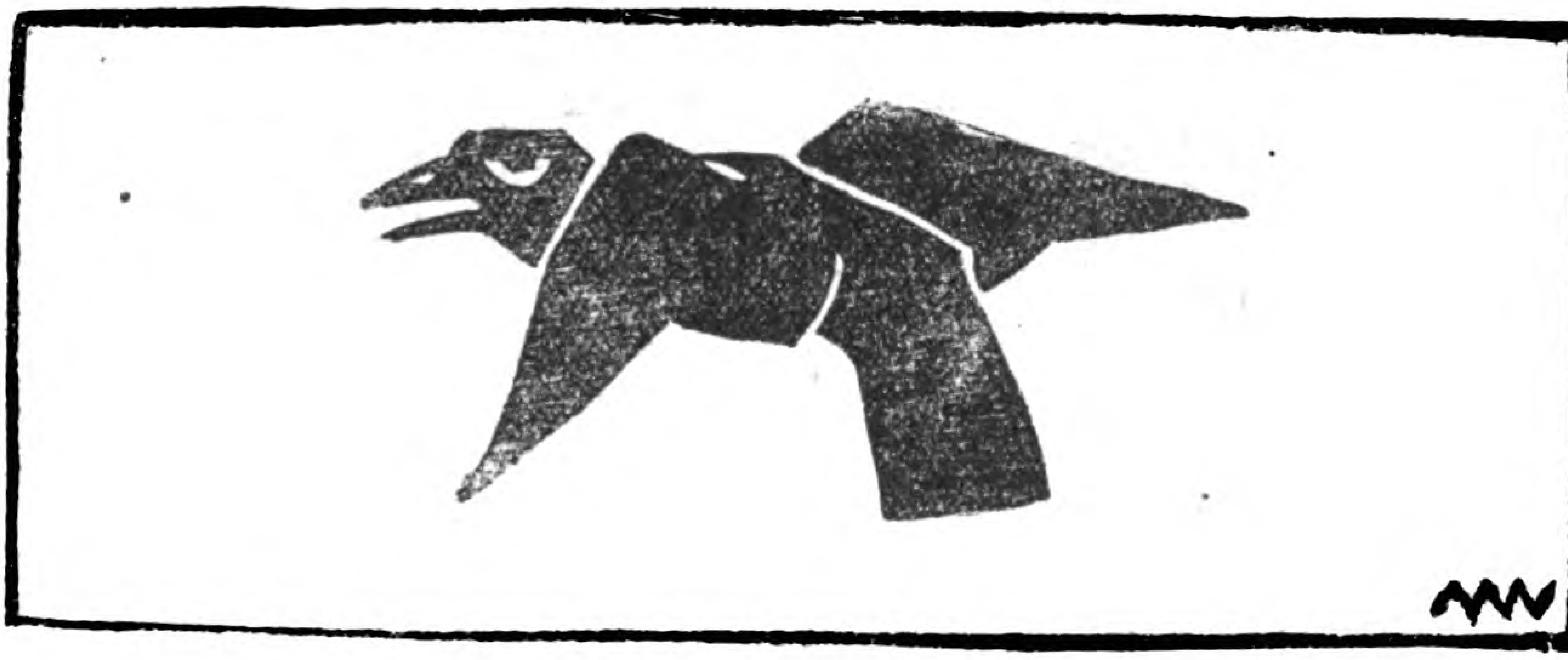
石井は松代の女將からその悲しい報らせを聞くと、葬式が濟んでから半月ばかり經つて、態々墓詣り

に入洛した。その時西村のお母はんと松代の女將を瓢亭へ招んで、一晩亡き千賀勇の追憶ばなしに耽つたが、西村のお母はんは耐らなくなつたやうに、

「もう今度めに舞妓が出來たら、私一生旦那はんちうやうなもん持たせしまへん。千賀勇のことを思ふとほんまに可哀想で、一遍でしみじみ懲りましたさかいなあ。」と、云つて、袖口を引出して頻りに泣いてゐた。

千賀勇が今はの際まで針をもつて縫ひつゞけてゐた絽刺は今石井の手に保存されてゐる。色糸で形だけぬひだしてあるまゝなので、その苧巻の姿までが幻をみるやうにしなしなとした絽の糸目へ影が薄く浮き出して見えるのであつた。

石井はそれを見る度に井とめのひと夜を忘れることが出來なかつた。（をはり）



筆耕の死骸

小山内　薫

イプセンが或時同國人のジョン・パウルゼンに向つて、こんな話をした——

諾威のクリスチアニアに或年老いた筆耕がゐた。この筆耕は大層な變り者だつた。

彼は何にも增して靜寂と平和とを愛した。一つの場所から他の場所へ動くといふ事さへ、彼にとつては非常な違法だつた。

二つの椅子がこの老人の全世界だつた。一つは古びた肱掛の高い、皮張りの椅子で、それは仕事部屋に置いてあつた。もう一つは、刺繡をした丸枕の附いてゐる、古びた、柔らかな肱掛椅子で、それは獨身生活の寂しい居間に置いてあつた。

晝間は一つの椅子に腰をかけて、自分の年ぐらゐ古い記錄から讀み難い

文字を寫した。夜はもう一つの椅子に腰をかけて、銀の口の附いた、長い海泡石のパイプで煙草を吸ひながら、新聞を讀んだ――大抵は Toddy の大きな杯が彼の前にあつた。

老人は非常な財産家だつた。しかも、彼は家の外の世界を見る爲に、一文の金をも一分の時をも使はうとしなかつた。

老人は振子のやうに、この二つの椅子の間を、あつちへ行つたり、こつちへ來たりしてばかりゐた。

老人に一人の妹があつた。名をロオナ・クレムと言つて、これが老人の家計を預かつてゐた。老人は妹を非常に尊敬してゐたが、唯一つ氣に入らない事は、彼女がちつともぢつとしてゐない事だつた。ロオナは絶えず動いてゐた。今階子段にゐるかと思ふと、もう町へ出てゐた。町を歩いてゐるかと思ふと、もうお寺の中にゐた。老人が植物のやうに靜かな生活を望んでゐるのと丁度反對に、妹は獸のやうに一瞬時も一つ所にぢつとしてゐる事が出來なかつた。

或天氣の好い日に、この老筆耕が死んだ――そして、二つの椅子が空しくその後に殘つた。醫者は運動の不足から死んだのだと言つた。兎も角も、燈が消えるやうに消えたのである。

兄が死んでから一年立つと、ロオナは外國へ旅に出た。そして、かね〳〵噂に聞いてゐた獨逸のドレスデンに先づ旅裝を解いた。ザクセン王國の、この氣持の好い首都は、大層ロオナの氣に入つた。主に美術家や工藝學校の生徒から成り立つスカンヂナキア人の小なサアクルが、直ぐとこの年とつた、愛想の好い、金のある婦人を取り巻いて來た。ロオナは家を開放して、どんな客をも歡んで迎へた。貧乏な學生などには小遣錢まで貸して遣つた。

仕合せと、ザクセン人は異教徒でなかつた。諾威人と同じ善良な基督教徒で、そして、プロテスタントだつた。ロオナは日曜日毎にお寺へ行つて、信心を忘れないやうにした。そして、長い說教を聽聞しながら、同時に月謝なしで獨逸語の實習をした。

ロオナはとう／＼ドレスデンに永住する事に心を極めた。こんな氣持の好い所が又と外にあらうか。それに、こんな美い菓子のある所が世界の何處にあらう。國の菓子などは迚も比べ物にならない――

初めの一月は極めて平和に過ぎた――併し、それから急にロオナが陰鬱になつた。寺詣りも、月謝なしの獨逸語の稽古も、うまい菓子も、もう彼女を滿足させなかつた――兄が死んでから買つた小犬のDelle までが、砂糖の不足を嘆いた。彼女はもう可愛い犬の世話をする事さへ忘れ果てたのである‥‥

ロオナはその原因をドレスデンに住んでゐる或仲の好い諾威の婦人に打ち明けた。

彼女は兄の墓のこの都にないのが、急に物足らなくなつて來たのである。

故國にゐる時は、殆ど毎日のやうに兄の墓を訪ねた。日曜日には、禮拜を終へると、お墓の側に何時間も坐つて、涙を流しながら、兄と二人で寂しく暮らした當時の事を思ひ出すのが常だつた。そして、それから大理石の十字架の廻りに感謝の花輪を編んで歸るのが常だつた。

美しい、明かるい、夏の晩には、折々兄の墓の側で珈琲を飲んだ。ロオナはそれをどんなにか樂しく感じたらう。彼女は肩掛の下に、よく蓋をした、暖かい珈琲の罐を携へて行つた。そして、衣兜には出來立ての菓子を幾つか忍ばせて行つた。

そして、それから近所の墓の間を散步した。新しい立派な墓に目を見張つた事もあつた。金字の墓銘

を一生懸命に讀んだ事もあつた。花を探して歩いた事もあつた。新しく堀られた墓穴の中を覗いて、古い骨の白く散らばつてゐるのを發見した事もあつた。

兄の墓のやうな、小さな、形の好い墓は、世界の何處へ行つても二つとは見られまい。その可愛いお墓の側には、垂柳が立つてゐて、柳の陰には綠色をした氣の利いたベンチが据へてあつた。

「實は私そのお墓が戀しくなつて來たのでございます。」

ロオナはかう親友に打ち明けた。

「女中のマアレンが毎土曜には私の代參をして吳れる事になつてゐるんですけれど、何しろあんな年寄の事でございますからねえ。覺束ないものでございますわ。」

ロオナはさう言つて泣いた。人の好い女の友達も、ロオナと一緒になつて泣いた。そして、どうかして自分の友達を慰めようとした。

やがて、女の友達は極めて單純にこんな事を言つた――

「ねえ。クレムさん。あなた兄さんをこゝへ連れて入らしたらどうでございますの。堀り出すのは何の造作もない事なのですし、さうすれば外の荷物と同じやうに、こゝへ送つて貰ふ事が出來るだらうと思ひますわ。お宅の兄さんは、御遺言で、木乃伊にもしてありますし、トタンの棺にも這入つてゐるのですから、運搬には何の不便もない筈でございますわ……さうして、又この土地へ埋め直せば、又前のやうに、墓地で愉快に日を暮らす事がお出來になりますわ。私もあなたと御一緒にお墓の側へ呼んで頂いて、お茶の御馳走にでもなりたうございますわ。隨分變つてゐます事ねえ――でも、私變つた事が大好

きでございますわ。」

ロオナはこの考への餘り突飛なのに驚いた。併し、段々考へてゐる内に、この意見の存外實際的な事が分かつて來た。

成程。これに越した事はない。金は隨分掛かるだらうが、可愛い兄の爲である。それに、生前ちつとも外へ出なかつた人だから、死んでからでも、少しは旅をする方が好い……硬くなつた手足を動かすのも、死んだ人の運動になるかも知れない……ロオナはこんな事を思つた。

そこで、直ぐとその方に關係のある諸威の役所へ手紙を書いた――間もなく、丁寧に包まれた大きな箱に這入つて、老筆耕が汽車で無事にドレスデンへ着いた。

ロオナはひどく感動した――とても棺を明けて、懐しい顔を見る勇氣はなかつた――そして、興奮の餘り、いつもより餘計に珈琲を飲んだ。

明くる日、老筆耕はドレスデンの墓地に葬られた。ロオナの住居の直ぐ近所にある墓地である。ロオナは色々な理由から、極めて靜かに埋葬をする積りだつたが、或合唱團が何處からともなく不意に墓の側に現れて、同じ人類としての純な愛情から、全く好意的に、葬ひの歌を唱つて呉れた時は、流石に嬉し涙を零さずにはゐられなかつた……

獨逸人といふものは、何といふ善良な、基督教徒らしい、高尚な心を持つた國民だらう。ロオナはそう思つて、彼等に神の惠みあれと祈つた。

ところが、それから一週間立つと、〝Concordia〟といふ葬儀會社から、その勘定書がロオナの所へ來

た。ロオナは溜息をついて、それを拂つた。あの人達はやつぱりさう好い人間ではなかつたのだ。基督には仕へないで、淺ましいマムモンの神に仕へてゐたのだ。あんな退屈な唱歌とあんな見窄らしい花輪で、こんなに澤山金を拂はせるといふ事はない。

併し、それが濟むと愉快な日が來た。ロオナは朝早くから墓地へ出かけて行つては、一日兄の墓の側にゐた。ロオナはそこで古い靴下の繕ひをしたり、花輪を編んだりした。墓堀の爺さんとも懇意になつた。ロオナは樣々な事を墓堀に訊いた。兄の墓の側に埋まつてゐるのは、一體どういふ家の人だとか、どういふ地位の人だとか、そんな事を煩さく訊いた。

そして、彼女は生前あんなに貴族的だつた兄が大層好い人達の中にゐるのを知つて喜んだ——兄の墓の右には或將軍が埋つてゐた。兄の墓の左には或控訴院判事が眠つてゐた。

ロオナは涙を流しながら、兄の墓の側で、暖かい豚の腸詰を幾つか喰べた。その間に、墓堀は近所の酒屋へ駈けて行つて、ビイルを一杯買つて來た。

ロオナは泡の立つた酒をちび／＼味ひながら、地下の兄の生前どんなにかビイルを好んだ事を思ひ出した——そして、女らしい優しい感情から、杯の半分以上を墓の上に注ぎかけて了つた。そして、酒の雫のぽた／＼と地面に泌みて這入るのを、悲しさうにぢつと見詰めてゐた。

心の足らぬ墓堀には、女のする事がまるで分からなかつた。どうせ空にするなら、俺に飲ませて呉れれば好いにと墓堀は思つた。そればかりではない。彼は年とつたロオナを氣違ひか馬鹿だと思つた。そして、その日から段々ロオナを冷遇し始めた。その癖、祝儀はいつでも多分に貰つてゐるのだつた。

やがて飛んでもない事が起つて來た。ロオナが特別に親しくしてゐた例の諾威人の家族が突然ドレスデンを立つて、伊太利へ行く事になつたのである。ロオナがそれを自分に對する裏切だと思つたのに無理はなかつた。彼等は――H夫人も、その御亭主も――一生ドレスデンにゐる積りだと言つた。それ故、ロオナも哀れな兒をここへ連れて來たのである――それを、今になつて、急にここを立つて行くといふのは、何といふ殘酷な仕打だらう。ロオナはH家の不實を心から怨んだ。

かうして、スカンヂナヰア人のサアクルは日に日に小さくなつた。それよりも惡い事は、愛犬のDelleがひどい病氣になつて、もう吠える事も出來なければ、往來の人の腓脛に飛びつく事も出來なくなつた事であつた。

ロオナは外國の町に孤獨でゐる寂しさを、恐ろしいまでに沁々と感じた。彼女は自分を欺した獨逸人にもう用はなかつた――しかも、スカンヂナヰア人はもうそこに幾人もゐなかつた。

彼女はひとり兄の墓の側に坐つて、苦い涙を流した。彼女は兄と長い話をした――併し、實はそれも獨語に過ぎなかつた。なぜと言へば、いくら彼女が嘆いても、尋ねても、墓は決して答へなかつたから。

墓堀はいつも澁面を作つてゐた。彼はもう決してロオナと親しい口を利かなかつた――そして、彼女が悲嘆の餘り、そこらの土を堀つて古い骨を見つけようとすると、いつも恐い顏をして、嚴しく叱つた。「墓地の平和を尊敬しろ」といふやうな事まで言つた。それ程、彼は破廉恥だつた。

伊太利へ行つた諾威人の家族からは、毎日のやうに誘惑の手紙が來た。ロオナの友達は、今羅馬にゐ

る。そして、町の美しさと生活の快さをどう褒めて好いか分からないで困つてゐる。それに、伊太利では獨逸にゐるより遙に安く生活が出來る。食事の度に葡萄酒が出る。そして、それは無代である……ロオナの友達はこんな事を書いて寄越した。

人の好いロイナは、もう以前の怨みなどは忘れて有頂天になつた。いつもの旅行熱が高度に昇つて來た。併し、今自分がここを立つたら、誰が哀れな兄の世話をするだらう。

このドレスデンへ兄をたつた一人殘して行く事がどうして出來よう。彼を埋める日に、ちよいとした墓の歌を唱つて、破廉恥な高い金をとつた、この不快極まる獨逸人の中へ、どうして兄を一人殘して行く事が出來よう――それは不實極まる話だ……兄さんがいくら善人でも、決してそれは許して呉れまい……

併し、變化を望む性癖は總ての彼女の妹らしい躊躇を壓倒して了つた。別離に臨んで、彼女は大きな「忘れな草」の花輪を墓の上に掛けた。それから、古びた赤い外套を引つかけると、直ぐ汽車で南を指した。

彼女の着くのをプラットフォムの上で待つてゐた諾威人の家族は、兩手を開いて彼女を歡迎した。併し、その再會の喜びの中にも、彼女は哀れな兄の名を呼ぶのであつた。

羅馬の滯在も、初めの半月程は總てが喜びであつた。彼女は柔かい空氣が氣に入つた。美しい散步道が氣に入つた。そして、愛らしい人間が氣に入つた。

併し、直ぐと彼女はその暗い方面に目をつけた。食事が彼女には美くなかつた。虫が彼女の柔かい肌

を刺した。それから、詞がまるで分からなかつた。何よりも寂しいのは、プロテスタントの寺が一つもない事だつた。故國の宗敎の儀式が何處にも見られない事だつた。彼女は或男がマドンナの像に跪いてゐるのを見ると、蔑むやうに顔を背けて、思はず『異敎徒。』と小聲に叫んだ。

これらの苦痛に加へて、又遠くにゐる兄を思ふ、いつもの考へが涌いて來た。

また鬱憂が彼女を襲つて來た。それを見て取つたロオナの友達は、或日一緒に珈琲を飮みながら言つた――

『ねえ。クレムさん。あなたの兄さんをドレスデンへ來させたのは、私達が少し至らなかつたと思つてゐますわ。ドレスデンといふ町は、決して好い人が骨を埋める場所ではございません。それよりは羅馬ですわ。もう一遍兄さんを堀り出して上げたら如何です――あなたのたつた一人の兄さんぢやありませんか――さうして、ここへ持つて來させれば、又毎日お詣りも出來ますし、お世話も出來るぢやございませんか。』

ロオナは悲しさうに頷いた。

『ここには歐羅巴第一の美しい墓地がございます。大理石の宮殿が大理石の宮殿の隣りに立つてをります。糸杉や橄欖の長い並木道もあります――死んだ人の住む土地として、ここ程好い場所はございませんわ。お宅の兄さんも、きつとこんな愉快な所はないとお思ひになるでせう。勿論、又ここへ移すとなると、隨分費用も掛かりませうが、それはあなた、可愛い兄さんの爲ですものねえ――』

ロオナは涙を零しながら、友達に抱きついた。そして、いつもながらこの人の言ふ事は考へが好いと

思つた。

又ここへ來るといふ事は、可哀さうな兄さんにとつて、可なり長い辛い旅だらう。併しさうするより外に道はない――その代り、無事にここへ着いたら、前の倍程にも親切に世話をして上げよう。お墓の廻りには鐵の垣根を拵へて上げよう。そして、その側には大きな糸杉の木を一本植えて上げよう‥‥ほんとに、あの憎らしいドレスデンの墓場は、その後どんな惡い事をしたか分かりやしない。花輪はきつと盜んで了つたに違ひない。金字の墓銘もきつと滅茶々々に毀して了つたらう。どうも、あの爺は無頼漢のやうな人相をしてゐた‥‥迚も、迚もあんな墓場の監督に兄さんを任して置く事は出來ない。さうだ。一日も早くここへ呼んで上げよう‥‥‥ロオナはかう思つた。

諸威の或大きな商人で、羅馬からドレスデンを通つて故國へ歸るのがあつた。商人はロオナのこの話を聞いて、自分が一切の事に當らうと言ひ出した。ロオナはその親切を喜んで、涙を流して禮を言つた。そして、獨逸の墓地では死骸をいぢつてゐると、突然不思議な合唱團が姿を現すから、それは是非斷つて貰ひたいと言つた。それから、墓場にも決して心を許してはならないと言つた。

商人は總ての事を約束した。一月程立つと、又丁寧に包まれた大きな箱が、ロオナの名宛で到着した。彼女はもう一度可愛い兄さんに會ふ事が出來たのである‥‥併し、今度も棺を明けて見る勇氣はなかつた‥‥折角よく寐てゐる兄さんを妨げるのは惡いと思つて‥‥

併し、老筆耕が三度目の埋葬を受けようとした時、或困難が起つて來た。老筆耕はプロテスタントだつた――ところが、ここは天主教の國だつた。ロオナは聖水や十字架を持つた伊太利の坊さんに大事な

兄さんを任せようとは思はなかつた。老筆耕は妹に色々骨を折らした後で、やつと或墓地の一隅に特別な隠れ家を見つける事が出來た。

ロオナは墓の側に糸杉を一本植えた。そして、暖かい夏の午後、九年母の露を啜りながら、チエエレ河に沿うて長い道を歩いた。そして、朗かな快い空氣を吸つた。彼女は死んだ兄さんが總てこの美しいものを見る事が出來ないのを嘆いた。空の丸天井の輝くやうに青いのも何も見る事が出來ないのを悲しんだ。

墓地は日沒と共に閉ざされた。そして、それから猛犬が二疋、夜の番人として鎖を解かれた。或午後の事だつた。ロオナの食糧を入れた籠がいつもよりは豐富だつた。從つて、死と永遠とについての彼女の瞑想も、いつもよりは深かつた。彼女は思はず時を忘れた。

もう夜の八時だつた――それだのに、ロオナはまだ糸杉の下に坐つて、兩手を信心深く籠の上に組んでゐた。不意に彼女は起き上がると、目をこすつた……少しは寢てゐたのかも分からない――兎に角、彼女は廣い墓地の中にたつた一人でゐた――そして、故郷よりはずつと早く來る南國の暗闇が、もうそこにあつた……暗がりを透かして見ると、糸杉の並木道が、まるで黒い幽靈が行列を作つて、自分の方へ進んで來るやうに見える……白い墓が木の間に氣味惡く光つてゐる……いつも見るピラミッドが大きな怪物のやうに見える……

ロオナは全身に戰慄を覺えながら、大急ぎで出口の門を探した……それはもう締まつてゐた。そこで、今度は第二の小さな門へ行つて見た。併し、又そこも堅く閉ざされてゐた。ロオナは覺えず聲を上

げて救を求めた――併し、誰も彼女に答へるものはなかつた。

ロオナは殆ど絶望した。そして、その絶望は、遠くに猛獸か何かの吠えるやうな聲を聞いた時、愈々ひどくなつた……彼女はよろめきながら塀の側まで行つた……塀は石で出來てゐた。高くて、そして堅固だつた。そして、上には硝子のかけらが植えつけてあつた……でも、或一箇所、塀が毀れて、餘程低くなつてゐる所があつた……

彼女は籠を投げ捨てて、着物の裾を高く端折つた。それから、大理石の十字架を踏臺にして、塀を登り始めた。

もう一息で外へ出られる所だつた――彼女は塀の頂上に跨がつてゐた。そこから、身輕に往來へ飛び降りようとしてゐた。すると突然、鋭い獸の齒が自分の柔かい肌に食ひついたのを感じた――彼女は思はず悲鳴を上げた。

やがて、彼女は塀の向う側の地面の上に、意識を失つて倒れてゐた。

この事件があつてから、ロオナは直ぐと病氣になつた。一つは恐怖からであつた。一つは股の痛みからであつた。彼女は何週間か寐床に就いたつ切りであつた。

ロオナは誠に人の好い女だつたが、それにも關らず、この頃は毎日のやうに伊太利といふ國を呪つた。純粋なプロテスタントの教で育てられ、洗禮をされ、そして信仰を確認された名譽ある諾威の處女が、墓地の散歩を自由にする事が出來ないやうな國。猛獸のやうな犬に食ひつかれなければ、先祖の骨をいぢる事も出來ないといふやうな國。そんな厭な國はどうでもなれと思つた……

彼女は丈夫になり次第、斷然伊太利の塵を拂はうと決心した。彼女はやつぱり諸威へ歸らうと思つた。あの古い、罪のない國。それは彼女が決して見捨てる事の出來ない國だつた。思へば、食事も美くなければ、精神的の養ひもない、こんな國で自分は何を求めようとしたのだらう。國の牧師のハンゼンさんのやうな人さへ、ここでは見る事も聞く事も出來なかつた……

勿論、兄さんを一緒に連れて行かなければならなかつた。彼女は大事な兄さんをこんな外國に捨てて行かうなどとは夢にも思ふ事が出來なかつた。繪にかいた女の姿の前に跪いたり、ルテルの問答示教をまるで知らないでゐたりする、この異教徒だらけな國に、どうして大事な兄さんの體などを預けて置く事が出來るものかと思つた。

兄をもう一遍堀り出す事は、ロオナの義務だつた。聖い、逃がれられぬ義務だつた。ロオナはさう思つた。

秋の或日に、ロオナは再び諸威の首都へ歸つて來た――丁寧に包まれた大きな箱の供をして。女の友人達は、自分達の爲にロオナが外國から樣々な土產物を買つて來て與れたのだと思つた。ところが、やがてそれが開かれると――それはロオナの兄さんだつた。

老筆耕は盛大な儀式の下に、四度目で又土の中に埋められる事になつた。彼は生前何よりも愛した靜寂と平和とをやつと見出だす事が出來る事になつた。ところが、突然ロオナを死ぬばかり驚かす事件が起つた。

愈々埋めるといふ前に、或醫者が棺を明けて、死骸を檢めて見た――すると、筆耕がまるで筆耕でな

かつた事が分かつた。

詞を代へて言へば、棺の中には——或女の骸骨が這入つてゐたのである。

ロオナはこの驚くべき發見から、殆ど理性を失ひさうにした。

それにしても、この婆さんの骸骨は、一體何處から來たのだらう。一體何處で兄さんが取り違へられたのだらう——そして、今一體兄さんは何處に寐てゐるのだらう。

彼女はこの長い外國の年月を、まるで知りもしない人の死骸と一緒に歩いてゐたのであつた——多分、年とつた女囚か何かの死骸だらう——その丸で關係も何もない女の墓の側に、ロオナはいつも悲しさうに坐つて、豚の腸詰を喰べたり、九年母の露を吸つたりしたのだつた。その丸で會つた事もない婆さんの墓の上に、獨逸のビイルを注ぎかけたり、苦い涙を零したりしたのだつた……

——最初の強い打擊が過ぎると、ロオナは或新しい旅行の決心をした——それは一つの探險旅行だつた。そして、それは彼女の狹い交際仲間に、スタンレエが亞弗利加にでも出發するやうな興味を喚び起した。

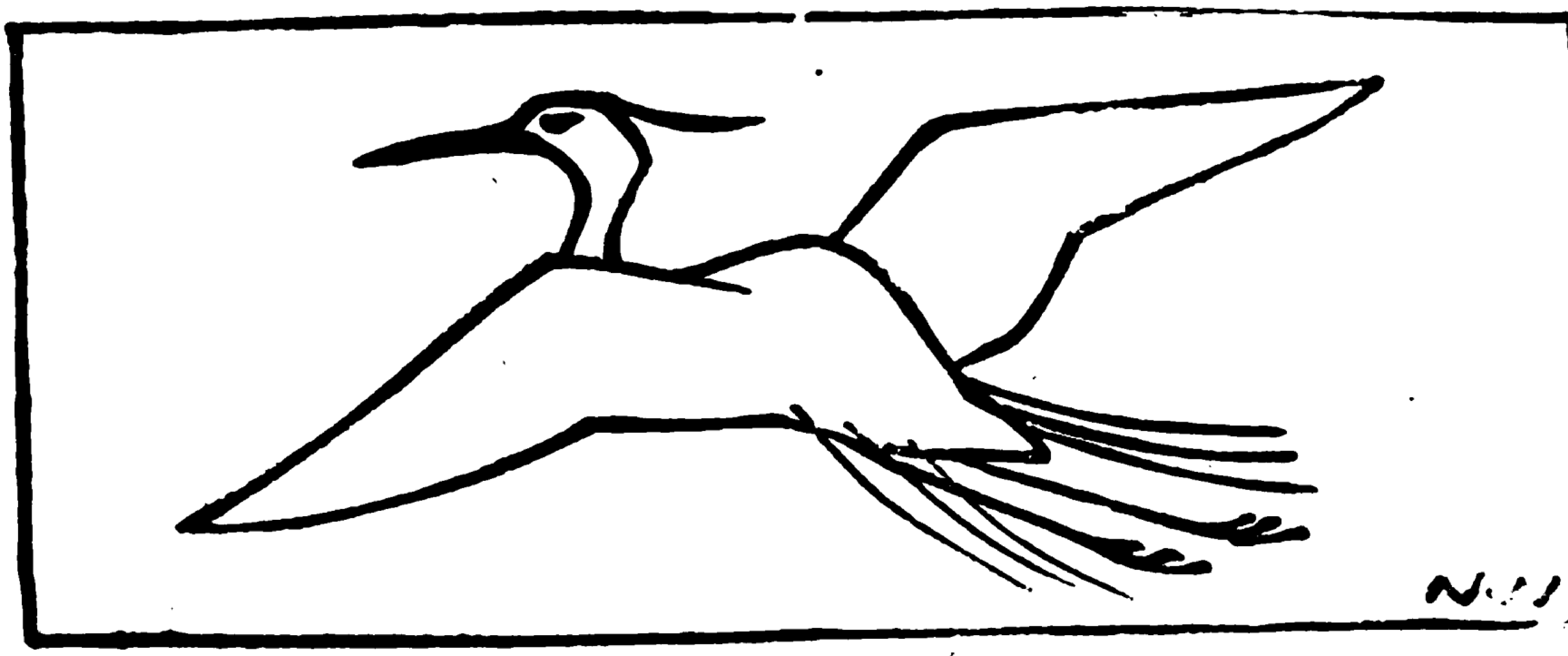
彼女は先づドレスデンへ行つた——併し、そこの墓地の探險が悉く徒勞に終つたので、今度は羅馬を指した。彼女はどんなに金が掛かつても、無くなした兄さんを探し出さなければならないと堅く心に誓つてゐる。彼女は感じの鋭い鼻を持つてゐるし、墓地の骨をいぢるのでは經驗があるので、この勇ましい計畫が必ず效果を擧げずにはゐないと信じてゐる……

イプセンの話はこれでお終ひだつた——この話がほんとにあつた事だか、イプセンの作つた詩だか、それは分らない。

兎に角、女であるイプセン夫人は男である夫の話が終ると、パウルゼンの方を向いて、

『みんな嘘ですよ。』

と言つたさうである。



威嚇

徳田秋聲

晩春の靜かな或朝であつた。女髪結のおふきの第二の夫淺吉が、つい近所の素人下宿で催された花の仲間入りをして、夜明まで血眼になつて働いた揚句に、宵の口の損失を恢復した上に、いくらかの勝となつて歸つて來ると、いきなり朝湯へ飛込んで、脂ぎつた體を流して、せいゝゝした氣持で家の格子戸を開けた。

忙しい中を、おふきは急ぎの頭を結ふために、得意先へ出て行つたとみえて、店には下梳が一人、そこに三四人待つてゐる客の一人の髪を梳いてゐた。おふきのゐないことは、彼に取つては此のうへない仕合せであつたが、然しまた毎時も彼女が外廻りをするときに感ずるやうな淡い不安が起らないでもなかつた。淺吉が、年の割には、しつかりした腕だと云はれてゐる彼女と一緒になつてから、まだ一年半とは時が經つてゐなかつた。そして彼女が自分の有となつた動機が、何時かまた人のものとなる同じ動機

でないとは言へなかつた。

同じ仲間の周旋屋の一人が、彼女の最初の持主であつた。そして淺吉が時々そこへ遊びに行つたり、一緒に花を引いたりしてゐるうちに、上州産れの鐵化肌の彼女の心が、何時とはなし彼の方へ惹着けられると同時に、最初の持主から紙が剝れるやうに譯もなく離れて行つた。勿論淺吉は最初の持主に比べて、産れおちるとからの周旋屋ではなかつただけに、人品が遙かに立優つてゐたのは事實であつた。彼は下町の可也な商人の子息であつた。そして株と道樂とのために、そんな社會へ落ちては來たのであつたが、彼を見放したものゝ中には歷々とした親類もあつた。

最初の持主が、彼女と淺吉とのなかを嗅ぎつけたのは、遊びずきな彼女が彼と一緒に出歩くのを厭ひはじめた頃からであつたが、それと同時に淺吉の足が、彼の家から遠ざかつたことが、一層彼の頭腦を不安に陷いれた。

或晩などは、彼が用事先きから歸つて來ると、締めてあつた二階の一室で、ぴちり／＼と札が音が洩れきこえて來て、小金貸しの某のお爺さんだの、若い大學生だの、藝者あがりの會社員の圍ひものだのが、四五人寄つて、電氣の下に圓陣を作つてゐたが、その中には淺吉も交つてゐた。暫らく彼は傍で見てゐたが、如何かすると會社員の圍ひものだといふ其の女の方へ、彼の力瘤が入つて行つた。すると其に挑發されたやうなおふきの態度が、不思議にまた淺吉の方へ加勢をするやうな風に見えた。

「お嫁に行つた晩で、どうでも勝手になさいまし」などゝ、おふきは立膝をしながら、負けこんで來た腹立まぎれに、棄鉢な札の引き方をしてゐた。そして、夜なかに蕎麥が來たとき、おふきが淺吉とも、あ

ひで箸を取つたり、淺吉の丼のなかゝら、食べさしの天麩羅を摘みあげて食べたりしたことが、彼女の亭主の心を怒らせてしまつた。彼は一つ二つ言葉咎めをしてゐるうちに、一層頭腦を興奮させられて、いきなり起ちあがつて、彼女を打つたり蹴たりした。髻をきり〳〵手首に捲きつけて、凄じい勢ひで、段梯子の降口まで引摺つて行つたりした。衆が總立ちになつて八方から彼を遮ぎ止めなかつたら、彼は或は彼女を下へ引ずりおろして、刄物を振廻したかも知れなかつた。

衆のために、おふきはふるゝゝ厭になつた彼の前に手をついて謝罪させられることになつたが、それと同時に淺吉との情交が、次第に緊迫して來た。同じやうな事件が、時々寬容な良人を怒らせたが、打つたり擲いたりすることは、單に其の場きりの威かしに過ぎなかつた。彼女を悔悛させることの困難なことが、次第に明かになつて來た。そして其よりも幾層不謹愼な光景が、彼を驚かしてから、生創のたえなかつた彼女の體が、到頭自由になつた。

おふきが淺吉と一緒になつたのは、彼女が一年弱も姿を隱してゐた田舍から、再び東京へ歸つて來てからであつた。

おふきが淺吉に取つて、不安心な女であつたと同じやうに、淺吉は嫉妬ぶかいおふきに取つて、彼女の最初の良人ほど安心な良人ではなかつた。少なくとも彼女にはさう思はれてならなかつた。男の年が二つも下だと云ふことが彼女に不安を抱かせる一つの理由であつたが、それよりも彼が最近に別れたと云ふ若い一人の女のあることが、殊にも氣がゝりであつた。三年ばかり同棲してゐたその女は、生活が遣切れなかつたとき、話づくで幾許かの前借を彼に與へて、昔しゐたやうな客商賣の家へ働きに行つた。

最近まで淺吉が時々その女と逢つてゐたらしい形迹も、彼のそり〳〵の口吻によつて占はれたが、その後の彼女の行方は、かいくれ知れなかつた。薄い寫眞によつて想像される其の女の姿を、おふさは時々途中や人の集る場所などで物色したが、彼女と一緒に暮してゐたと云ふ下谷の方の家の前を、わざと通つてみたこともあつた。それは電燈の器具や煽風器などを商つてゐる店の二階であつた。淺吉はそこへ色々の世帶道具を預けたまゝであつたが、一緒になつてから二人でその荷を受取りに行つた。そして其がまた怠けものゝ淺吉の以前の貧しい生活を想像させると同時に、不檢束な女の日常をも考へさせた。彼女の締めてゐたといふ帶や下帶などが、彼の單衣物や襦袢と一つに押入の隅に束ねられてあつたり、破れた鏡や使ひさしの化粧品がそこらに零れてゐたりした。部屋も天井が低くて陰氣であるうへに、煤け黝んでゐた。よくこんな處にゐられたものだと惘れるほどであつた。

「お前さんの神さんは、餘程だらしのない人だつたと見えるね。」

おふさはそんな埃々した物を撮みあげながら笑つてゐたが、色つぽい目が嫉妬に燃えてゐた。おふさは直に顏まで赫とするやうな質であつた。

淺吉は表へ向いた出窓に腰かけて、にや〳〵笑つてゐたが、「それでも好いこともあつたのさ」と、其の目が笑つてゐるやうに見えた。

「こんな中から拾ひあげて、一人前の男にしやうと云ふのだもの、なか〳〵容易ぢやないよ。」おふさは恩に被せるやうに言つた。

「だからお前さんだつて、性根をつけてしつかりしてくれなくちや困るよ。私の別れた人や、口を利い

てくれた人の前へ對しても……。」おふきはそんなことも言つた。

始終うか〳〵してゐるやうな淺吉であつたが、年が若くて苦勞をさせられた前の女を可憐しく思つた。肉の荒んでゐる割に、心持の美しい――といふよりは惡智慧や猜疑心のない、働きもなかつた代りに擦れてもゐなかつた彼女が、まだ紅い色の入つた帶などを締めながら、惡い病氣に惱んでゐたことが、不憫に思はれた。

働きに行つた客商賣屋の家の神さんにでも智慧をつけられたものらしく、最後に彼が小使をせびりに行つた時分には、彼女はもう姿を隱してゐた。そして自分と一緒に暮すよりは、とにかく好い狀態に在るものと想像された。淺吉はそれに何の異存もなかつた。一緒にゐるときには、よく無理を言ひかけて泣かせて窘しめたり、肉體を虐げたりしたが、それは小柄の彼女のいたいけな體を、抱擁しても爲切れないやうな感覺からであつた。單に生活の點から言つても、この先き自分と一緒にゐたら、どんな事になつたかも知れないと思はれた。

淺吉のそんな氣持が、嫉妬ぶかいおふきに能く感づけた。

朝湯から歸つて來た淺吉は、まだ二十坊主や櫻の幔幕などのちらつくやうな充血した目をして、瓦斯で自身味噌汁を溫めたり、湯を沸したりしてゐたが、咽喉が渇くので、酒も一本つけて、茶の間で飲食をすると、そのまゝ新聞をもつて二階へあがつて行つた。

二階の部屋には四月の溫い光線が一杯に差してゐたが、窓から出張つたところにやくざな盆栽がごち

や〳〵並んでゐて、それが皆んな吹出物でもしたやうに、枝といふ枝に若かい葉が暢びだしてゐた。彼はその下に寢そべつて新聞を讀みはじめたが、するうちうと〳〵と好い氣持に甘い眠に誘はれた。人家の立込んだなかなので、周圍の屋根の下から何か絶えず物音がしてゐたが、その中におふさの尖がつた聲が聞えるやうな氣がして、眠りかけた彼の神經が、頭腦のなかで時々悸えてゐた。

其といふのも、おふさが淺吉と一緒になつてから、彼女の事件を知つてゐる人達への反抗心から、何か急に發心したやうな氣持で、花札などを自身餘り手にしたくなくなつたのと同時に、誘惑の多いやうな浮いた空氣のなかへ、彼の浸つて行くのを好まなかつたからであつた。夜更かしや夜明しをすることが、殊にも不安であつた。女の多いやうな集りには、如何かすると、自身出て行つて彼の動作を見張つてゐることもあつたが、自分で手を出せば夫婦のうち孰かゞ極つて負がこんで來るのも、彼女には不快であつた。

さうでなくてさへ、おふさは淺吉を一人で外へ出すことを甚しく嫌つた。自身家に在るときもさうであつたが、得意廻りなどをして歸つて來たときに、のらくら其處らを遊び歩いてゐる、彼の姿が見えないと、そのまゝに棄ててはおけないといふ風であつた。梳手に當りちらして、近所を捜させるか、自身に行つた先を突留めなければ氣がすまなかつた。若い梳手とふざけた口などを利くときの不眞面目な男の調子などが、殊にも彼女の神經をいら〳〵させた。そんな場合のおふさは、全く手のつけやうのないほどヒステレー性の兇暴な女であつた。不用意な――時には揶揄ひ半分の彼の些細な言葉や樣子が、彼女の荒い神經に可恐しく誇張されて響いた。淺吉はふる〳〵其を怕れた。

不斷は口數の少ない尋常な女であつたが、そんな場合のおふきは、その目の色と共に口の利き方が驚くほど荒かつた。關東育ちの女性らしい野性が、下町育ちの淺吉を悸えさせずにはおかなかつた。

「今頃どこを彷徨いてるんだ。この意氣地なしの薄野呂。」おふきは然う言つて口汚く彼を罵つた。大きい目から涙がぼろぼろ流れた。

一時落ちた得意が段々恢復されて來て、彼女の腕がめきめき上つた。寢室になつてゐる二階に新しい簞笥などが据えられ、一緒に出るときは、淺吉もぞろりとした身裝をさせられた。そして揃つて芝居などへ行くときの二人は、眞實幸福に充滿ちて見えたが、腕を鼻にかけて、附けあがられるときの淺吉は眞箇慘であつた。

「私なんざね、下谷のおふきさんで通つてゐるんです。」

それが丸みをもつた、とぼけた彼女の愛らしい鼻に始終ぶら下つてゐたが、淺吉もへこら／＼してばかりも居なかつた。彼の思ひつきで、大きな姿見をすえたり、ハイカラな化粧品を備付けたりして、店を高等に飾つたとほりに、飼はれた羊のやうな淺吉も、生きる必要上可也に彼女を操縦することを知つてゐた。

「氣障なことを言ふなよ。」彼はさう言つて、おふきを凹ませた。

けれど大抵の場合がさつな響をもつたおふきの聲は彼には餘り氣持のいゝものではなかつた。

二階に寢てゐる彼の耳元へ、おふきの代りに聞なれぬ男の聲が不意に聞えた。そして暫くすると下梳が二階へ上つて來て、彼を呼起した。

「ちよつと旦那にお目にかゝりたいつて、誰方かいらつしやいましたよ。」
降りて行つて見ると、商人とも書生ともつかないやうな風體の、見知らぬ顏の男が二人まで、入口に立つてゐた。淺吉はそれを見ると、何といふことなし厭な氣持になつた。彼はあんな事情でおふさと一緒になつてから、始終暗い陰を背負つてあるいてゐるやうな罪人じみた不安を感じてゐた。
「何ですか。」彼はそこへ出て行つて無氣味さうに訊いた。
二人はにこにこした顏をして淺吉の顏を見てゐたが、「やあ」とお辭義をした。
「あんたが淺吉さんといふんですか。」
「然いです。」淺吉はおど〳〵した聲で應へた。
「私たちは××署の刑事ですがね。」彼等の一人はさう言つて、少し前へ出て來た。
淺吉はぎよつとした。そして其の瞬間、可恐しい鋭敏さで自分の過去をつらりと振顧つて見た。別にぎよつとするやうな惡事を犯したとも思へなかつた。しかしこんな人達の眼鏡に照してみたら、何かあるかも知れないと云ふ氣がした。
「な、何んです。」淺吉は襟を無闇と掻合せながら、狼狽の色を浮べた。
「いや別に何でもないですがね。」刑事はそこに腰かけて、親指で鼻頭をこすりながら、「あんたは是れやるでせう」とにや〳〵して言つた。
「これつて何ですか。」淺吉は恍けた善良さうな目をしばたゝきながら言つた。
「いや……花を引くでせう。」刑事は重ねて訊いた。

「じよ、じよう談でせう。私は花なんか引いたことはないんですがな。いや眞箇。」淺吉は頭をかきながら言つた。

「いや、別に何でもないですよ」と、刑事は二人とも、上り口に腰かけて、袂から莨を取出した、淺吉は急いで莨盆を持つて來た。

同時に蒲團も持つて來て、「お布きなさつて」と勸めた。刑事は「どうも濟みません」と言つて、莨をふかしはじめたが、それ以上訊くやうな樣子もなく、にや〳〵しながら奥の方を眺めてゐた。

淺吉は自分の方から何か言はなければならなかつた。そして自分にも莨を喫しながら、

「誰かさう云ふことを言つて行つたものでもあるんでございますか。」

「いや、さう云ふ譯ぢやないんです。」甲の方が言つて笑つた。

「誰か言はなくても、我々には何もかも判つてゐるんですからな。」少し年上かと思はれる、商人風の扮裝をした乙の方が、口を利いた。

淺吉は羞澀の色を浮べたが「いや然し、世間にはよく然う云ふ人があるものですから。」

そして、「けれどあれは、金錢を賭けさへしなければ、別に罪にはならないんでございませう。それでなくて、札の販賣を公然許してある氣遣はないんでございますからな。」

「それあ然うですがね、賭けないから必ずしも好いといふ譯ぢやないんですよ。それにまた花を引く以上、賭けないと云ふ場合は、殆んどないんですからな」

「さいですかな。」

「それは此方の手加減にあるんですよ。たとへば署長が風紀上の問題をやかましく云ふんだと、自然賭場の手入れも頻繁になる譯ですが、それも無闇に處分するといふ譯ぢやないんです。まあ餘り目に立つのは一度説諭して、それでも止めなければ科料と云つた風でせう。だけど、本職とやるのは危險だからお止しなさい。」

「さいですか。」

「本職が一人でも入つてゐると、我々は見遁すわけに行きませんから、場合によると手を入れるかも知れません。」

「この界隈にも、よく遣つてゐますな。」乙が言つた。

「然うですか。」

「あんたは昨晩××と云ふ、素人下宿でやつてゐましたね。」乙がまた言つた。

淺吉は笑つてゐた。

「それから貴方のよく行くのは、××町の齒醫者、あすこも些と注目されてゐますから、餘り行かない方がいゝでせう。」

そして其の刑事は、何時幾日頃に、何處にどんな連中が集つてゐたかといふことを、一々詳しく話した。

「その人の不斷の品行や地位にもありますが、しかし餘り行らん方がいゝですね。屢ば目にたつと、勢ひ放抛つちやおけなくなりますから。」甲が附加へた。

「然いすか。」淺吉は漸と安心したと云つた風で「いや、これから愼みます。つい引張出されて行くんですけれど……初めれば必ず夜明かしになると云つた風で、實は餘り感心したもんぢやないんでござんすから。それにこの頃は、大分風紀問題がやかましいやうで……」などゝ淺吉は話した。

刑事たちは、自分の職業上から見た、色々の面白い世間話や、警察部内の噂などをしはじめた。泥棒狩や淫賣狩の話も出た。

そこへおふきが、仕事姿で歸つて來た。顏の廣いおふきは、その刑事の顏をよく知つてゐた。そして其から又しばらく異つた話が續いてゐた。

「旦那方の商賣も隨分面白い商賣ですね」などゝ、おふきは長火鉢の傍からさう言つて、三人の話を聞いてゐた。

「何でもよく知つてやがる。」

角袖が歸つて行つてから、淺吉は悄れた風で又二階へ上つて行つた。そして前の若い妻を虐げたことなどが、不思議に彼の心を曇らしたゞけで、總てが幸福であつた。

二三日たつと、その話が其の晩の連中の評判になつた。そして其は多分嫉妬やきのおふきの仕業だらうといふことに一定した。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　京橋區西紺屋町	良明堂
同　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替にて御送金の場合は指定を**本鄉區西片町十番地中央公論社**とし、拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取さるゝ處なし

一振替貯金口座は**東京三十四番**なり

一郵券代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒ます

一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢（集金委託料
一金五圓迄　金七錢　及送料共）

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正七年五月廿九日印刷納本
大正七年六月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木西三

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地
中央公論社
電話小石川一四四四
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正七年五月廿八日印刷納本
中央公論六月號